

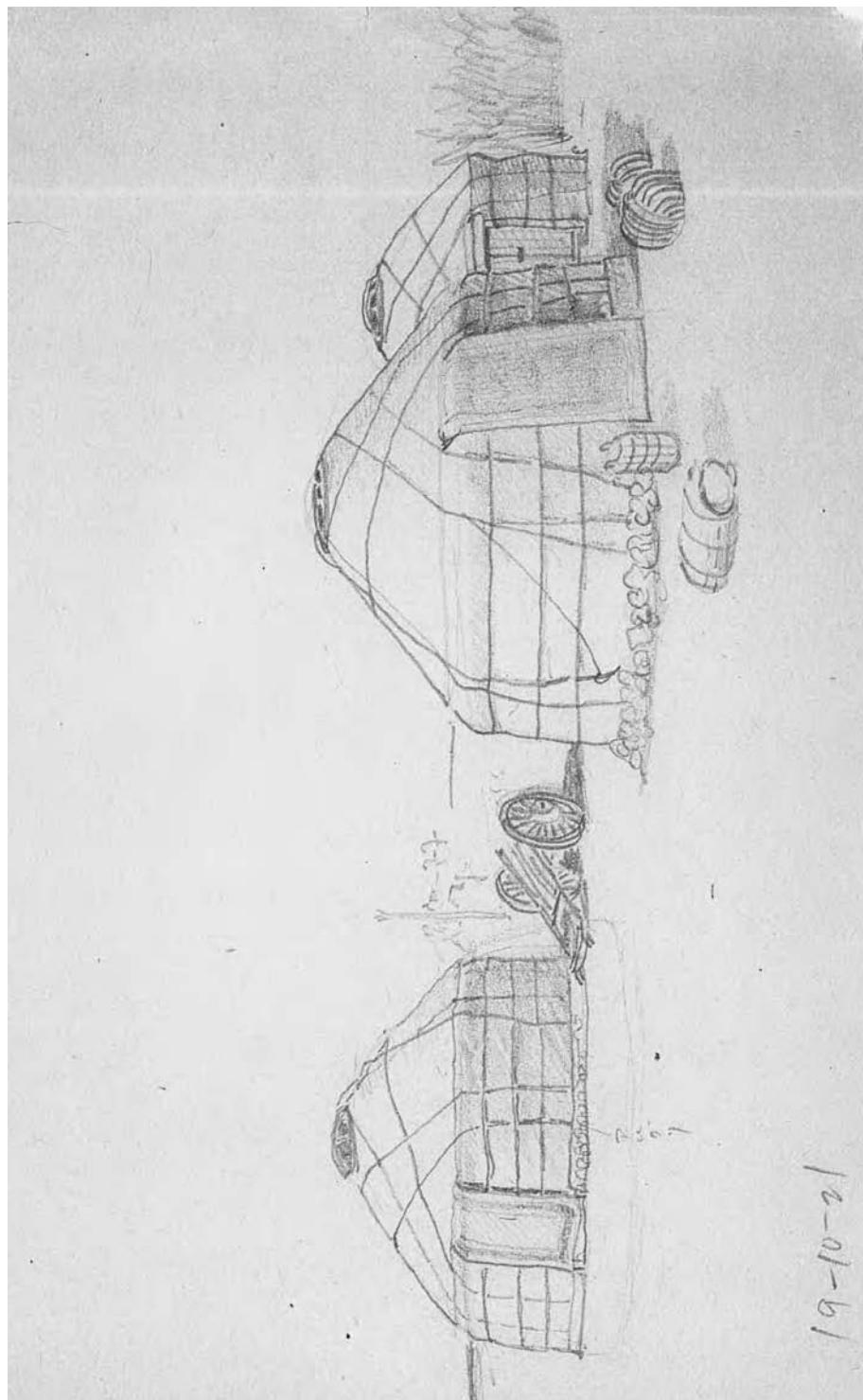
みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology Academic Information Repository

スケッチと写真

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀, 堀田, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008882

1. 宿营地



19-10-21

1. 宿营地

モンゴルの草原をウマでゆくと、人家にゆきあたることはまれである。ときどき、まっしろいゲルがぽつんとたっていることがある。

ゲルは、漢語で包とよばれているものである。円形家屋で、しろいフェルトでおおわれている。その形が漢人がこのんでたべる包子に似ているというので、漢人はこの名でモンゴル・ゲルをよんでいる。

ゲルというのは家屋のことであって、世帯のことではない。したがって、「あそこに人家がある」という意味のときは、「あそこにアイルがある」というのである。アイルは、標準モンゴル語ではアイルだが、チャハル方言ではエールとよばれている。複数のゲルからなりたっているアイルもしばしばある（図1）。それは1戸がいくつかのゲルを所有しているものである。日本人の記述では、しばしばアイルという用語を小集落の意味でつかっている場合があるが、すくなくともチャハルやスニトでは、それはまちがいである。数世帯から小集落のことは、ホトという。チャハル方言ではゴトである。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』563ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図1にもちいられた原画は、その日付の記述方法から、和崎洋一のスケッチではないかとおもわれる。梅棹は和崎のスケッチをゆずりうけていたようである。1950年代に書かれた論文のなかにも和崎のスケッチにもとづくものがある。

注2 岡田英弘氏のご教示によれば、満州語で家のことをバオといい、それが漢語に取り入れられた。

注3 ホトはもともと、複数のゲルで囲まれた空間を指し、ヒツジの寝床を意味する。

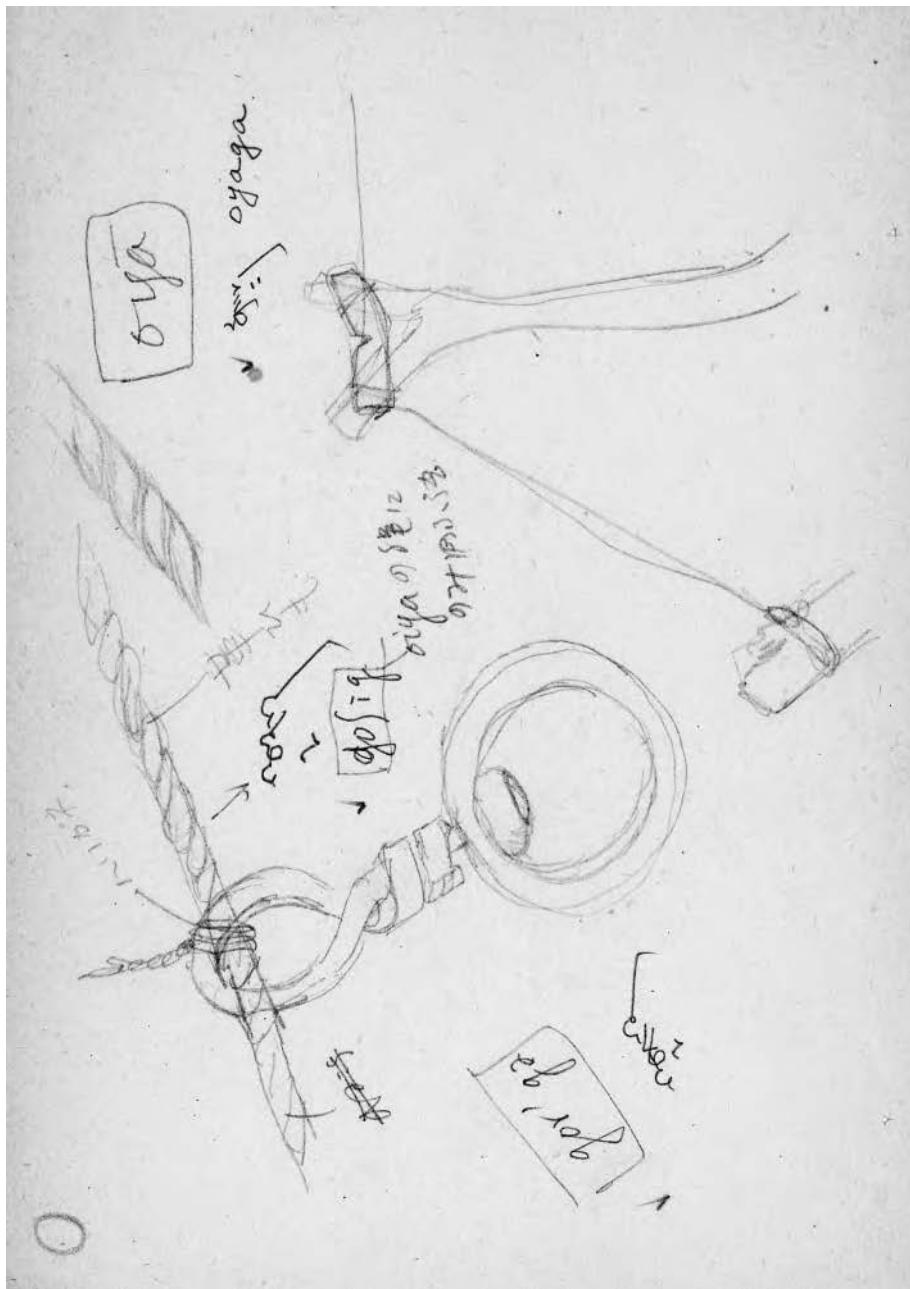


撮影年月：2012年5月
撮影場所：

中国内モンゴル自治区
シリンゴル盟東ウジム
チン旗フレートノー
ル・ソム、アルタンエ
メール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

現在では固定家屋が一般的であり、ゲルはもっぱら物置として利用されている。

2. 訪問



2. 訪問

ウマでアイルにちかづくと、1kmぐらいはなれたところで、もうイスが来客を察知してほえはじめる。ゲルにちかづくと、さらに猛然とほえかかる。ここで絶対にウマからおりてはならない。イヌはたちまちひとにおそいかかるであろう。イヌがほえたてる声で、ゲルのなかから家人がでてきて、イヌをおさえる。ここではじめてウマをおりるのである。

アイルのそばにオヤーとよばれる駒つなぎがたっている（図2）。2本の杭のあいだに、綱をはったものである。綱の部分は、ゴシグとよばれる。綱には、ゴルゲとよばれる鉄の輪がいくつかぶらさがっている。客人はウマの手綱をそれにつなぎとめる。そして、ゲルのなかに招じいれられる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』563-564ページ

注1 ゴシグというのは、革ひもの編みかたをさしている。図85参照。

注2 フィールド・ノート7番の68ページ、11月12日の記録のなかに、ロープのむすびかたが図解説明されている。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：中国内モンゴル自治区シリンゴル盟東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

3. 家屋



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

3. 家屋

ゲルの構造は、側壁と屋根とからなる。そのうえをフェルトでつつんでいる（図3）。側壁は、ハナとよばれる。ほそい木をななめ格子状にくんだもので、木の交点は革ひもでとめてある。したがって、伸縮自在で、おりたたむとちいさくなる。こういうななめ格子の側壁は、6枚ないし8枚がふつうである。それを円形にならべて、うえに天井をかぶせる。

天井は、オニという。これは半円形の木枠とそれに放射状に結合された唐傘の骨のようなながい棒とからなる。これをふたつなぎあわせて、天井の枠とする。半円形の木枠が接合されて、円形の天窓になる。天窓はトーノという。オニの1本1本の骨は、ハナの上部に革ひもでもすばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』564-565ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図3は、著作集の編集時にあらためて作成されたものであり、原画はない。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地
撮影者：堀田あゆみ

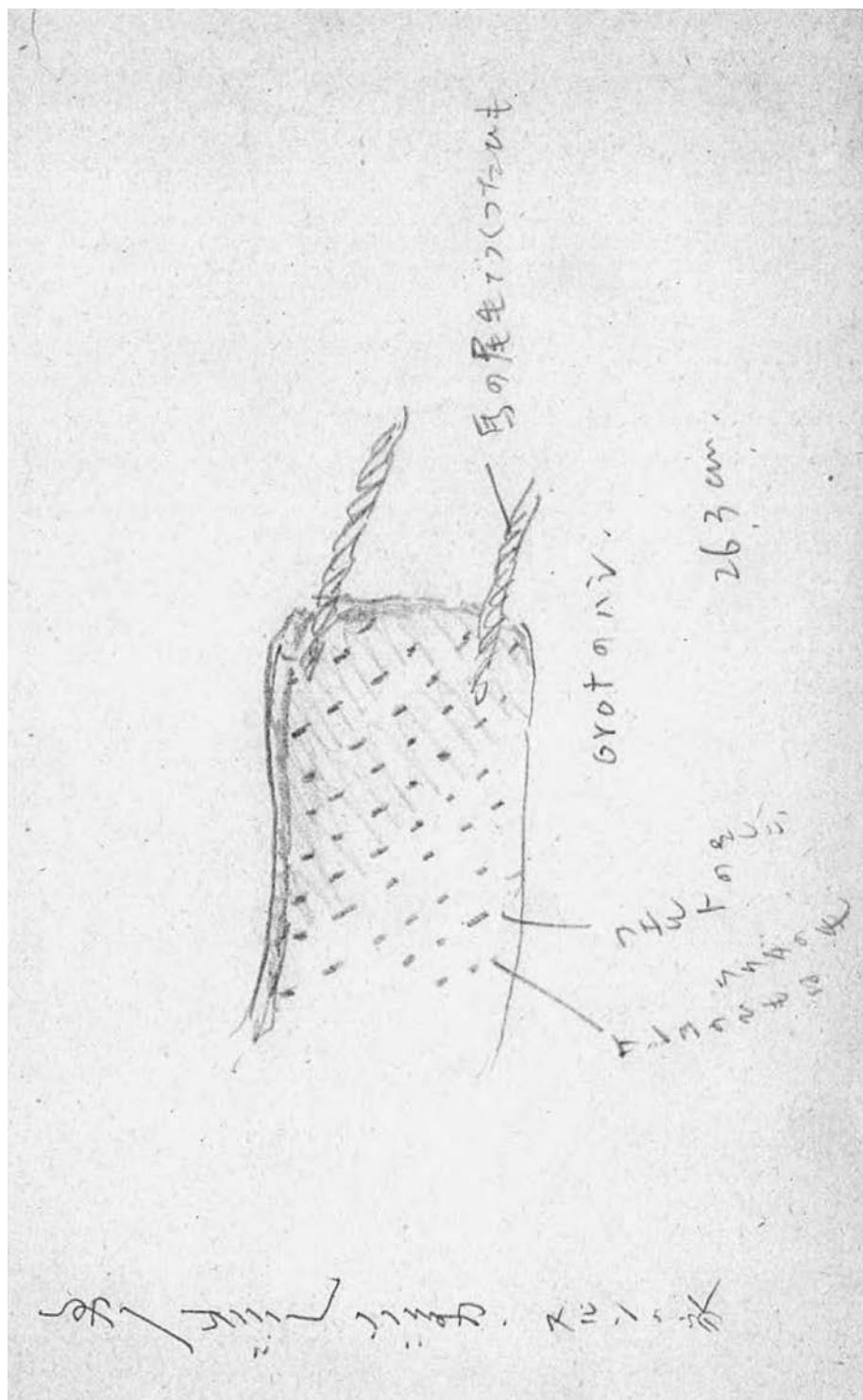
結婚式場のあるホテルに隣接する写真館。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

側壁が見えないように内側に布をはるのが一般的である。

4. 家屋の外側



4. 家屋の外側

ハナの外部は、羊毛からつくられた、しろいフェルトでまかれる。オニのうえにも、フェルトがかけられる。裾からのすきま風をふせぐために、ハナの裾は15cmぐらいの帯状のフェルトでまいてある（図4）。これをオロートとよぶ。全長263cm。ラクダの毛でさしこがほどこされており、ウマのしっぽの剛毛ヒヤルガスでつくったひもがついている。

入口は、木枠を組んで、そこに板の扉がとりつけられる。扉は、1枚戸もあり、観音びらきの場合もある。これで1軒のゲルができあがる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』565ページ

注1 原画には、アバガ旗にある湖フール・ツァガーン・ノール（呼日查干諾爾）とある。「ヌルンの家」と人名もしるされている。

注2 家の裾まわりには、小さな板をつなぎあわせたものをもちいることがおおく、これをハヤープチという。2012年の東スニトでの聞き取りによれば、フェルトをまいた家もあったとのことである。ただし、オロートという名まえは確認できなかった。

注3 乳Ⅲの図11の原画に「オロート」という記述がみえる。その原画にも「ヌルンの家」とあることから、この図4は蒸留器具の一部であるとおもわれる。正しくは巻くものの意でオロールトである。なお、一般に、ハヤープチの全長は10メートル越し、オロールトの全長は1.5メートル程度である。

注4 扉は、かつてフェルト製の幕であった。これをウードといい、観音びらきはハールガといい、両者は区別されていた。ただし、『元朝秘史』では、ハールガは道の意味でもちいられており、新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州のホボクサイル・モンゴル族自治県では、現在でもハールガという単語を道の意味でもちいっている。



夏は風通しをよくするために、フェルトの裾をまくっておき、8月下旬、このように裾を外側から巻いた。

撮影年月：1987年8月

撮影場所：中国内モンゴル自治区シリンホト市ダブシルト・ソム

撮影者：小長谷有紀



ゲルの裾が厚手の布で巻かれたうえに、さらにレンガがめぐらされて、固定式の住居となっている。

撮影年月：2012年5月2日

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

5. 室内



5. 室内

室内にはいると、中央に炉がきってある。炉にはときに木の枠があるが、なにもない場合がおおい。

炉のまんなかには、鉄製のおおきい五徳がおかれていることがおおい（図5）。トルガという。この五徳とよんでいるのは、四隅に柱があり、4本の鉄の輪でそれをつないでいる。この五徳のうえには、鉄製の大鍋がかかる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』565ページ

注1 大鍋をトゴーという。大鍋については補10を参照。

注2 鉄製のほかに、鉛製の大鍋もあり、それはシレミン・トゴーとよばれる。フィールド・ノート3番の42ページには「土のカマド」がえがかれており、そのうえにのっている鍋は、ふち付きであることから、鉛製の大鍋であるとおもわれる。また、35ページには、五徳の装飾部分の精緻なスケッチがある。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ

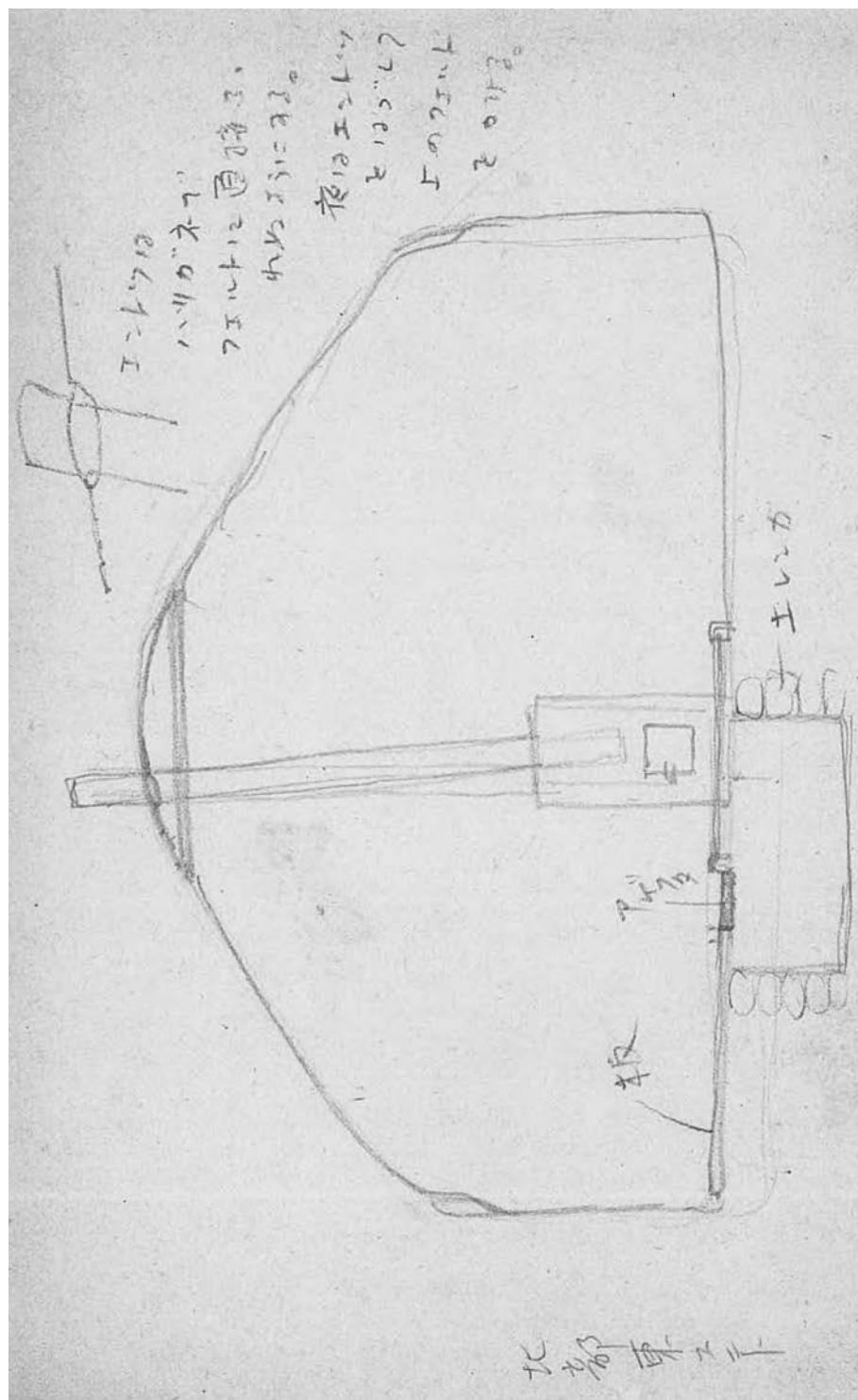
家庭から完全に姿を消した五徳は博物館で見ることができる。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地
撮影者：小長谷有紀

卓上サイズのミニ五徳が商品化されて店頭に並んでいる。

6. ストーブ



6. ストーブ

ときには、五徳のかわりにうすい鉄板製のストーブがある（図6）。ストーブの煙突は、天窓の穴からそとにでている。針金があり、フェルトに直接ふれぬようにしてある。夜は煙突をはずして、天窓をフェルトでおおう。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』565-566ページ



煙突を天窓に接触させないよう既製の器具が設置されている。

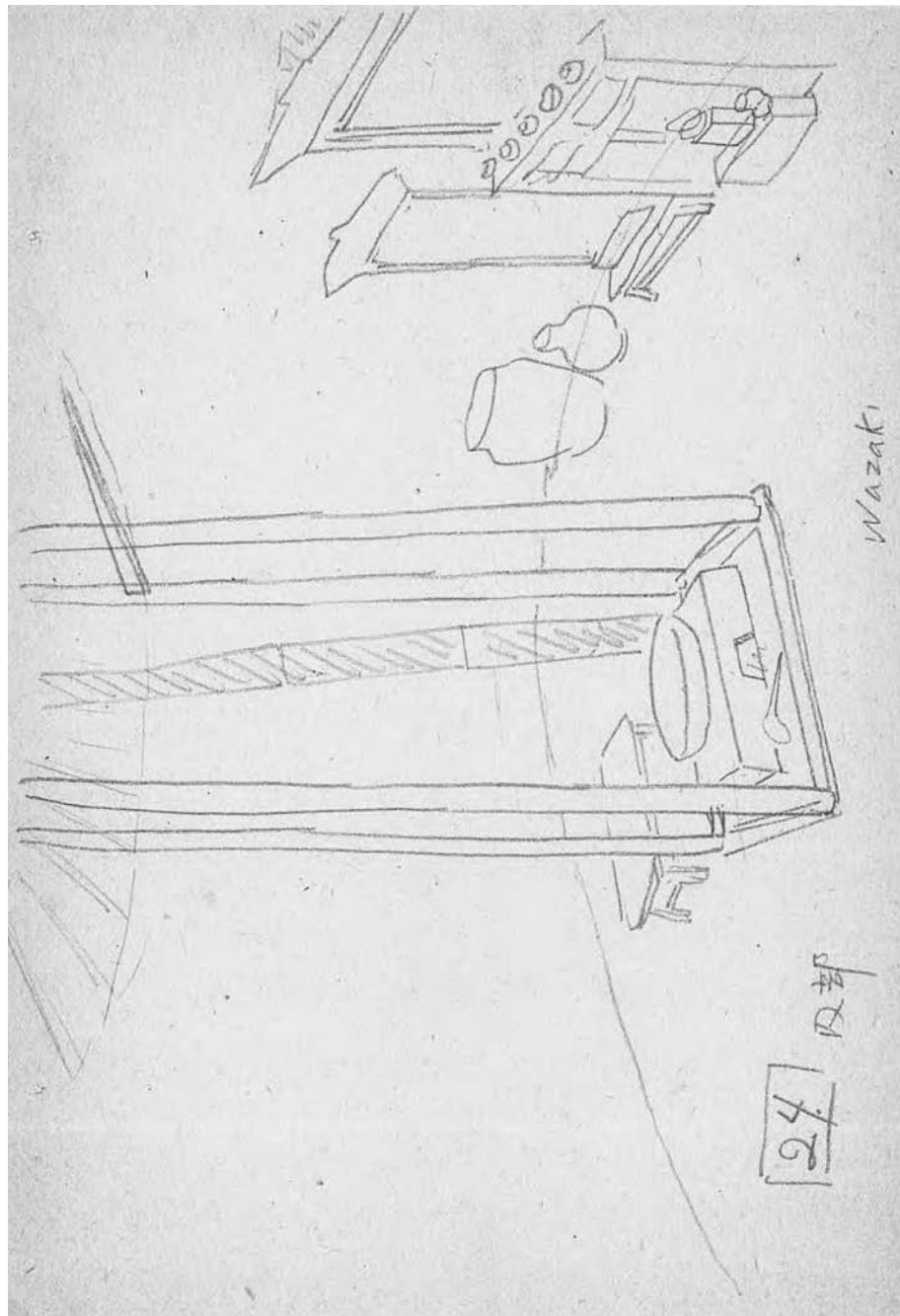


このゲルの骨組みは鉄製で、天窓、天井、側壁はいずれも溶接されている。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

7. 囲炉裏



7. 囲炉裏

またときには、囲炉裏の四隅から天窓まで4本の柱がたっていることがある（図7）。この4本の柱は象徴的なもので、天窓をささえるかたちになってはいるが、構造的な意味はない。

床には、花もようのあるフェルトの敷物がしかれている。

囲炉裏をかこんですわる座はきまっている。扉から奥にむかって左側が主人の座で、右側は主婦の座である。客人は奥の正面に招じいれられる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』566ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図7にもちいられた原画は、署名があるので和崎のスケッチである。



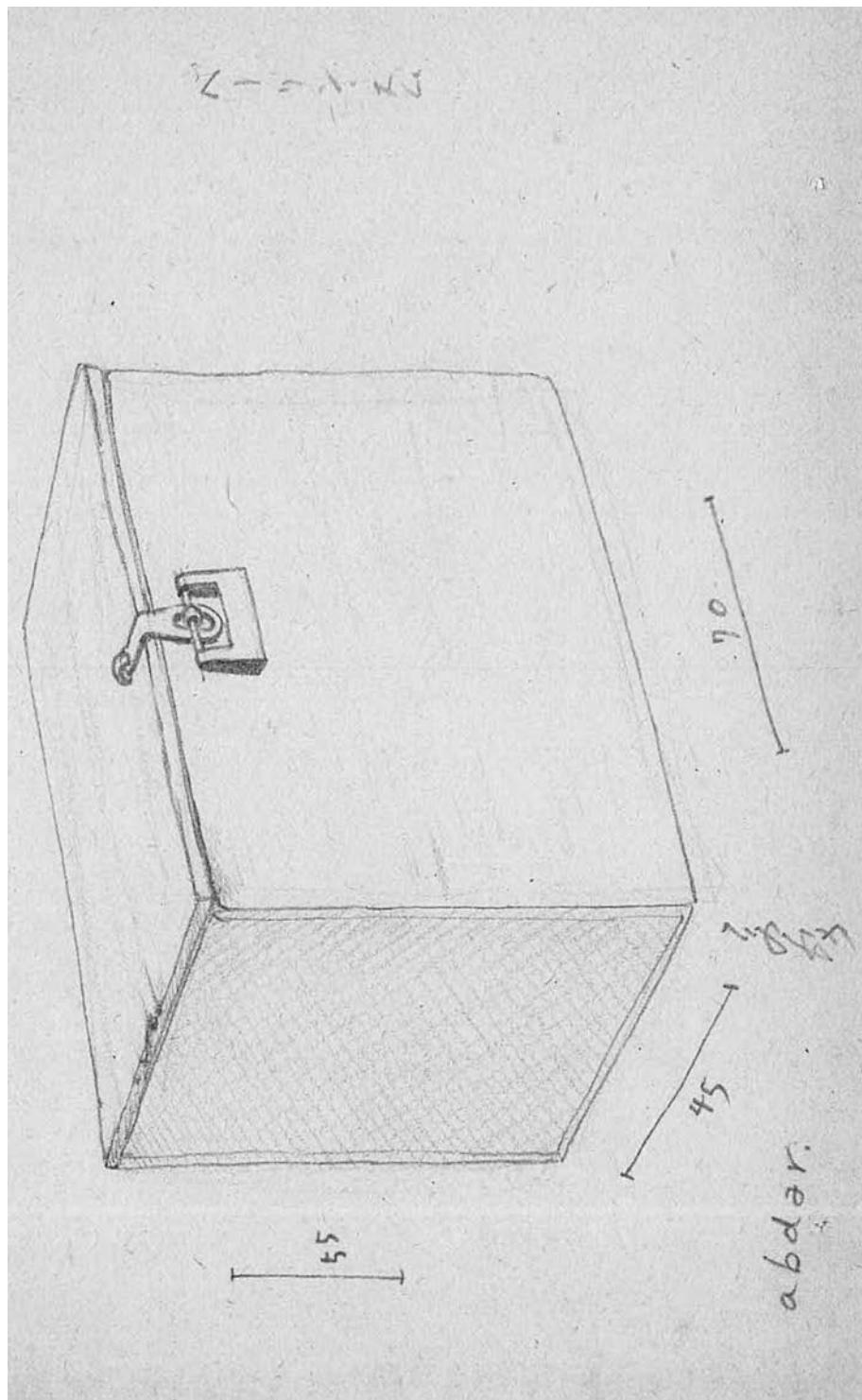
囲炉裏はみられなくなったが、奥の正面に招じいれられた客人と家人が中央をかこんで語らうというスタイルは、現在も変わっていない。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

8. 家財道具



8. 家財道具

室内の奥の一角には、仏壇がある。ボルハンとよばれるが、との意味は仏さまのことである。

家財道具は比較的すくない。アブダルとよばれるタンスがある(図8)。45×70×55cm。片びらきの蓋のついた、ながもち状の木箱である。たいていあかく採色されている。なかには、上等な衣服や、たいせつな道具類がしまわされていて、おおきな錠がかかっている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』567ページ

注1 原画にしるされた場所は、ベーリン・スム(貝勒廟)である。その跡地に2010年、スニト(蘇尼特)博物館が建設された。

注2 フィールド・ノート1番の26ページには正面から見たさまが製図されている。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

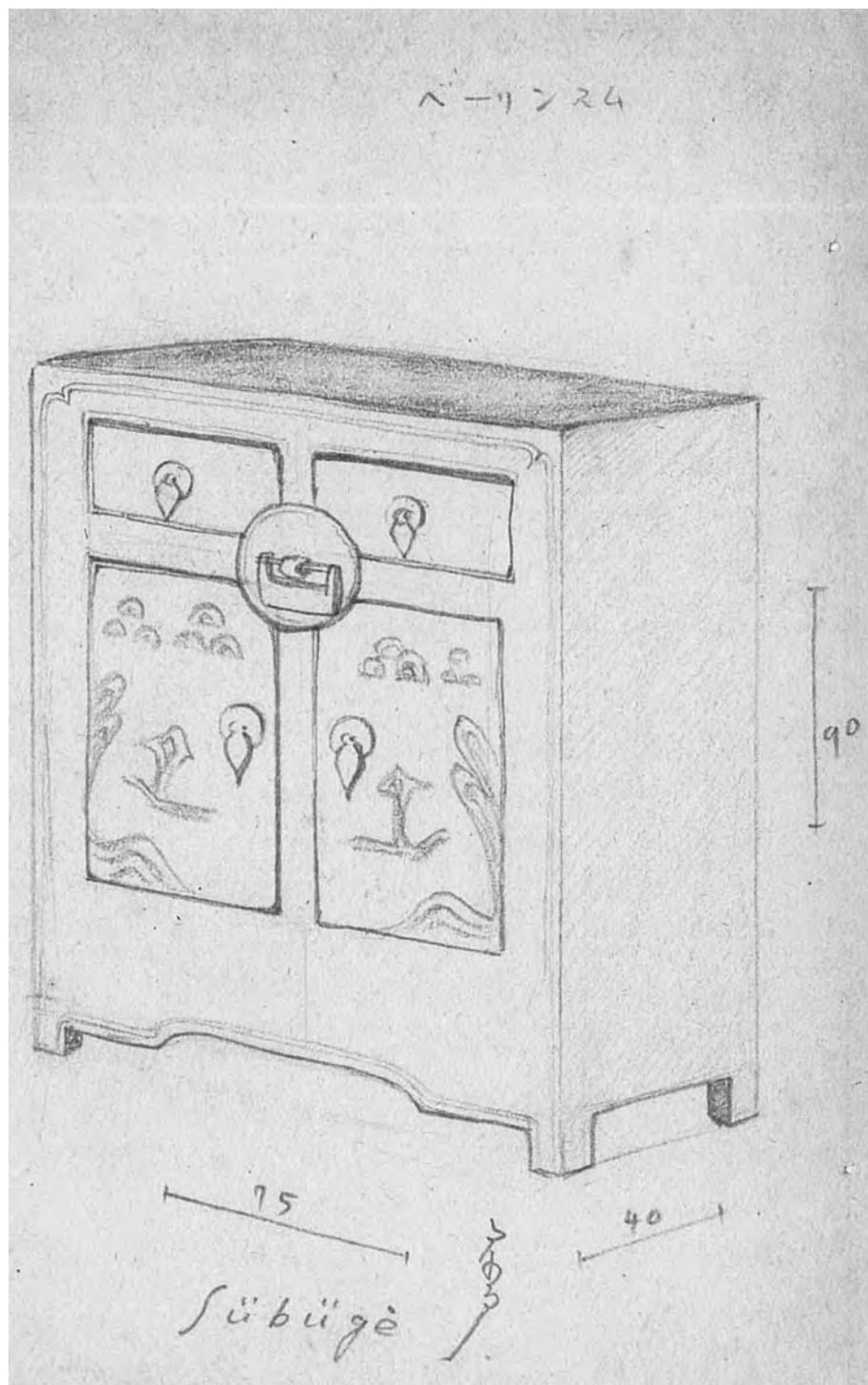
20年ほど前に嫁入り道具として持参したというアブダル。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：中国内モンゴル自治区通遼市、ホルチン博物館
撮影者：堀田あゆみ

職人がつくるモンゴル錠にかわって南京錠が日常的につかわれている。

9. 棚



9. 棚

また、縦型の観音びらき戸の木箱もある（図9）。75×40×90cm。シュブゲという。朱ぬりのうえに、しばしば模様がえがかれている。なかは棚になっていて、食器類が収納されている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』567ページ

注1 シューゲーと聞こえる。フィールド・ノート1番の26ページには家具類が製図されており、棚は *jūgwei* としるされている。



撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗

撮影者：堀田あゆみ



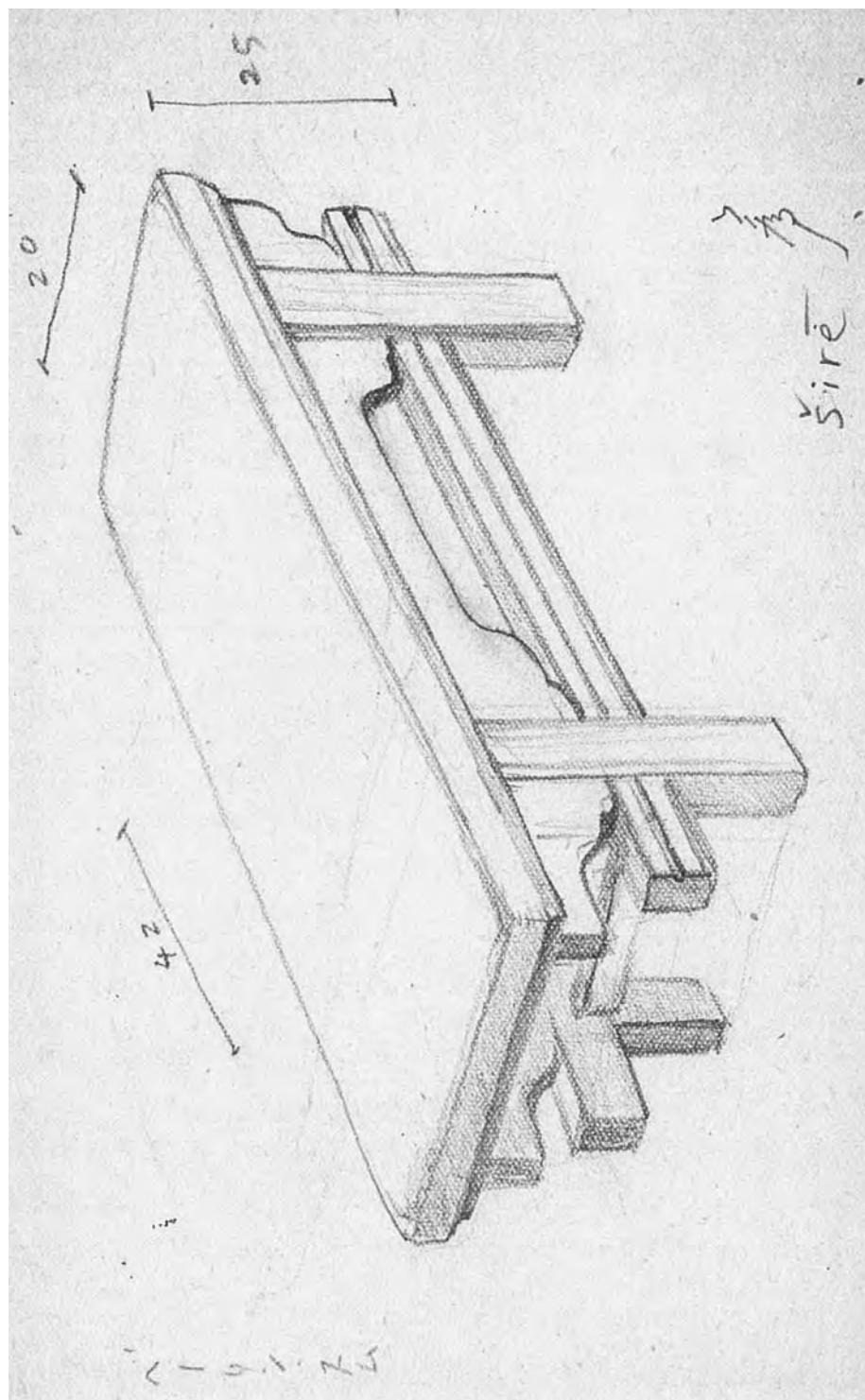
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗

撮影者：堀田あゆみ

現地ではひらき戸の付いたものはシューゲーではなく、ホロゴとよばれていた。収納だけでなく、物置台や調理台として利用されている。

10. 机



10. 机

室内には、シレーとよばれる小型の朱ぬりの机がある（図10）。42×20×25cm。客に食物を供するのにもちいる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』567ページ



固定家屋の床はオンドルのようになっている。ハンズとよばれ、机や寝具類が置かれる。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

11. 衣服



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

11. 衣服

衣服はデールとよばれる（図11）。一見、中国服に似て、左衽^{おくみ}前びらきの長衣である。左側の肩および脇で、かがり輪に布製または金属製の球形ボタンでとめる。ボタンはトップチという。

一般に男性は、日常的に帯をまいている。帯はながいへこ帶状のもので、ぐるぐるとまきつける。それで、男性のことをブステイ・ファン（帯つきの人）とよぶ。それに対して女性は一般に、日常的には帯をしていないので、女性のことをブスガイ・ファン（帯なしの人）という。ただし、女性も乗馬など戸外で活動するときは、帯をしている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』567-568ページ

- 注1 「モンゴル遊牧図譜」の図11は、著作集の編集時に、国立民族学博物館に所蔵されているモンゴル人民共和国（当時）の標本資料にもとづき、あらためて作成されたものであり、原画はない。
- 注2 フィールド・ノート13番の69ページに、デールのうえにはおる毛皮コートに関して、ラフ・スケッチつきの記載がある。



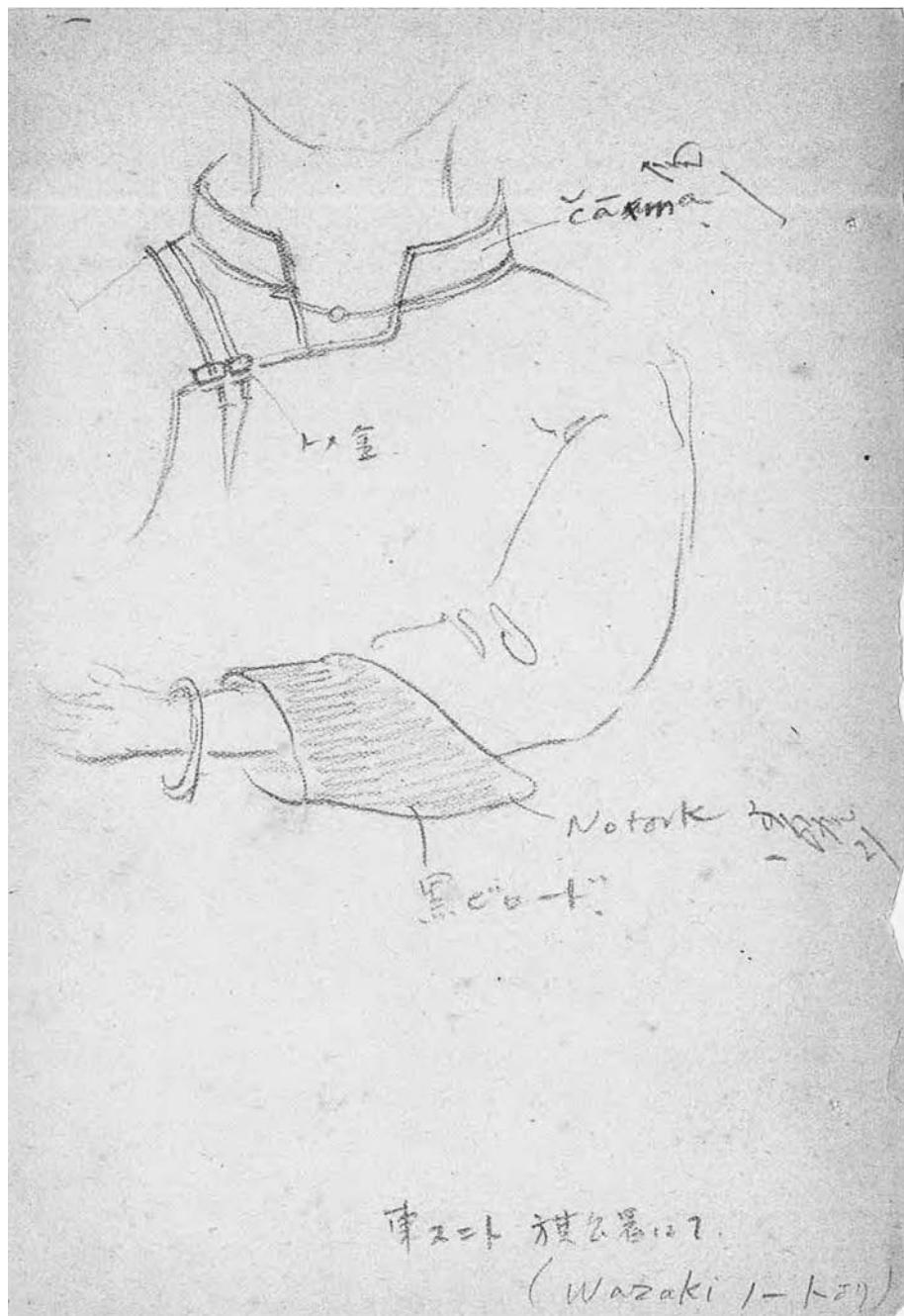
現在は洋服が中心であり、普段着にデールを着ている人は少ない。民族雑貨をあつかう商店などで晴れ着として売られている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地

撮影者：堀田あゆみ

12. 袖口



12. 袖口

デールの袖口は、折りかえしになっていて（図12）、のばすとひじょうにながくなり、手をすっぽりつつみこむことができる。この部分はノダルガとよぶ。これは、冬さむいときに手袋の役をする。上等のものは、黒ビロードである。

冬用のデールには、裏地に子ヒツジの毛皮をぬいつけたものがある。これはたいへんあたたかい。

上着のしたには、だぶだぶのズボンをはいでいる。オムドという。ウマにのるとき内股の部分が鞍にすれていたみやすい。ここにわざわざ、どんすのような高価な布をつかう。1種のみえっぱりである。

寝るときには、したに布団をしいて、からだのうえにはデールをかけて寝る。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』568ページ

注1 原画には、実物をスケッチしたものではなく、和崎のノートをみてえがいたことがしるされている。

注2 「モンゴル遊牧図譜」ではこのあとに「洗濯・水浴」の項目がつづくが、図版がないので割愛する。



撮影年月：1988年3月

撮影場所：中国内モンゴル自治区シリンゴル盟
シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤ
ンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

冬の正装。衣装の内がわには子ヒツジの毛皮がぬいつけられている。袖口には、黒ビロードがついている。



撮影年月：1989年4月

撮影場所：中国内モンゴル自治区シリンゴル盟
西ウジムチン旗ジリンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀

ラマ医がウマにのって、産後の肥立ちをみにやってきた。袖口は青色で目だっている。

13. 帽子



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

13. 帽子

帽子は、一般にマラガイという（図13）。冬用には毛皮製のものがある。夏は、一般には中おれ帽がもちいられている。帽子をかぶることは、礼装の1種とかんがえられている。室内で客人にお茶を献ずるときに、婦人も中おれ帽を頭にいただく。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』570ページ

- 注1 「モンゴル遊牧図譜」の図13は、著作集の編集時に、国立民族学博物館に収集された標本資料を参考に作成されたものである。
- 注2 清朝時代、モンゴル人の貴族や官吏は、赤い垂れのついた帽子をかぶった。また、爵位に応じて頭につける宝物がことなっていたので、とおくからみてだれであるかがわかった、という。本文にあるような、中おれ帽をえがいた原画はない。



帽子の内側に子羊の毛皮がはってあるもの。帽子は頭と同様に大切にあつかわれ、床や地面ではなく棚の上などにふせて置かれる。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

14. 靴



14. 靴

靴は、ゴトルとよばれ、通常はウシの革でつくる（図14）。まえにたかく35cm、うしろにひくい30cm。筒の直径20cm。爪先がちょっとそりかえっているものもある。しばしばうつくしい模様の色皮がアップリケのようにほどこされている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』570ページ



先のまるい形式はチャハルなどの形式。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ



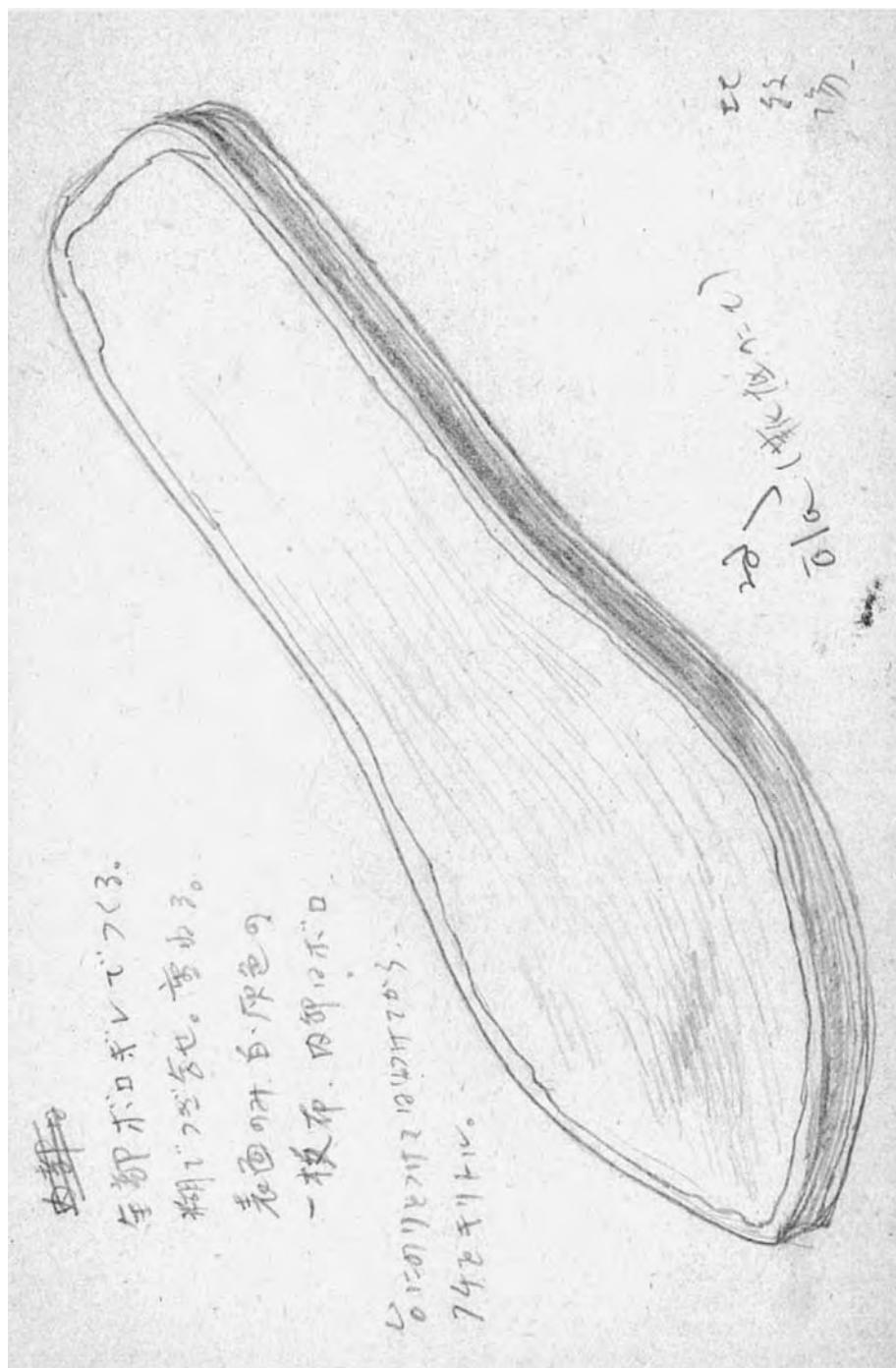
店頭に並ぶ男性用靴。先のとがっているのはハルハなどの形式。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地

撮影者：堀田あゆみ

15. 靴底



15. 靴底

靴底はオラという（図15）。糊でぼろきれをつぎあわせる。表面には白または灰色の一枚布をもちいる。台に糊をつけてはりつけてから、最後に縁をきりとる。

室内でも、通常は靴をぬがない。靴のままフェルトの敷物のうえをあるく。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』570ページ



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗

フレートノール

・ソム、アルタ

ンエメール・ガ

チャー

撮影者：堀田あゆみ



撮影年月：2010年1月

撮影場所：モンゴル国アル

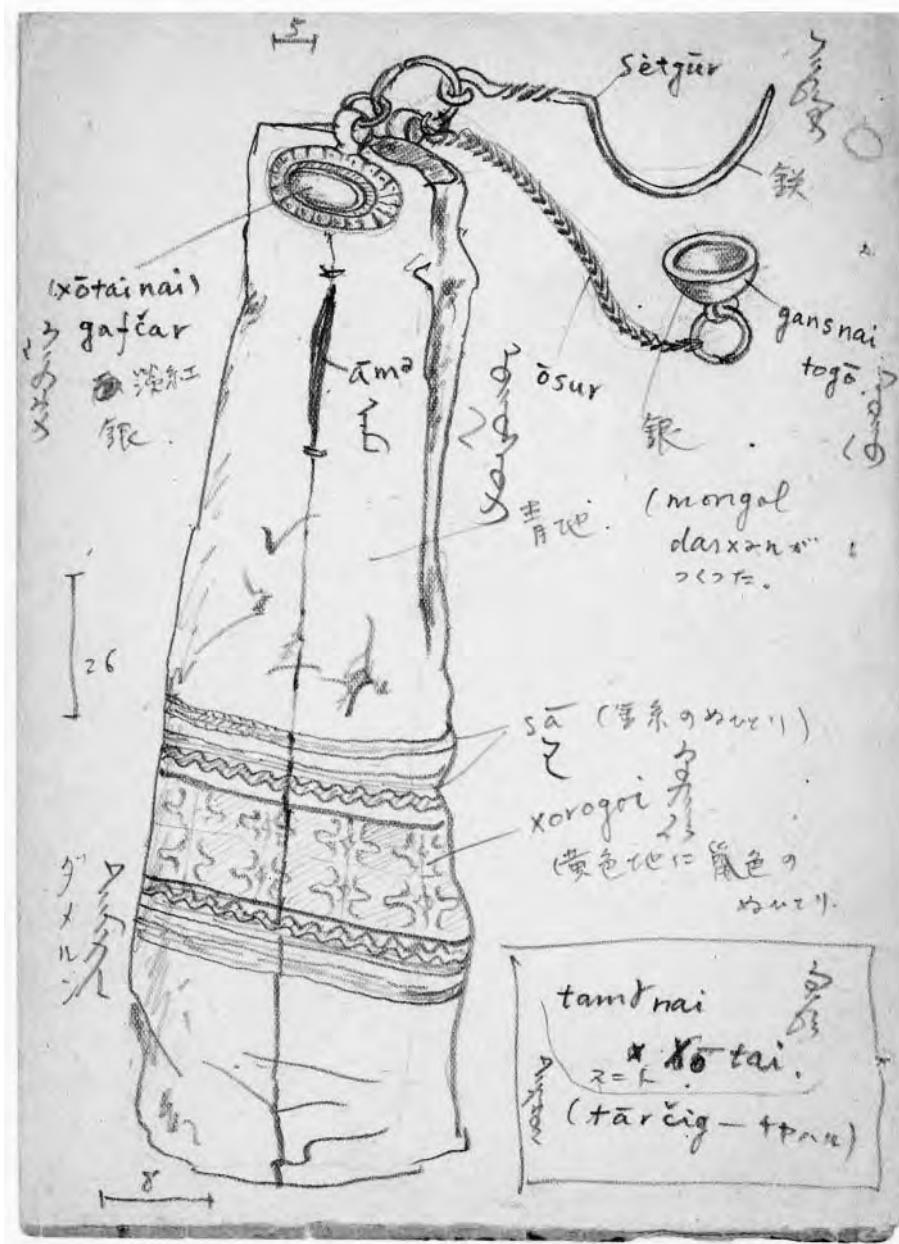
ハンガイ県ホト

ント・ソム

撮影者：堀田あゆみ

一番底には皮がもちいられている。

16. タバコいれ



16. タバコいれ

携帯品として、タバコいれがある（図16）。細ながい袋で、上部にたてに裂口がある。そこからキセルをつっこんで、袋のなかでキザミタバコをつめる。ガンスナー・オートとよばれる。ガンスはキセルをあらわしていて、キセルの袋という意味である。キセルの頭をそうじする鉤と、すいがらをするとともににつぎの火をつけるための小鉢が、袋の先についている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』570ページ、572ページ

注1 キセルを掃除するための鉤はセトグールといい、小鉢はガンスナー・トゴー（キセルの鍋という意味）とよばれていることが原画にしるされていた。

注2 そのガンスナーという記載に影響されて、本文で、袋までガンスナー・オート（キセルの袋）と記してしまったが、原画にはただしくタムヒネー・ホータイ（タバコの袋）と記されていた。なお、ホーデイは漢語の「口袋」である。



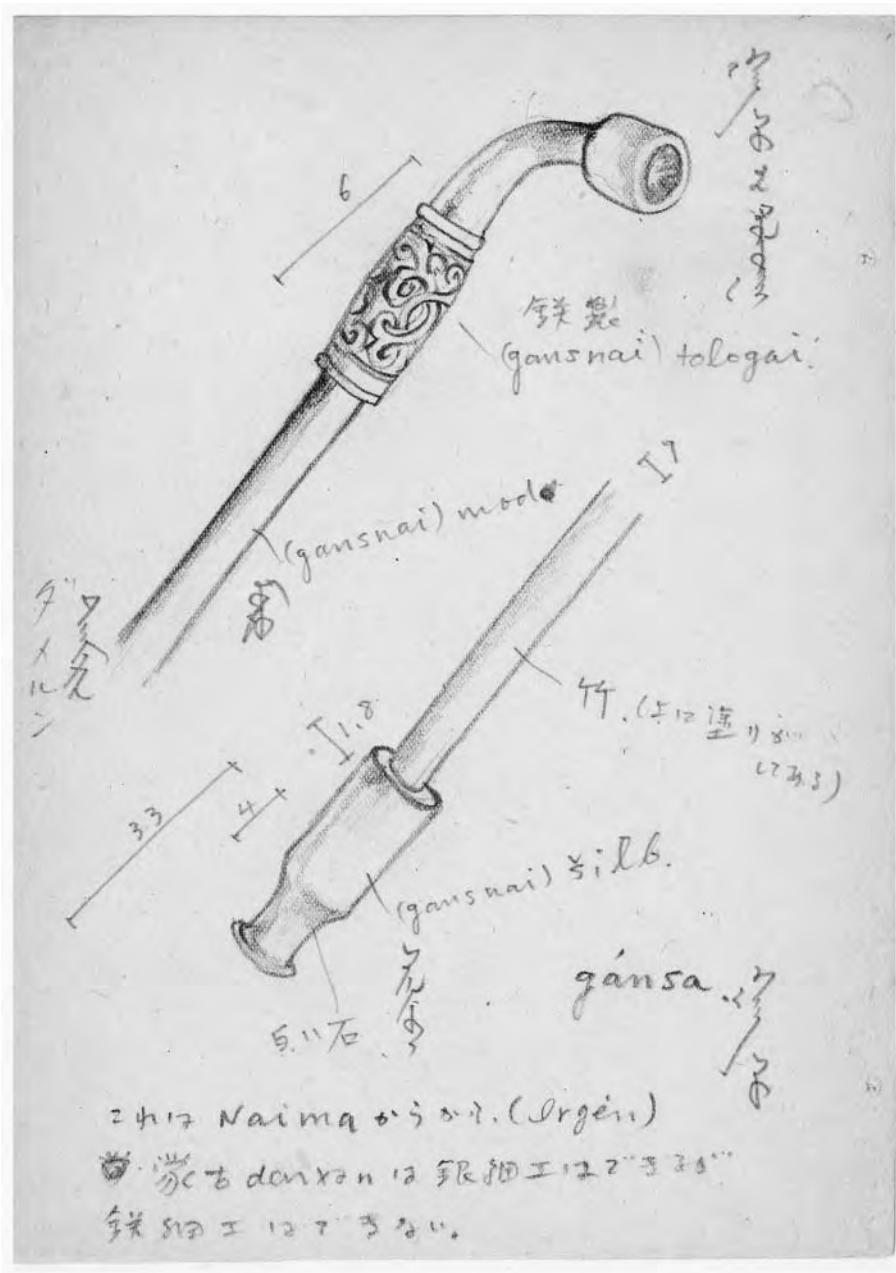
現在は持ち歩いている人はほとんどいない。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：通遼市、ホルチン博物館

撮影者：堀田あゆみ

17. キセル



17. キセル

ガンスは竹製で上ぬりがしてある（図17）。ながさ33cm。吸い口はシルブとよばれ、しろい石でできている。1.8cm × 4 cm。タバコをつめるほうは、トロガイ（頭の意）とよばれ、鉄の部分（6 cm）に浮きぼりがほどこされている。漢人商人マイマイチア（買壳家）から購入したもの。モンゴル人のダルハン（銀細工師のこと）は銀細工はできるが、鉄細工はできない。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』572ページ

注1 現在ではモンゴル語で一般に商人のことをマイマイチンという。



キセルは煙草や巻煙草にとってかわられている。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

18. 喫煙道具のもちかた



18. 噫煙道具のもちかた

タバコいは、帶にはさんで上部をまえにおりかえす。キセルは長靴にさしこむ（図18）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』572ページ

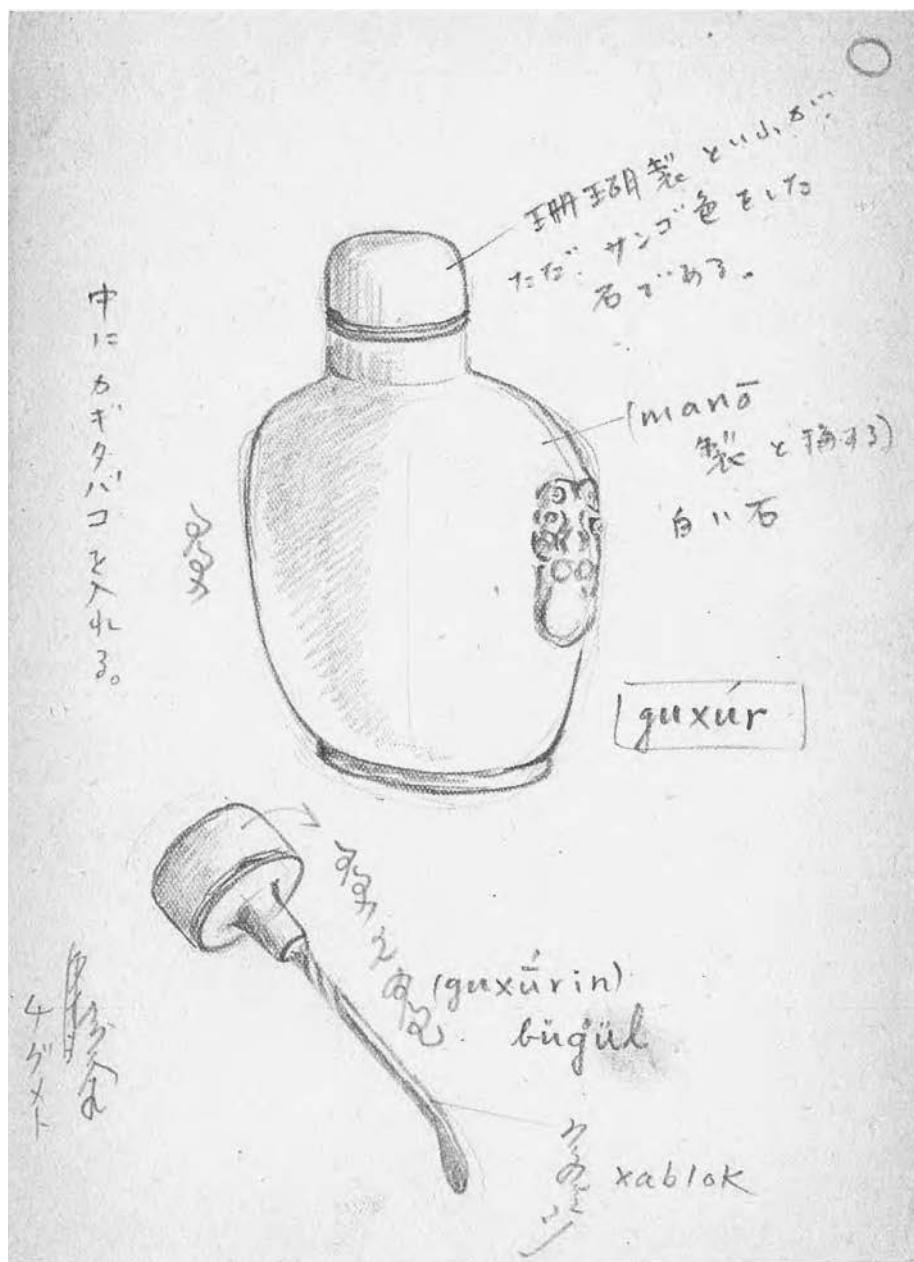
注1 「モンゴル遊牧図譜」の図18は、著作集の編集時に作成されたものである。本書では原画でしめす。キセルは長靴のひざがしらのほうにさしこむ。



銀細工の装身具を身につけてみせてくれた。右腰にさげるのは、ナイフと箸の入った鞞。左側にさげるのは、火打石。タバコ入れのふくろはそこにはさむ。

撮影年月：1997年7月
撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ハシャート・ソム
撮影者：小長谷有紀

19. かぎタバコいれ



19. かぎタバコいれ

タバコいれにはもう1種類のものがある（図19）。フフルという。チャハル方言では、ゲフルという。これは、ぎょく めのう玉や瑪瑙でつくった小型の瓶で、なかにかぎタバコを入れる。しろい石できでいてもマノウとよんでいる。マノウは漢語の瑪瑙の借用であろう。蓋はサンゴ製であるというが、ただのあかい石であることがおおい。蓋にはちいさなさじがついていて、なかのかぎタバコをかきだすのにつかう。さじはハルバガとよぶ。女性はかぎタバコをもちいない。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』572ページ

注1 女性でも客として、かぎタバコをかぐことはありうる。



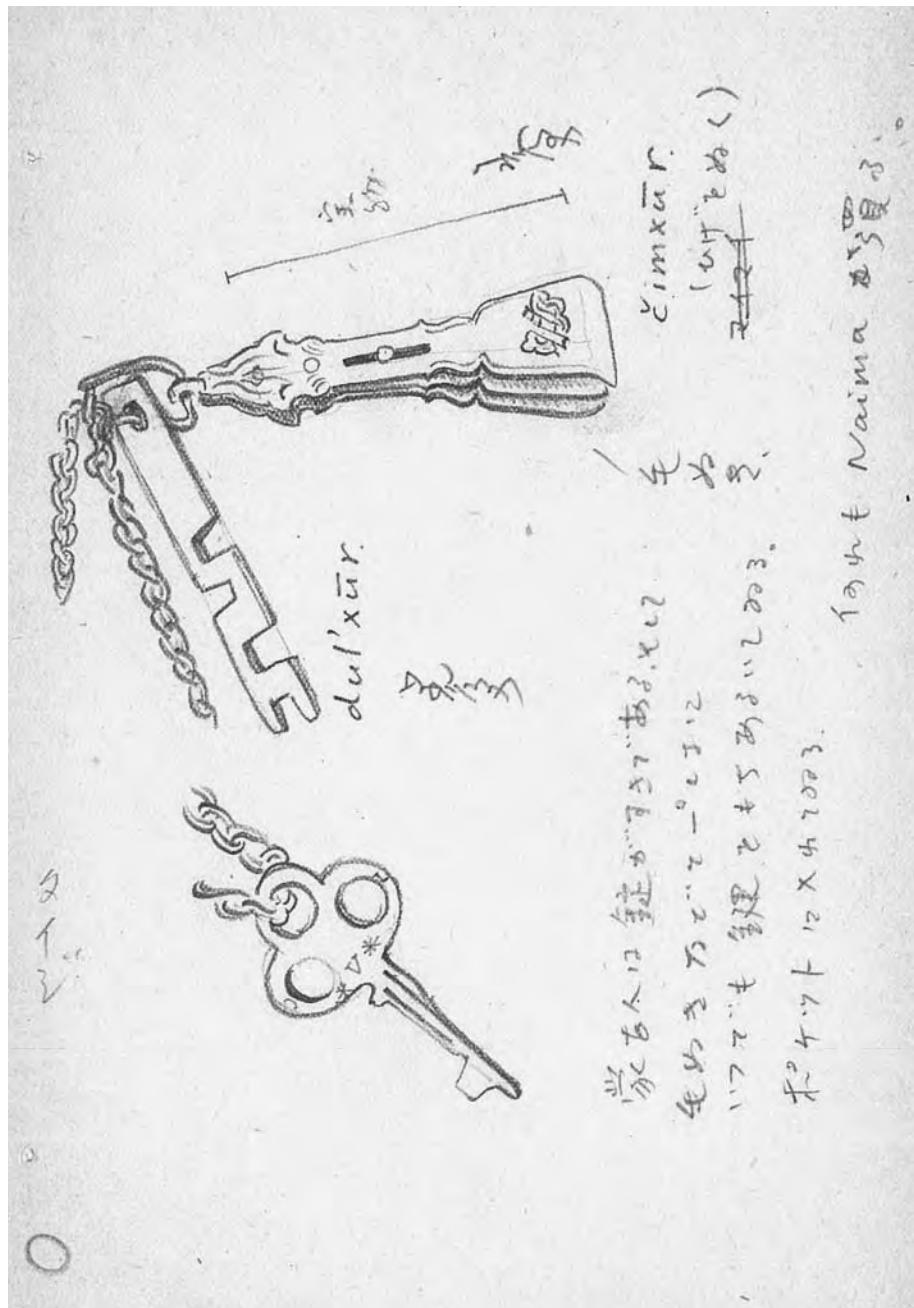
たがいのかぎタバコ入れを交換し、かいだあと、またもどす。

撮影年月：1988年4月
撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：ナランゲレル

20. 鍵などの携帯品



20. 鍵などの携帯品

家具類には錠がかかっている場合がおおい。日常的に鍵たばを腰につけたり、ポケットにいれている。とくに、女性がもっている場合がおおい。鍵はトゥルフルという。鍵たばのほかに、日常の携帯品として毛ぬきチムフルなども、いつでももちあるいでいる（図20）。いずれも漢人商人から買ったもの。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』573ページ

注1 清朝の爵位には、親王、郡王、貝勒、貝子、公につづいてタイジ（台吉）、タブナン（塔布囊）という序列があった。原画には、タイジのもちものであることがしるされている。



全長は6.5cm。

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル



鍵たばには毛ぬきにかわって爪切りがつけられている。

撮影年月：2012年7月
撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ホントン・ソム
撮影者：堀田あゆみ

21. 娯楽



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）
左から、梅棹忠夫、娘を抱いた野村正良夫人、藤枝晃、加藤泰安、野村正良、甲田和衛、今西錦司。

21. 娯楽

モンゴルでは、室内娯楽はほとんどない。シャーとよばれるサイコロがある。これは、ヒツジの踝の骨をとりだしたもので、なんとなく6面体にちかい形をしている。そのうちの4面がウマ、ヒツジ、ラクダ、ウシをあらわしている。サイコロふうにふって、目の出かたをきそあそびかたもあり、おはじきのようなあそびかたもある（図21）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』573ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図21は、著作集の編集時にあらたに作成された。



子どもたちばかりでなく、成人もあそぶ。冬の室内あそびとされている。

撮影年月：1988年3月

撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

22. 音楽



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

22. 音楽

モンゴルでは歌はひじょうに発達している。すばらしい歌手はたくさんいる。曲のなかには、日本の追分そっくりなのがあって、そのほかたくさんの流行歌もある。

楽器は、あまり発達していない。代表的なものとしては、馬頭琴がある。四角い胴の2弦琴である。弓でひく。竿の頭はウマの頭の形をしている。これが馬頭琴という名の由来である（図22）。モンゴル語ではモリン・トロガイ・ホールとよばれる。

馬頭琴奏者は、専門家がいる。ふつうの家庭でどこにでもあるというものではない。有力者や貴族の家によばれて、演奏するものである。

ほかに小型の胡弓がある。こちらは、より一般的である。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』574ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図22は、著作集の編集時にあらためて作成されたものであり、原画はない。

注2 現在では一般にモリン・ホールと略称されている。



撮影年月：1987年9月
撮影場所：中国内モンゴル自治区イフジョー盟
ウーシン旗
撮影者：小長谷有紀

オルドスでは固定家屋に住み、農耕にも従事する。自家製のキビでもてなすとともに、一家の主人が胡弓を演奏してくれた。

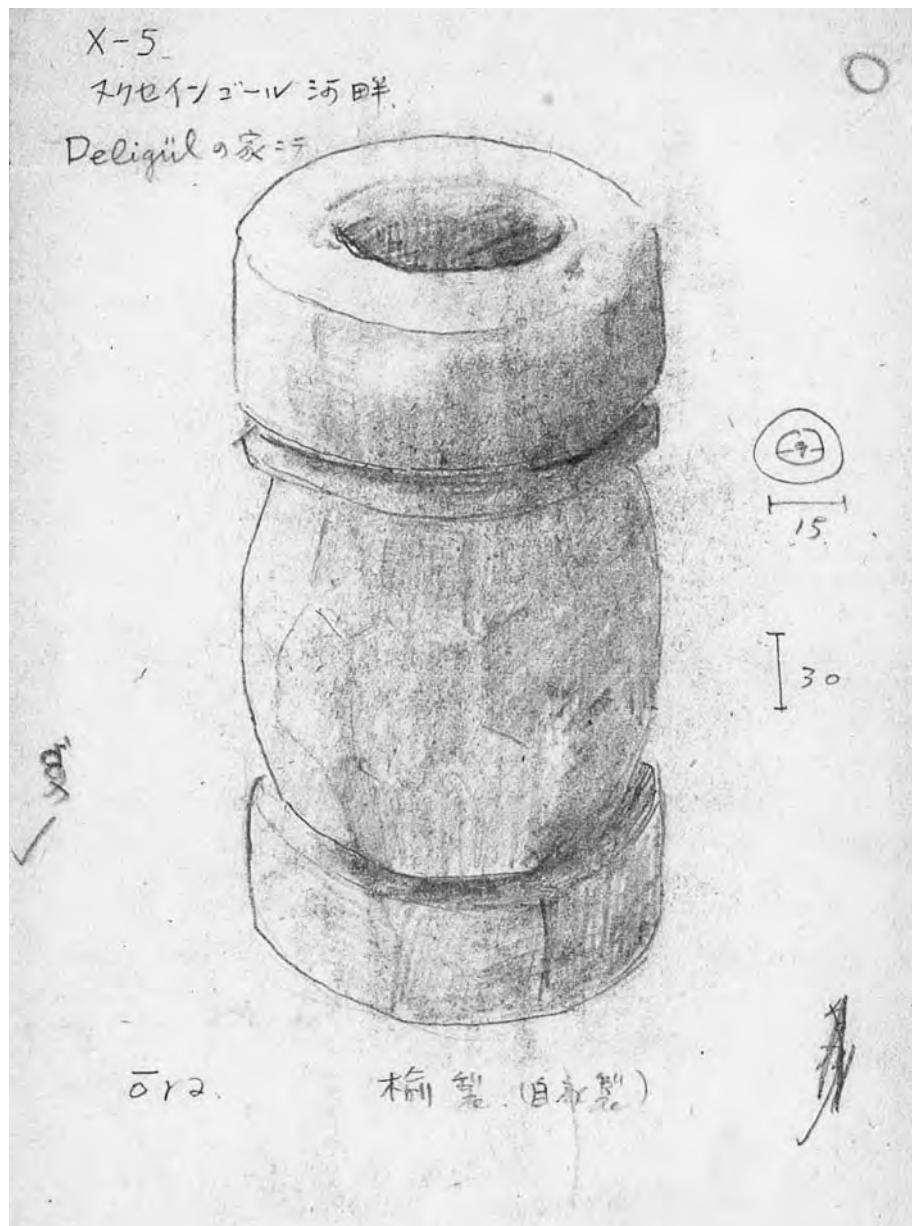


撮影年月：1988年2月
撮影場所：中国内モンゴル自治区シリンゴル盟
西ウジムチン旗
撮影者：小長谷有紀

西ウジムチンでも固定家屋に住んでいた。壁に馬頭琴がかけられていたが、誰が演奏するのか聞きそびれた。旧正月のお祝い。

23. 乳茶

23-1. 茶臼



23. 乳茶

23-1. 茶臼

日常の食べものでもっとも一般的なものは、キビと茶である。

茶は、ダン茶のひとかけらを茶臼にいれて、杵でつく（図23）。ダン茶というのは、南中国でつくられた茶で、おおきなレンガ状にかためたものである。中国人の行商人または店で買う。茶臼はオールといい、ニレなどの木に穴をうがった自家製の筒である。外径15cm、内径9cm。たかさ30cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』575-576ページ

注1 原画にあるスクセイン・ゴルとは、中国内モンゴル自治区東スニト旗の南にある川の名である。



茶臼は各地の博物館に収められていたが、杵はほとんど残っていなかった。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：堀田あゆみ

23-2. 杵



23-2. 杵

杵は、木製の柄におおきな鉄のおもりをつけたものである。ダン茶をつきくだくには、おもりのほうではなく、柄の先端でつく。チャハルではラントーとよばれ、シリングルではモノとよばれている。おもりは9cm、柄は38cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』576ページ

注1 おもりについては、モンゴル語で鉛であることがしるされている。



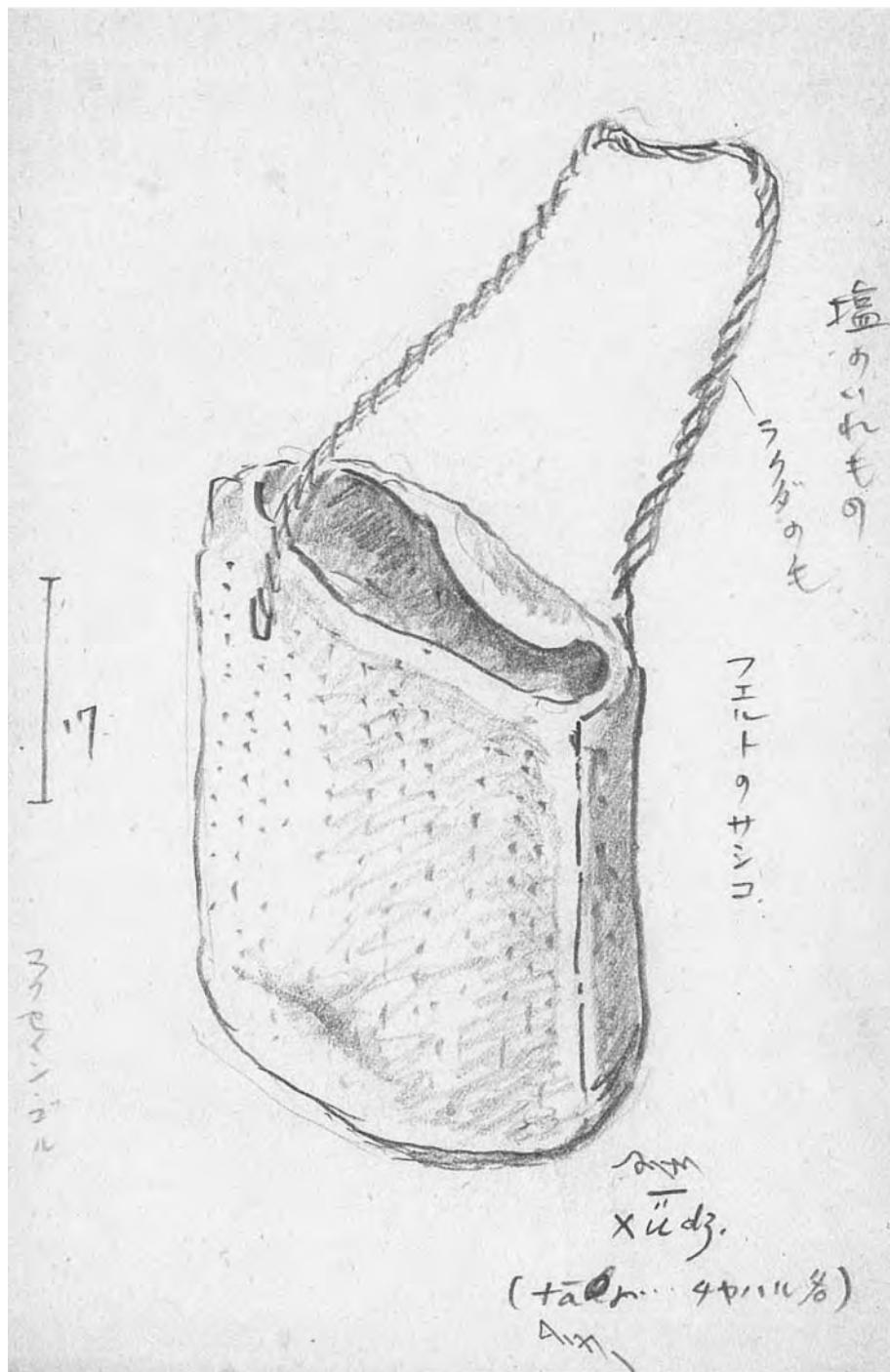
家庭では茶臼も杵も見られなくなった。袋詰めの茶葉が商品化されているためである。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

24. 塩いれ



24. 塩いれ

粉になるまでくだけた茶の葉を、大鍋トゴーにわかした湯のなかになげいれる。にえたったあと、茶こしで茶かすをすくいとる。スーすなわち乳、通常は牛乳をいれる。

最後にダウス（塩）またはホジル（ソーダ）の小片をいれる。観察した実例では、塩はフェルト製の袋にいれてあった（図24）。ラクダの毛によってさしこがほどこしてあり、ひもがついている。袋のふかさ17cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』576ページ



撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ

展示用に新しく作られたものようである。

25. ソーダいれ



中は xojin を入れる。 — 瓦器の場合は Xojin 。

木 - 1862

2-37223

xüji 817

25. ソーダいれ

ソーダはボール紙製の容器にはいっていた（図25）。塩味の乳茶はステイ・チャイ（乳いり茶）とよばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』576ページ



棚の両側に茶や塩などを入れるための入れものが吊られている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

26. やかん



主部 銅 2" 37003.
銅とたたきのはしてつ
もの。

26. やかん

大鍋でわかした茶は、やかんにいれて、各人が懐にもっているお椀アイガにそそぎられる。チャハル方言ではエーグという。やかんは銅をたたきのばしてつくったものである（図26）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』576ページ

注1 やかんは内モンゴルではデヴェル debür-e（壺の意）とよばれることがおおい。モンゴル国では一般にダンハ danq-a とよばれる。



古いタイプのやかんは博物館で見ることができる。

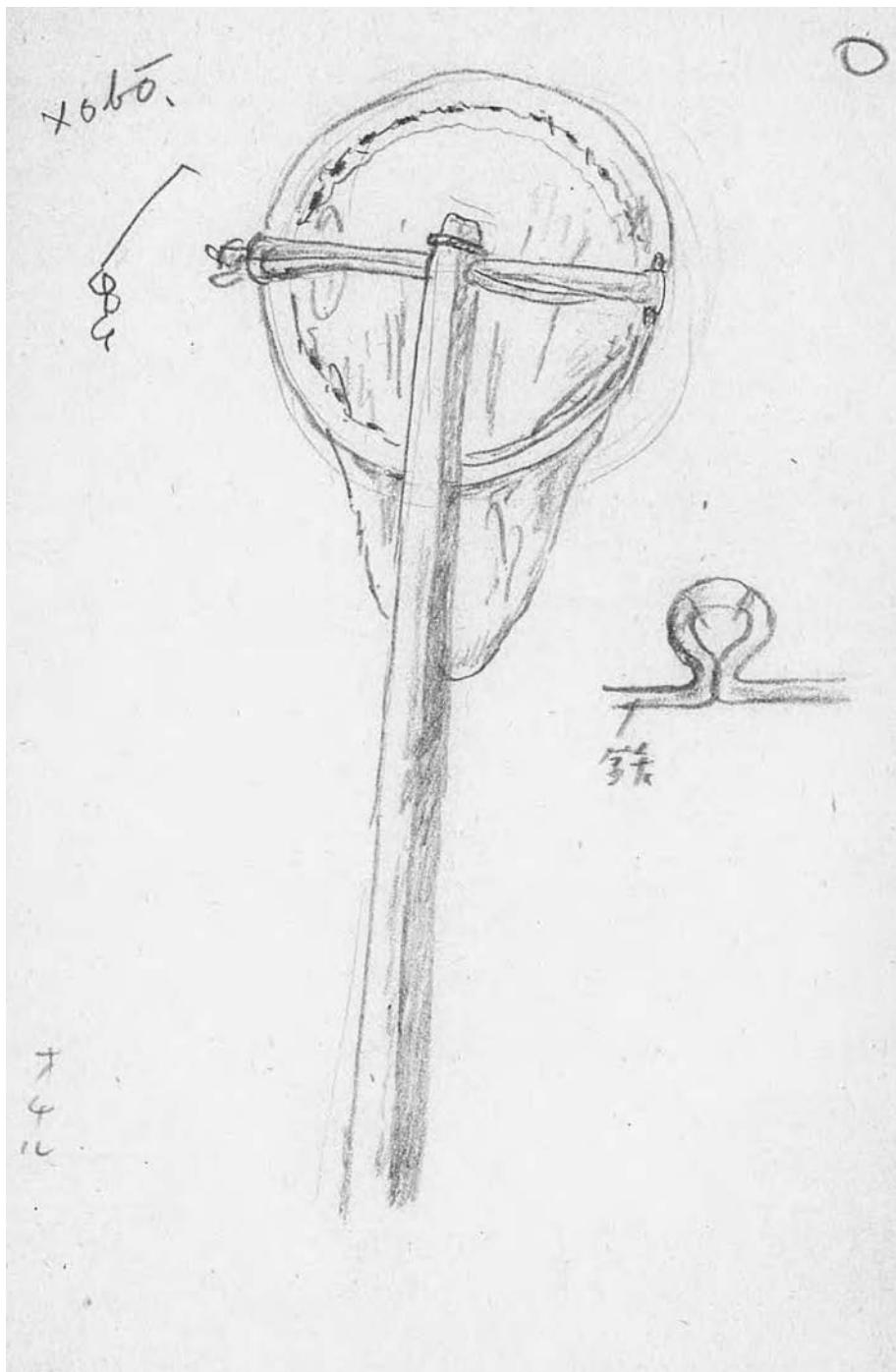
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、
スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ



さめたお茶をふたたび沸かしている。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フ
レートノール・ソ
ム、アルタンエメ
ール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

27. 汲みとり竿



27. 汲みとり竿

汲みとり竿は、ホボーとよばれる（図27）。

注1 著作集第2巻『モンゴル研究』576ページでは、茶こしとして解説されていた。ホボーというのは一般に、柄のついたバケツをいう。原画からも、柄のついたバケツであるとおもわれる。梅棹による製図もある。汲みとり竿と改稿したい。68ページ写真参照。



博物館に展示されていた柄のついたバケツ。全長はおよそ150cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

28. 梵



28. 梱

アイガは木製であるが、しばしば内面および外面には銀がはってあり、繊細な浮きぼりがほどこされている（図28）。上径11cm。モンゴル人のダルハン（銀細工師）がつくる。材料の銀は注文ぬしが銀貨をもっていく。

楕にそそがれたステイ・チャイには、いったキビをひとつかみなげいれて、すする。茶はなんどもおかわりをする。最後にふやけたキビを舌でなめるようにしてたべる。これがもっとも日常的な食事である。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』576-577ページ



一家の主人は、ふだんから銀杯をもちいていた。

撮影年月：1987年8月
撮影場所：シリンホト市ダブシルト・ソム
撮影者：小長谷有紀



現在では既製の陶器茶碗がつかわれている。

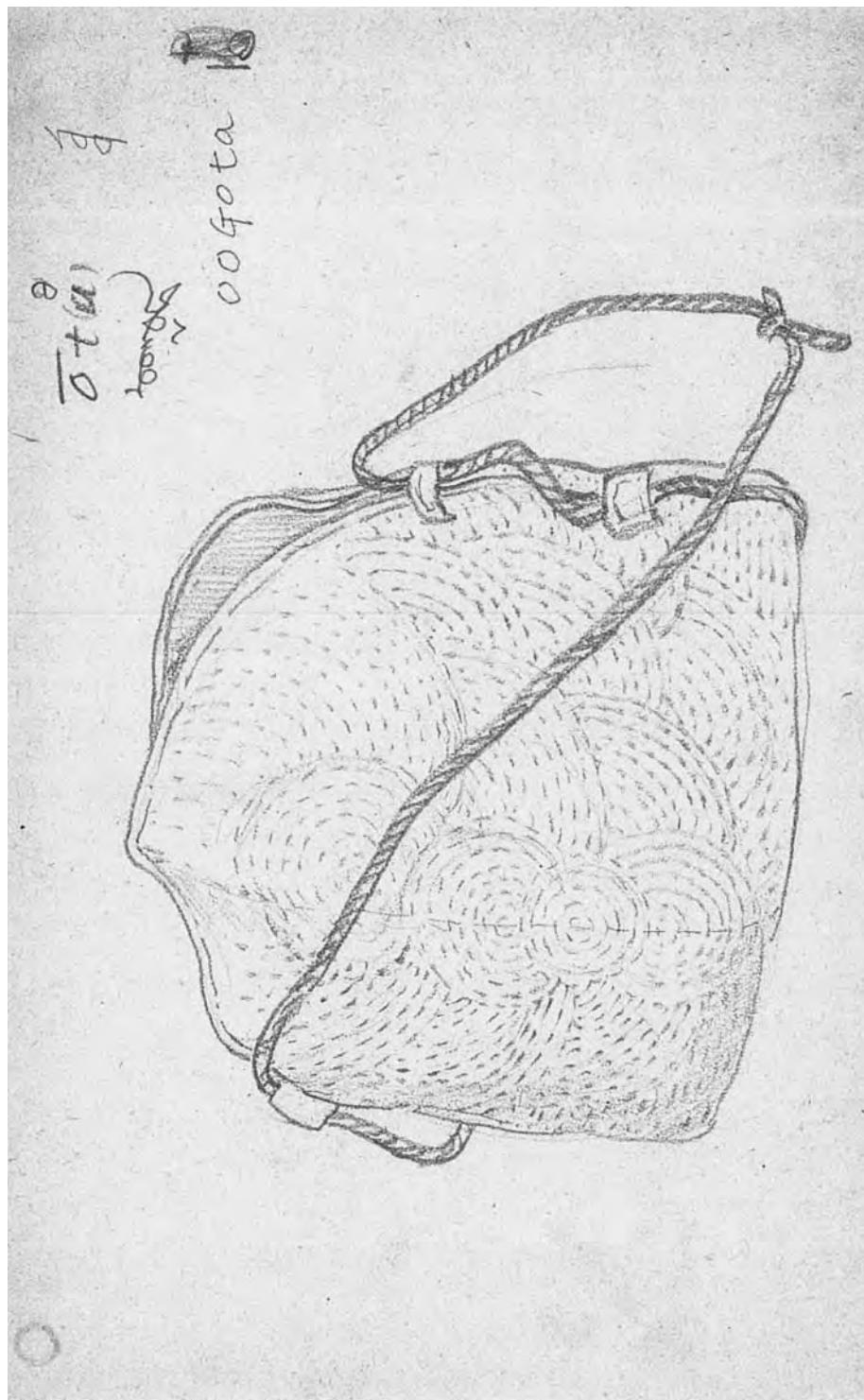
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム,
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ



浮きぼり細工のほどこされた銀杯はハレの日につかわれる。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：通遼市、ホルチン博物館
撮影者：堀田あゆみ

29. 穀類



29. 穀類

乳茶にいれるキビは、しばしばかんたんにボダーとよばれている。大興安嶺の東側の農耕地帯まで買いにゆく。クシクテン地方まで買いにゆく。晩秋にラクダ数頭をひきつれてゆく。しいれたキビは、オートとよばれる袋にいれてラクダにつんでかえる（図29）。オートはフェルトにラクダの毛でさしこがしてあり、ラクダの毛のひもがついている。買いだしにいく人が近所にあると、その人にたのんで、袋をあずけて買ってきてもらうこともある。

ほかに麺類がある。とくに蕎麦の粉でつくったユウマイ・ゴリルがこのまれる。ユウマイは、チャハルおよびウランチャップの漢人地帯で栽培されているカラスマギの1種である。モンゴル人のあいだでも、大量に消費される。ユウマイの粉を水でねり、板のうえにうすくのばして、それをほそくって麺にする。それを羊肉の煮汁でくる。塩味でたべる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』577ページ

- 注1 キビを生産している東部内モンゴルでは、キビをモンゴル・アムとよぶ。アルバイは、東部内モンゴルでは「莧菜」（ひゆな）をさし（ふつう、人間がこれを食べることはない）、青海ではチンコームギをさし、モンゴル国ではオオムギをさすというように、雑穀の名称は地域差がはなはだしい。
- 注2 フフホトにはユウマイ料理の専門店もある。ユウマイ料理については、小長谷有紀著『世界の食文化 モンゴル』に詳しい。
- 注3 現在では小麦粉が普及している。



左側の容器には炒ったキビが、右側には炒る前のキビが入っている。キビは商店で買っている。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレート
ノール・ソム、アルタン
エメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

30. 肉をたべる



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

30. 肉をたべる

肉でもっともしばしば食されるのは、羊肉である。晩秋に屠畜して、あとはこおらせて翌春までにたべる。ヒツジを解体して、すこし塩味をつけて大鍋でにる。銀製の大皿に肉をかきねてもり、客人に供するときは、ヒツジの脂肪尾をうえにのせ、そのうえにヒツジの頭をのせてだす（図30）。ヒツジの頭上には脂肪尾またはバターの小片をさいの目にきったものをのせる。宴席がはじまるまえに、さいの目の脂肪またはバターを、炉にくべたりして、天地にささげる。乳酒アルヒ（チャハル方言ではエルヒ）に指をひたして、滴を天地四方にふりまく。この儀礼のうちに、肉をたべはじめる。

ヒツジを屠畜するときには、あおむけにしておいて腹をさいて手をつっこみ、大動脈を人さし指と中指と薬指の3本ではさんできる。血はすべて体腔内にたまり、地面にこぼれることはない。血を地面にこぼしてはいけないのである。小腸をとりだして、内容物をきれいにあらいだす。その後に、体腔内にたまつた血をあらった小腸にいれて、ゆでる。1種のソーセージである。こうして血も完全に利用される。小腸、血以外の内臓もほとんどが食用に供せられる。

ヤギもヒツジに準じて、食用に供する。

ウシも屠畜して食用に供する。ウシを屠畜するには頸椎にナイフをいれる。ウシも肉および内臓をほとんどすべて利用する。

ウマおよびラクダは原則として食用に供さない。地方によっては、食用に供する場所があるときいているが、わたしはみていない。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』577-579ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図30は、著作集の編集時に作成されたものであり、原画はない。



オルドスでは、脂肪尾から獸脂を細長く切って、ホストが手づから供し、ゲストはそれを吸うようにしていただくのだといわれた。

撮影年月：1987年9月

撮影場所：イフジョー盟ウーシン旗

撮影者：小長谷有紀



博物館のレプリカ展示。デベシとよばれる盆にゆでたヒツジ肉がもりつけられている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

31. 刀



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

31. 刀

食事を、とりわけ肉をたべるために、各人は蒙古刀ホトガをもっている（図31）。みじかい刀と箸とをセットにして鞄におさめたものである。通常は、房状のひもかざりがついている。これは各人が携帯し、腰にさすか、または長靴にさしこんでいる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』579ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図31は、著作集の編集時にあらためて作成されたものであり、原画はない。



鞘や銀細工の装飾のついた刀は正装用にもっている人もいる。肉を食べるときには、大量生産された既製品の小刀がもちいられる。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：通遼市、ホルチン博物館

撮影者：堀田あゆみ

乳製品

食べものとして重要なものに、乳製品がある。その種類および製法については、べつの論文でのべた。乳製品は、チャガン・イデー（しろい食べもの）と総称される。もっとも普遍的にみられるのはホロートである。これは、カッテージ・チーズの1種とみることができる。これは、長期保存にたえて、各季節に食される。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』579ページ

注1 べつの論文とは、「モンゴルの乳製品とその製造法——乳をめぐるモンゴルの生態III——」のことである。このほかにも「乳をめぐるモンゴルの生態」が2本ある。これら3つの論文は、それぞれ乳I、乳II、乳IIIと略記し、それぞれの論文にもちいられた図の原画も本書に収録する。

補1. 壺（乳Ⅲの図1）



補1. 壺（乳Ⅲの図1）

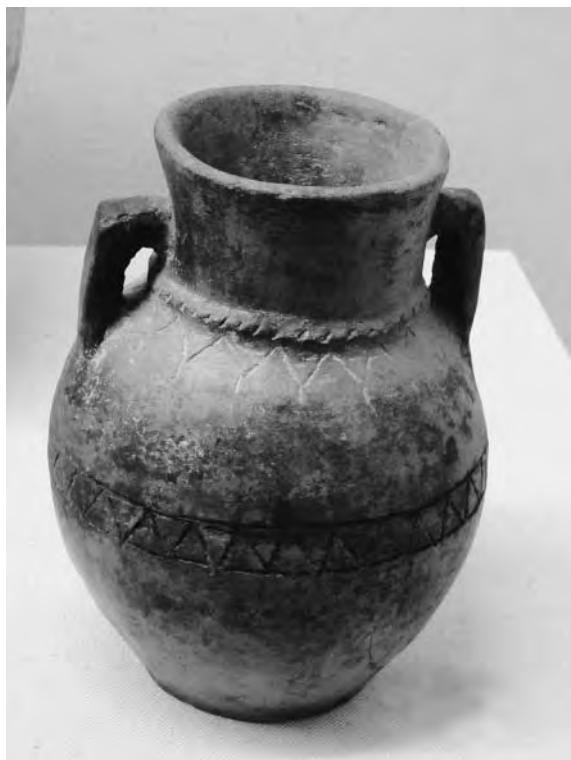
乳のはいった壺は、数時間そのまま室内においてある場合もある。チャハルではふつうはすぐにワールあるいはカン・ワールとよばれる陶器の壺に乳をうつす。これらのワール類は、チャハルでは、どの家にも棚のうえに数個ないし十数個ならんでいる。乳は、夏なら2日、さむくなれば3日ばかりも、このまましづかにおいておく。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』275ページ

注1 補1～補14までの説明文について、初出の論文は以下のとおり。

梅棹忠夫1955「モンゴルの乳製品とその製造法——乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ——」『内陸アジアの研究——ヘティン博士記念号——ユーラシア学会研究報告Ⅲ』217-296ページ。

注2 フィールド・ノート1番の26-27ページには壺が製図されている。



撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

補2. 壺（乳Ⅲの図2）



補2. 壺（乳Ⅲの図2）

注1 当該論文の図3の原画は、日付の記載方法から和崎のスケッチではないかとおもわれる。



撮影年月：1988年6月

撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

バターをつめたあと、布でおおって、糸でしばり、長期保存用とした。

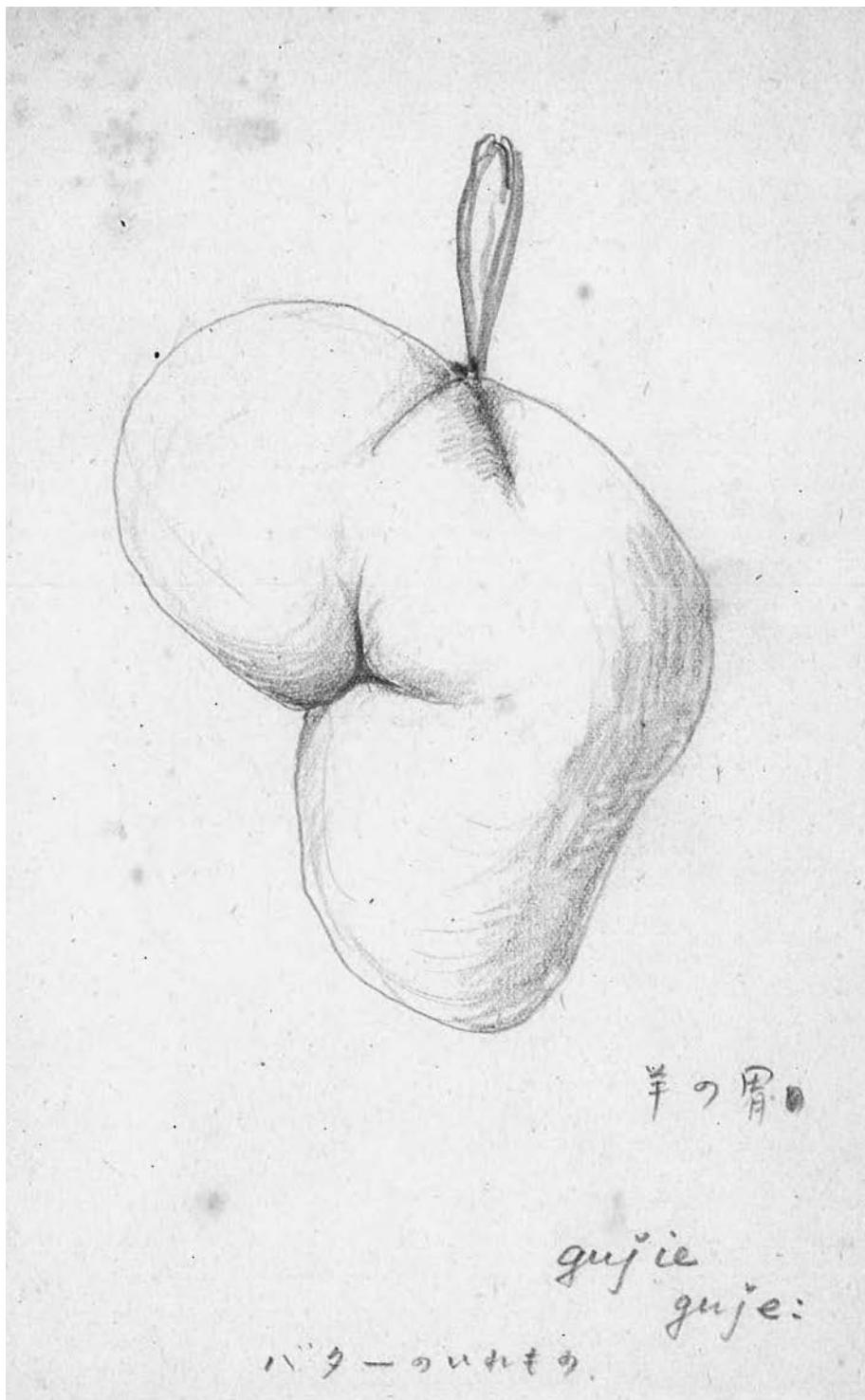


撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、
スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

補3. バターのいれもの（乳Ⅲの図4）



補3. バターのいれもの（乳Ⅲの図4）

ヒツジなどの胃ぶくろをかわかして、そのなかにシャル・トスをつめたものである。天井からさがっているのをよくみる。これは「胃」（第4胃）ということばをそのまま転用して、グジェーとよんでいる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』278-279ページ

注1 ここにかかげた原画のさらにもとになるとおもわれるスケッチが、フィールド・ノート0(ゼロ)番の20ページにえがかれている。そこには「肅親王牧場」としるされている。



モンゴル国ではグゼーと呼ばれ、現在でもウルムをつめて保存するのに使用する。天日乾燥しているところ。

撮影年月：2009年8月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ホントト・ソム

撮影者：小長谷有紀

補4. ざる（乳Ⅲの図5）



補4. ざる（乳Ⅲの図5）

ジョッヘ（生クリームに相当する）をとりだしたあとには、エードスン・スー（乳酸発酵してすっぱくなり、凝固しつつある乳）がのこっていた。それはしばしばカード（凝乳）の状態になっていた。

つぎには、このカードをすくいとって、水をきり、鍋にうつす。カードをすくいとるには、ジョーラというザルをもちいることがある。ほそい柳条あんだもので、水きりがよい。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』280-282ページ



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、
スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ

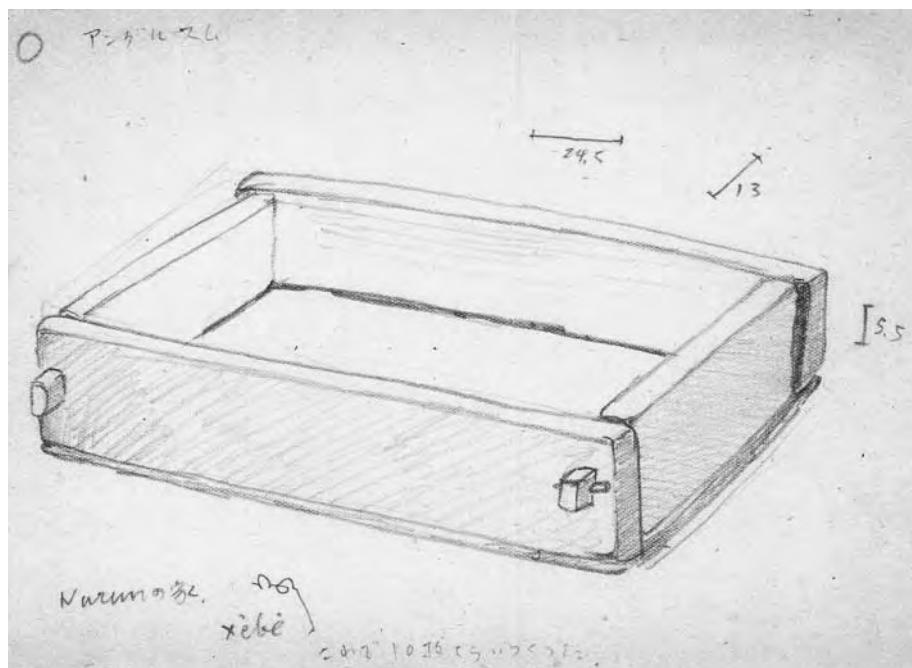
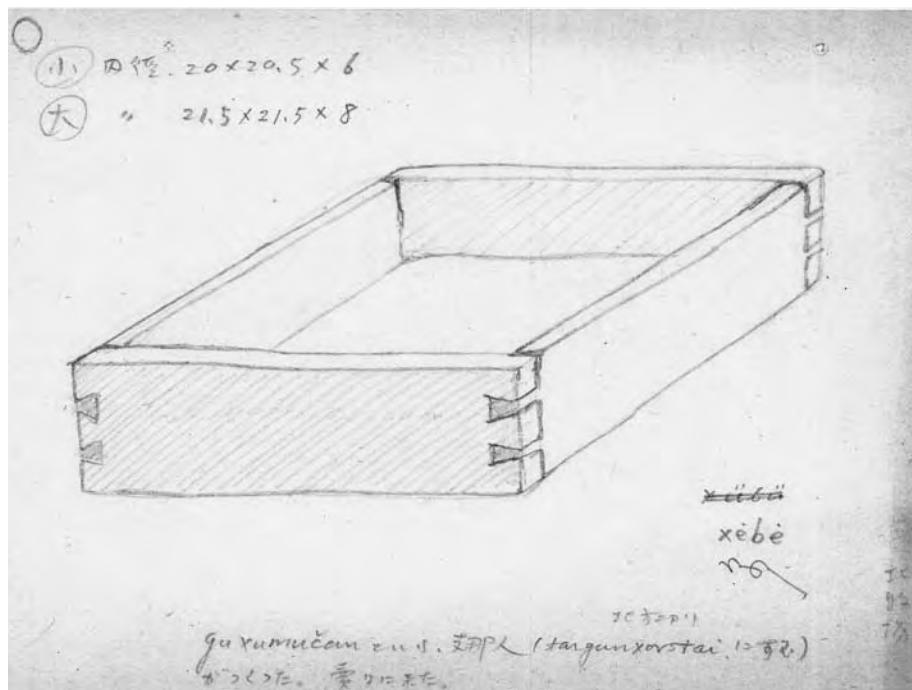
柳条製のざるは博物館に収められている。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレ
ートノール・ソム、
アルタンエメール・
ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

一般の家庭では金属製のものが使われている。

補5. 補6. 木型 (乳Ⅲの図6~7)



補5．補6．補7．補8．木型（乳Ⅲの図6～9）

まずエーデウムのゆくえをたどる。エードゥム（水をきった凝乳）は、鍋のなかでかきまわしながらトロ火で熱をくわえると、水分の蒸発につれてしまいに濃厚になる。やがてそれをとりだして、フブとよばれる木の枠のなかにながしこむ。（中略）

フブには、底のあるのもないもある。底のないのは、木の板のうえにこれをおくと、余分の水は板のフブとのすきまから、すみやかにながれでるというわけである。フブは、ふつうは1辺が20cmくらいの正方形であるが、長方形のものもある。なかには、ホワールタイ・フブといって、花形模様のついた、お菓子の押型みたいなのもある。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』282ページ

注1 一般にヘブといわれており、方言でフブという。



撮影年月：1988年7月

撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀



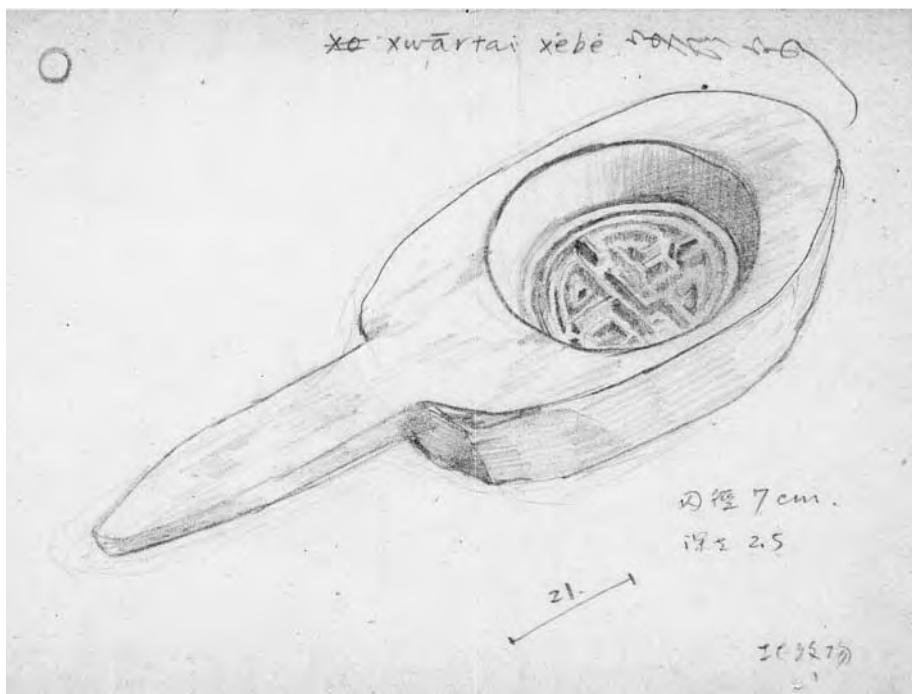
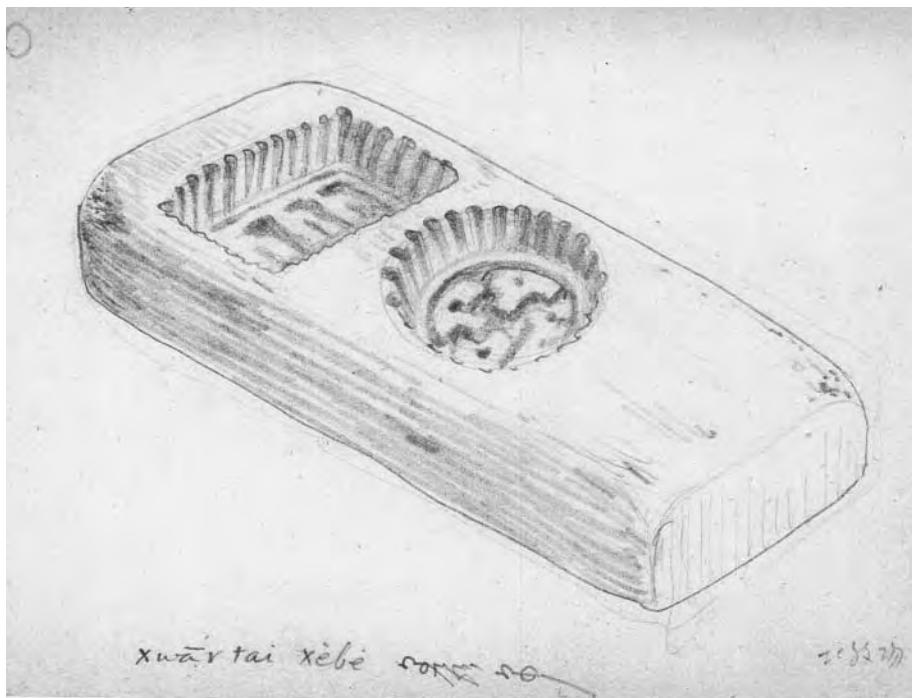
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

家庭では木製やアルミ製のシンプルなものがつかわれている。

補7. 補8. 木型 (乳Ⅲの図8~9)





博物館には複雑な模様のついた押型がおさめられている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗，タマチ博物館

撮影者：堀田あゆみ



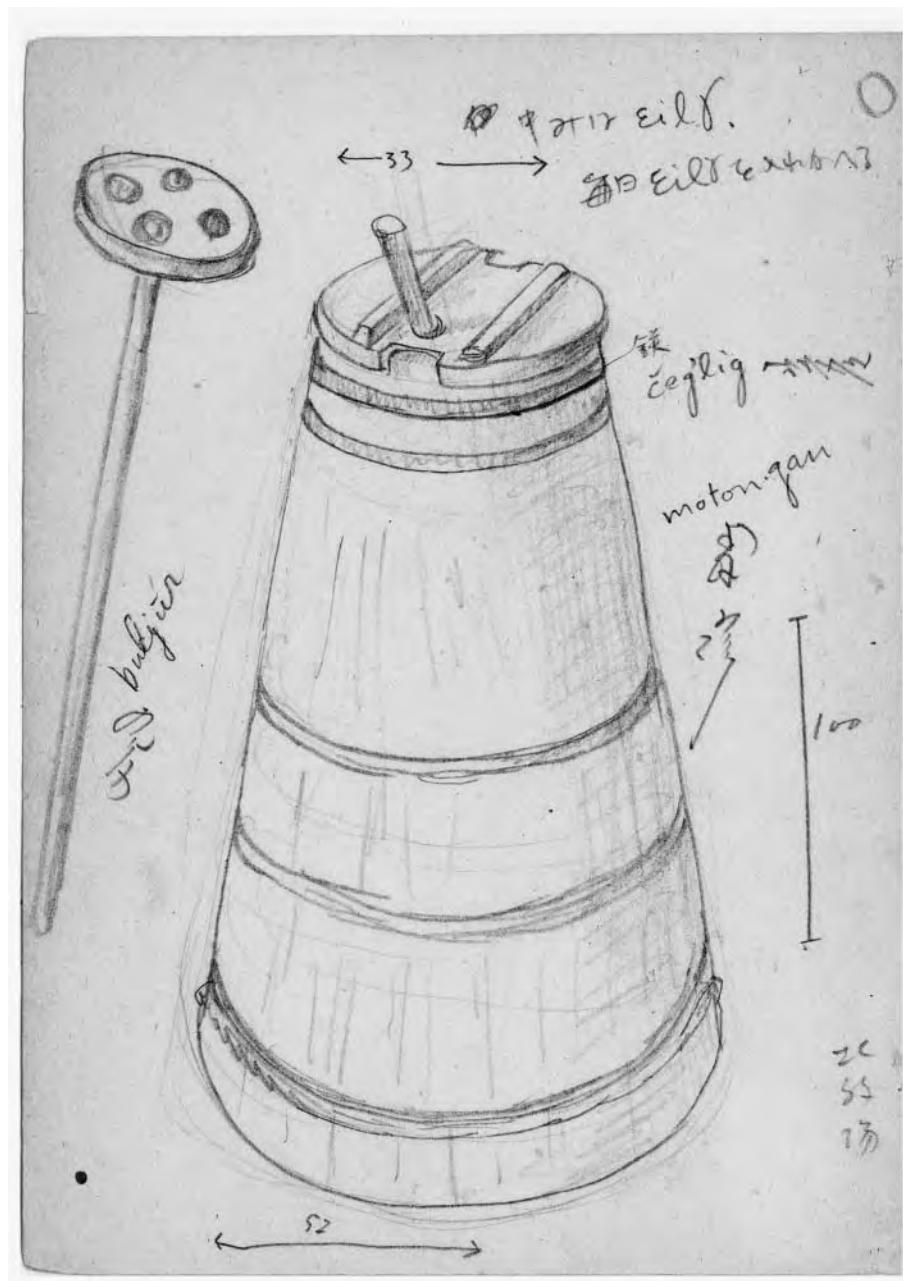
正方形のものも、円形のものも、まさしく梅棹の記述どおりである。

撮影年月：1988年7月

撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀

補9. 乳加工用の桶（乳Ⅲの図10）



補9. 乳加工用の桶（乳Ⅲの図10）

乳製品加工の過程で排出されたシャル・オス（乳清）は、モドン・ガンにいれる。それは、おおきな円錐形の木の桶である。

たかさ1m、底の直径52cm、口の直径33cm。なかにエーラグ（発酵乳）がはいっている。棒でかきまわす。棒はブルジュールという。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』290ページ

注1 搅拌棒はブルールという。2012年東ウジムチンでは、桶の内容物をしめすべくアイラグ・ガン（発酵乳桶の意）とよばれていた。



梅棹のスケッチと同じ形状・用途のまま家庭で利用されている。
中にはいった発酵乳をかきまわしているところ。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ



民族雑貨店で売られているアイラグ・ガン。同じ店内には、3分の1ほどの大きさのミニチュアも売られていた。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地

撮影者：堀田あゆみ



補10. 蒸留器具（乳Ⅲの図11）



補10. 蒸留器具（乳Ⅲの図11）

カマド（ジョーホ）は土でつくる。たかさ30cm。直径62cm。そのうえに大鍋（トゴー）をのせ、蒸留桶（ブルフル）をふせる。うえに冷却鍋（ジルブチ）をのせ、フェルトの帶（オロート）で密閉する。ブルフルのたかさ40cm。ジルブチの直径40cm。水滴をうける壺は、両側につきでた耳にひもをひっかけて、宙づりになっている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』291ページ

注1 原画にあるホンコという単語については、なにをさしているのか確認できない。当時の調査助手がつづったとおもわれるモンゴル文字はkeügeüとも読めるため、ホーkö（すずの意）を意図していたのかもしれない。モンゴル縦文字の正書法は確定していなかったので、発音の雰囲気は自由に表現されていた。

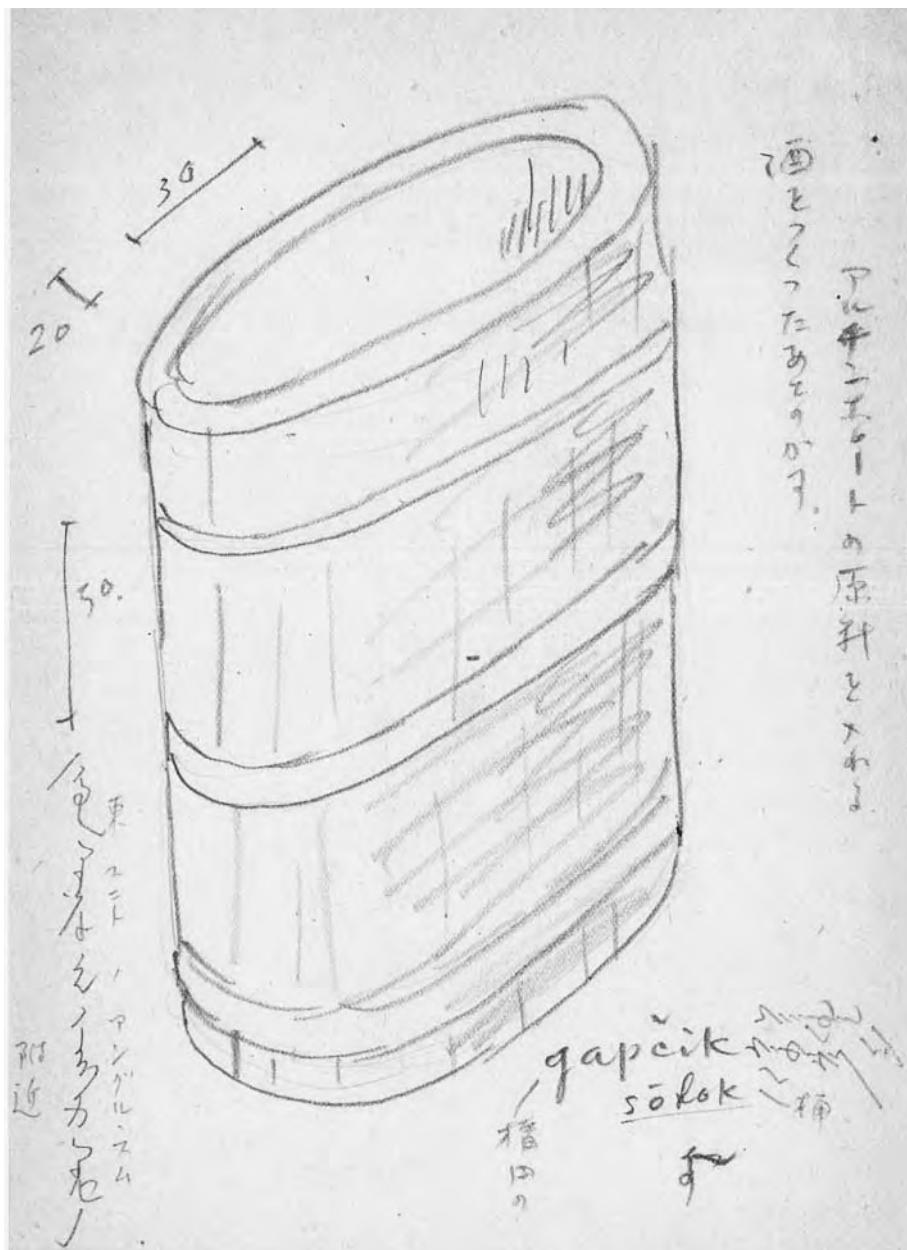
注2 カマドはフィールド・ノート3番の42ページに同様のスケッチがある。



撮影年月：1988年7月
撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム
撮影者：小長谷有紀

台所専用のゲルがあれば、発酵乳用の桶など、乳加工道具はそこにそろっている。

補11. 桶（乳Ⅲの図12）



補11. 桶（乳Ⅲの図12）

ガブチクは、長円のという意味、ソーロクは桶のこと。たかさ50cm、長円の長径30cm、短径20cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』295ページ

注1 つぎにかかげる桶にくらべて、これは、径がちいさいけれども、ふかい。蒸留によってアルコール分をとばしたあとの発酵乳をいれる。貯蔵しながら、つぎの加工をまつ道具である。

注2 ガブチクの原義は、挟まれたという意味である。



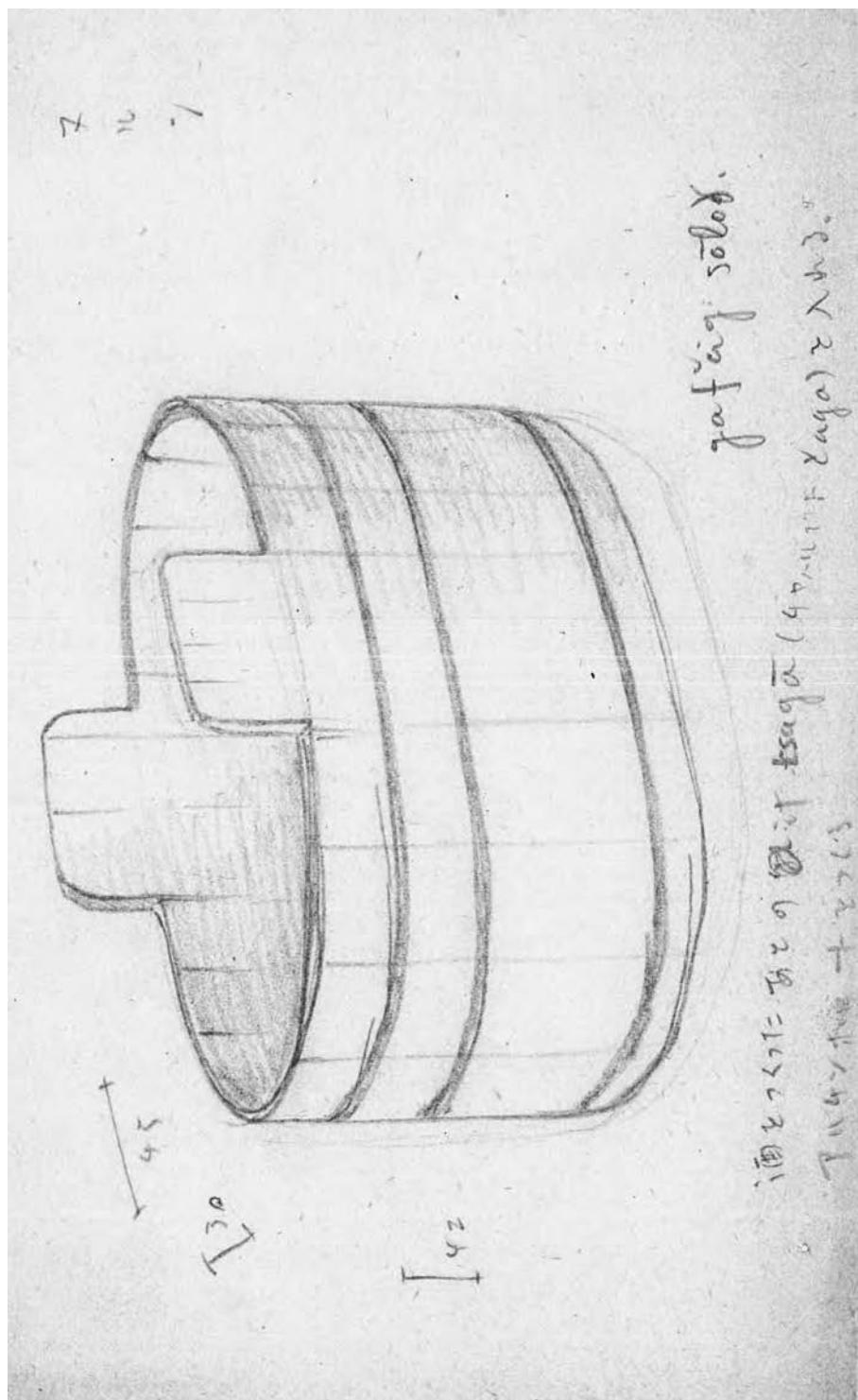
高さ56cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館

撮影者：ナランゲレル

補12. 桶 (乳Ⅲの図14)



補12. 桶（乳Ⅲの図14）

これも、ガブチク・ソーロクという。たかさ42cm、長径45cm、短径30cm。なかにチャガーをいれている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』296ページ

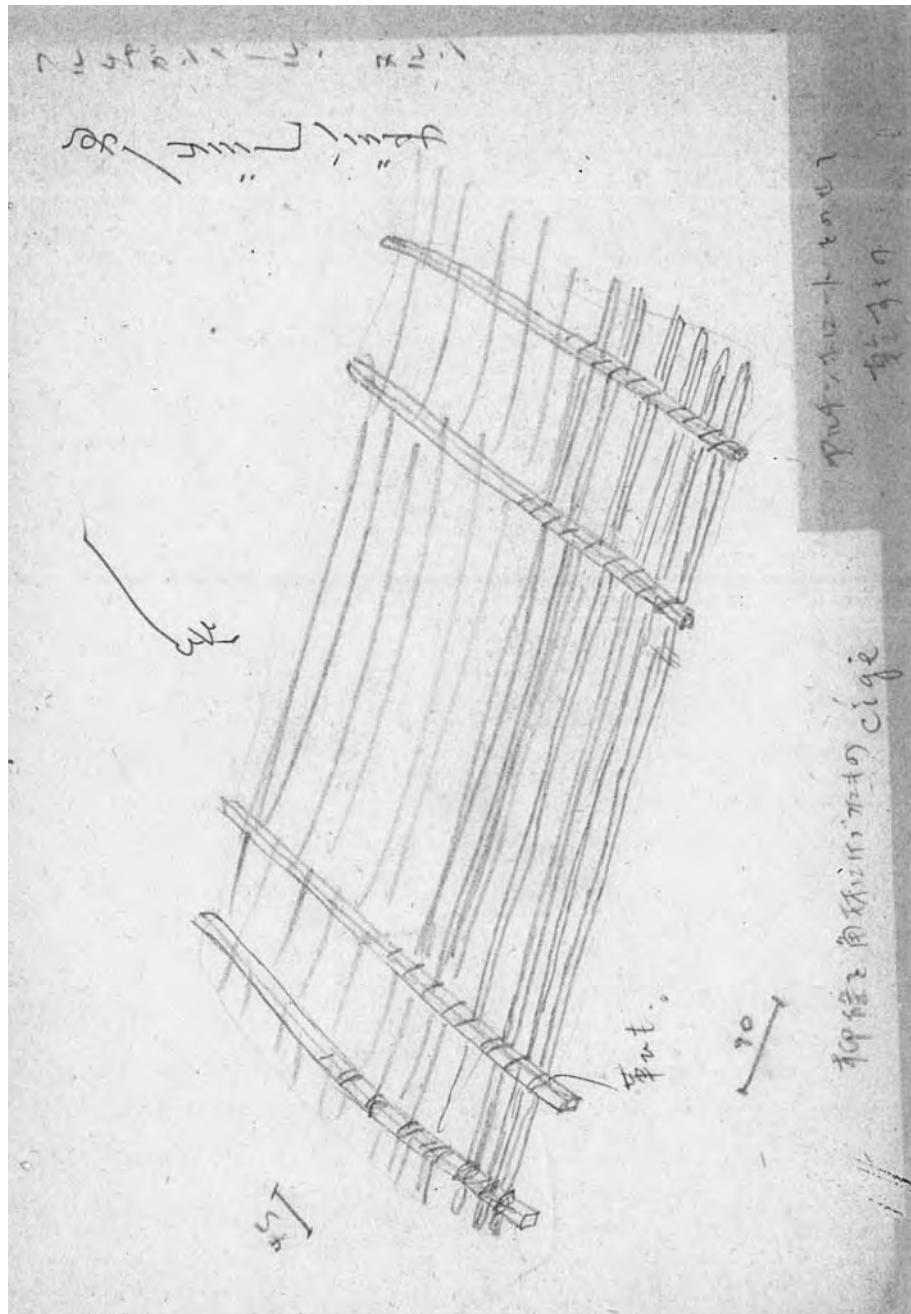
注1 さきにかかげた桶にくらべて、これは、口がひろく、ひらたい。発酵乳を煮詰めてできた一種のヨーグルトをいれる。食品としての完成品がいれられている。このようにおなじ名まえの桶でも、サイズによってつかいわけかれているとおもわれる。



これは円形である。

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：ナランゲル

補13. すのこ (乳Ⅲの図13)



補13. すのこ（乳Ⅲの図13）

柳条を角材にけずって、革ひもでむすんである。これを、チゲという。アルチン・ホロートなどをのせて、乾燥する。ながさ90cm、幅45cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』295ページ



柳条はけずらずにそのまま利用している。このときほしてあったのは、かたどりしてつくるスーン・ホロートである。

撮影年月：1988年7月

撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀

補14. 布袋 (乳Ⅲの図17)



補14. 布袋（乳Ⅲの図17）

ジュン・スニト旗、フル・チャガン・ノール付近。オチルの家にて。

ゲルのハナ（側壁の骨組み）に、布袋がつりさげてある。何かドロドロしたしろいものがはいっている。布袋は、ホンコといった。

「ラクダの乳をしほってきたら、それをモドン・ガンにいれる。いっぱいいいれてかきまわす。そのままにしておくと、うえにあぶらがういてくる。それをとってホンコにいれておくと、したから水分がしたりおちて、袋のなかにはチャガン・トスがのこる」
(1944・10・13)

チャハルでは、ジョッヘニー・タールチク（ジョッへの袋）という。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』325ページ

注1 2012年の調査では、ホンゴーという表現を確認することができた。



ゲルの入り口、台所側に布袋が吊られて、脱水されている。

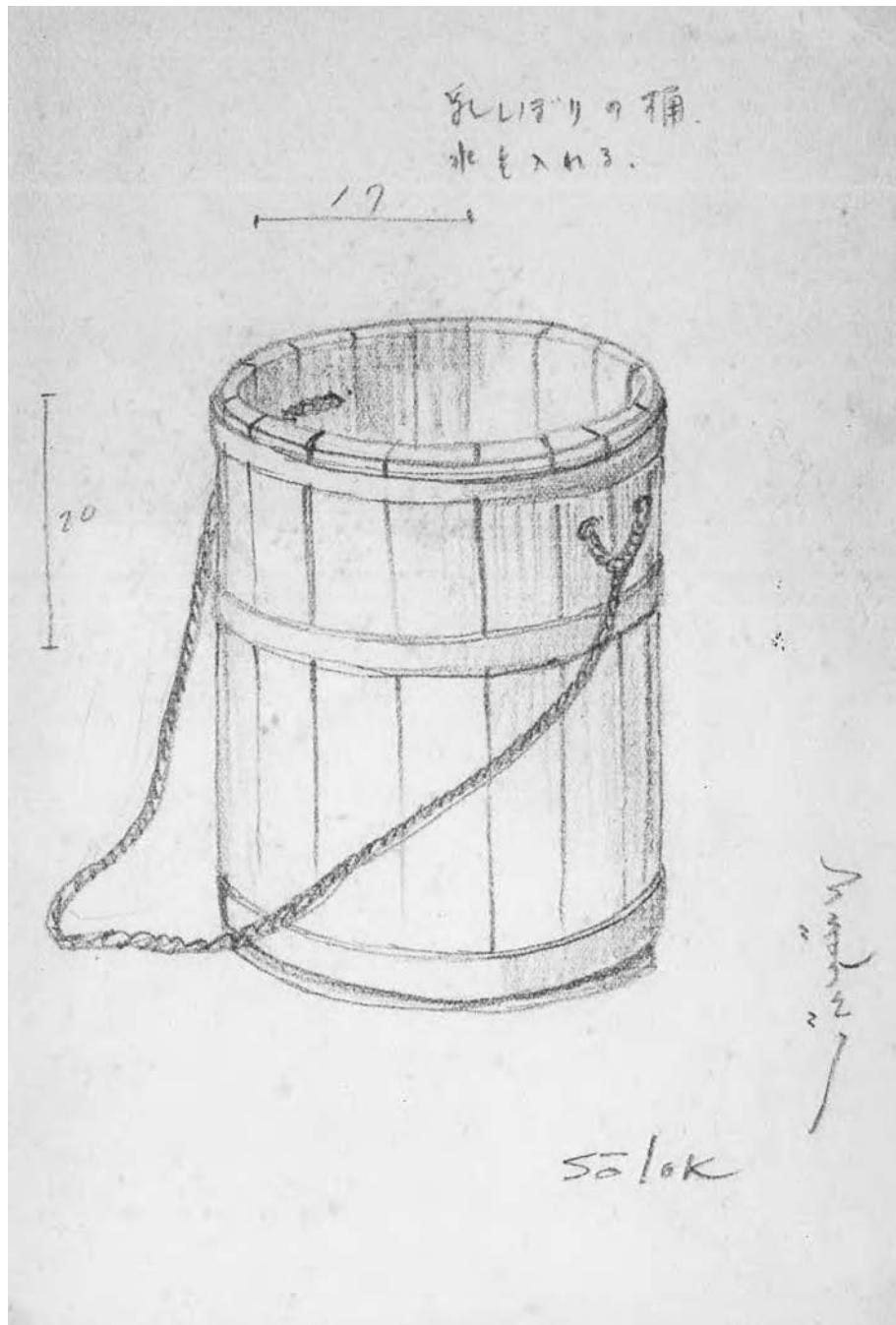
撮影年月：1987年8月
撮影場所：シリンホト市ダブシルト・ソム
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、
アルタンエメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

未使用の状態で、台所の壁の高い位置に吊られている。

補15. 乳しぶりの桶 (乳Ⅱの図1)



補15. 乳しぶりの桶（乳Ⅱの図1）

乳しぶりのための道具としては、ただ、ソーロクとよばれる木の桶があるばかりである。ソーロクということば自体は、桶一般を意味していて、いろいろな形や用途のものをもふくむけれども、ふつう単にソーロクといえば、小型の円筒形で、用途もだいたい乳しぶりのためだけのものである。そして、どの家畜にも共通につかわれ、かつ、地位的なちがいはみられない。おおきさもほぼ一定している。各地ではかった12例について、その内径をしめすと、17cmが1例、18cmが2例、19cmが4例、20cmが3例、25cmが2例となる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』216-218ページ

注1 つづいて関連する図版をかかげる。初出の論文は以下のとおり。

梅棹忠夫1951「乳をめぐるモンゴルの生態（II）——乳のしぶり方、およびそれと放牧の関係」『遊牧民族の研究——ユーラシア学会研究報告——自然と文化Ⅱ』、119-172ページ。



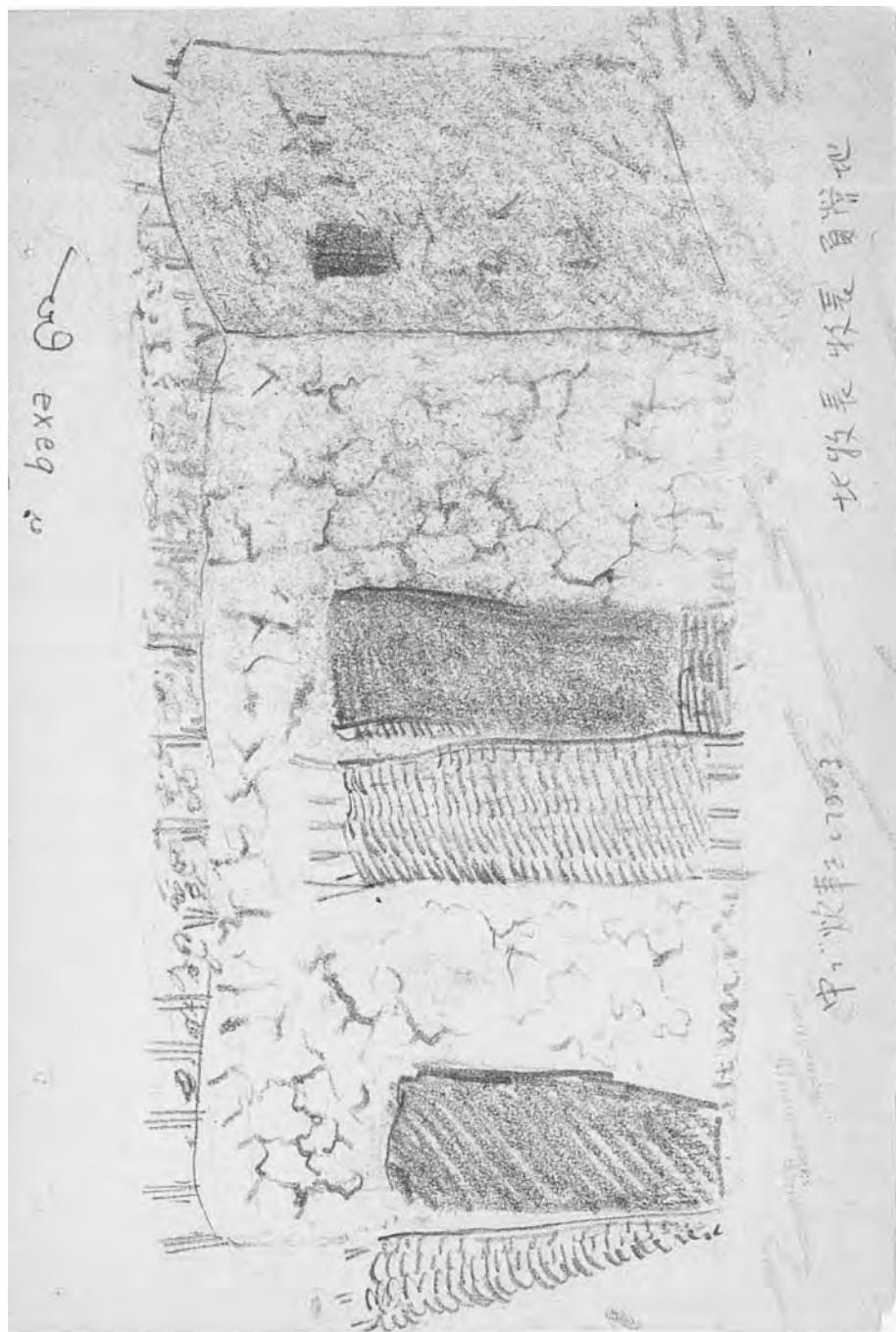
アルミ製のバケツが普及するとともに、木製桶はあまりつかわれなくなっていた。

撮影年月：1988年4月

撮影場所：シリントホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

32. 小屋



32. 小屋

台所はべつのゲルになっていることがしばしばある。なかには、ゲルではなく、アルガルと泥や灰をまぜてぬりこめた小屋を台所につかっている例もある（図32）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』579ページ

注1 原画にしるされた北牧場とは、肅親王府の牧場のひとつであり、グンシャンダク砂漠のなかにあったことが「回想のモンゴル」にのべられている。



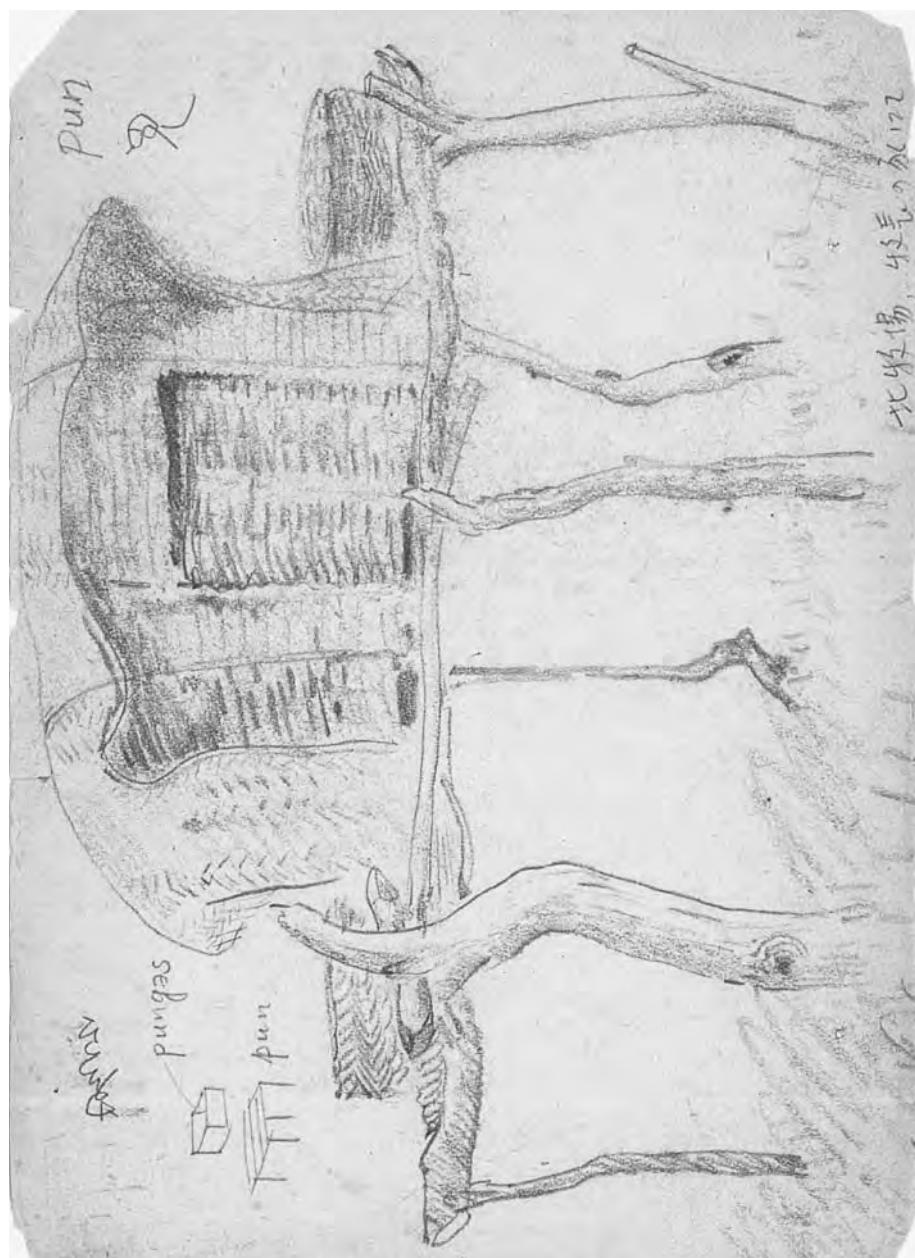
固定家屋の左側にあるゲルは鉄製で、物置としてつかわれている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

33. 乾燥台



33. 乾燥台

戸外における台所の延長設備として、ホロートなどの乳製品を乾燥させるための棚がある。乳製品を地上においておくと、イスがたべてしまうので、棚のうえにおいて乾燥させる（図33）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』579-580ページ



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

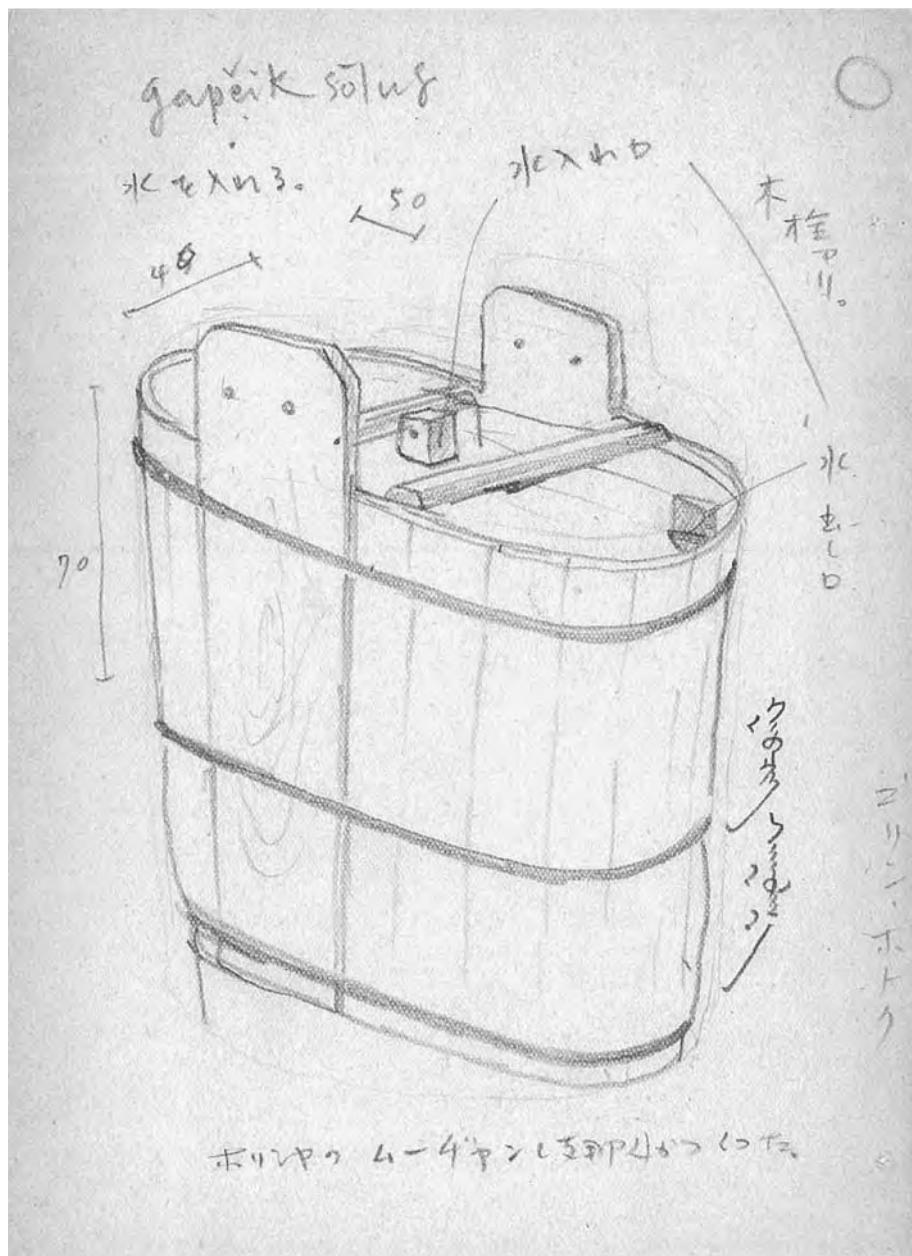


撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

34. 桶



34. 桶

台所には、さまざまな桶ソーログがある。扁平長円形の水入れの桶は、ガブチク・ソーログとよばれ、40×50×70cm(図34)。漢人大工がつくったもの。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』580ページ

注1 つづりではソーログだが、ソーロクと聞こえる。そのため、乳をめぐる3つの論文では一貫してソーロクとするされていた。補12および補15を参照のこと。

注2 「モンゴル遊牧図譜」では、図34と図35の図版が入れかわっていた。こちらが図34である。大型である。



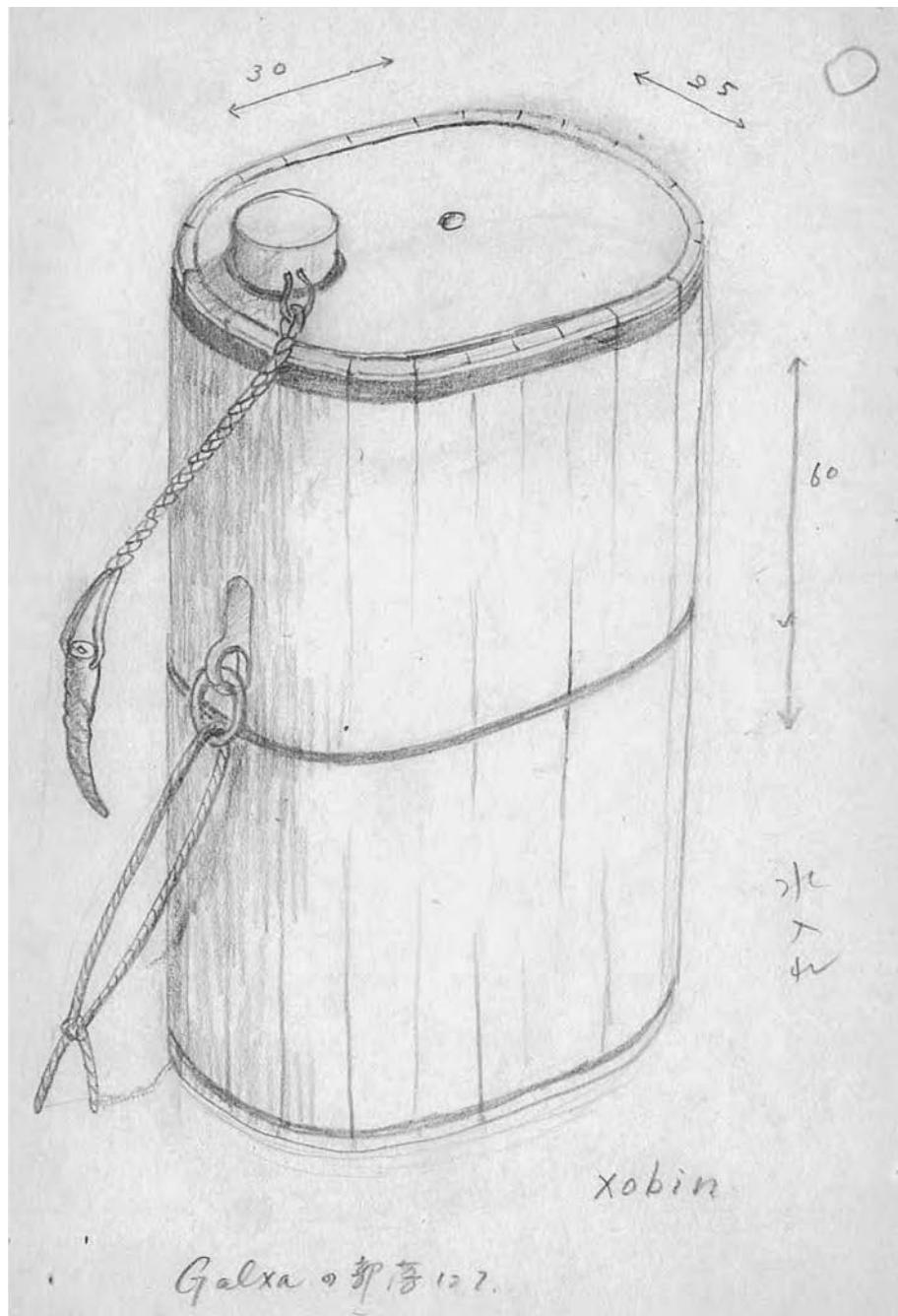
高さはおよそ65cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

35. 水入れ



35. 水入れ

また縦長の水桶は、ホビンとよばれている。30×25×60cm (図35)。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』580ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」では、図34と図35の図版が入れかわっていた。こちらが図35である。
図34よりもやや小ぶりである。大きさよりもむしろ、形状に違いがみられる。桶ではなく
「水入れ」として記述されていた。

注2 フィールド・ノート13番の7ページ、12月22日、ガルハ（ハルハ）部落での記録のなか
に、おなじ図解説明がある。



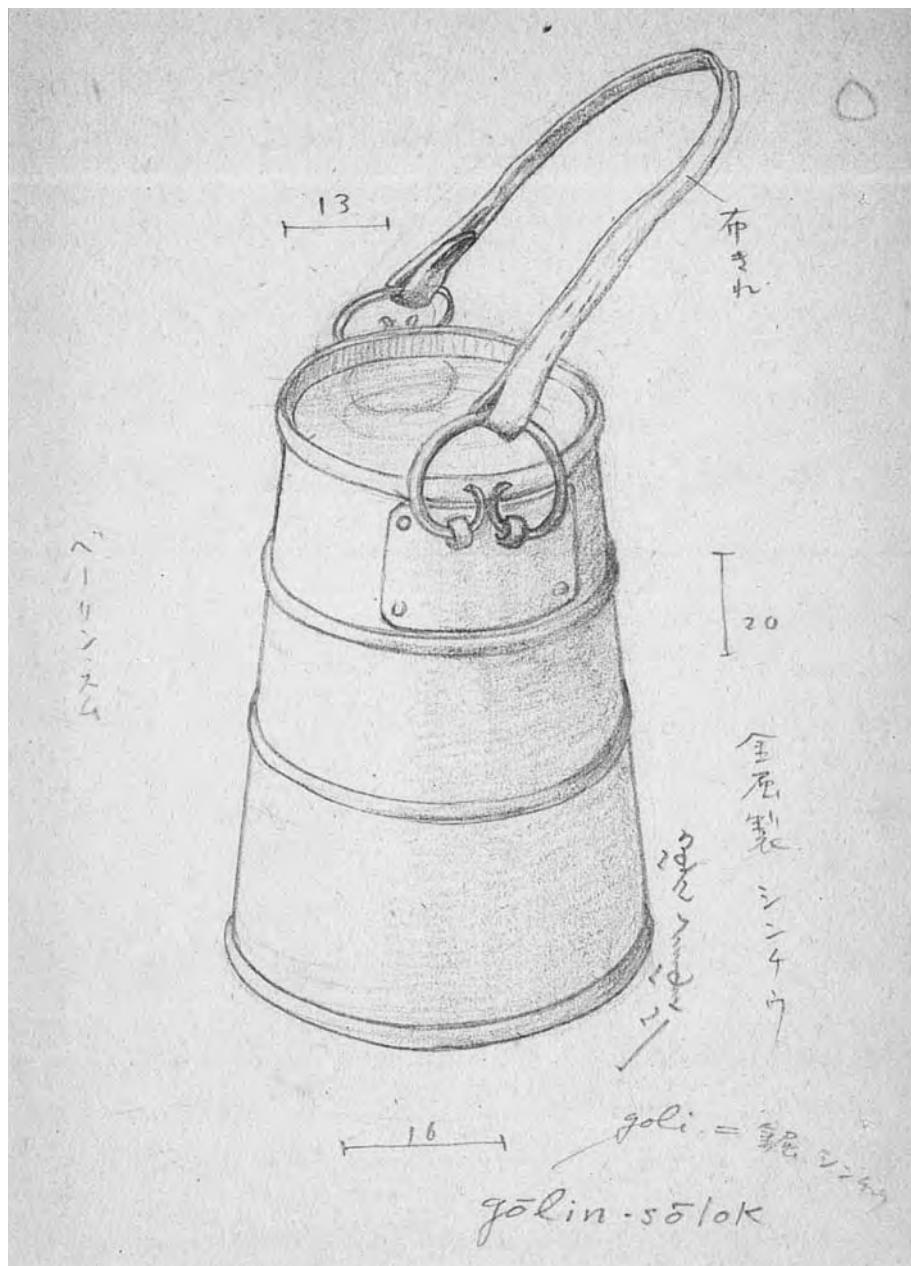
ポリタンクが普及している。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

36. 真鎚の桶



36. 真鍮の桶

真鍮製の上部がややほそくなった桶がある。ゴーリン・ソーログ（真鍮の桶）とよばれる。口13cm、底16cm ×たかさ20cm（図36）。

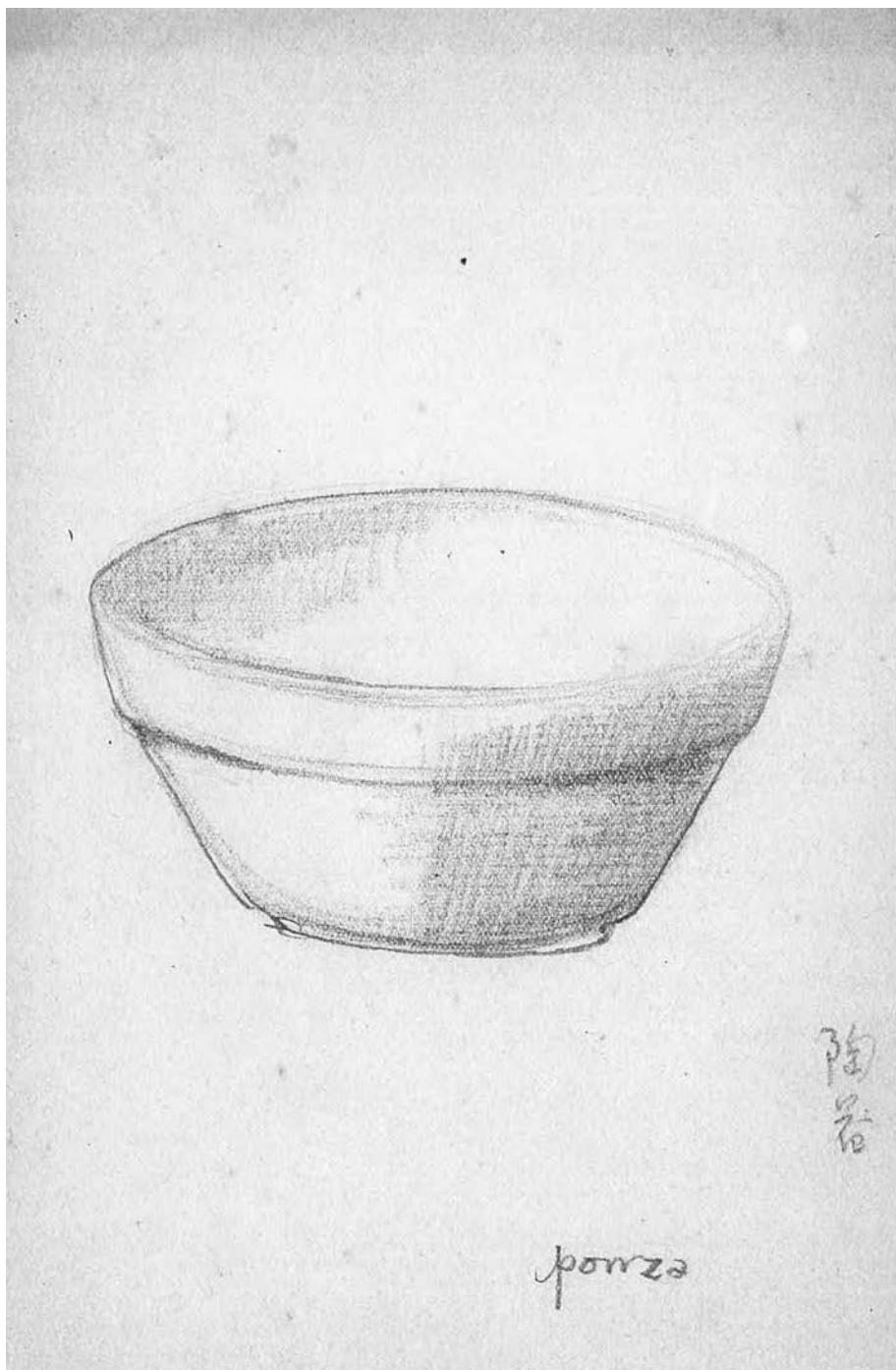
出典 著作集第2巻『モンゴル研究』580ページ



高さ26cm。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル

37. 鉢



37. 鉢

チャハル地方では、陶器の鉢ももちいられることがある。漢語の盆子からポンザとよばれている（図37）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』580ページ

注1 フィールド・ノート1番の27ページには、ま横から見たさまが製図されている。



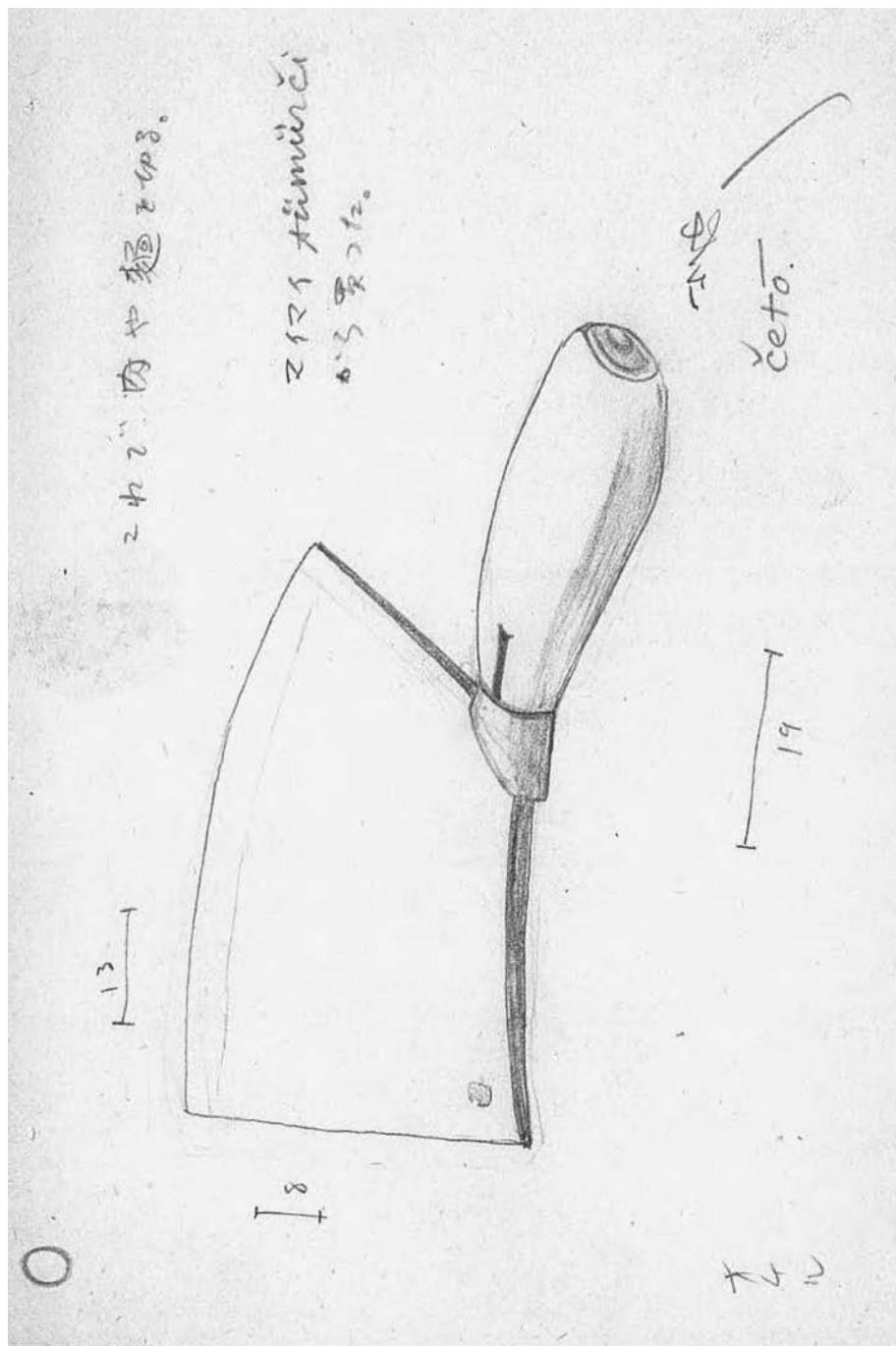
雑貨店にプラスチック製品があふれている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地

撮影者：堀田あゆみ

38. 包丁類



38. 包丁類

肉を食するときは、各人は蒙古刀をつかって肉をきりとるが、調理用のおおきな包丁もある（図38）。刃わたり $8 \times 13\text{cm}$ 。柄は19cm。漢人ふうのぶあついおもい包丁で、名まえも漢語ふうにチェートーとよばれている。これは菜刀ツアイトウであろう。漢人商人マイマイチアから買う。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』580ページ

注1 包丁は中国語を借用するが、地方差がみうけられる。東北ではポートー（包丁）ということがおおく、西北ではジェートー（切刀）ということがおおい。



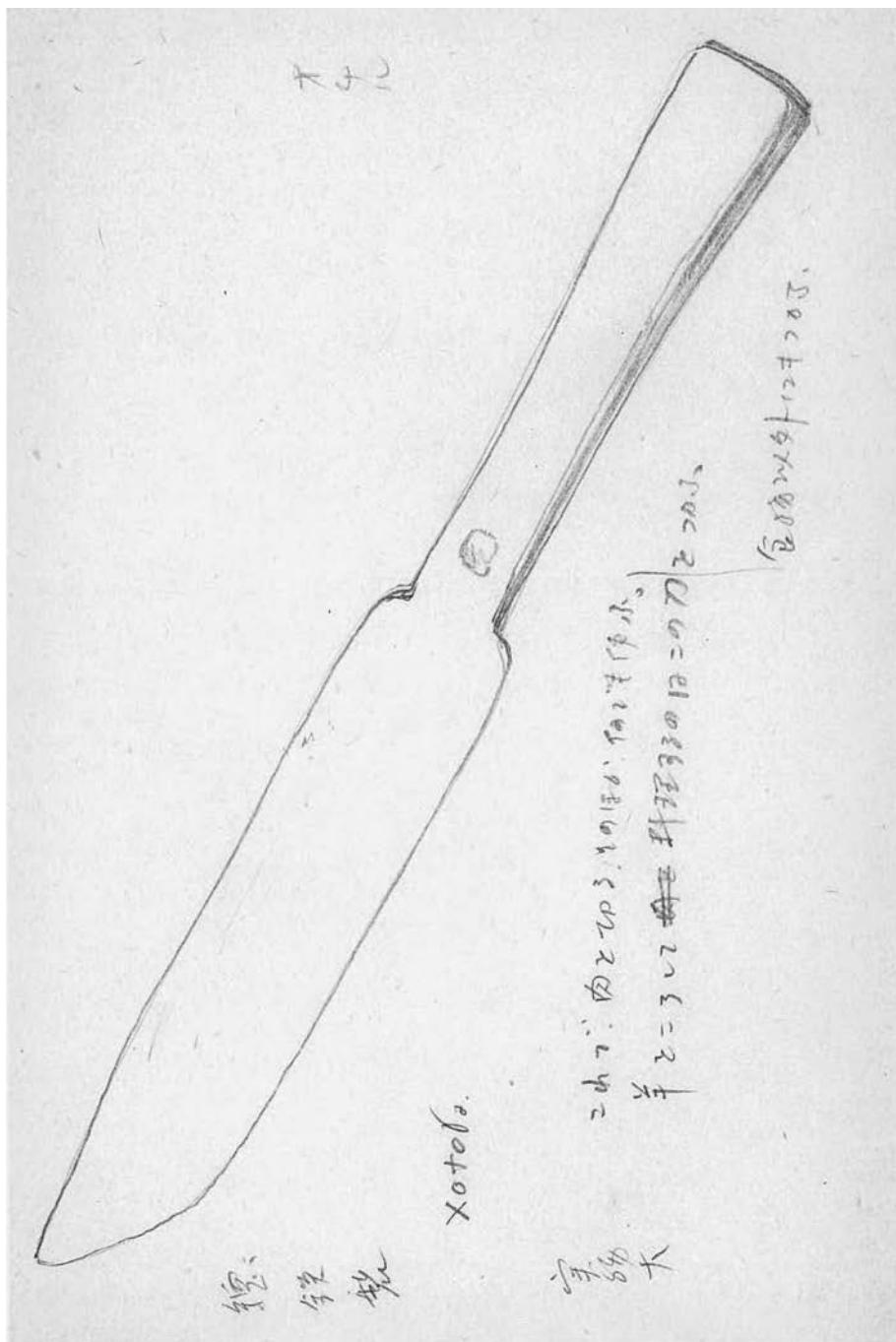
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、
アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ



39. ナイフ



39. ナイフ

包丁、ナイフの類はホトガと総称されるが、たとえば縦鉄製のものをヒツジの解体からさまざまな用途にもちいている（図39）。ながさ21cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582ページ

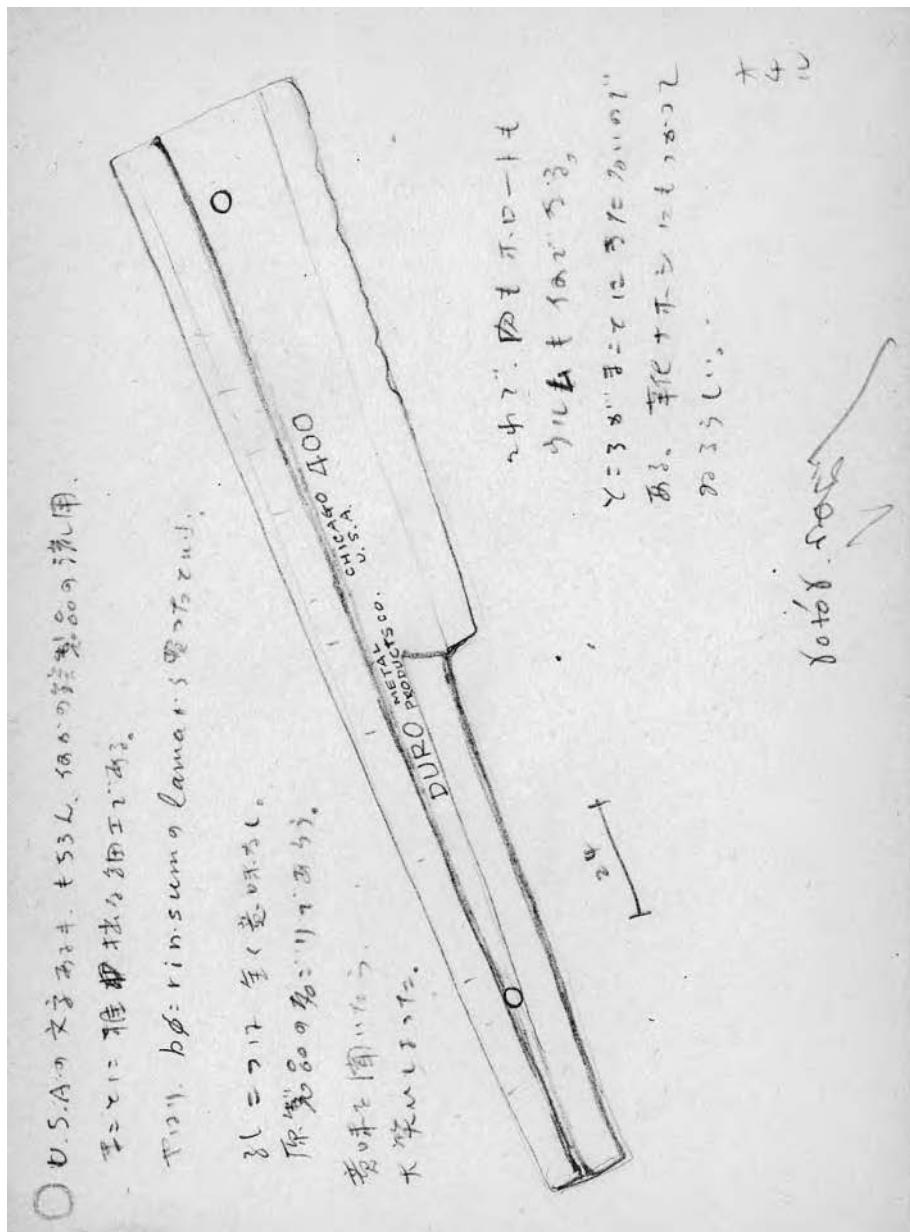


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

40. 自家製ナイフ

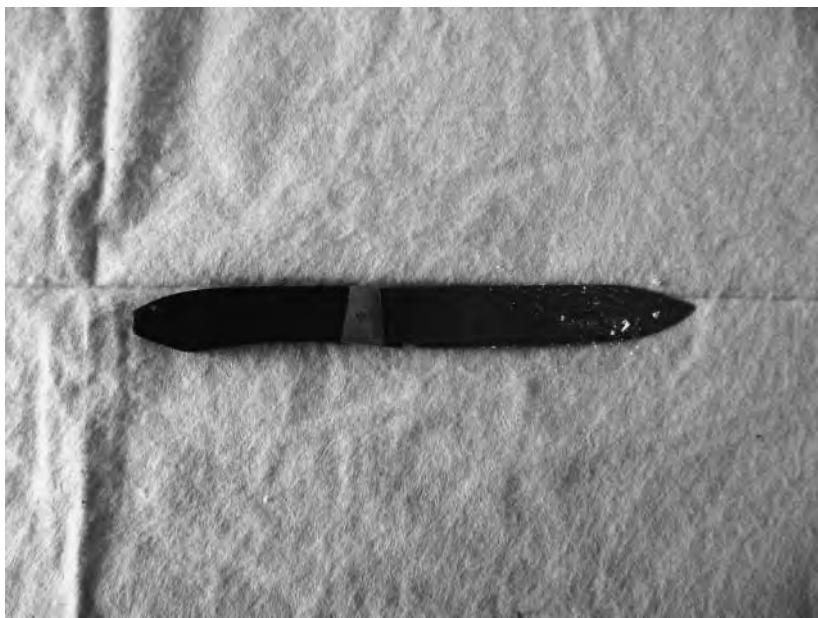


40. 自家製ナイフ

なにかの鉄製品を流用してナイフに改造したものがある（図40）。ながさ24cm。まことに稚拙な細工である。これで肉も乳製品もなにでもきる。ところが、まことにきたないことには、靴の修理にもつかっている。ふたつの穴があるが、これはもとの製品の名ごりであろう。意味をきいたら、もちぬしは大わらいした。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582ページ

注1 大わらいした、という所有者の名がオチルであることがわかる。



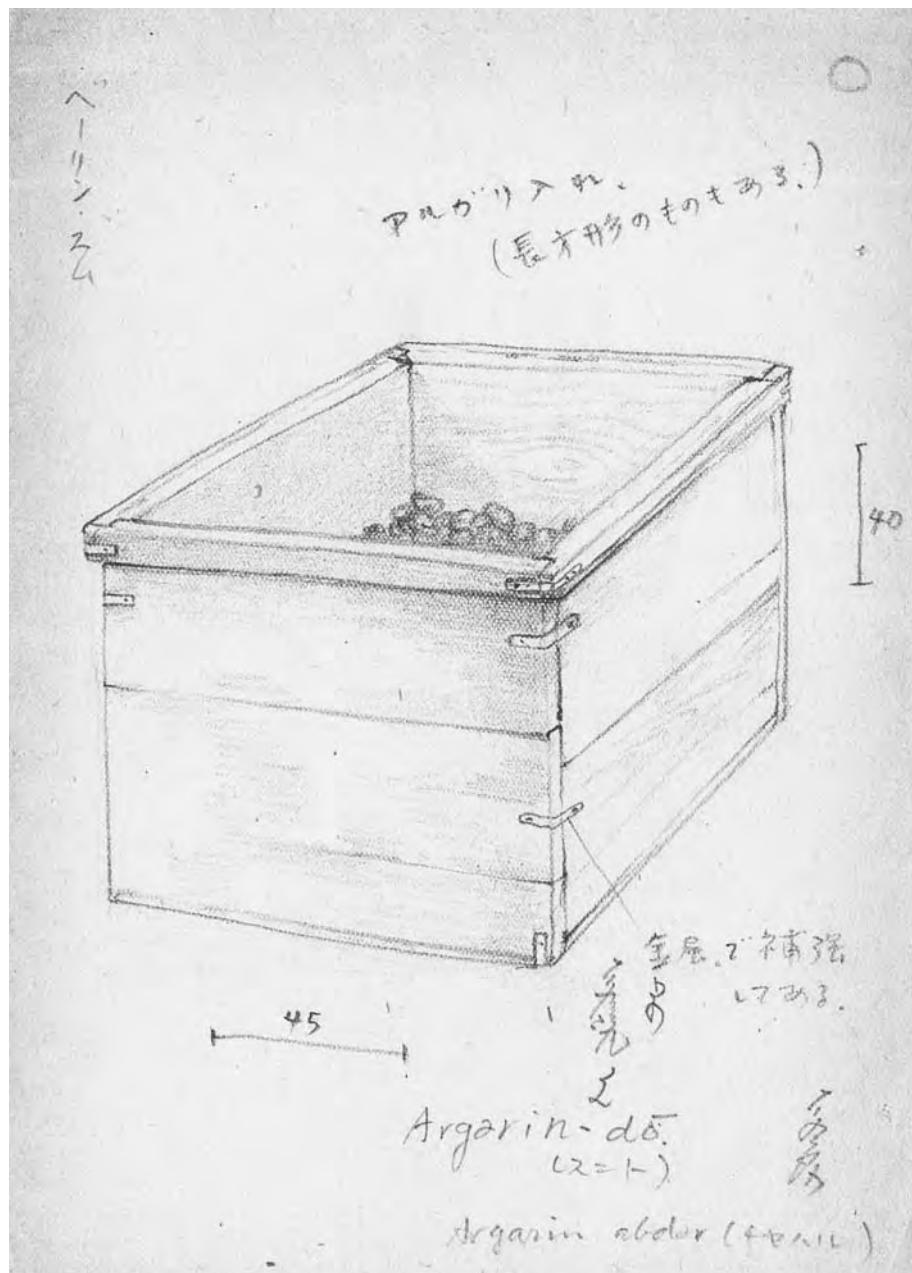
使いこまれたナイフ。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

41. アルガル (牛糞)



41. アルガル（牛糞）

燃料は、もっぱらアルガルである。これは、乾燥したウシの糞である。ウシ以外のウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの糞も燃料にもちいられる。家畜の糞は、よく乾燥しているので、においはなく、よくもえる。

燃料の畜糞をいれるための箱がある（図41）。45×45×たかさ40cm。長方形のものもある。四隅の外側が金属で補強されている。チャハルではアルガルン・アブダルとよばれ、スニトではアルガルン・ドーとよばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582ページ



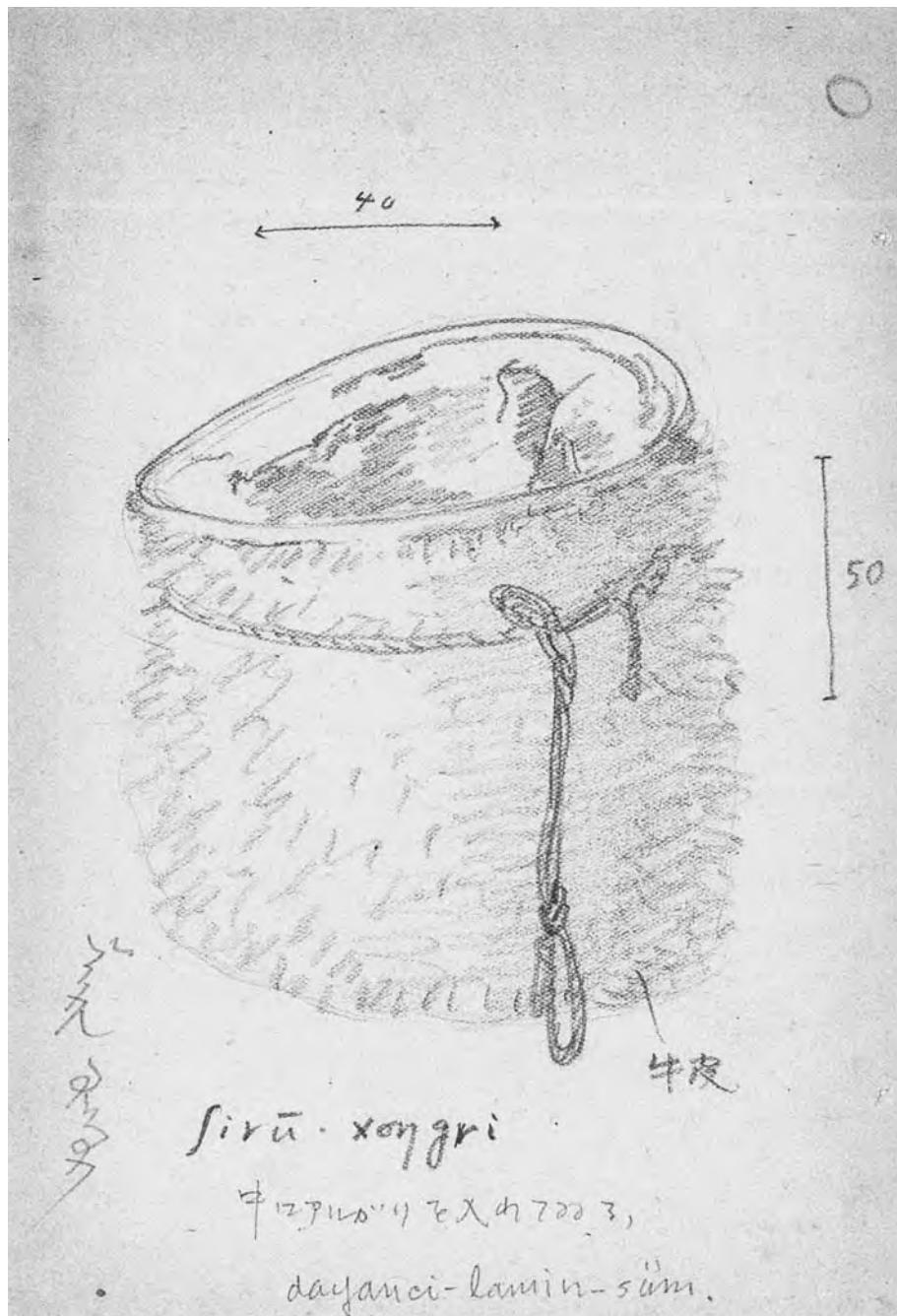
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

燃料として現在も利用されるアルガル。

42. アルガルいれ



42. アルガルいれ

また牛皮製のアルガルいれもある（図42）。シラ・ホングリとよばれる。40×50cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582ページ

注1 シラは皮（なめしていないもの）のことである。牛皮製の袋およびホングリの名称はともに、2012年現在、確認することができなかった。洞のことをホングリ qonggil という。



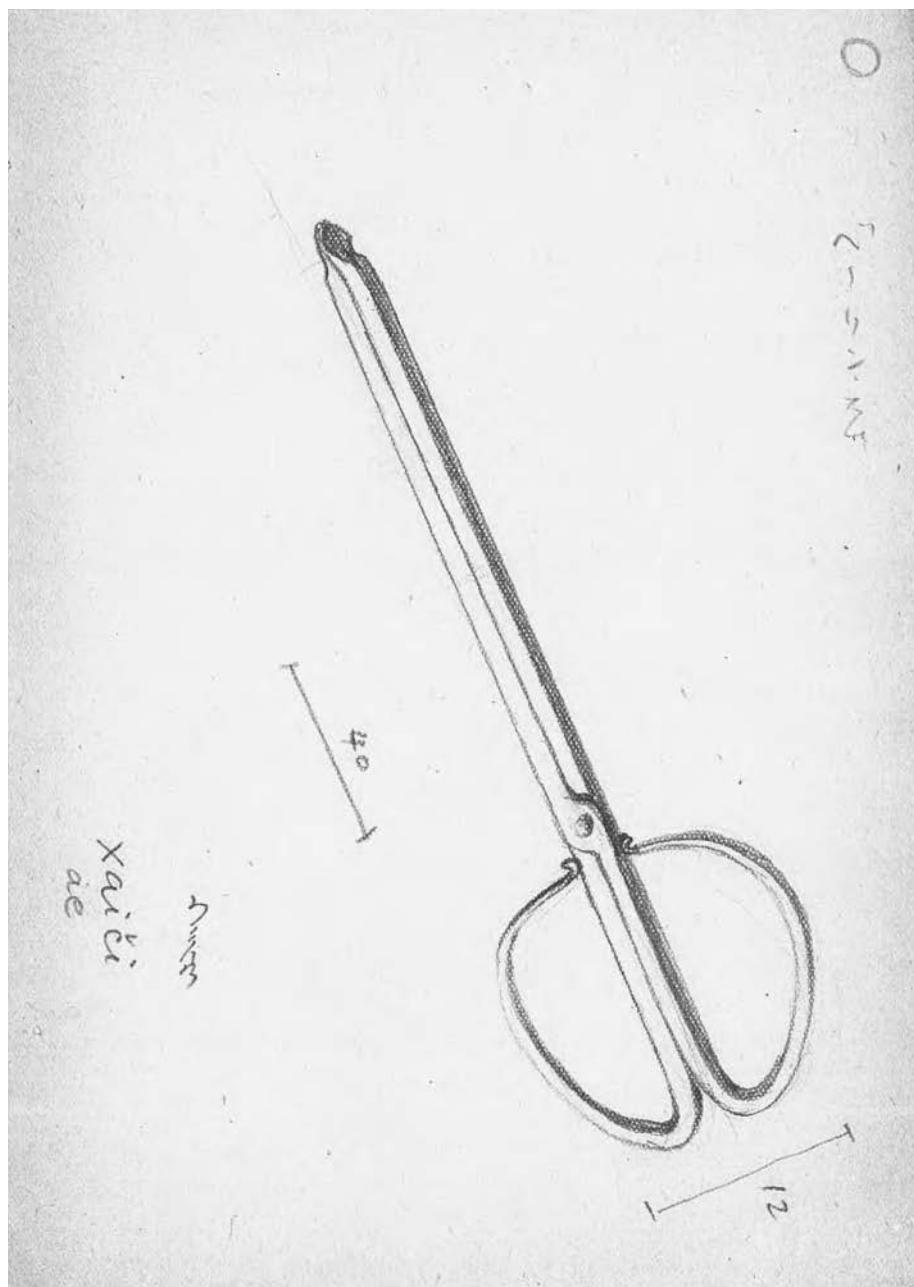
塩化ビニール製の袋にアルガルをいれている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

43. 火箸



43. 火箸

はさみ型の火箸がそえられている（図43）。ふつうのはさみとおなじく、ハイチ（チャハル方言でカイチ）とよばれる。40×12cm。これでアルガルをはさんで火にくべ、また火のなかをかきまわす。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582ページ

注1 一般的なはさみ（ハイチ）と区別するために、ガリン・ハイチ（火のはさみ）やハイチ・トゥモル（はさみ鉄）という場合もある。



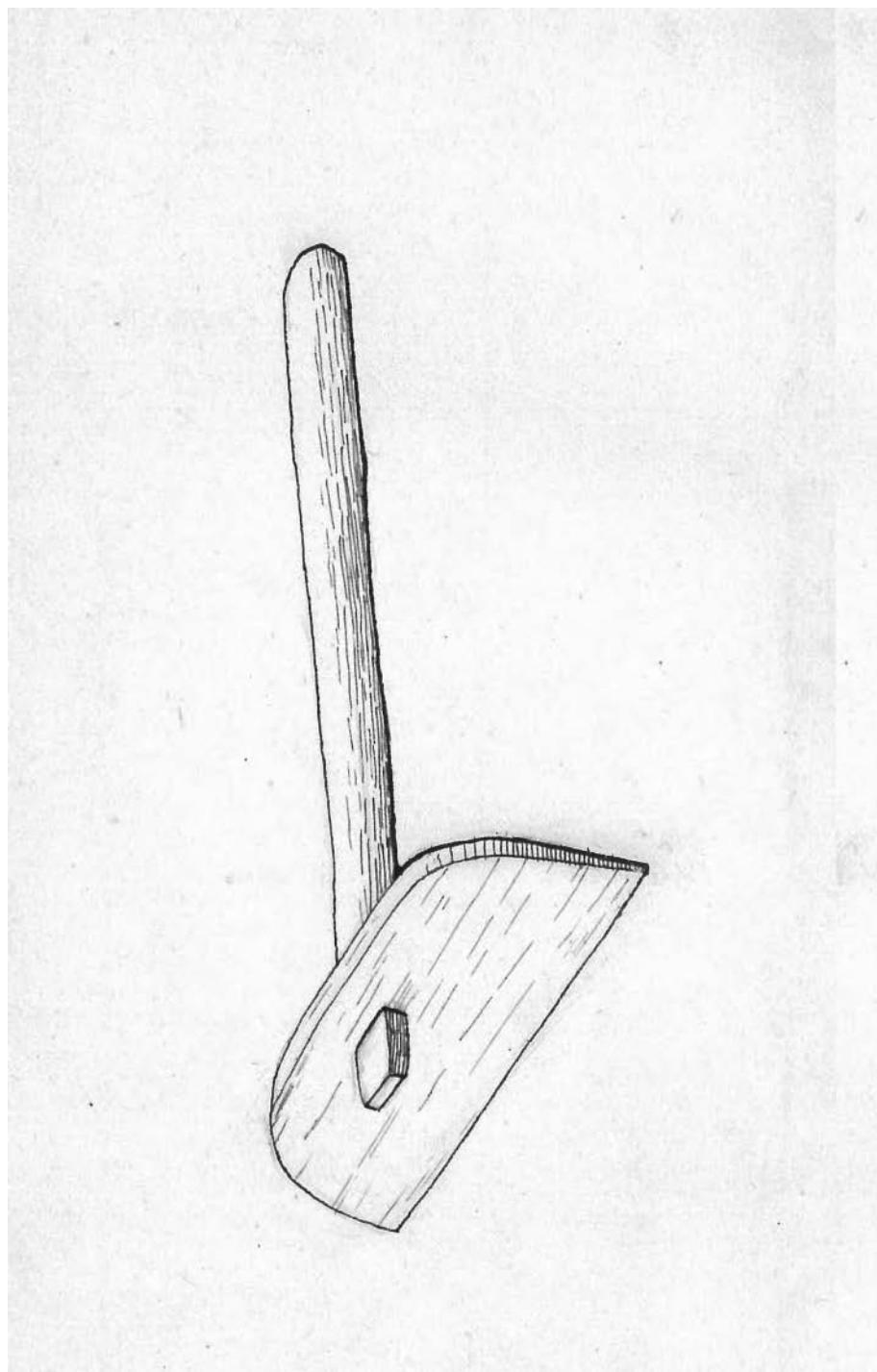
かまどのそばに置かれている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

44. 灰かきだし



44. 灰かきだし

五徳のしたにたまつた灰をかきだすものがある。木製である（図44）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』582-583ページ

注1 補10として掲載した原画の一部から、梅棹が製図したものである。



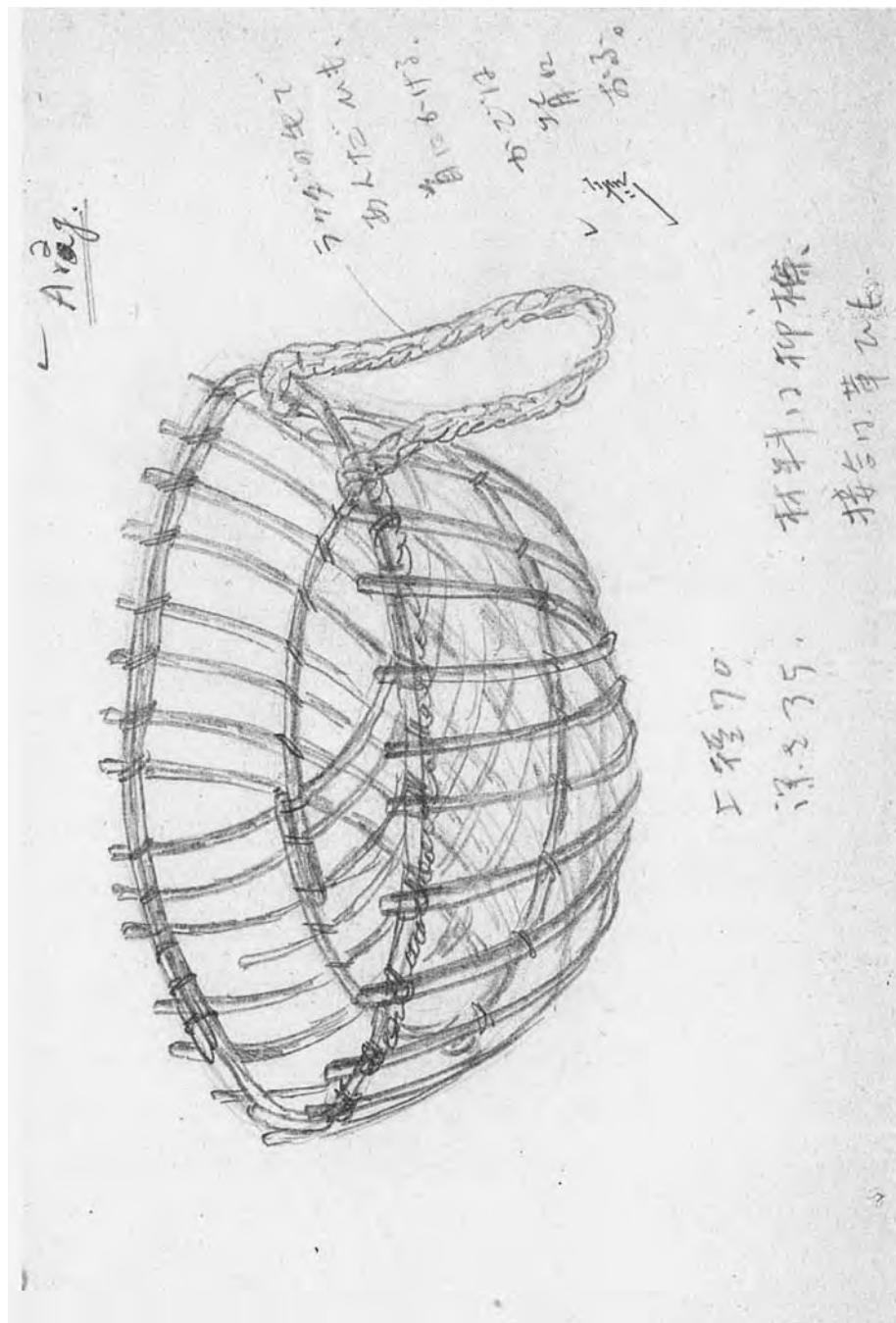
鉄製のスコップを灰かきにもちいている。柄は木製。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

45. アルガルひろい



45. アルガルひろい

アルガルをあつめるために女たちはしばしば戸外にでる。背に柳条であんだ籠を背おい、熊手をもってでかける。籠はアルグといい、上径70cm、ふかさ35cm（図45）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』584ページ

注1 原画には、ひもを首にかける、と書かれているけれども、肩の誤記ではないかとおもわれる。

注2 フィールド・ノート11番の13-15ページには、アルグの形状に関する考察がしるされている。



ひもを肩にかけて、さらに利き手ではないほうの肘^{ひじ}でおさえるようにしててもつ。利き手には熊手をもつ。

撮影年月：1988年4月

撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀



ビニール製のひもでかがっている。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：ナランゲレル



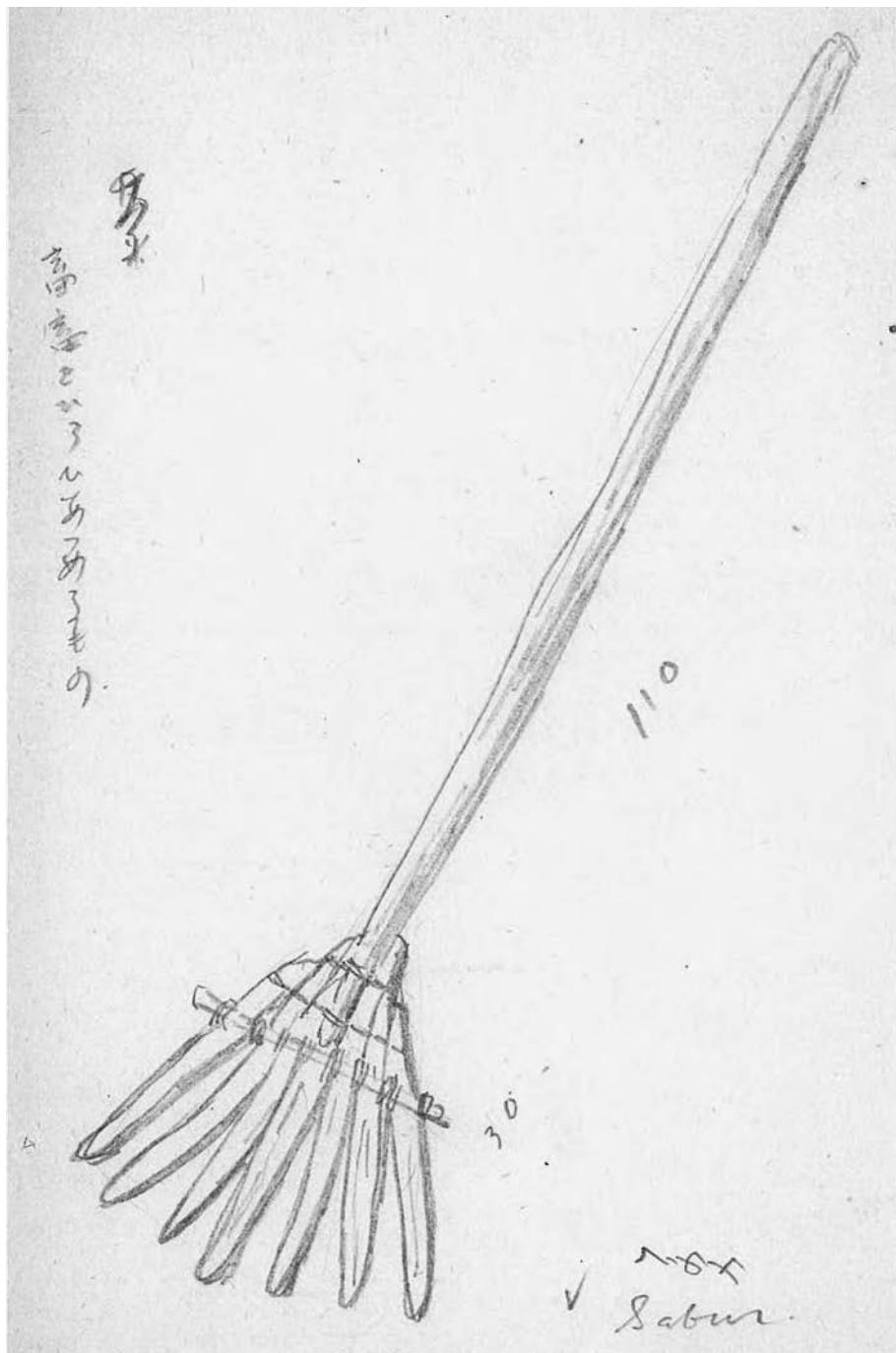
鉄製。重いため、背負ったあと、胸の前で細いひもを結び、固定する。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：ジャロート旗ゲルチョロー・ソム

撮影者：堀田あゆみ

46. 熊手



46. 熊手

熊手はサブルとよび、ながさ110cm(図46)。牛糞の完全にかわいたものをえらんで、熊手ですくいとり、背なかの籠に肩ごしにじょうずになげいれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』584ページ



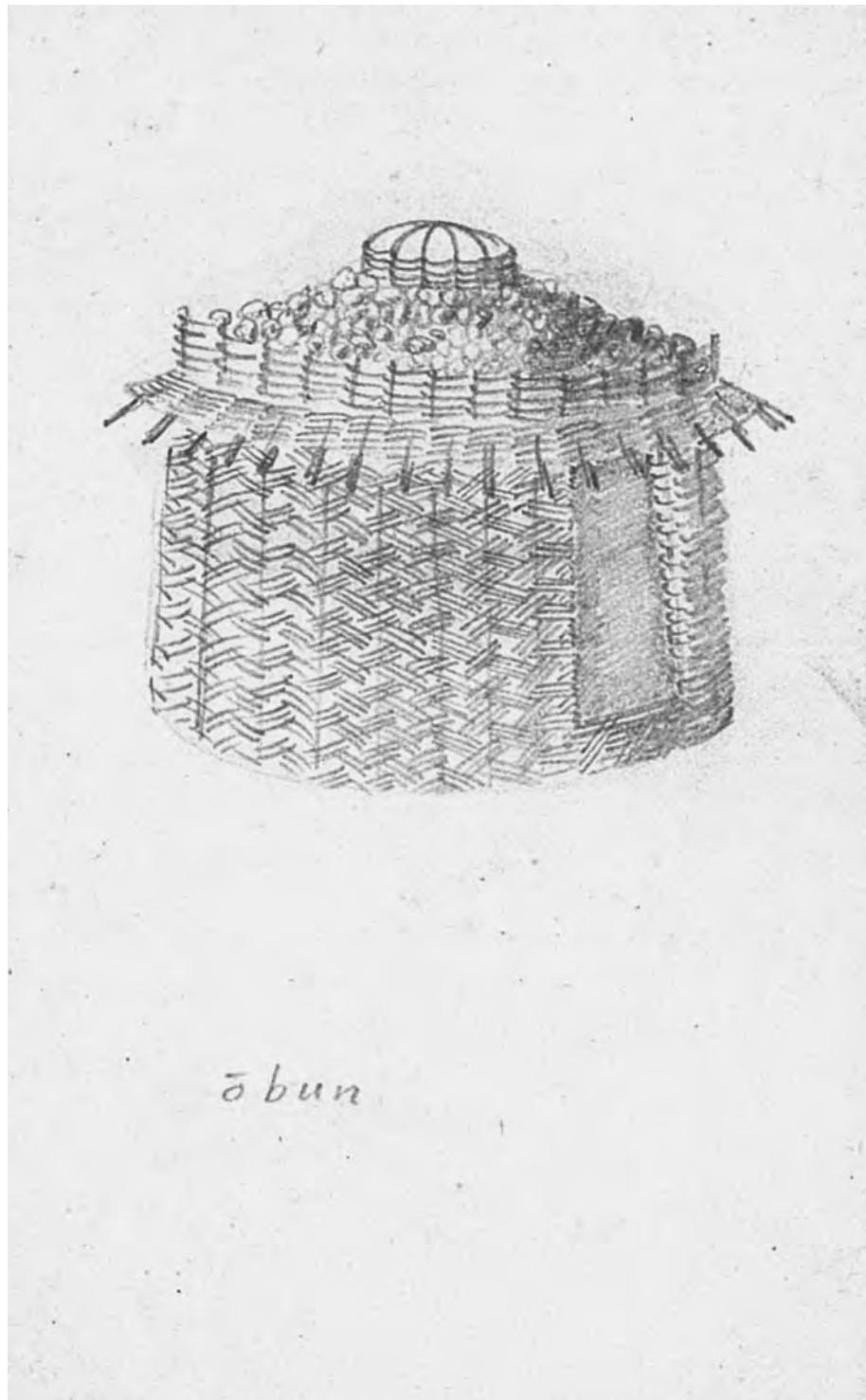
撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ
博物館
撮影者：ナランゲル



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオ
ール・ソム、バヤン
タル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

鉄製の熊手。

47. アルガルの山



47. アルガルの山

ひろいあつめてきたアルガルは、柳条の垣根でかこってつみあげてある場合がある（図47）。このような施設はオープンとよばれている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』584ページ

注1 少量のアルガルをつかいやさしいようにおいてある場所については、ラフ・スケッチものこそされている。



柳条の垣根に取り外しのできる屋根がのっている。
牛糞ははいっていない。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：堀田あゆみ



ゲルの形につみあげられた牛糞。針金の垣根でかこわれている。

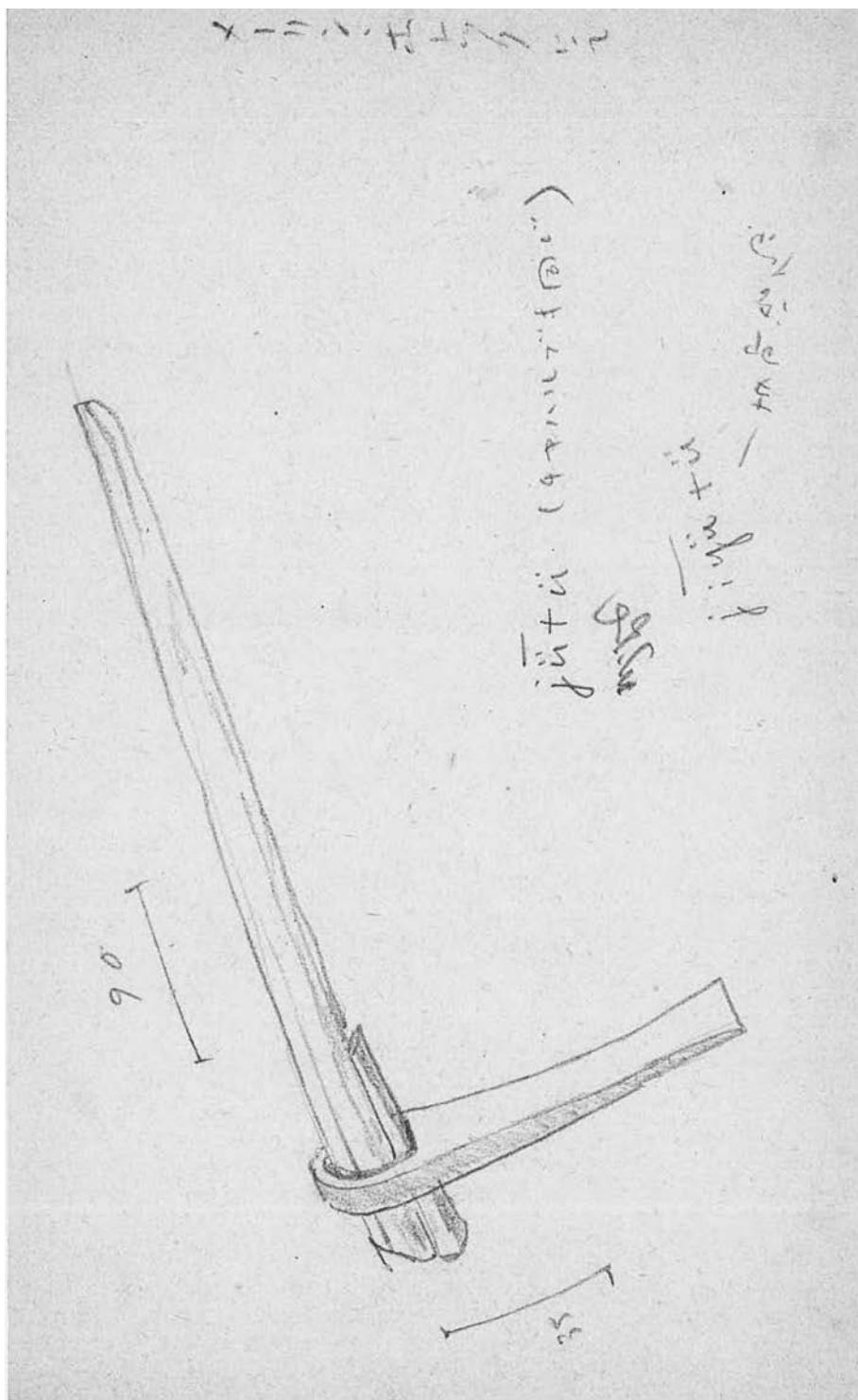
撮影年月：2012年5月
撮影場所：ジャロート旗ゲルチョロー・ソム
撮影者：堀田あゆみ



敷地内を仕切るようにそびえる2mほどの壁。柵の中にはすべて牛糞。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：ジャロート旗ゲルチョロー・ソム
撮影者：堀田あゆみ

48. 羊糞



48. 羊糞

ホローすなわち家畜がこいのなかには、ヒツジおよびヤギの糞があつく層をなしてかたまる。それをほりとる道具がある（図48）。35×90cm。ジウートゥという。漢語からきている。ほりとった羊糞も燃料になる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』584ページ

注1 2012年現在、内モンゴル各地でジェートゥとよばれている。



ほりとられた羊糞の山。

撮影年月：1988年6月

撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀



つるはしで、糞をほりおこす。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ



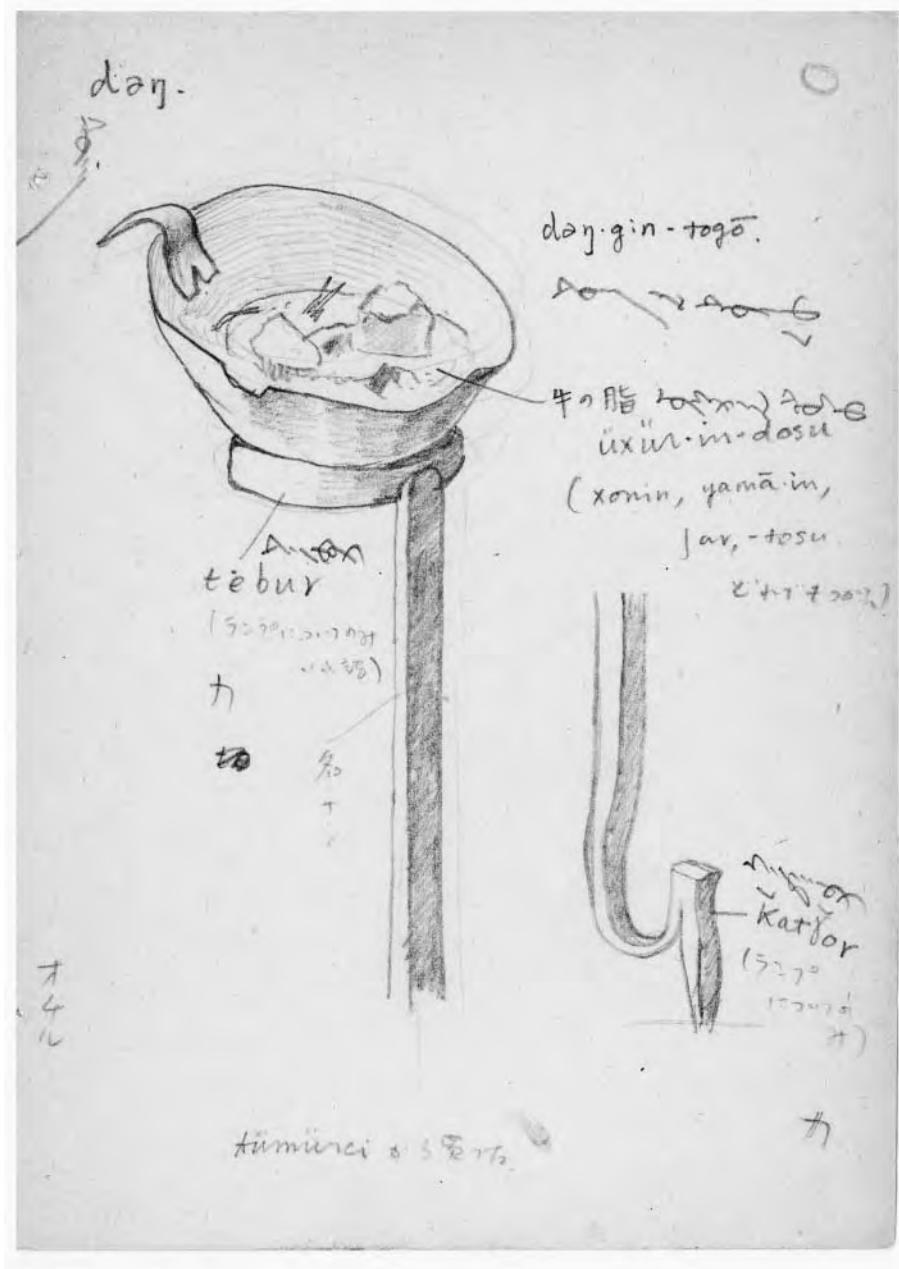
ほりおこした糞をすくいとるための専用シャベル。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

49. 灯火



49. 灯火

室内のあかりは、炉の炎の光だけのことがおおい。ときには、デンという灯火の道具がある（図49）。下部を地面につきさしてたてる。上部の皿はデンギーン・トゴーという。ウシの脂肪、ヒツジ・ヤギの脂肪やバターをいれる。デンという語は、漢語からきたものであろう。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』584ページ



撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：ナランゲレル

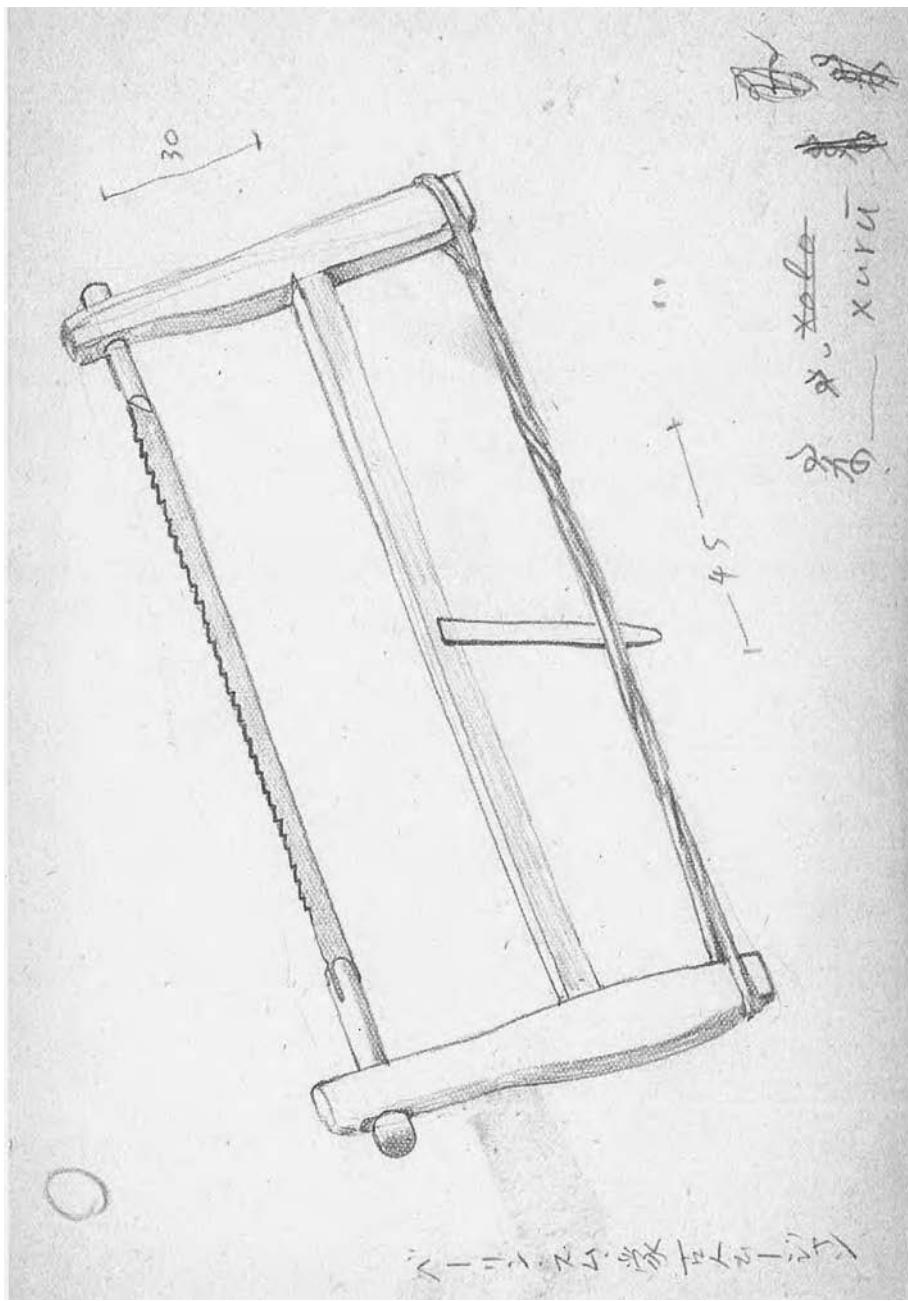
ゲルにも固定家屋にも電灯が設置されるようになったためデンは姿をけした。



撮影年月：2012年5月2日
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャーム
撮影者：堀田あゆみ

チーデンとよばれる電灯が天窓中央に吊りさげられている。

50. 大工



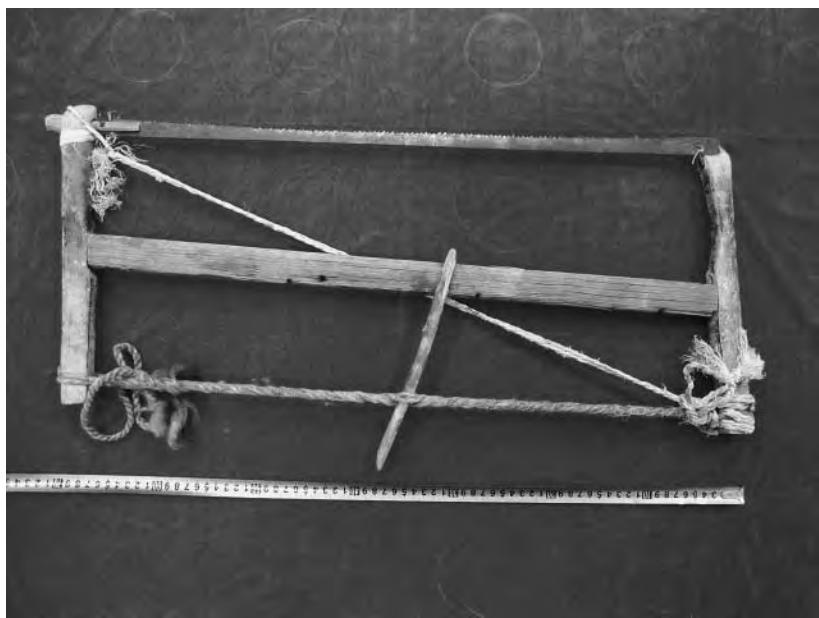
50. 大工

木工品は漢人がつくることもあり、モンゴル人がつくることもある。どちらの場合もムージャンとよばれる。各種の大工道具がある。

ノコギリは、ホローという（図50）。45×30cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』586ページ

注1 ムージャンは漢語の木匠からきていることは、のちの図71でのべられる。



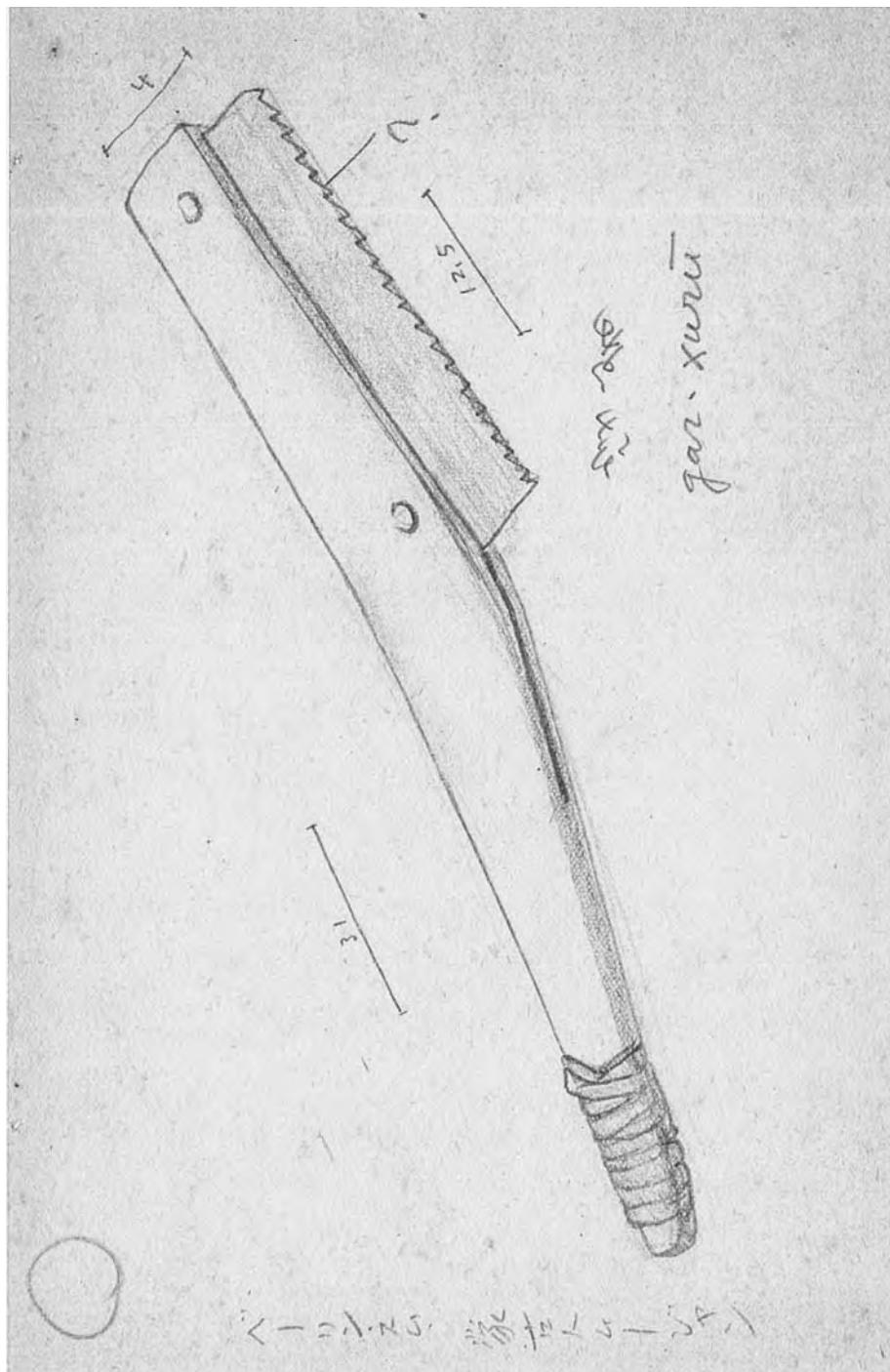
全長70cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

51. 手ノコギリ



51. 手ノコギリ

小型の手ノコギリもある。ガル（手の意）・ホローという（図51）。

刃の部分は、ながさ12.5cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』586ページ



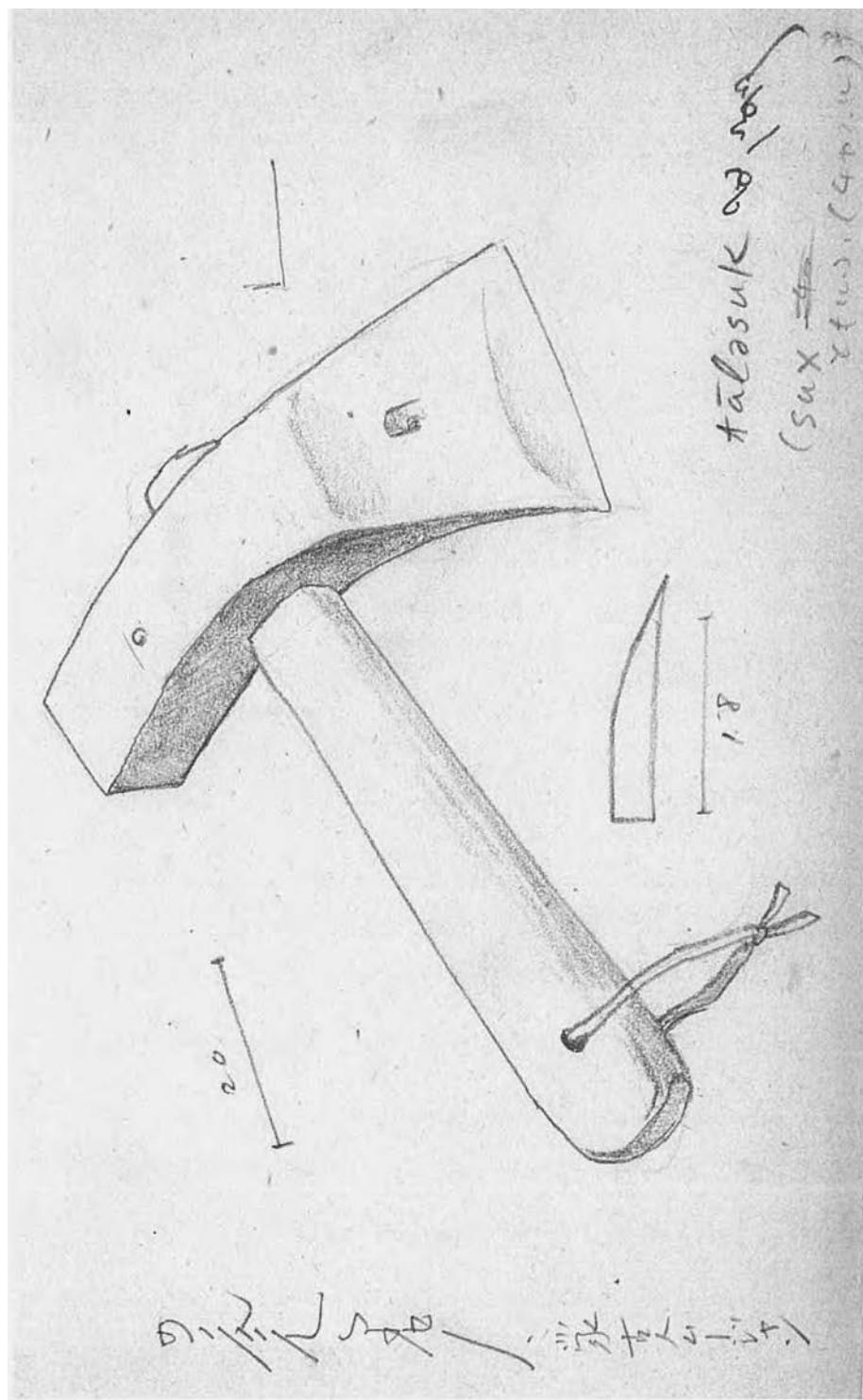
刃渡りおよそ45cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館

撮影者：ナランゲレル

52. オノ



52. オノ

オノはスフという（図52）。この図のようなものは、タル・スフすなわち片オノとよばれることもある。刃18cm、柄20cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』586ページ



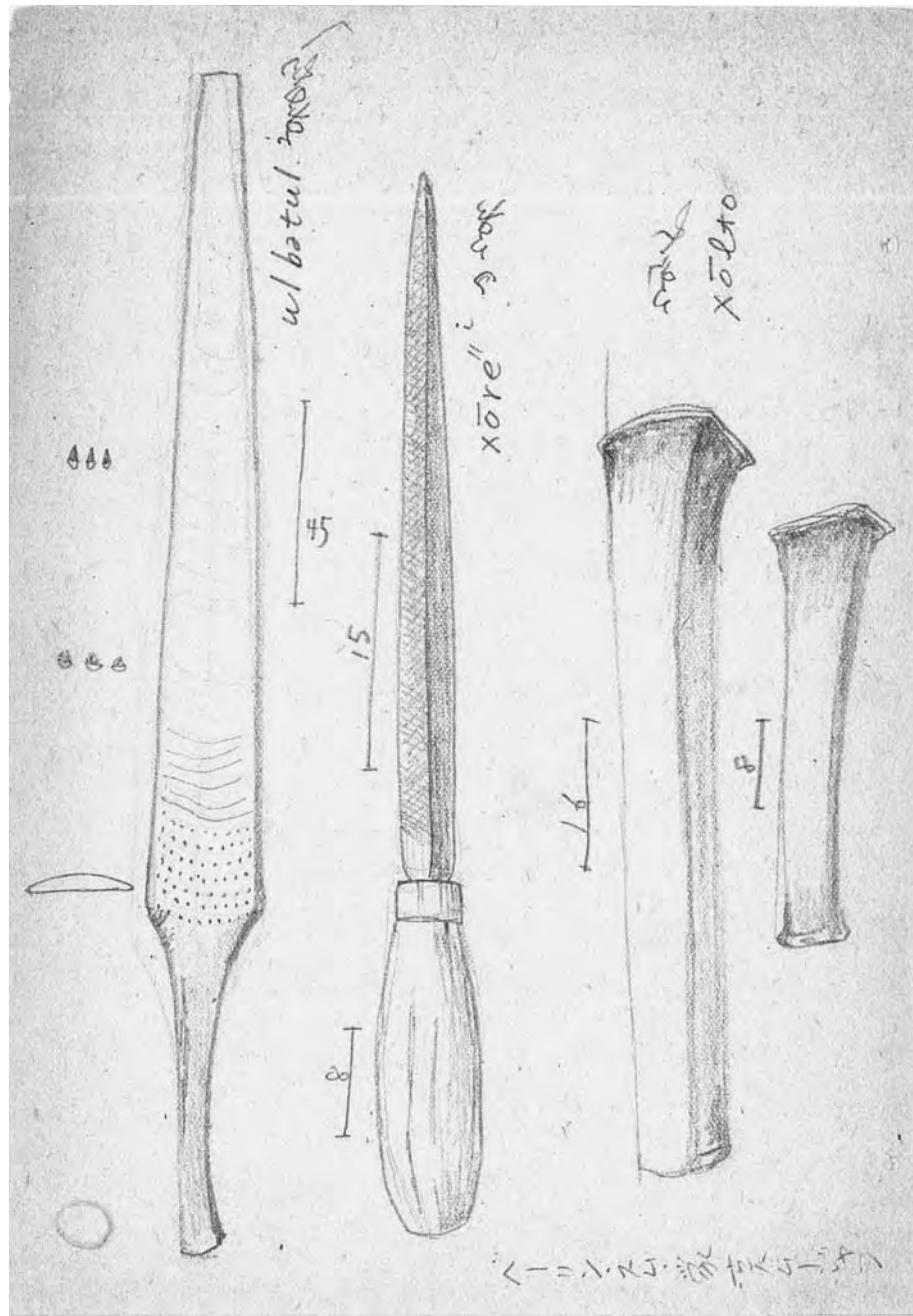
撮影年月：2009年7月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ホントン・ソム

撮影者：堀田あゆみ

53. 大工道具類

53-1.



53. 大工道具類

ノミ、キリの類はいろいろある（図53）。チョウナはハロールといい、ヤスリはホーライ（チャハル方言ではホーレー）という。

53-1.

- 注1 フィールド・ノート5番の46ページに大工道具の名称リストがある。これによれば、鉄くさびをホールトというようである。辞書では見あたらない。
- 注2 ウルルブトゥルというのは大やすりとある。



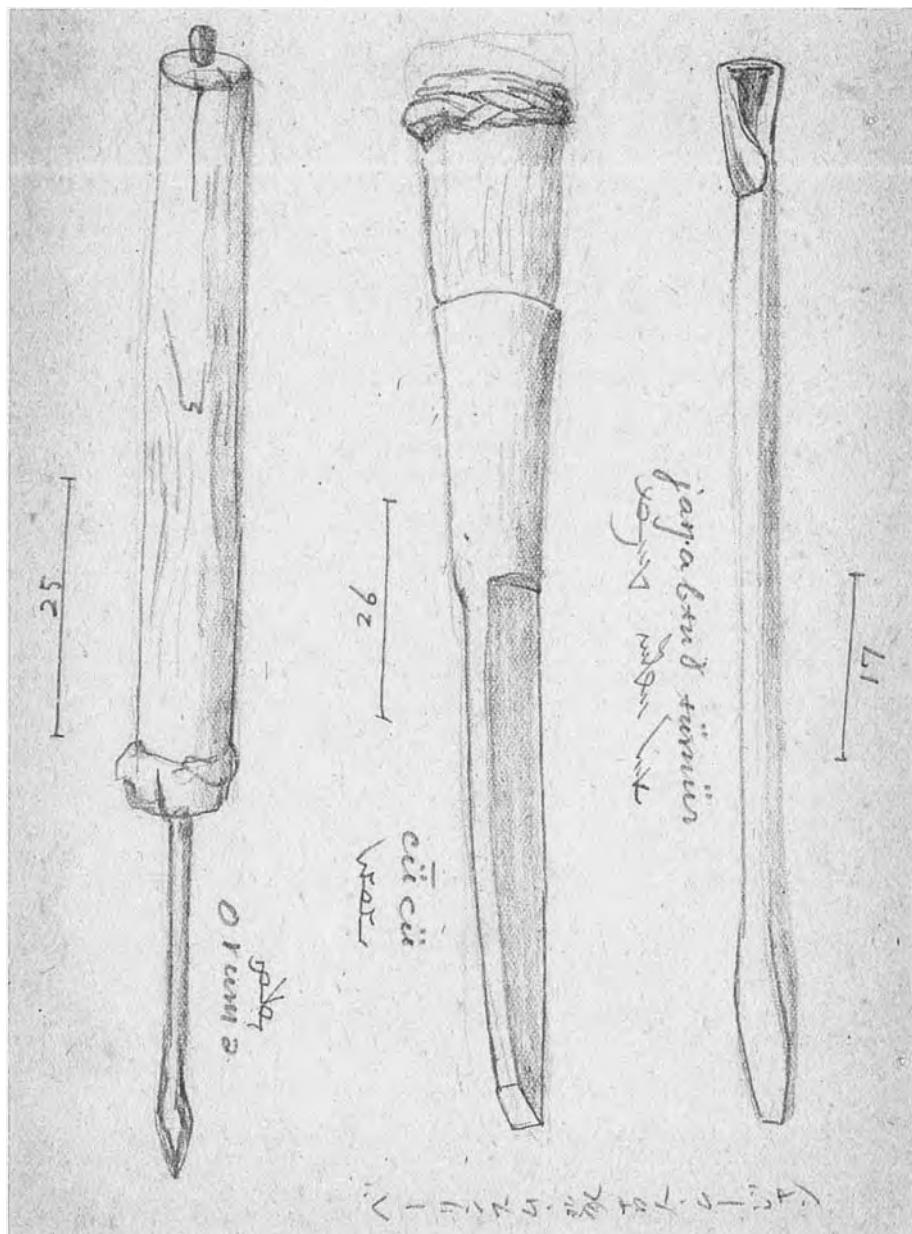
撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

53. 大工道具類

53-2.



53-2.

注3 上述のフィールド・ノートには小クサビとある。



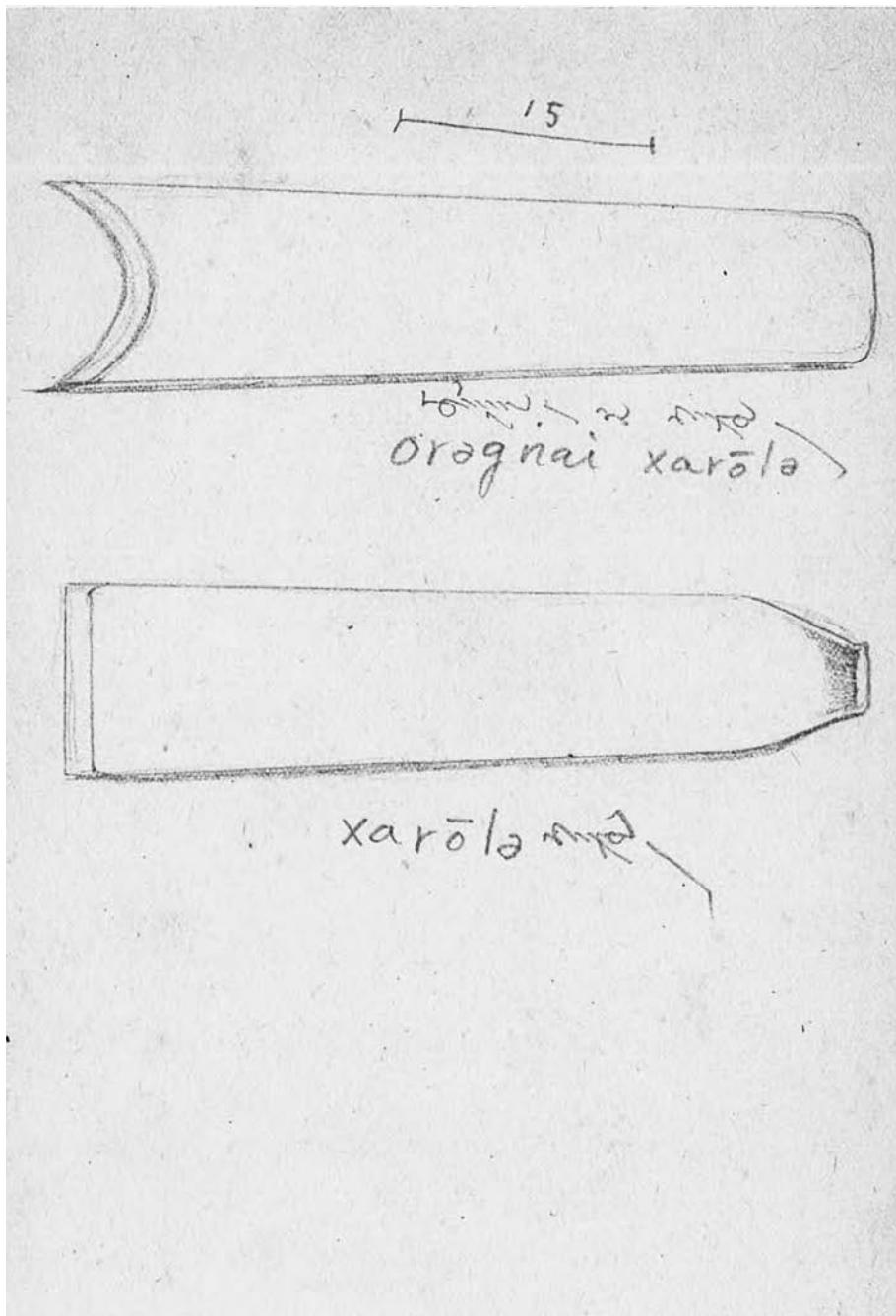
撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

53. 大工道具類

53-3.



53-3.

注4 チョウナにはまるくけずるものと、ひらくけずるものとの2種類ある。前者について、聞き取りによれば、たとえば、ウマとり竿（オラガ）のかたちをととのえるのにもちいる、という。発音はoraganēとなる。つづりではurayan-aiとなる。

注5 梅棹は『裏がえしの自伝』（1992年、講談社）で「わたしは大工」という章から始めるよう、大工仕事を趣味とし、大工道具に精通していた。チョウナは現在、現地の博物館でも見あたらない。下の写真は大工道具として展示されていたカンナなど。

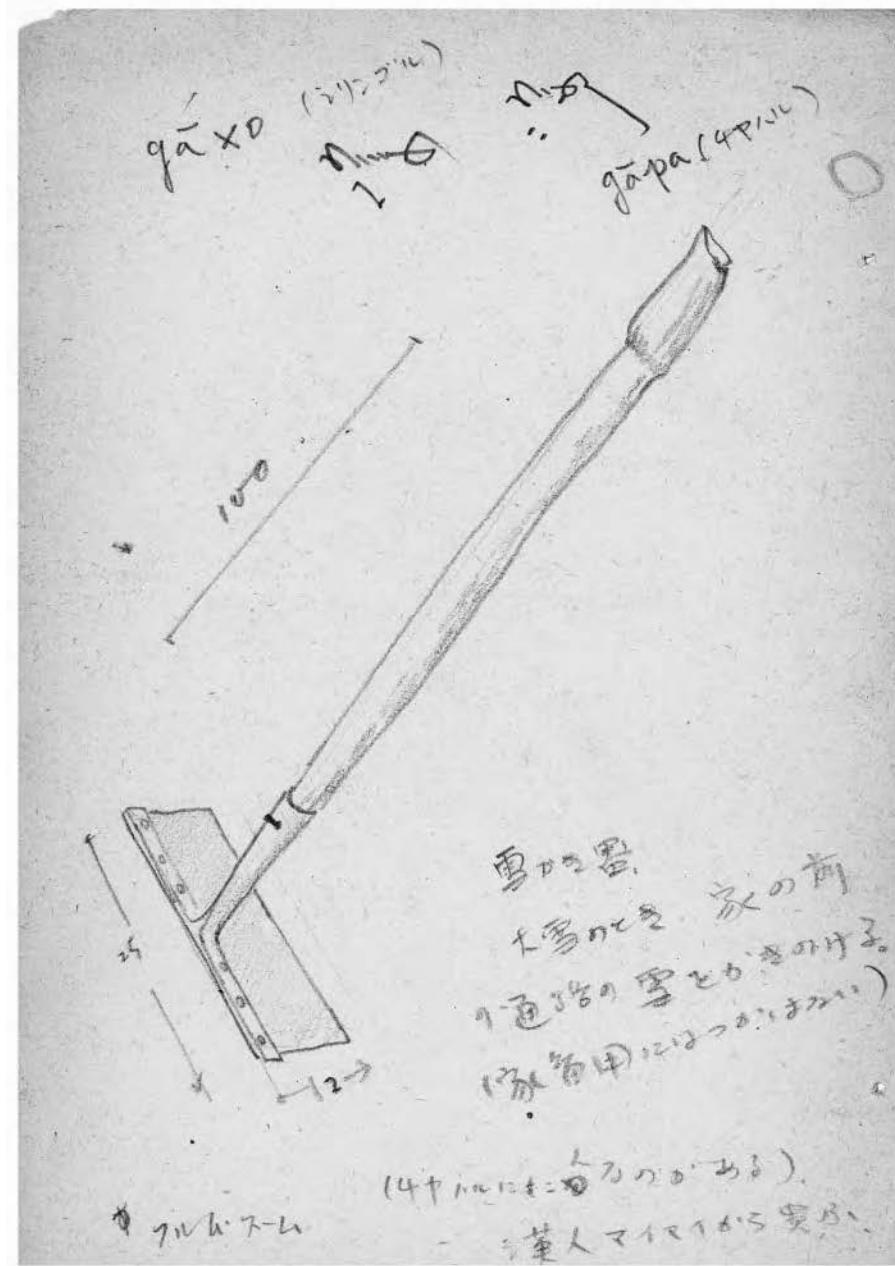


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

54. 雪



54. 雪

モンゴルの冬は、寒気はきびしいが、積雪はあまりない。しかし、ときには大雪がつもあることがある。そのときは、家のまえだけは除雪をおこなう。除雪のための道具がある（図54）。12×25×100cm。漢人マイマイチアから買う。シリンゴルではガーパとよび、チャハルではガーバという。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』588ページ



ガーバは雪かき以外にもつかう。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

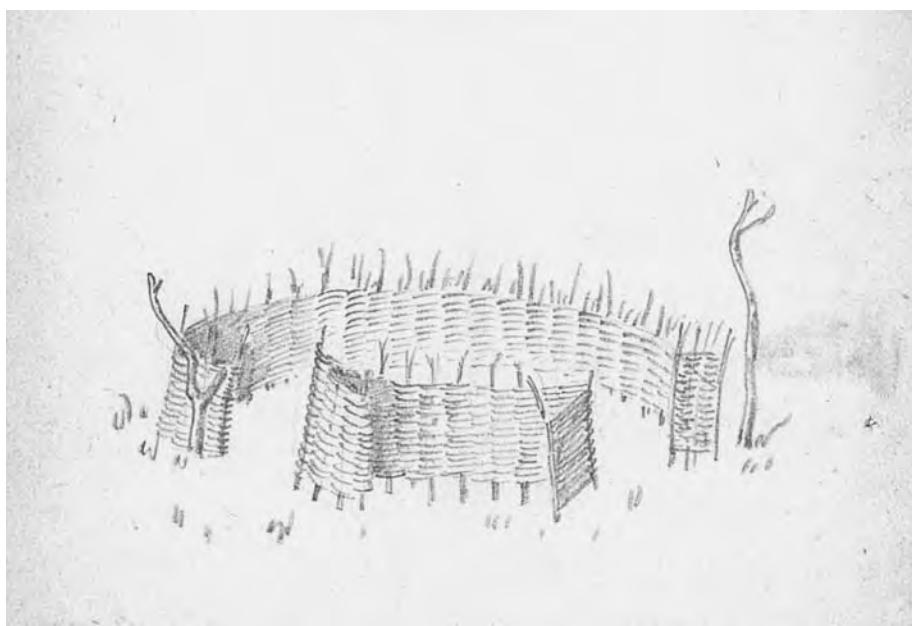
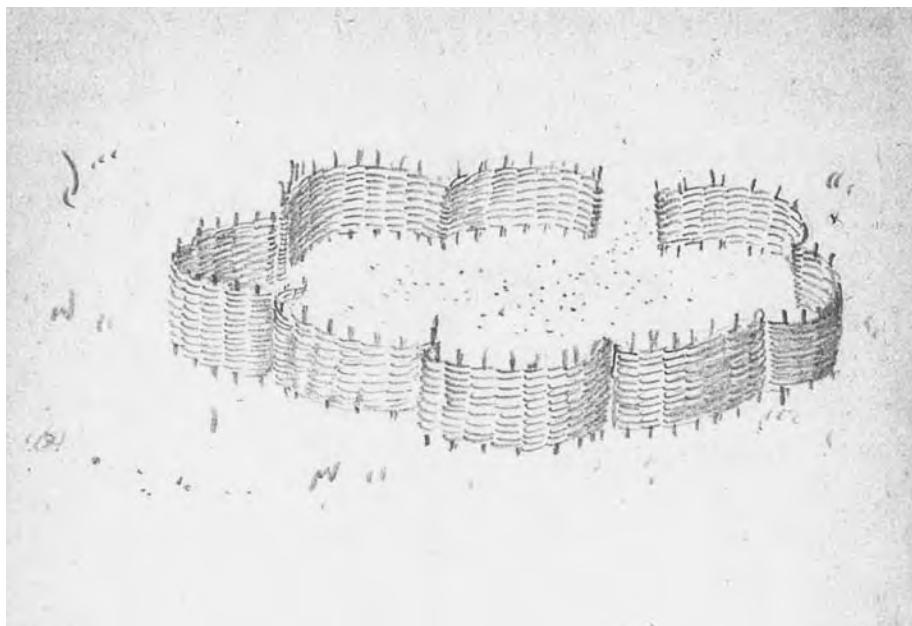
撮影者：小長谷有紀

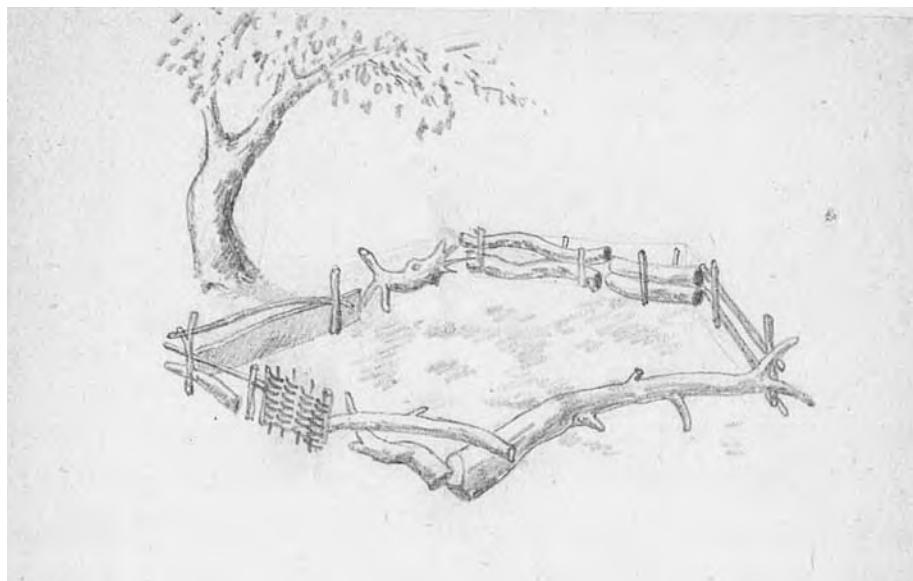
家畜の種類

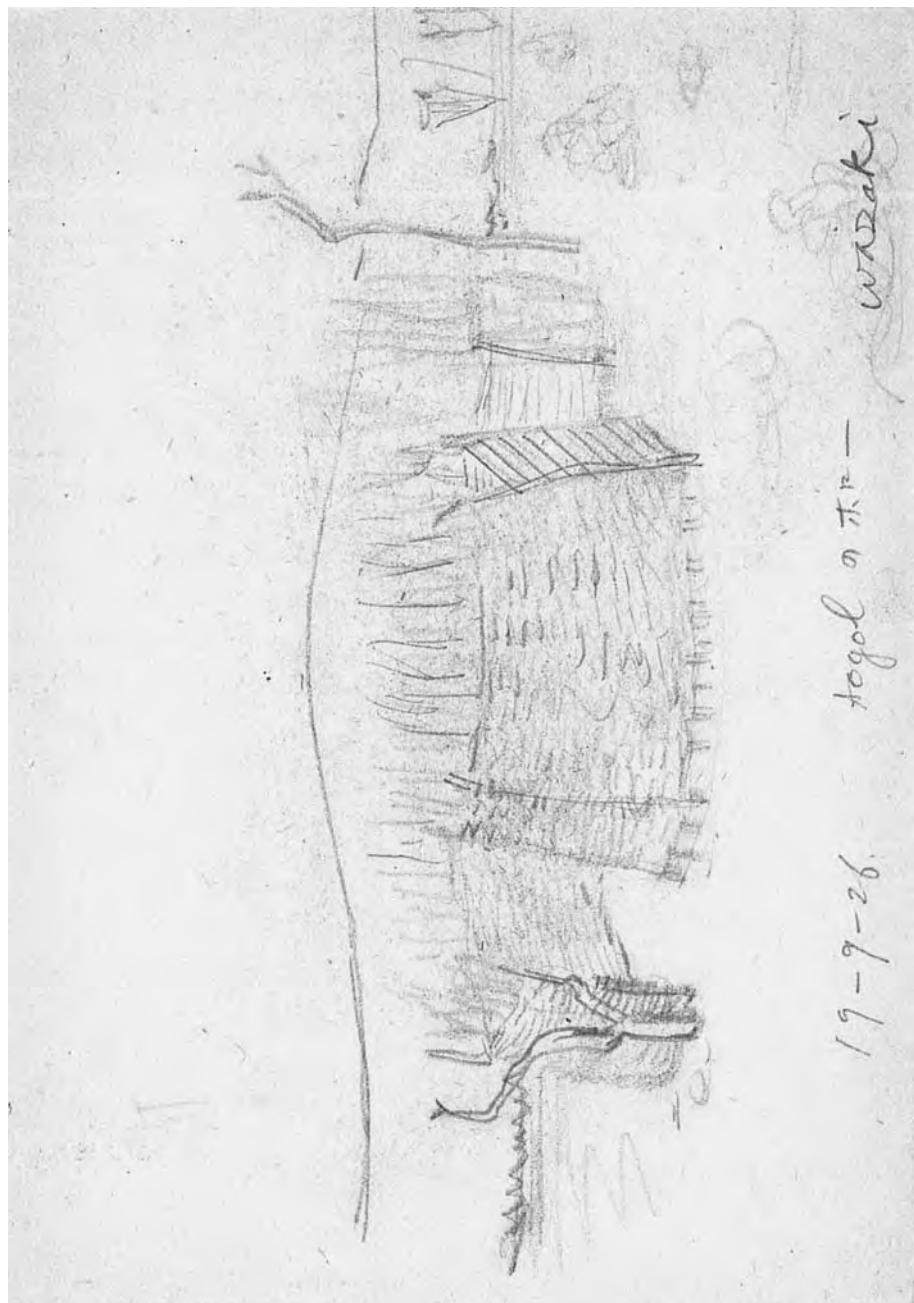
モンゴルにおける生産家畜は、総称してマルとよばれる。それは、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの5種類である。ほかに、イスとネコがいるが、これはマルではない。

家畜のそれぞれの名称については、別項「モンゴルの家畜名称体系」にくわしく論じた。

55. 放牧







19-9-26. togol o tr - urasaki

55. 放牧

畜群はすべて草原に放牧される。そのうち、ウシ、ヒツジ、ヤギは夜になると家の附近にかえってくる。ラクダはかえってこないこともある。ウマのむれはかえってくることはない。ウマ、ウシ、ラクダのむれには、見はりのひとはついていない。ヒツジとヤギは通例いっしょのむれとして放牧される。それには見はりのひとがついているが、たいていは子どもである。

ウマ以外の家畜は夕がたになるとかえってくる。ウシとラクダは家の近所の戸外でねる。家の近所には、柳条あんんだ家畜がこいのホローがある。そのなかには、ヒツジとヤギが収容される。ホローは畜群のおおきさによって大小さまざまある（図55）。柳条製、木製、石製など多様なヴァリエーションがみられる。

家畜に飼料をあたえることはない。

秋に草を刈りとて保存して冬の飼料とすることはいくらかみられるが、大規模なものではない。草刈りとその道具については、別項「草刈るモンゴル」にしるしたのでそれを参照されたい。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』588、591ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図55には5つの図がある。そのうち4つめまでは清書されていた。

5つめの図は、著作集の編集時に清書されたものであるが、そもそも2つめの図と同じ風景をえがいており、その原画にはローマ字で和崎の署名がある。これとは別に、泥がぬつてあることがわかる書き込みのある原画もある。

注2 論文「草刈るモンゴル」にもちいられた図について、次ページ以降にかかげる。



ヒツジを洗浄するために、洗い場に廻いをはこんでいくところ。

撮影年月：1988年7月

撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀



レンガづくりの家畜廻い。

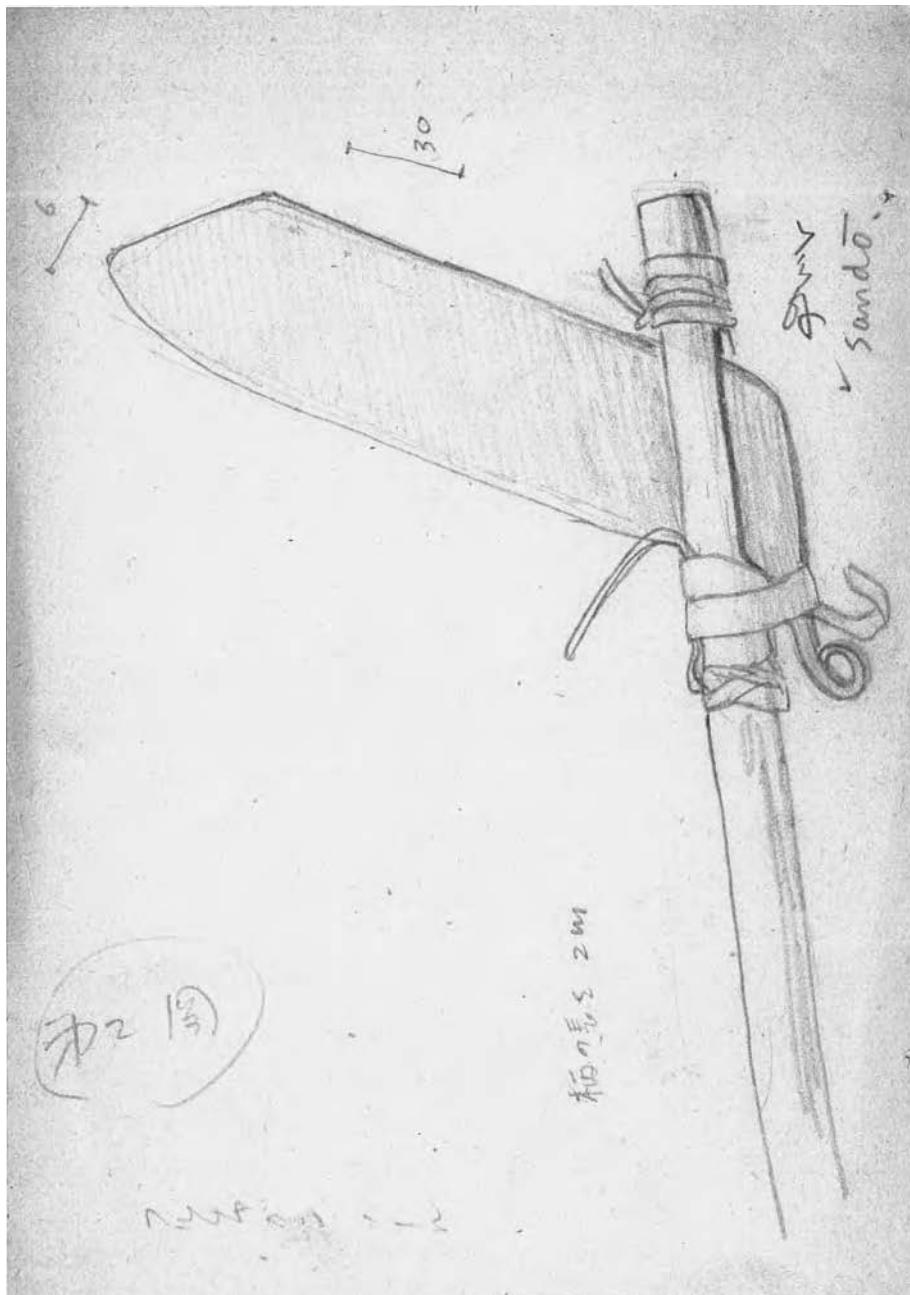
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャ

—

撮影者：堀田あゆみ

補16. 草刈り道具 (論文の図 2)



補16. 草刈り道具（論文の図2）

草を刈るときにつかう鎌に、まったくことなるふたつの種類があるのである。モンゴル牧民のよびかたにそのまましたがえば、そのひとつはサンドーであり、他のひとつはハトールである。

サンドーは、柄のながさ2m以上、刃わたり30cmにおよぶ長大な鎌である。柄は、ヤナギかなにかの棒をけずってつくり、そのさきにきれ目をいれて、そこにひろい刃をななめにはさみ、革ひもでしばってある。つかいかたは、このながい鎌をななめにかまえて、草むらのなかですいすいと扇形にふりまわすと、ななめにとりつけた刃がちょうど草の茎に有効にあたって、草はたちまちなぎたおされる。密生したイネ科の草を多量に刈るには、まことに合理的にできた鎌である。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』439-440ページ

注1 補16から補20までの解説文について、初出は以下の論文である。

梅棹忠夫1955「草刈るモンゴル」『遊牧民族の研究 ユーラシア学会研究報告——自然と文化別編II』、13-98ページ。

注2 フィールド・ノート12番の67ページ、12月18日の記録のなかに、柄のみじかい草刈り鎌のラフ・スケッチとともに、地域差に関する聞きとりが集中してしるされている。



刃渡り35cm、柄の長さ約180cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館

撮影者：ナランゲレル



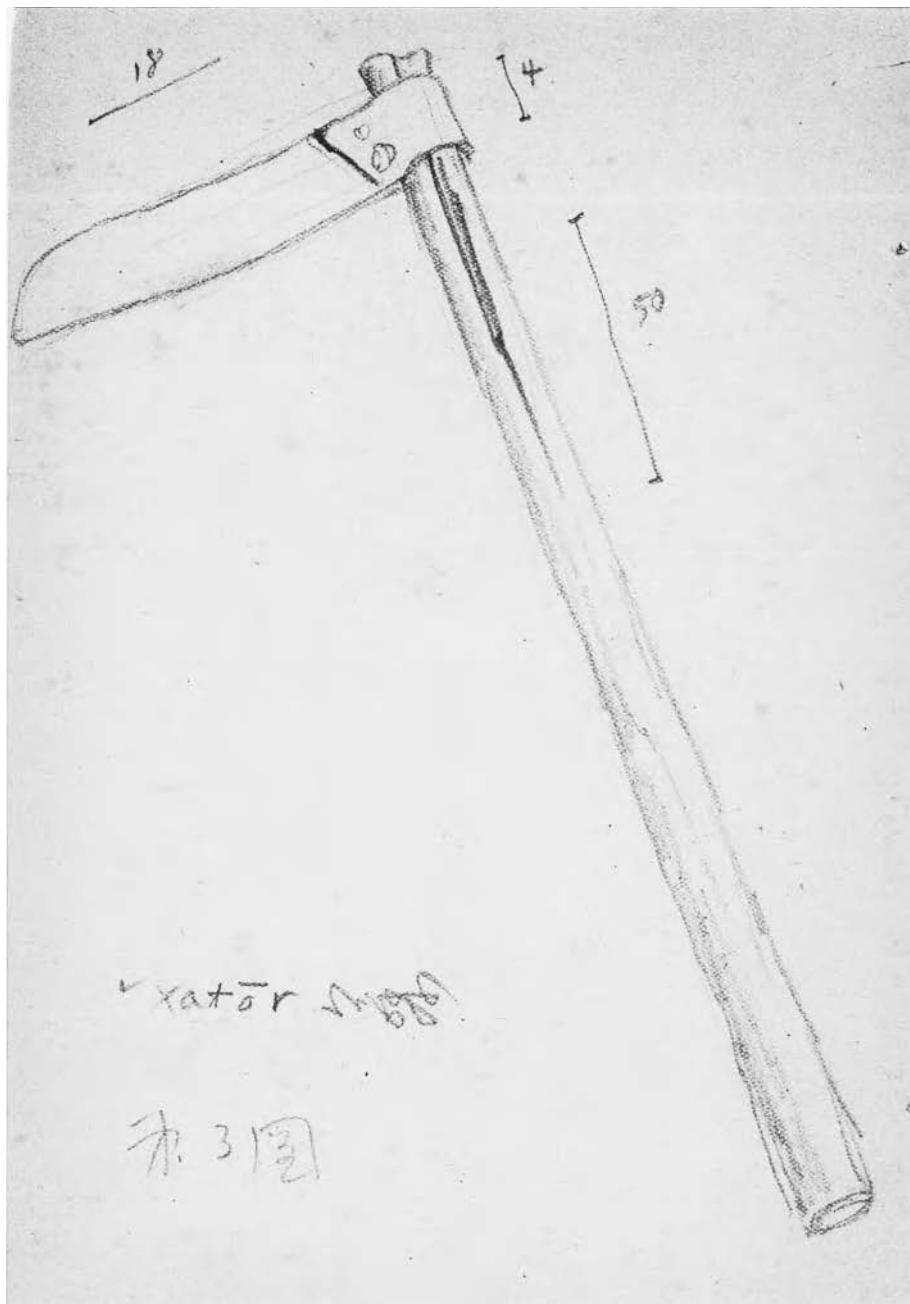
現在は草刈り機をもちいて大量に刈る。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、
アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

補17. 手鎌（論文の図3）



補17. 手鎌（論文の図3）

ハトルは、はるかにちいさい手鎌で、柄のながさは50cmばかり、刃わたり20cmにたりない。刃は柄に直角についている。つかうときには、ひとは、しゃがみこんで、ふつうの手鎌をつかうように、左手に草をにぎり、右手で鎌をふる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』440ページ

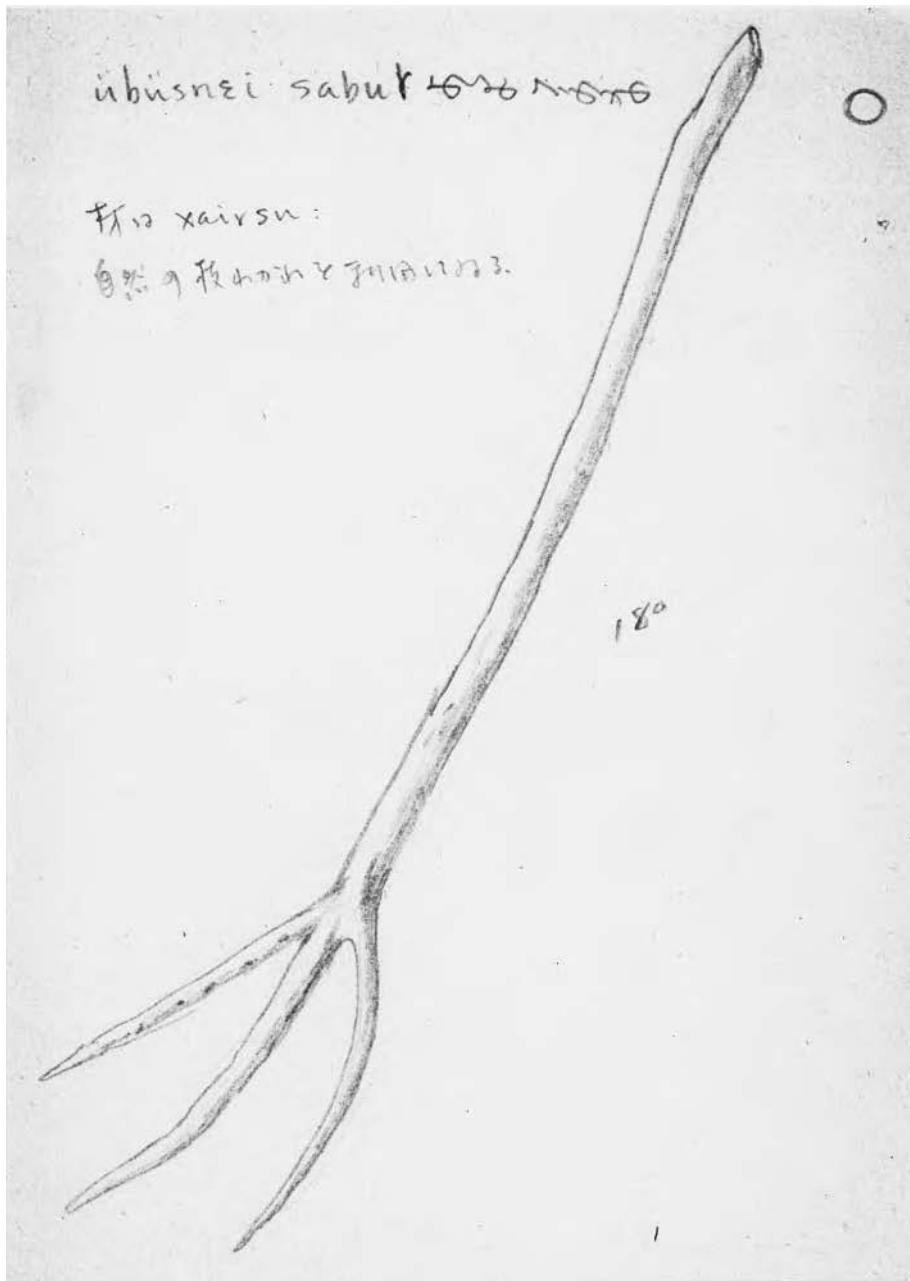


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

補18. ほし草用の熊手 (論文の図5)



補18. ほし草用の熊手（論文の図5）

サブルというのは、乾草用のフォークである。自然木の枝わかれをそのまま利用した、素朴な道具であるが、これで乾草を車につんだりおろしたりする。アルガルをひろいあつめるときにつかわれる熊手のようなおなじ名の道具と区別するために、とくに草のサブル（ウブスネイ・サブル）とよばれることもある。

材はハイルス（ニレ）、自然の枝わかれを利用している。ながさ180cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』458ページ



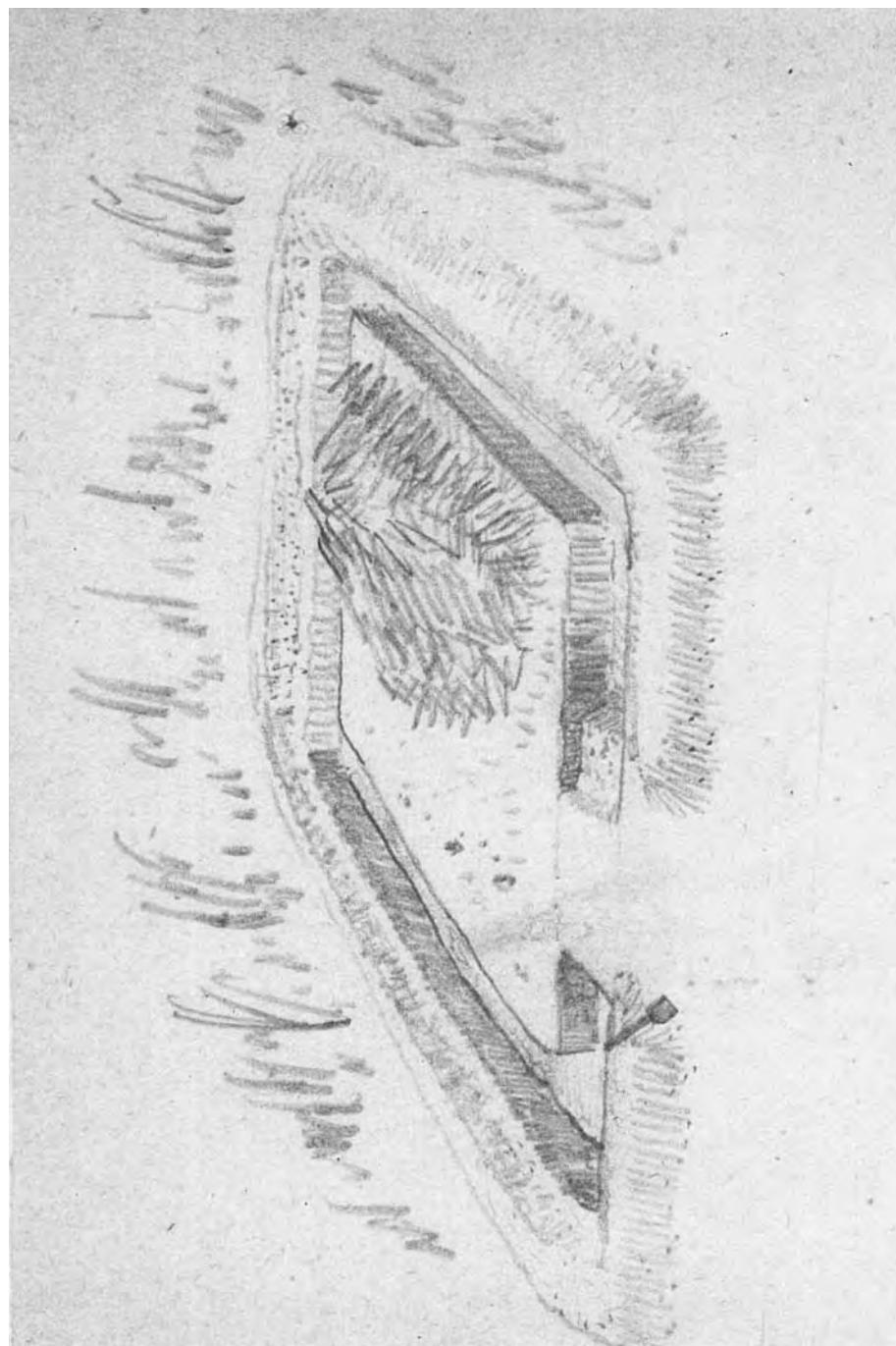
撮影年月：2012年4月
撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館
撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

鉄製。柄は長い。

補19. 草の貯蔵（論文の図9）



補19. 草の貯蔵（論文の図9）

ジュン・スニト旗、フル・チャガン・ノール付近にて。ヌルン（♂、60）。

乾草はサンドーで刈る。ことしはもう刈ったといった。しかし、家のまわりには乾草のおいてあるところはみあたらない。……現場をみにいったら、100mもはなれたところのラクダガヤのしげみのなかに、図のように1辺8m、ふかさ1mの溝をつくって、そのなかに乾草がつんでいた。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』465ページ

注1 フィールド・ノート3番の53ページには、この図をさらに簡略化した記録がある。

注2 論文「草刈るモンゴル」の図8については、和崎のスケッチから梅棹が製図した。



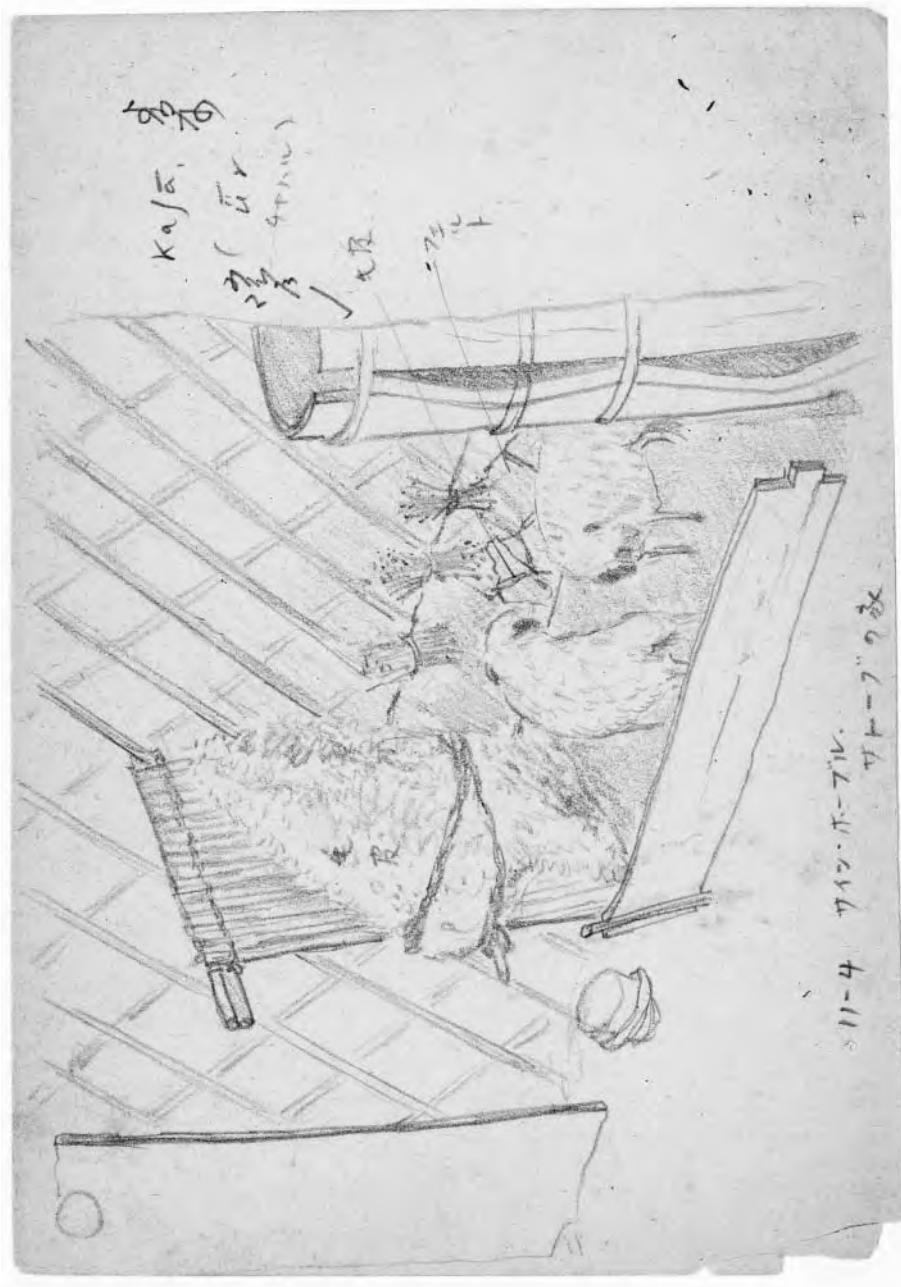
レンガづくりの家畜囲いの横に、飼料置き場がつくられている。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

補20. 草のあたえかた (論文の図10)



補20. 草のあたえかた（論文の図10）

冬のあいだに、うまれて間もないおさない家畜たちは、室内でそだてられる。昼間に母親たちが放牧にでているあいだ、子どもたちは、家のなかで、あてがわれた草をくいながらまっている。ときには病気の家畜も同様のあつかいをうける。要するに、放牧にでられぬ家畜には、家で草が給せられる。この様式は、3つの技術体系を比較して、すべてに共通である。ただ、給せられる草があらかじめ刈りためたものか、その場その時にとってきたものかという点だけがちがう。家畜の飼いかたとしては、本質的な差はない。

草は壁にしばりつけてある。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』489ページ

注1 3つの技術体系とは、ながい鎌をもちいて草を刈って乾草を準備するタイプ、みじかい鎌をもちいて草を刈り乾草を準備するタイプ、乾草をもちいないタイプのことである。



撮影年月：1988年3月

撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

まだ生まれたばかりの子ヒツジであるためか、草はしばられていなかった。



撮影年月：2012年5月

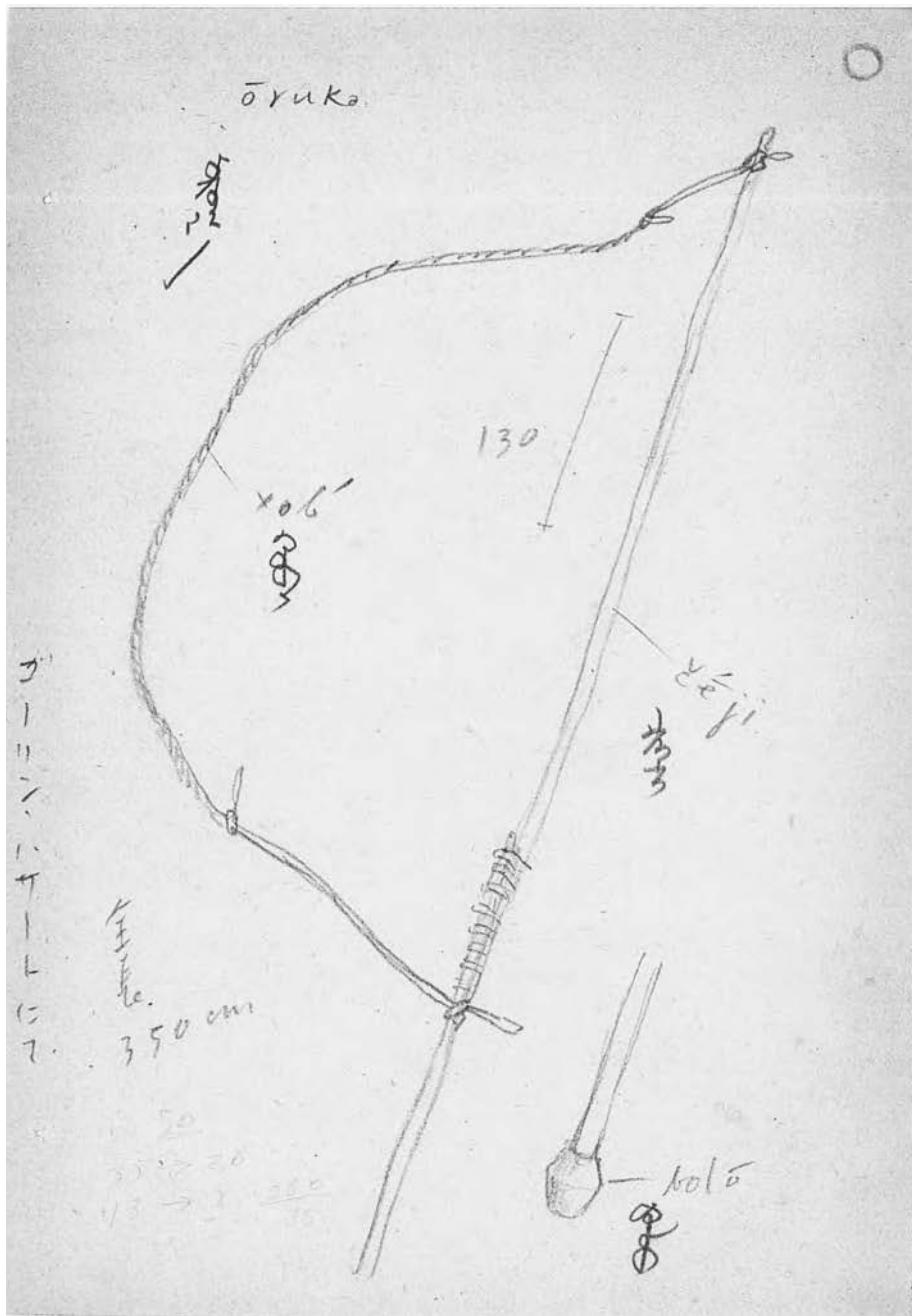
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、

アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

石壠の囲いのなかで子家畜が自由に干し草を食べている。

56. ウマとり竿



56. ウマとり竿

馬群は、まったく自由に放牧されていて、家にかえることはない。馬群のなかから、乗用に必要なものをとりだすときには、ウマとり竿のオールガをもちいる（図56）。

長大な棒のさきに革ひものループをつけたもので、これを疾走するウマの首にひっかけて、たくみにとらえる。革ひものループはホビといい、それがついている先の部分をチエージ（胸の意）という。全長350cm。チエージ部分130cm。手もとの部分にふくらみがある。チャハルおよびスニト付近の特徴である。輪にかかったウマにひきずられても、竿が手からぬけないようにくふうされたものである。この部分をボローという。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』591-592ページ



手もとのふくらみの部分は、辞書にボルチョーとある。



つなぎの部分はタグナイとよばれる。

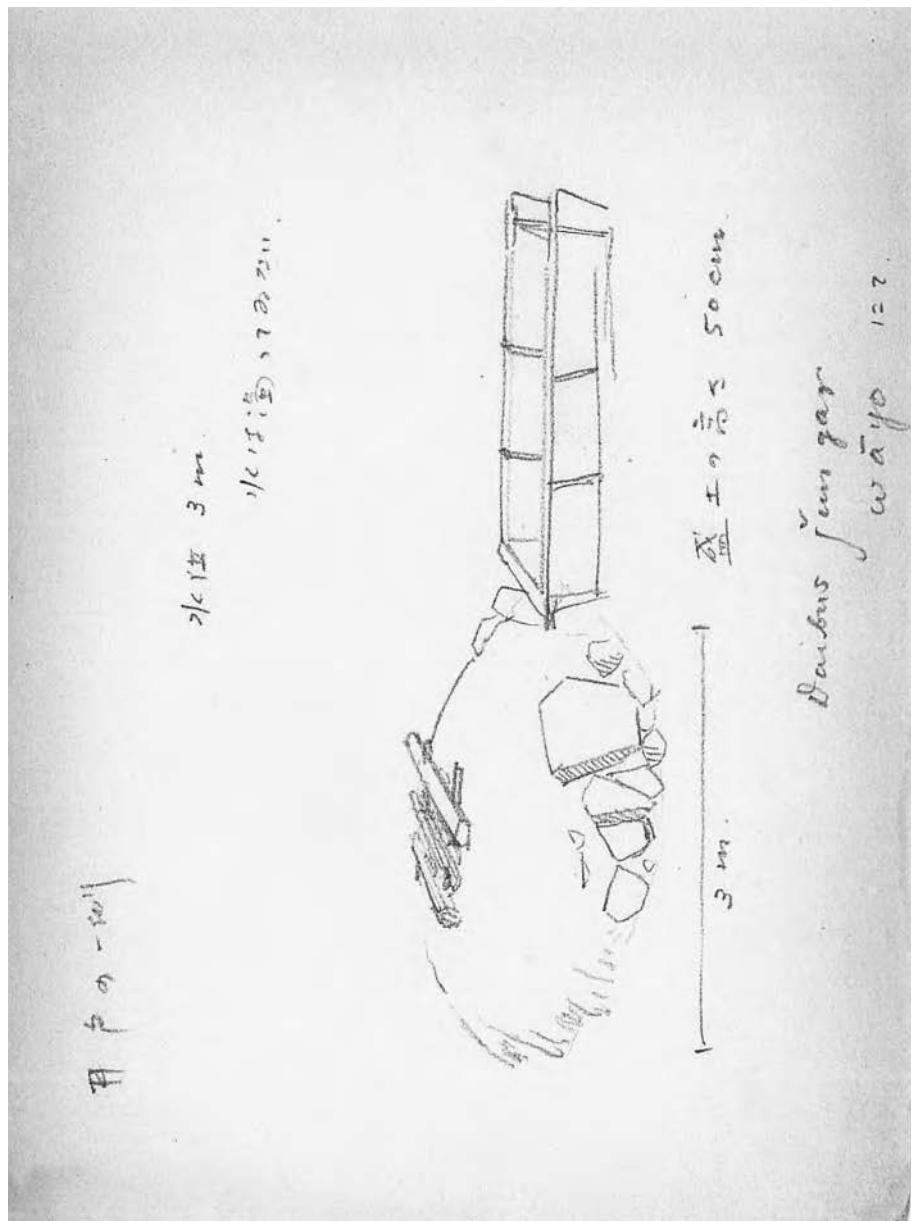
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ



竿の部分をチエージ、輪の部分をホイビという。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

57. 井戸



57. 井戸

家畜に水をのませるには、井戸がある（図57）。図のように盛土がしてあることもある。盛土は直径3メートル、たかさ50cm。水位は地下3メートル。水はにごっていない。井戸は、草原の各所にもうけられているが、これはだれの所有でもない。モンゴル人であれば、だれがつかってもよい。井戸は草原とともに全モンゴル人の共有財産である。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ

注1 フィールド・ノート24番の42ページにおなじ図解説明がある。そこには「水は濁ってわるい」とあるが、スケッチには「水は濁っていない」とあり、齟齬がある。

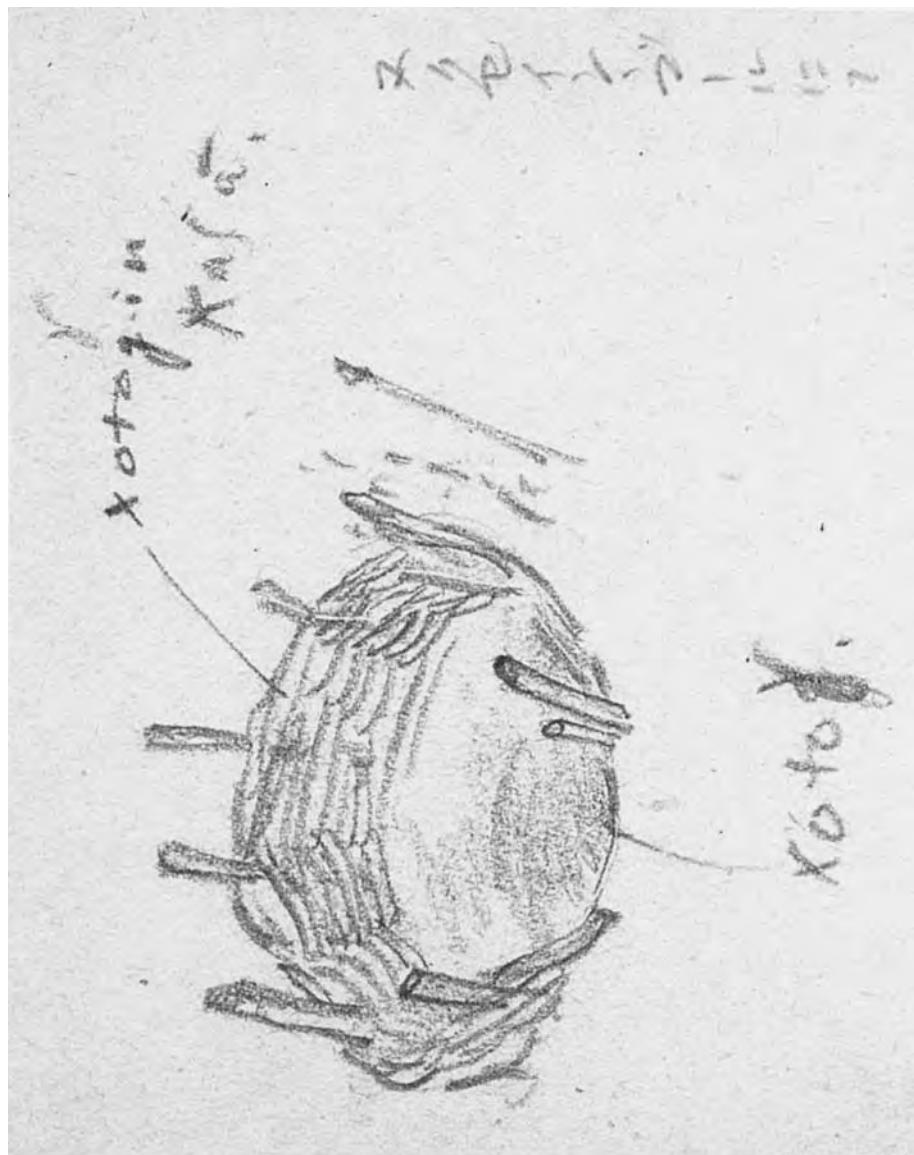


撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

58. 井戸の囲い



58. 井戸の囲い

井戸には柳条でかこいがつくってある場合もある（図58）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ



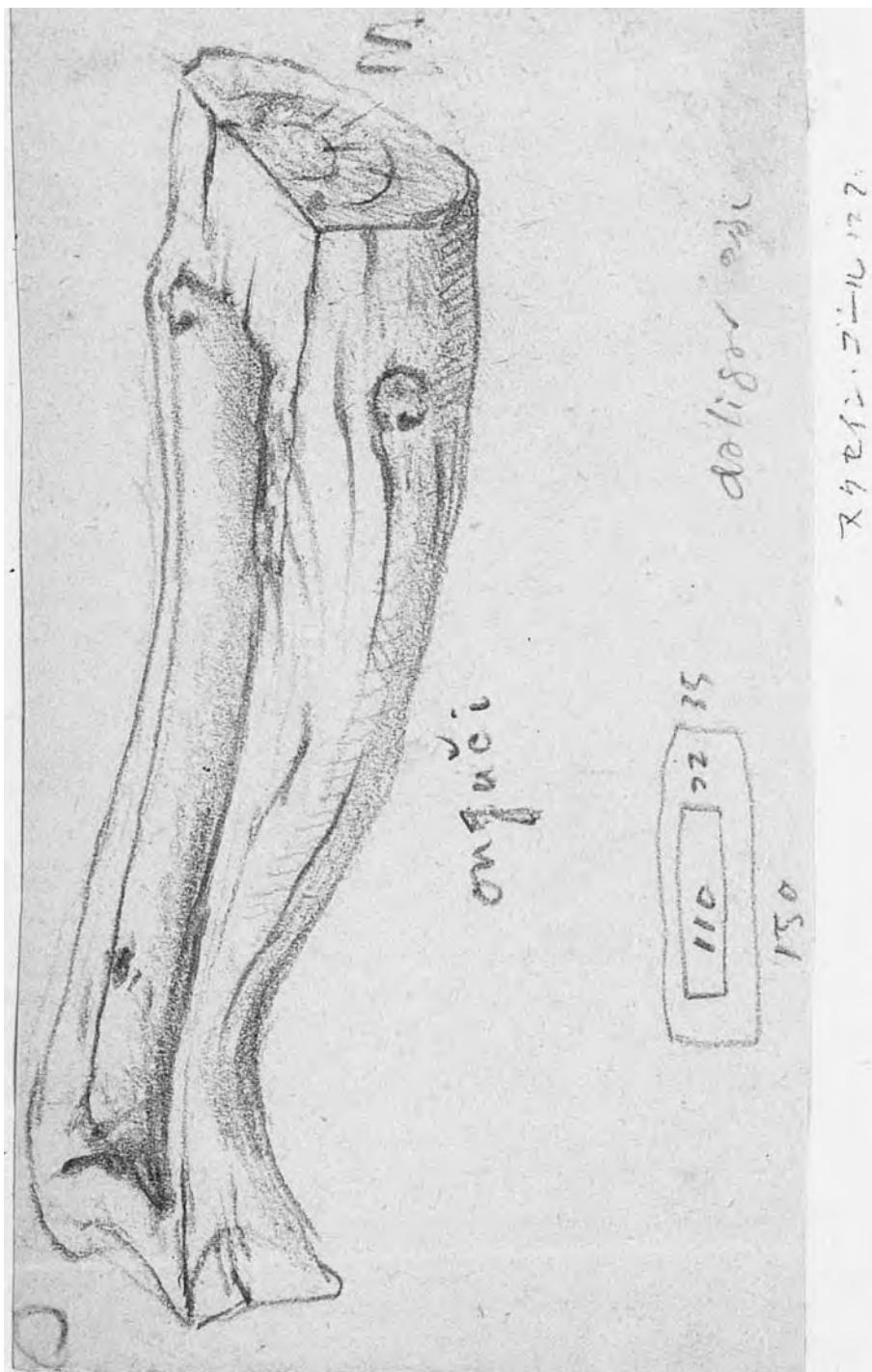
各戸の敷地内にあるため、柵はない。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：ジャロート旗ゲルチョロー・ソム

撮影者：堀田あゆみ

59. 井戸の桶



59. 井戸の桶

井戸のまわりには、家畜に水をやるために桶オングチャがおかれてている。丸太をくりぬいたものは、外径35×150cm、内径22×110cm(図59)。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ



石をくりぬいた桶。

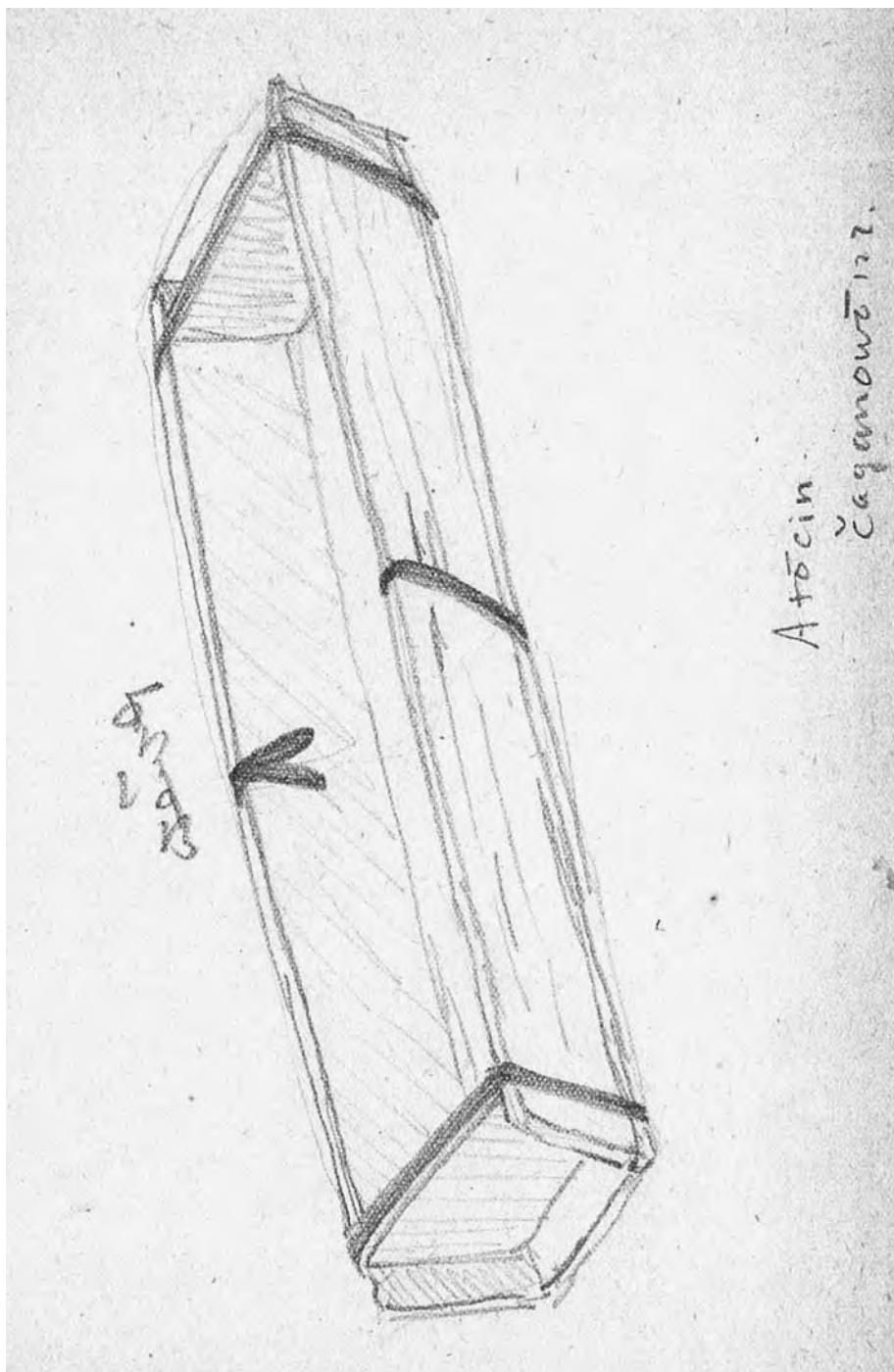
撮影年月：2012年4月
撮影場所：西ウジムチン旗
バラゲル・ソム、
オンドラフ・ガ
チャ一
撮影者：ナランゲル



鉄製の桶。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗
フレートノール
・ソム、アルタ
ンエメール・ガ
チャ一
撮影者：堀田あゆみ

60. 井戸用のタガつき桶



60. 井戸用のタガつき桶

板を組みあわせて鉄製のタガをはめたものがある（図60）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ

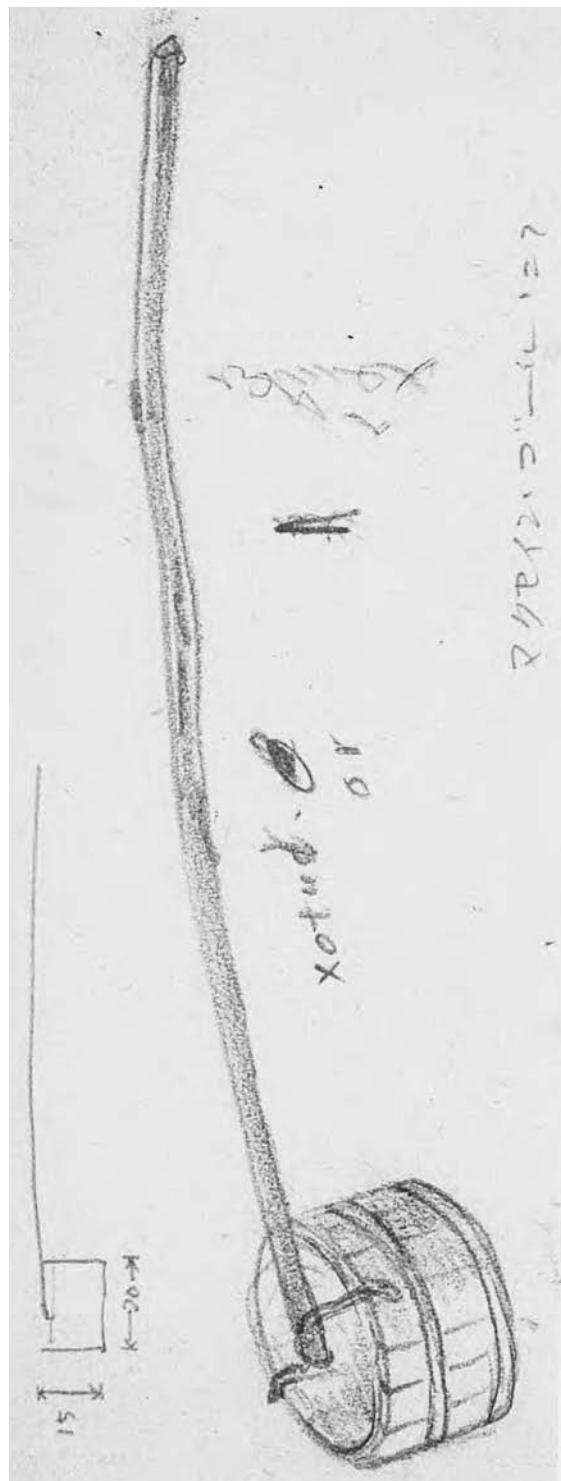


撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

61. 井戸用のバケツ



61. 井戸用のバケツ

しばしば汲みあげ用のバケツ、ホトゴルもおいてある（図61）。鉄のタガをはめた木製の桶は、20×15cmで、革ひもで柄にとりつけられている。柄は2-3mであるが、水位がたかいのでこれでじゅうぶん用をたせる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ



桶の直径およそ24cm、木の柄の長さは95cm。

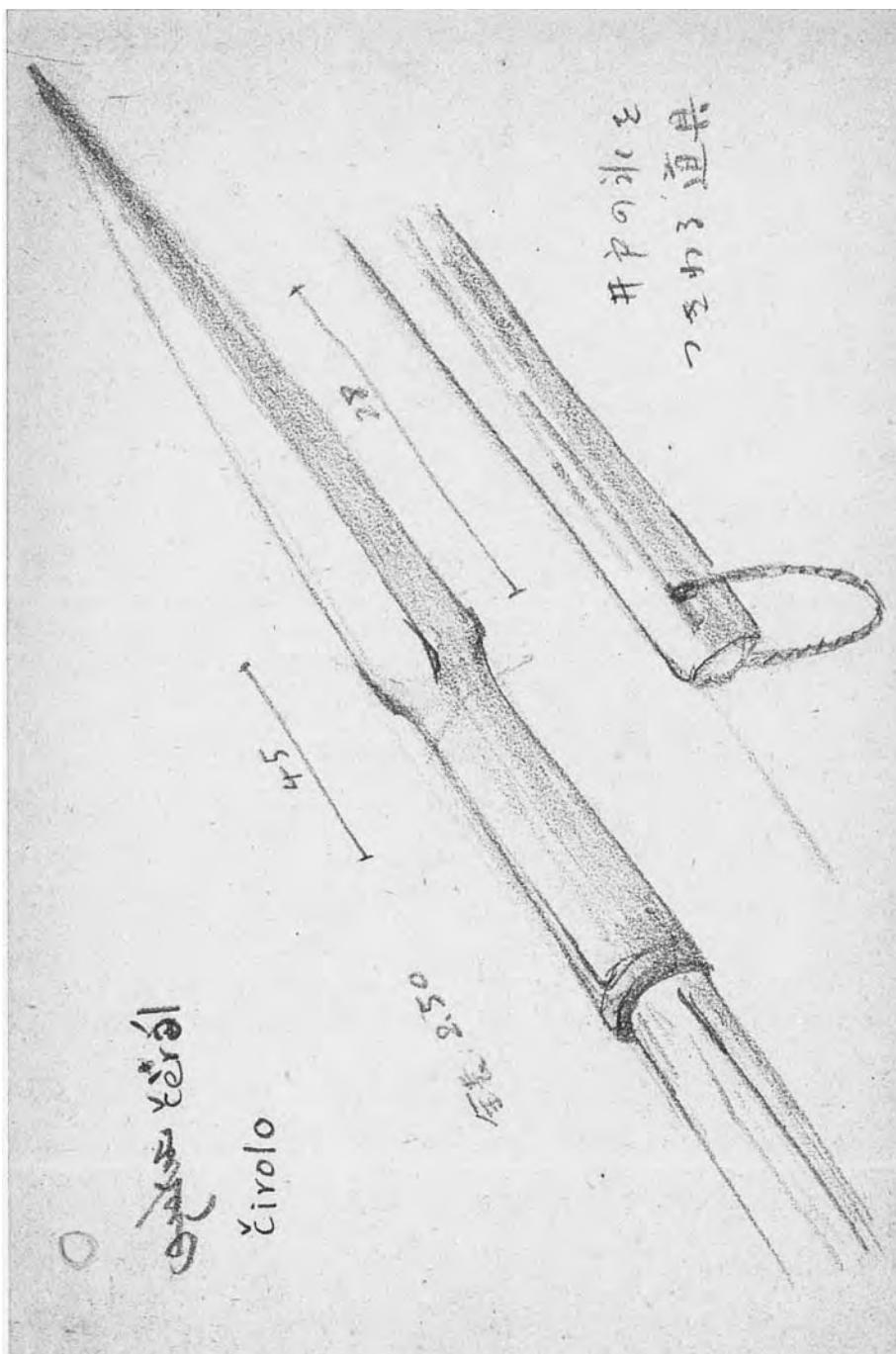
撮影年月：2012年4月
撮影場所：フフホト市、
内モンゴル大学
民族博物館
撮影者：ナランゲレル



手押しポンプになり、汲みあげようのバケツは使われていない。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗
フレートノール・
ソム、アルタン
エメール・ガチ
ヤー
撮影者：堀田あゆみ

62. 氷をわる



62. 氷をわる

冬には、井戸の水面が凍結して、水が汲めなくなることがある。その氷をわるための道具がある（図62）。チョラルとよばれる。全長250cmで、鉄製の部分は45cm、穂先は28cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』592ページ



撮影年月：2012年4月
撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学
民族博物館
撮影者：ナランゲレル

鉄製の部分の長さは37cm。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー
撮影者：小長谷有紀

先端を尖らせた金属の棒がもちいられている。

63. 幼畜管理



63. 幼畜管理

春になると家畜の子どもが続々とうまれる。

戸外でうまれた子ヒツジ、子ヤギをくるんでかかえてかえるためのフェルトのふろしきがある（図63）。とくに名まえはない。ただ、シャル・エスギー（黄色いフェルト）とよばれている。黄色いというのは、よごれたというほどの意味。よごれたフェルトをくろいといわずに黄色いと表現する。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ



オートとよばれるフェルト製の袋のなかにいれて、戸外でうまれた子ヤギがもちかえられてきた。

撮影年月：1988年3月

撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

64. 幼畜のための着物



64. 幼畜のための着物

体調のすぐれない幼畜にフェルトの着物をきせることもある（図64）。ネムネーとよぶ。かけものの意味。ラクダの毛であんだひもで固定されている。ひもは一般にデースとよばれる。ラクダの毛でつくったひもは、ウマの尾やウシの毛でつくったものにくらべて、とてもやわらかい。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ

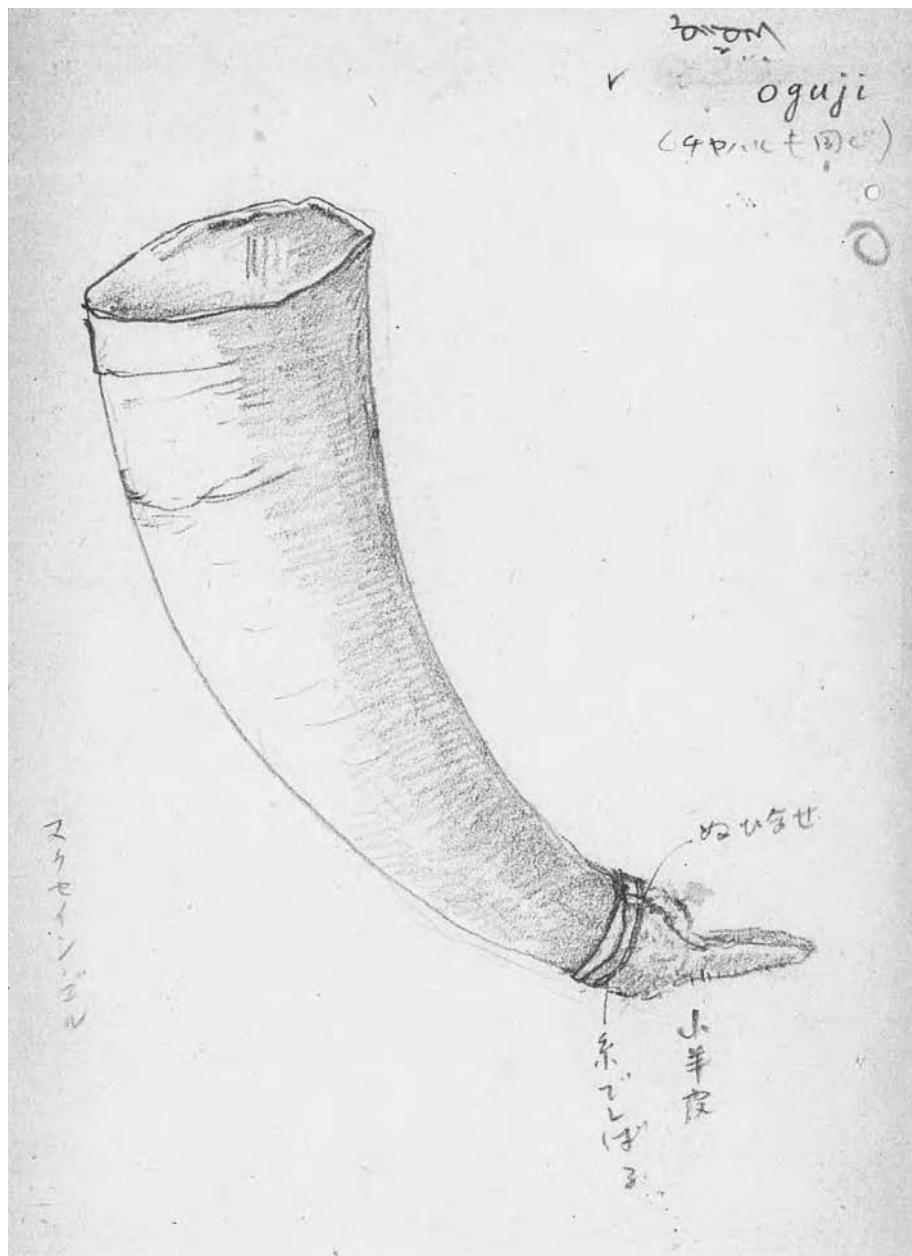


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：堀田あゆみ

65. 幼畜のための哺乳瓶



65. 幼畜のための哺乳瓶

幼畜に乳をのませるための哺乳瓶オグジがある（図65）。ウシの角の先をあけ、ヤギの革でつくった吸い口をつけてある。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」に「子ヒツジの革」とあったが、スケッチ原画には「山羊」とあるので、改稿する。



人間用の哺乳びんや、酒びんを代替利用している事例がおおかった。

撮影年月：1989年5月

撮影場所：西ウジムチン旗ジリンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル



ペットボトルを利用した哺乳瓶。

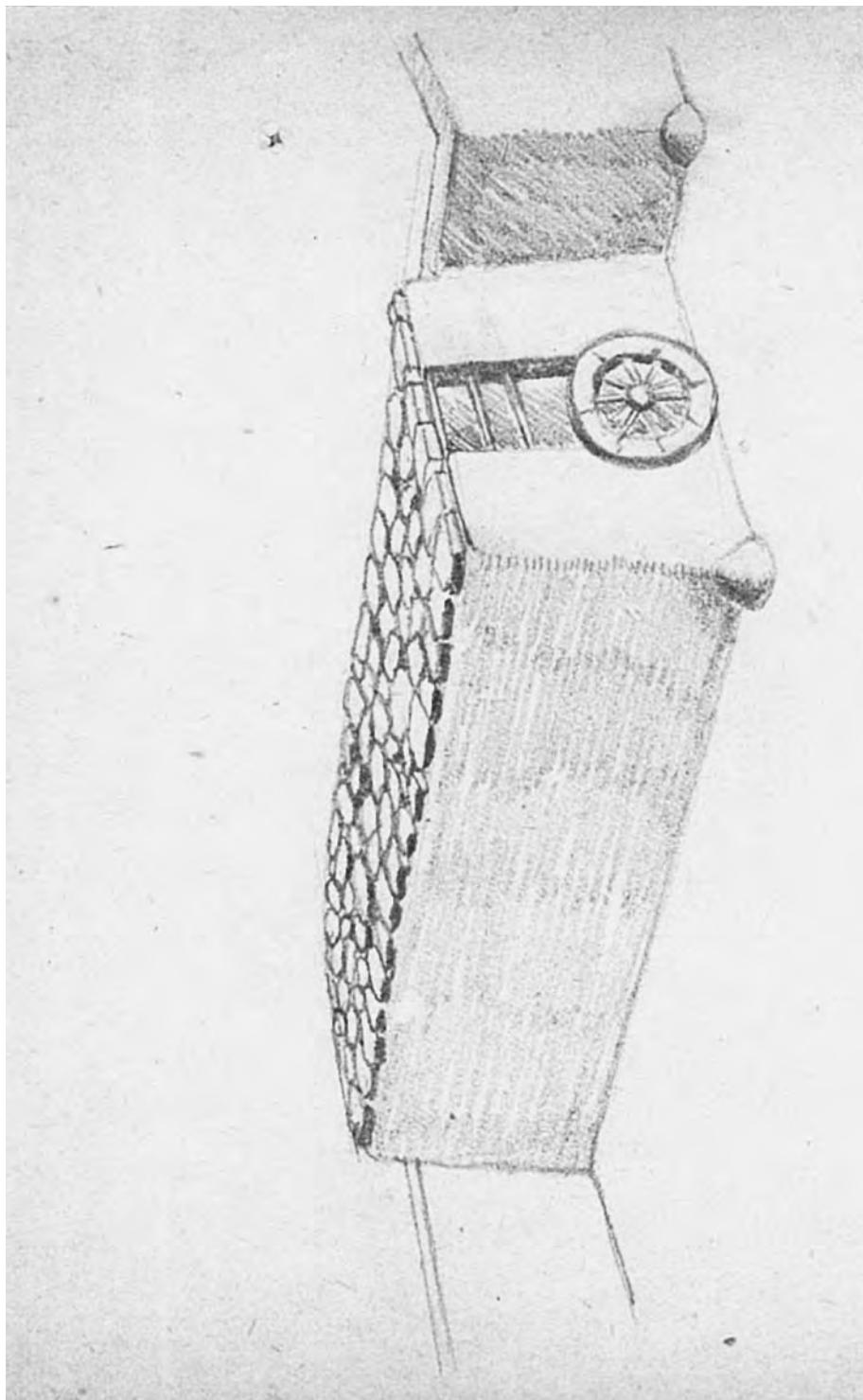
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、

バヤンタル・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

66. 家畜小屋



66. 家畜小屋

しばしば、幼畜専用の家畜小屋がある。泥で壁をぬった家畜小屋はブンとよばれる（図66）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ



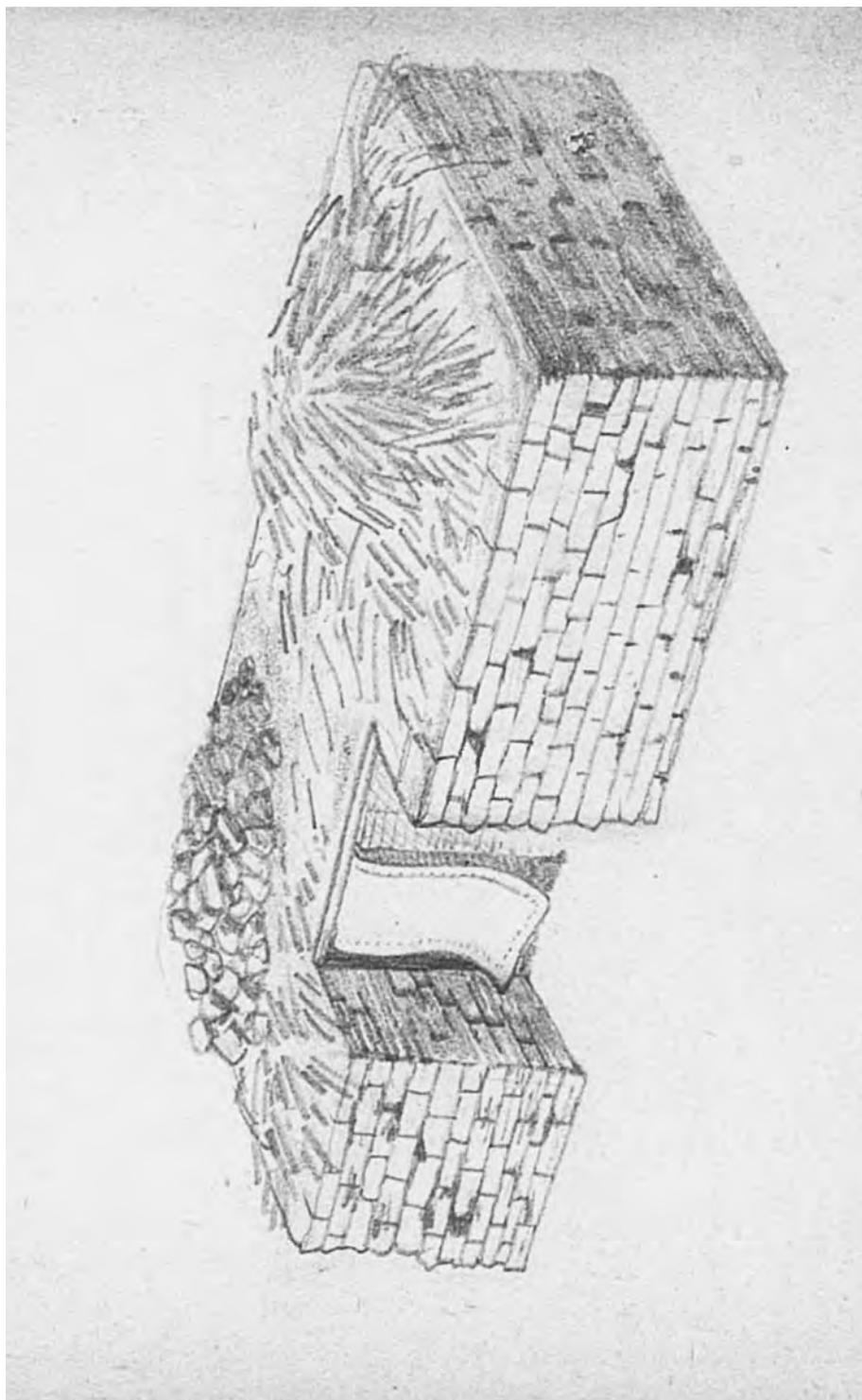
畜用小屋の中に幼畜用の間仕切りがある。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー

撮影者：堀田あゆみ

67. レンガづみの小屋



67. レンガづみの小屋

レンガづみのりっぱな小屋もある（図67）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ

注1 2種類の小屋はもとから清書されていた。



撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗

バラゲル・ソム、

オンドラフ・ガ

チャー

撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月

撮影場所：ジャロート旗ゲ

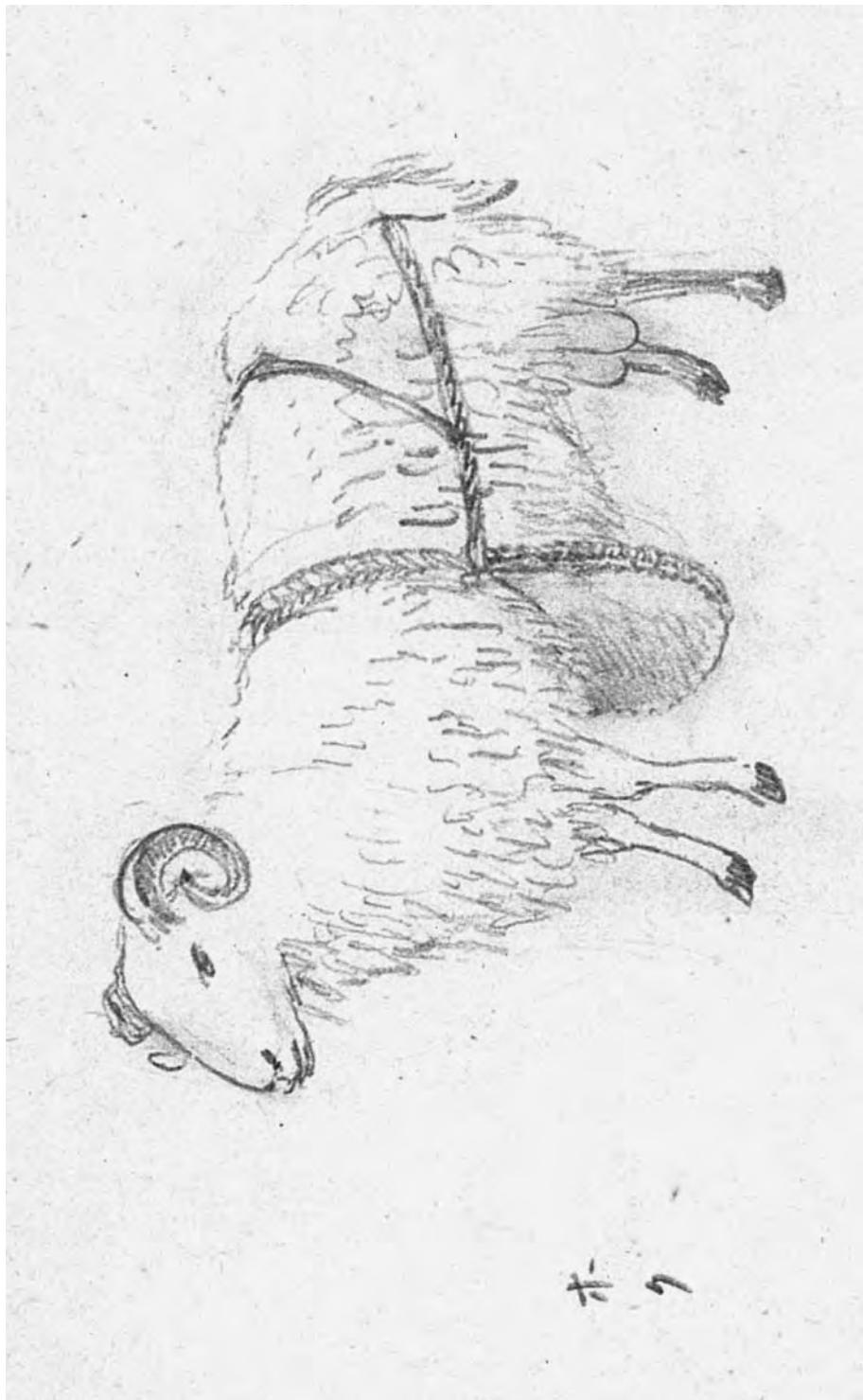
ルチョロー・ソ

ム

撮影者：堀田あゆみ

レンガ積みの家畜小屋。

68. ヒツジのふんどし



ホウ

68. ヒツジのふんどし

ヒツジの子が時期はずれにうまれてくることをさまたげるために、種オスヒツジにふんどしをかける（図68）。これはホグとよばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』594ページ



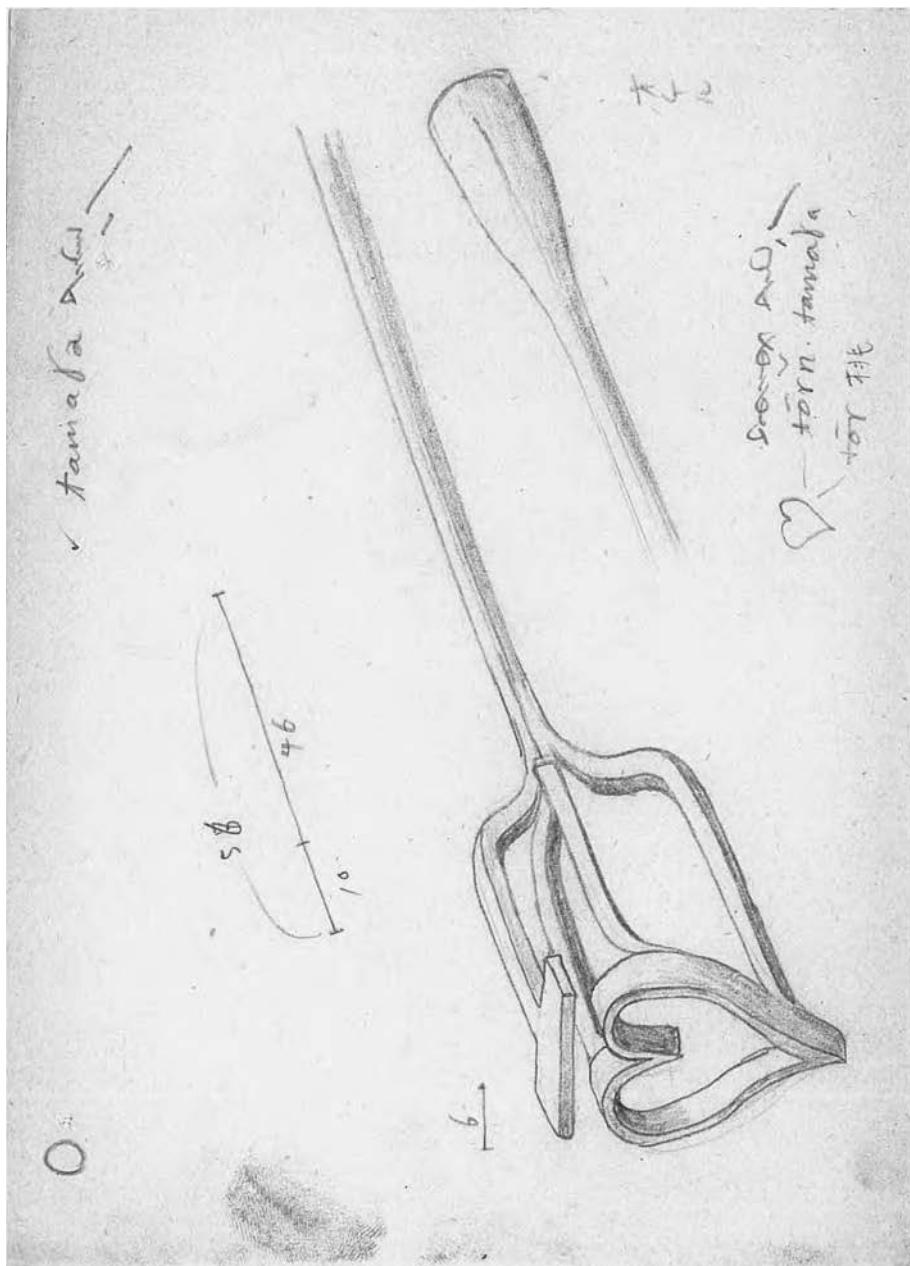
オルドスではメリノ種ヒツジが導入されていた。ふんどし布が前のほうにずれていた。容易にずれるものであるらしく、あわてふためいたようすをさして「ふんどしをひきずる」という慣用表現がある。

撮影年月：1987年9月

撮影場所：イフジョー盟ウーシン旗

撮影者：小長谷有紀

69. 家畜の標識 (焼印)



69. 家畜の標識（焼印）

各戸の所有家畜には印がつけられている場合がある。とくにウマ、ウシ、ラクダには焼印をおす。焼印は鉄製でタムガという。タムガには家によっていろいろな形のものがある（図69）。図にしめたのは、トールン（桃の）タムガとよばれるもので、印が桃の形をしている。下線があるのでダブハル（重なり）タムガともよばれる。全長56cm、印の部分は 6×10 cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』596ページ



博物館で大量に展示されているが、現在でもつかわれている。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ



柄の全長およそ70cm。

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル

70. 耳印

ear mark 9-131



70. 耳印

ヒツジ、ヤギには焼印をせず、耳印イムをほどこす（図70）。

出典　著作集第2巻『モンゴル研究』596ページ



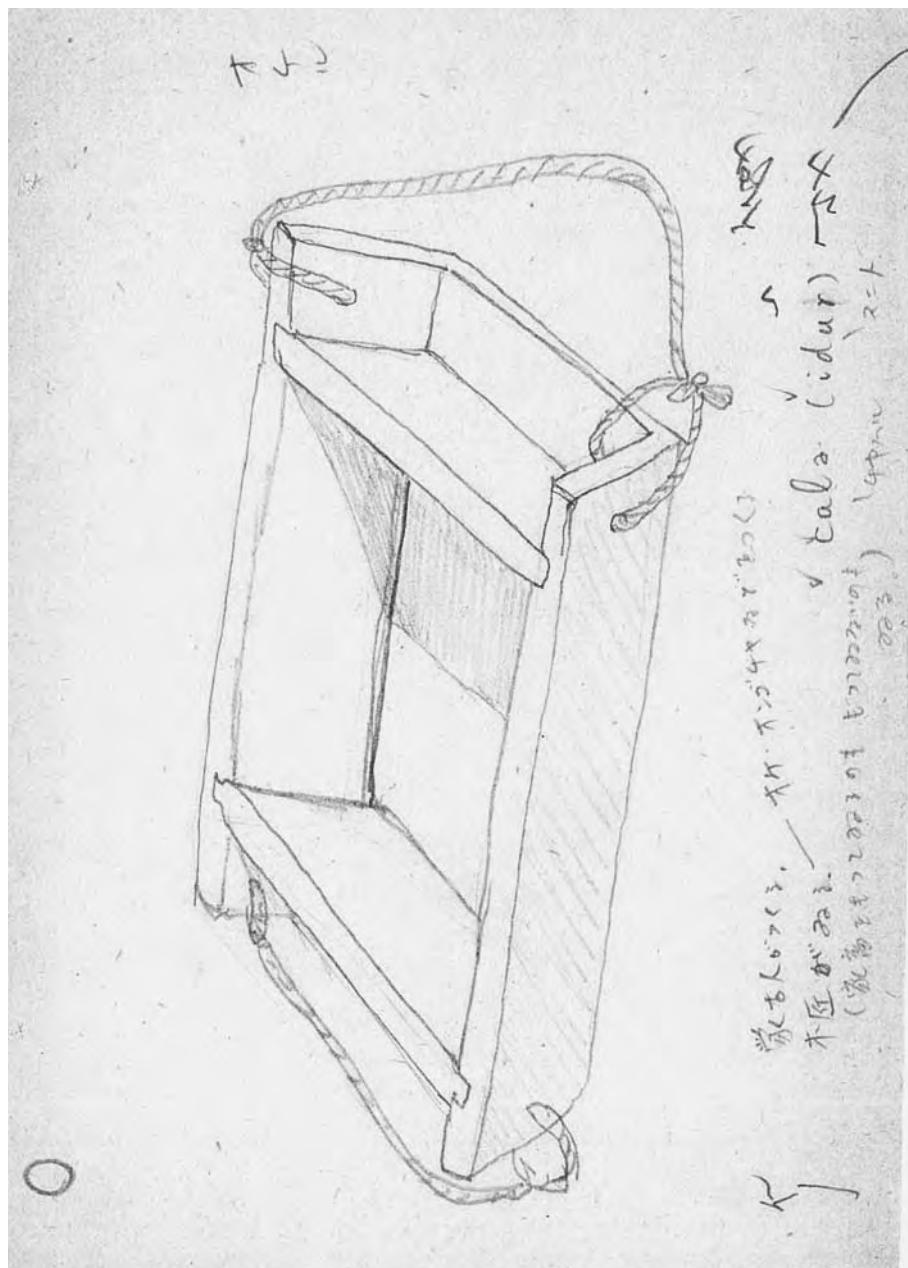
イムにはいろいろな形がある。このイムはツォールバル（引き裂き）と呼ばれている。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗マンダラト・ソム

撮影者：ナランゲレル

71. イヌ



71. イヌ

イヌは各戸に1頭ないし数頭いる。モンゴルのイヌはからだはたいへんおおきい。おおきいものは、たちあがると人間ほどの背たけになる。毛並はすべて黒褐色で、目のうえに褐色の斑点がある。いわゆる4つ目である。巻尾である。耳は、たち耳である。性質は、はなはだどう猛である。

イヌには原則として固有の名はない。1例では1軒の家に3匹のイヌがいた。名まえをきくと、名まえはあるという。トムル（鉄の意）という名である。3匹ともトムルという。

モンゴルのイヌはただの番犬であって、牧羊犬ではない。畜群の放牧についていく場合もあるが、畜群の管理にはなんの役にもたっていない。

イヌ用に餌箱がある（図71）。チャハルではチャラといい、スニトではイドゥルという。モンゴル人の大工ムージャンがつくる。漢語の木匠からきている。ムージャンは、桶や舟（箱型容器）などをつくる。家畜をもっているものも、もっていないものもある。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』596-597ページ

注1 フィールド・ノート11番の36-39ページおよび53-66ページ、12月13日の記録のなかで、イヌについてくわしく考察している。モンゴルにはノホイとハバの2種類がいる、とある。後者は狛の系統である。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中
心地、スニト
博物館
撮影者：堀田あゆみ

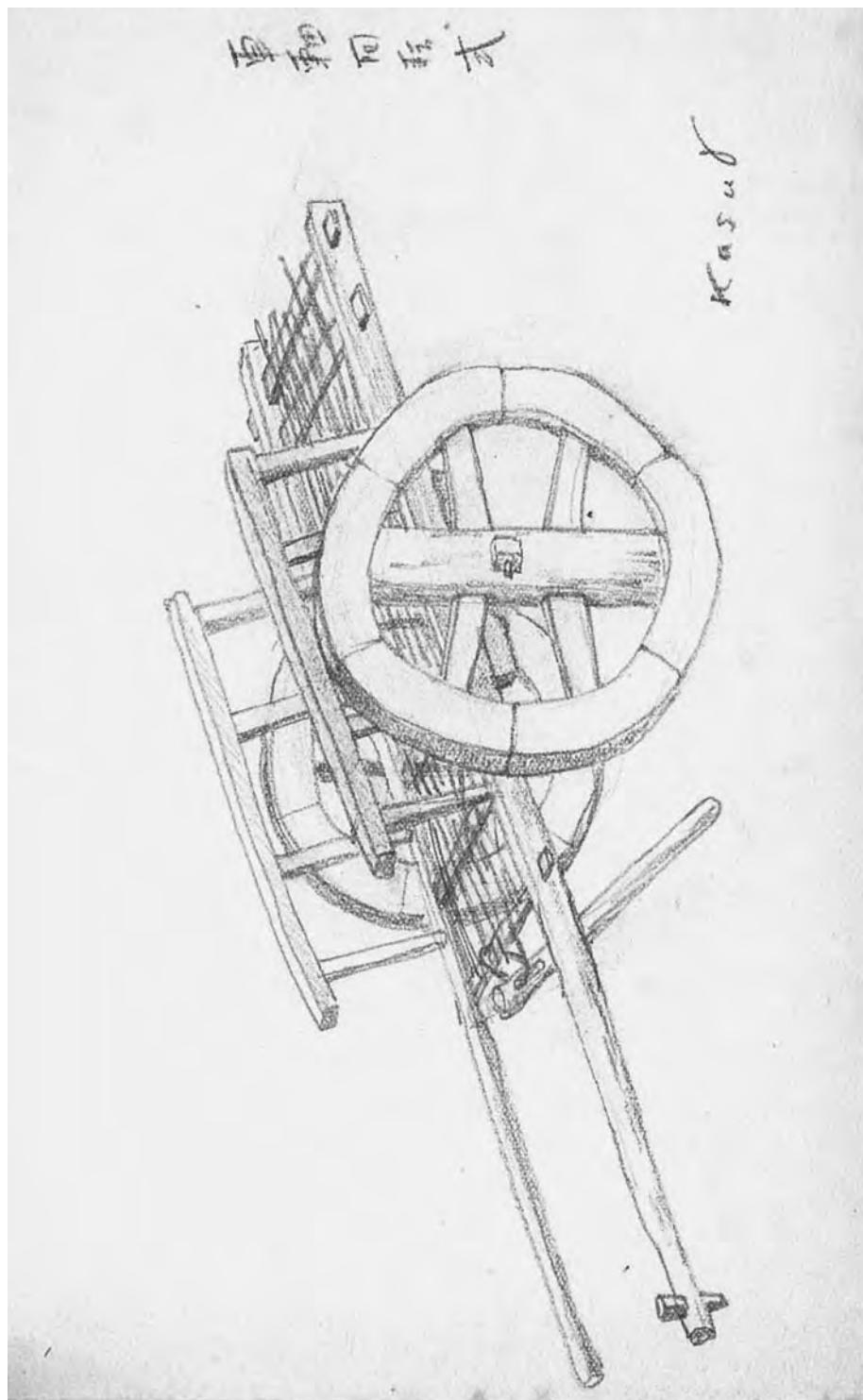
遊牧移動

チャハル南部では、モンゴル人でも漢人ふうの固定家屋バイシン・ゲルとフェルトのゲルを併用している場合がおおい。この場合は、原則として移動はしない。チャハル北部およびシリンゴル盟では、フェルトのゲルだけであるが、この場合は移動するのがふつうである。

移動回数は、年に2回というのから7、8回というのまである。2回の場合、宿营地は、冬营地ウブルジョーと夏营地ジョスランとよばれる。ほかに、秋营地ナマルジャーと春营地ハバルジャーとよばれることがある。しかし、いずれの場合も、その場所はまったく一定していない。ウブルジョーの場所はややきまっている傾向がある。

移動の際には、ゲルは解体され、たたまれる。移動には牛車またはラクダがもちいられる。

72. 牛車



72. 牛車

牛車にはふたつの形式がある。ひとつは、車軸と車輪が固定されていて、車台は車軸のうえにのっている形式である（図72）。この形式のものは、ハサグとよばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』597-598ページ

注1 フィールド・ノート20番の1ページに2形式に関する図入りのメモがある。



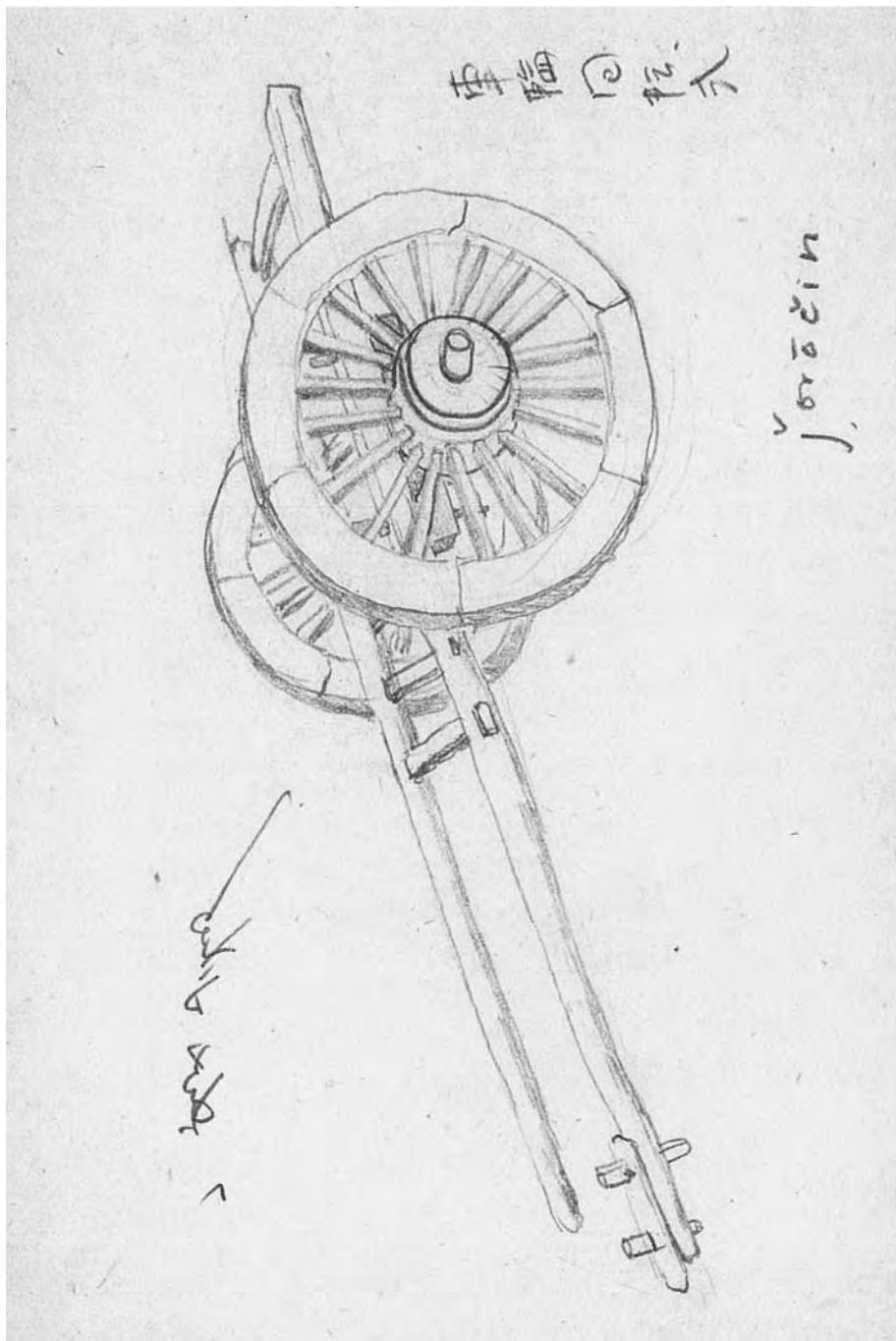
夏营地に移動する。夏营地までは10キロメートルほどである。移動距離がみじかいのはこの地域の特徴である。ハサグがまだ使われている。

撮影年月：1997年6月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ハシャート・ソム

撮影者：小長谷有紀

73. 車輪回転式の牛車



73. 車輪回転式の牛車

第2の型は、車台と車軸が固定されていて、車輪が回転する（図73）。これは、車一般を意味するテレグの語でよばれる。

この両者のうち、ハサグのほうがよりふるい形態であるとおもわれるが、数はハサグのほうがおおい。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』598ページ

注1 原画にはこのタイプの名まえとしてジョローチンとしらされている。ウマの側対歩をジョローといい、その軽敏さから名づけられている。中国語では「勒勒車」とよばれている。

注2 車輪回転式の車については、部品名称を詳細に記した原画もあり、次ページにしめす。



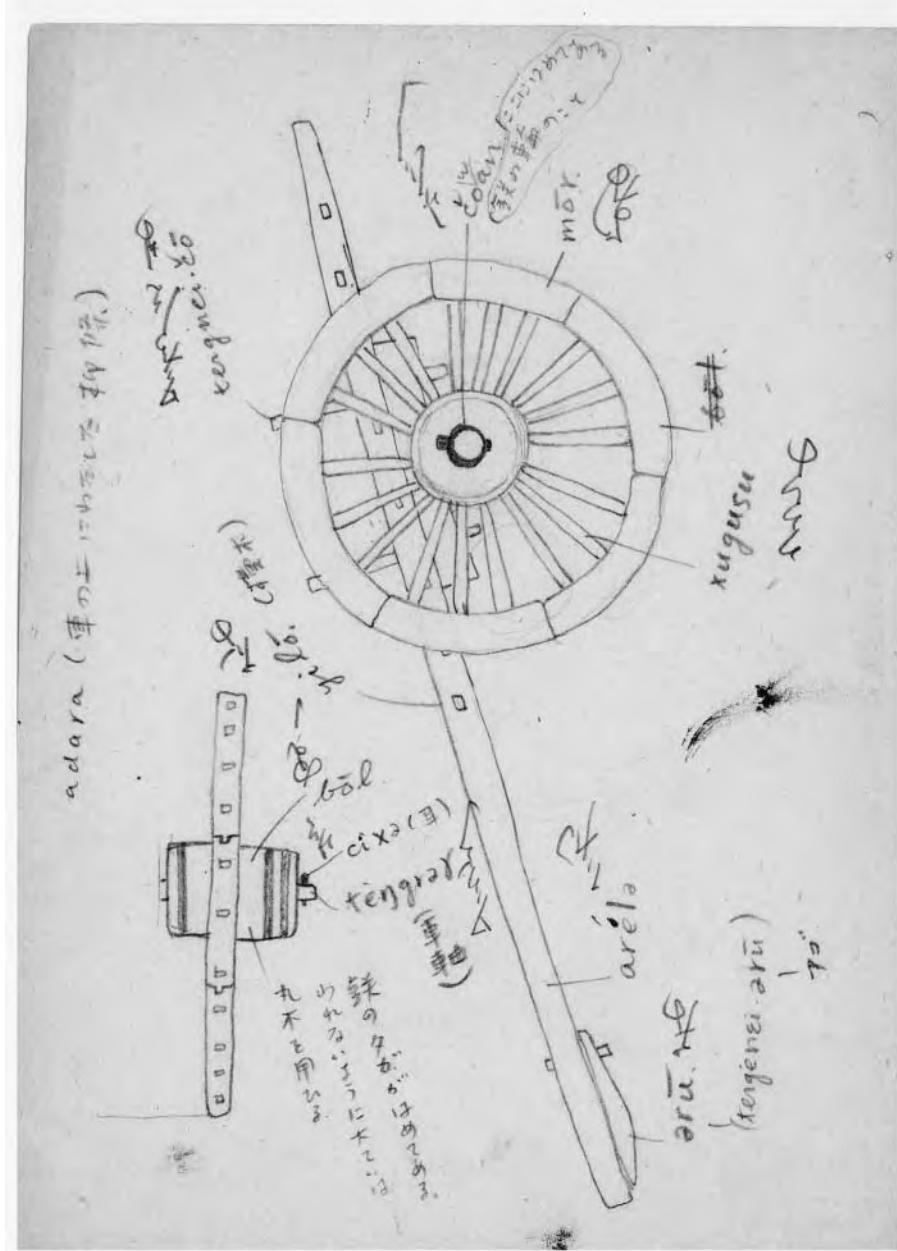
中国では博物館でもハサグは少ない。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：通遼市、ホルチン博物館
撮影者：堀田あゆみ



撮影年月：2012年5月
撮影場所：フホト市、内モンゴル大学民族博物館
撮影者：小長谷有紀

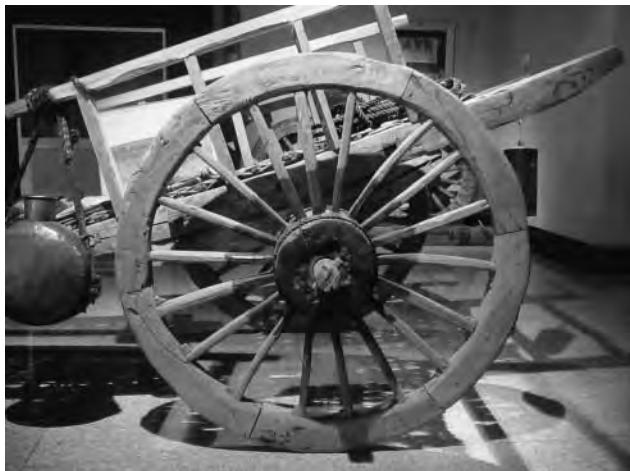
補21. 牛車の構造



補21. 牛車の構造

木製の車輪はいくつかの弧に分かれている、それぞれの木をムールとい。車軸はテンゲレグという。車軸と車輪の結合部をボロという。そこには鉄製のタガがはめてある。車軸にはめられている鉄の輪はチヨンといい、くさびはチフ（耳の意）とよぶ。車輪の矢はベースという。まえにつきだした轆はアラルといい、その先端部分はエルー（あごの意）とよぶ。両輪のあいだにわたす横木はイルーといい、そのうえに床をつくる。床は一般にアダラとい。 (小長谷記)

注1 スケッチにかかれた図解にもとづいて、解説をつけた。

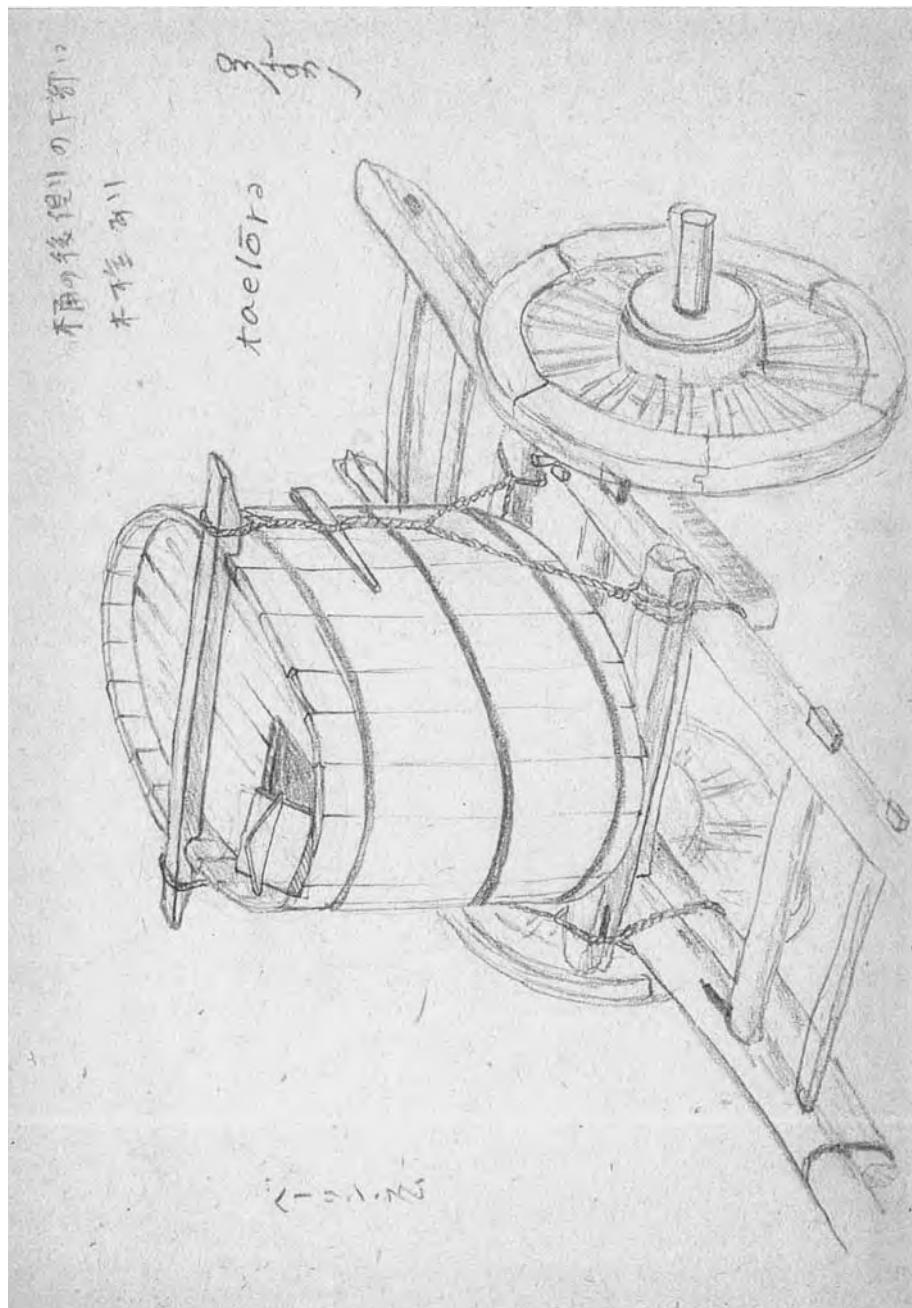


撮影年月：2012年5月
撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月
撮影場所：ジャロート旗ゲルチヨロー・ソム
撮影者：堀田あゆみ

74. 水はこびの牛車



74. 水はこびの牛車

車にはまた、おおきな水桶を固定したものがある（図74）。タエロールとよばれる。桶の後方下部に木栓がある。井戸からゲルまで水をはこぶときにももちいられるし、長距離移動の際にも有用である。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』598-599ページ



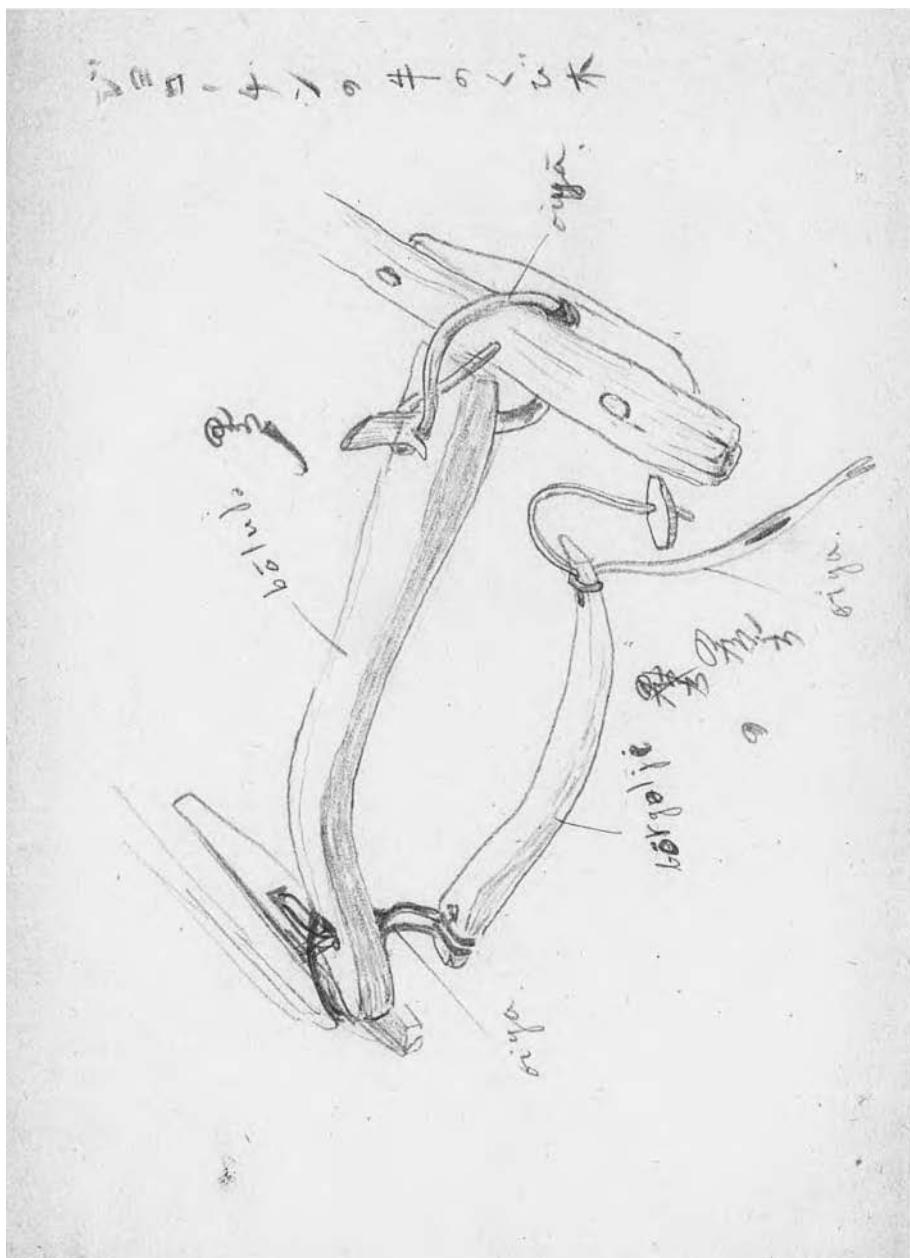
まず、井戸の桶に水をはってウシに給水し、バケツで桶に水をくんだ。

撮影年月：1988年4月
撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月
撮影場所：通遼市、ホルチン博物館
撮影者：堀田あゆみ

75. 役牛



75. 役牛

車をひくのは、去勢ウシである。ウシに車をひかせるには、専用のくびきがある（図75）。うえの木は、ポールゲ、したの木は、ベルゲルジとよぶ。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』599ページ

- 注1 したの木について、辞書にはみあたらないが、2012年5月、通遼市ジャロート旗ゲルチョロー・ソム、ボルホショー・ガチャーの牧畜民トゥグスバヤル氏により、ブルゲルジとよぶことが確認された。
- 注2 原画にあるジョローチンというのは車輪が回転する一般的な牛車のことである。図73参照。



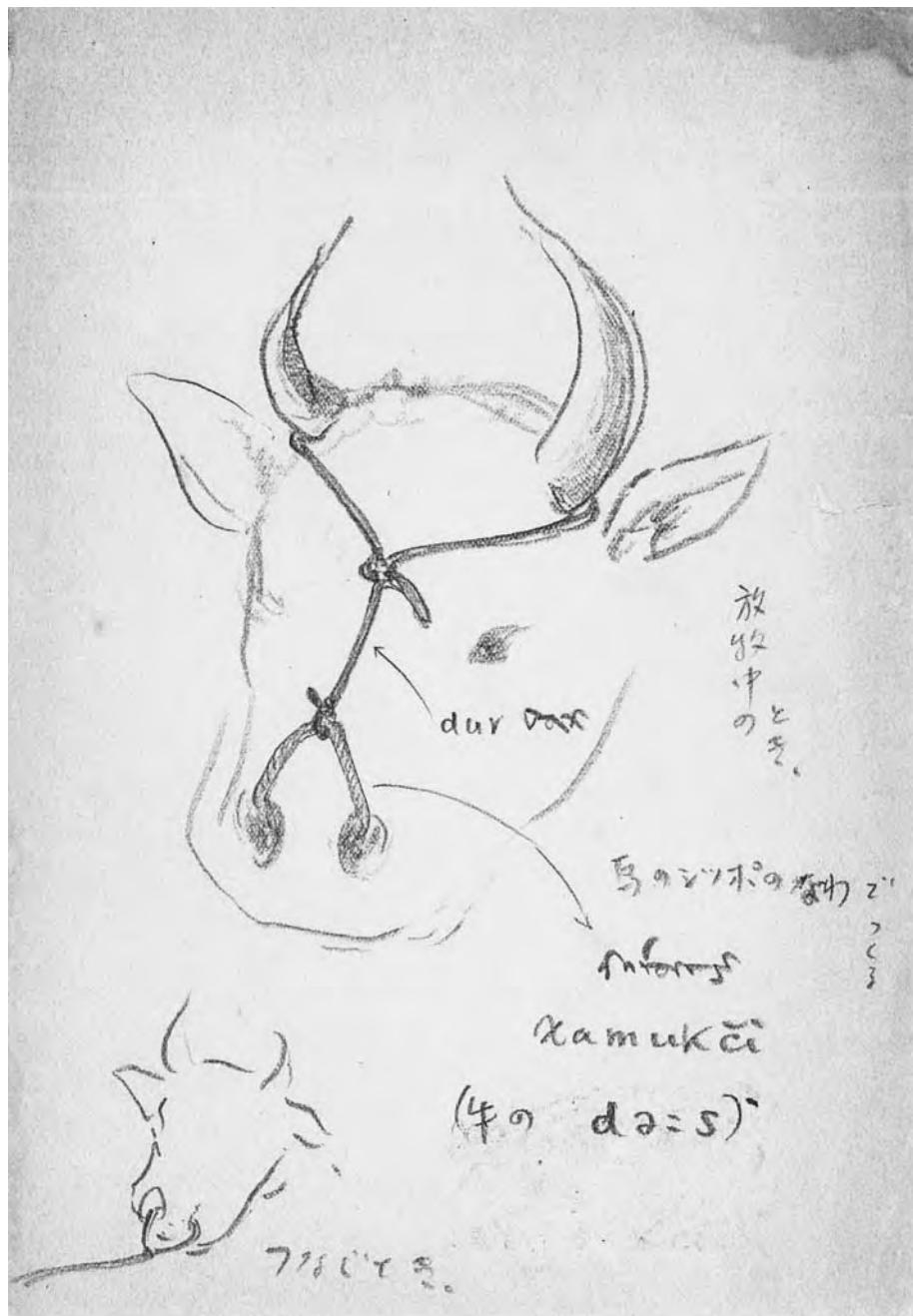
役場の庭に展示されていたもの。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：ジャロート旗ゲルチョロー・ソム

撮影者：堀田あゆみ

76. ウシの鼻環



76. ウシの鼻環

車をひくのに常用するウシには、しばしば鼻環ハマクチがつけてあり、ひっぱりだすのに便利なようにしてある（図76）。鼻環には綱がついていて、これはドゥルとよばれる。全体がウマのしっぽの剛毛でつくられている。放牧中は、綱の部分を角にかけておき、必要なときにははずして、ひっぱる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』599ページ

注1 フィールド・ノート23番の79ページに「つなぐとき」とおなじようなスケッチがある。また、フィールド・ノート24番の43ページに「放牧中のとき」とおなじようなスケッチがある。



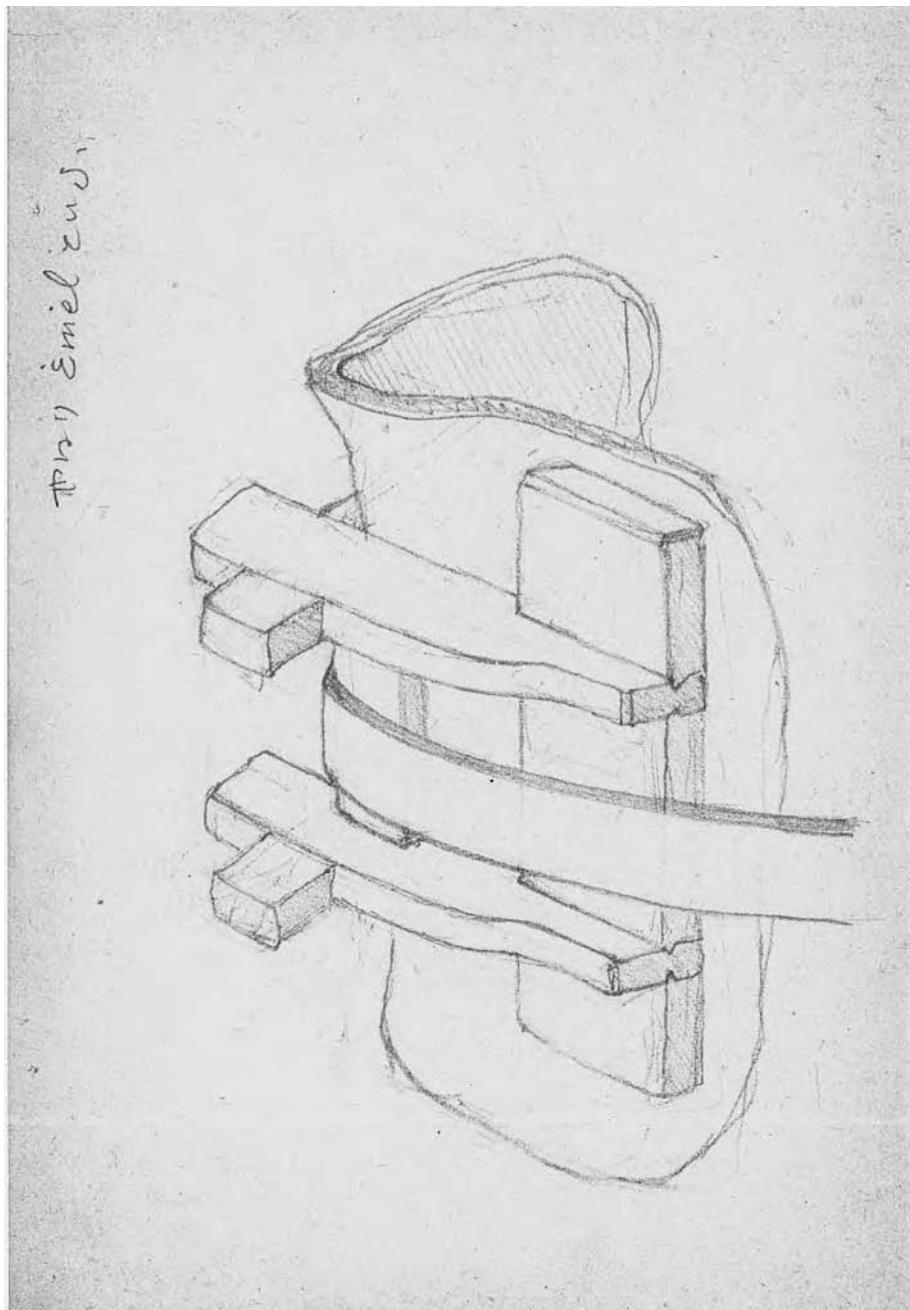
鉄製の鼻環。

撮影年月：2009年8月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ホトント・ソム

撮影者：堀田あゆみ

77. 荷物用の鞍



77. 荷物用の鞍

去勢ウシには、車をひかすほかに、駄載すなわち直接に背に荷物をのせることもある。駄載のためには特別の鞍がある（図77）。ウマの鞍と構造はちがうが、名まえはおなじくエメールとよばれる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』600ページ

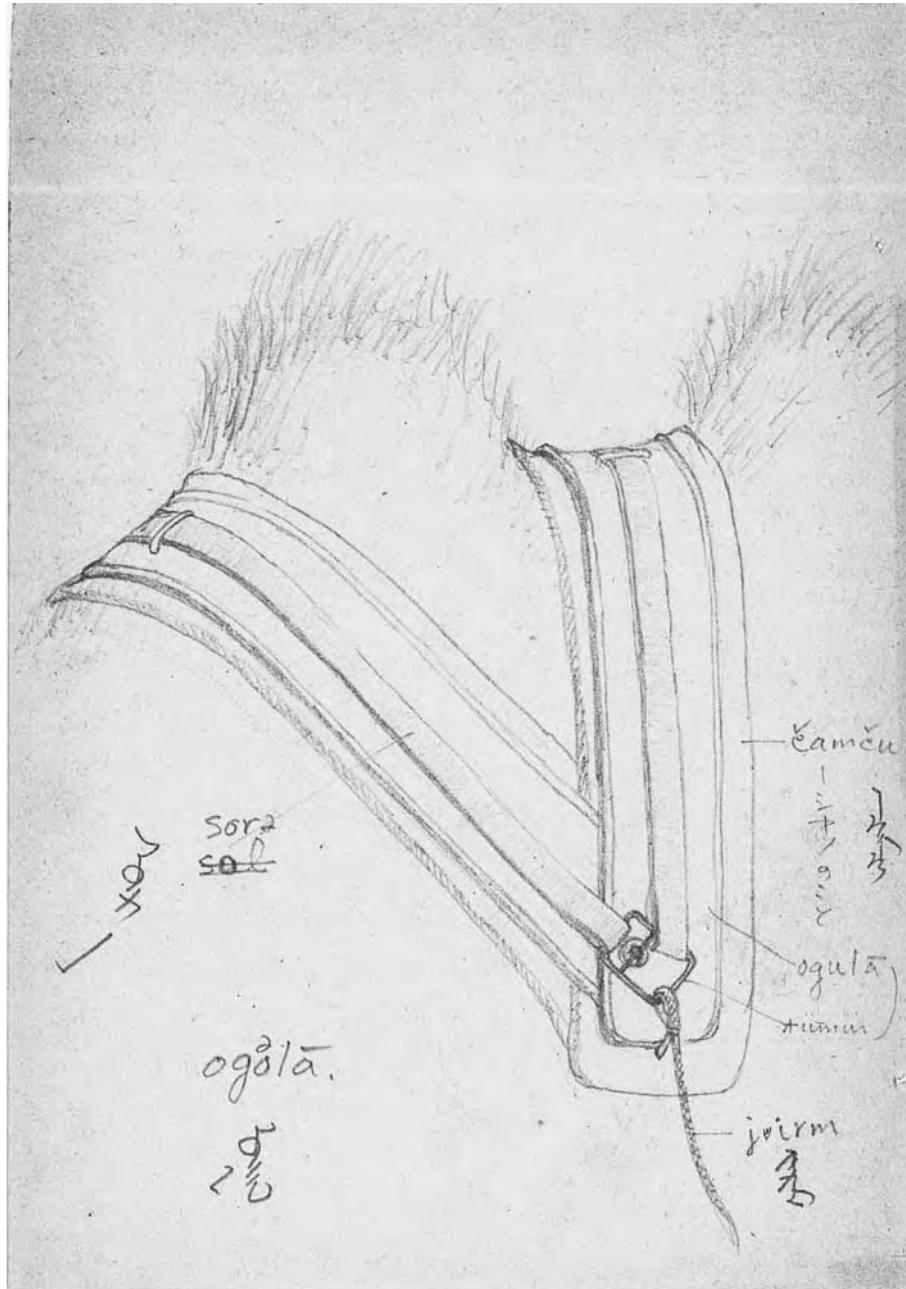


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

78. 役畜としてのラクダ



78. 役畜としてのラクダ

ラクダに車をひかせることもある。ラクダの場合は専用のくびきはなく、フェルトと革でつくった帶をまえのコブのまえにかける（図78）。いちばんしたのフェルトの部分は、チャムツ（シャツの意），つぎの部分はオゴラー，革ひもはソラ，よってある部分はジルムという。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』600ページ

注1 フィールド・ノート7番の50ページには、11月11日の日付とともに、ラクダのフェルト製のコブかけがえがかれているが、名称についての記載はない。



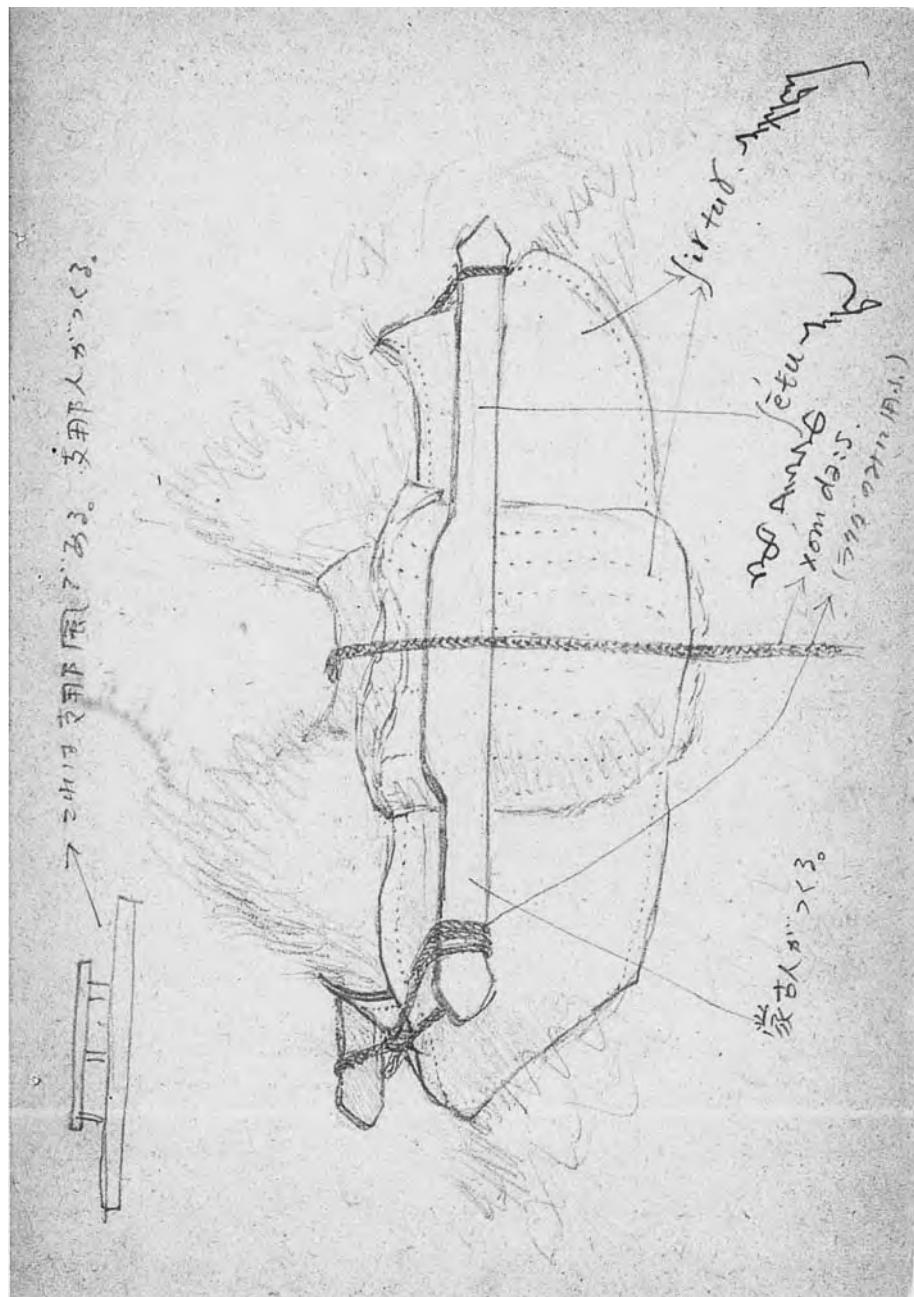
車には、ウシにひかせるときよりも長い柄がついているようである。

撮影年月：1989年4月

撮影場所：西ウジムチン旗ジリンゴル・ソム

撮影者：小長谷有紀

79. ラクダの荷物用の鞍



79. ラクダの荷物用の鞍

またラクダに駄載することもある。前後のコブのまわりにフェルトをあて、そのうえから左右に棒をあてて固定する。それに、ふりわけ荷物をむすぶ（図79）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』600ページ



左右にふりわけ荷物が積載されているので、鞍のようすがわからない。国立民族学博物館の展示場には、ラクダの荷物用の鞍が展示されている。

撮影年月：1995年8月

撮影場所：モンゴル国ホブド県ムンフハイルハン・ソム

撮影者：小長谷有紀

騎乗

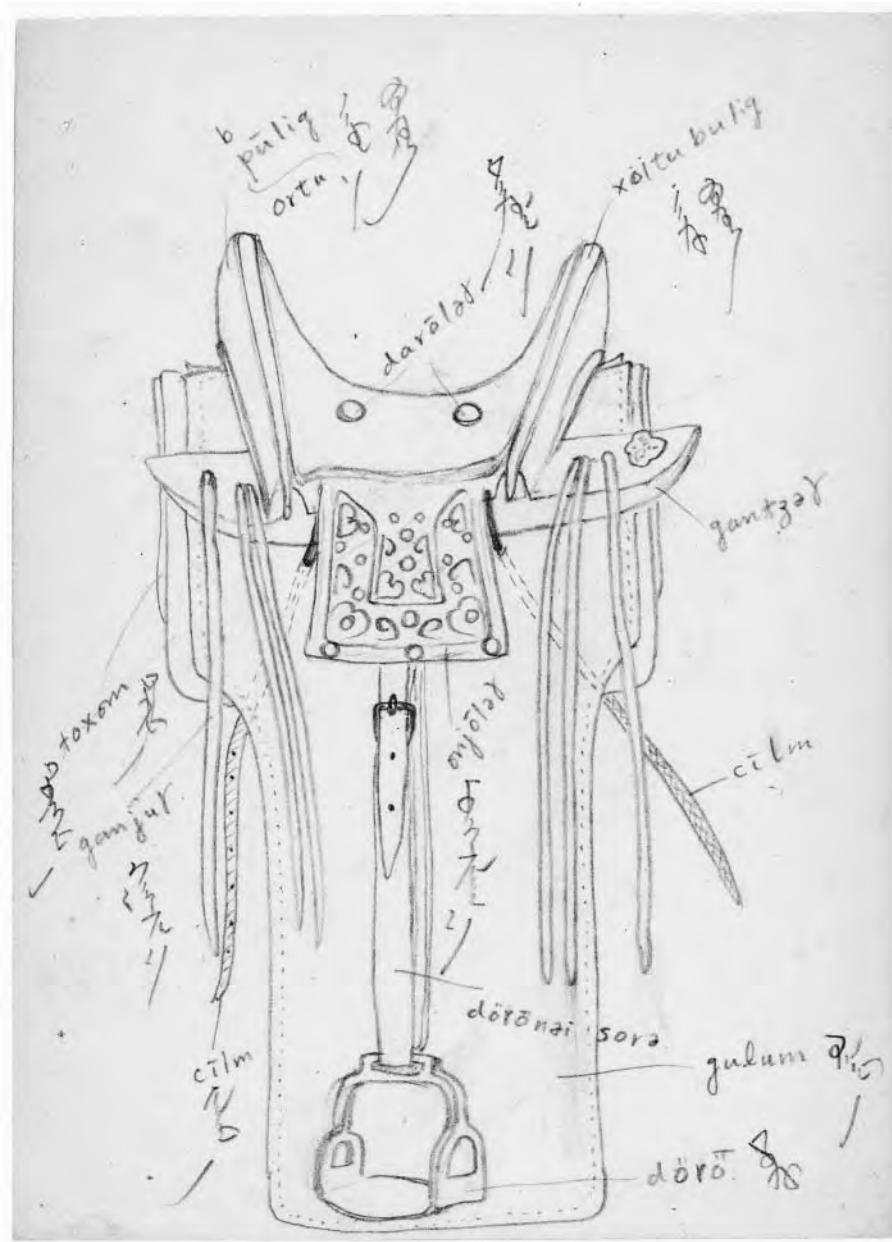
ウマおよびラクダは、乗用に供する。ただし、いずれの場合も、種オスが乗用にされることはない。またオンゴン・モリ（神馬）とよばれるものがあるが、これはオボ神にささげられたものである。これにのることもない。

騎乗用のウマには、まれに側対歩（片側の前後両足を同時に着地するはしりかた）のものがいる。これはジョロー・モリとよばれて、たいへん珍重される。

ラクダはすべて側対歩である。

モンゴルのウマは、トロット（速歩）ならながい距離をかけることができるが、ギャロップ（襲歩）では長つづきしない。

80. 鞍



80. 鞍

鞍エメールの本体は木製であるが、皮およびフェルトをもちいて複雑な構造になっている（図80）。各部位の名称もこまかくわかっている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』601ページ



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ



個人宅に置かれているもの。

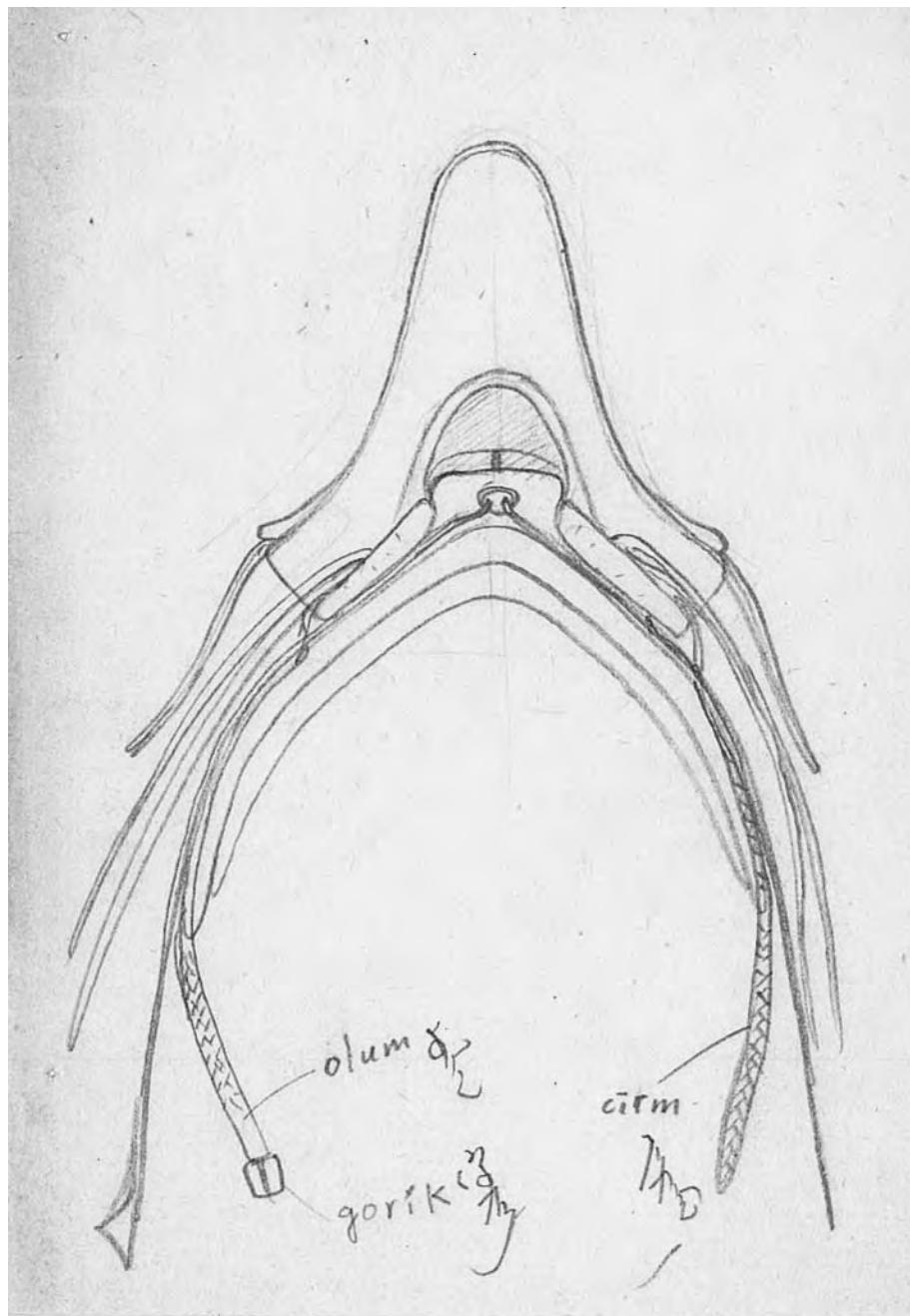
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー
撮影者：小長谷有紀



店先で売られているもの。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地
撮影者：小長谷有紀

81-1. 腹帶



81-1. 腹帶

モンゴルの鞍の特徴として、腹帶が前後に2本ある（図81）。2本それぞれ左右にわかっている。ウマの右脇になるほうは留め金がついていて、左脇のほうは穴があけてある。前者はオロンとよばれ、後者はジルムとよばれる。また、前者のうち留め金の部分はゴリクという。この腹帶をしっかりとしめておかないと、鞍がぐらついて落馬する。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』601ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」では左右逆転していたので改稿した。

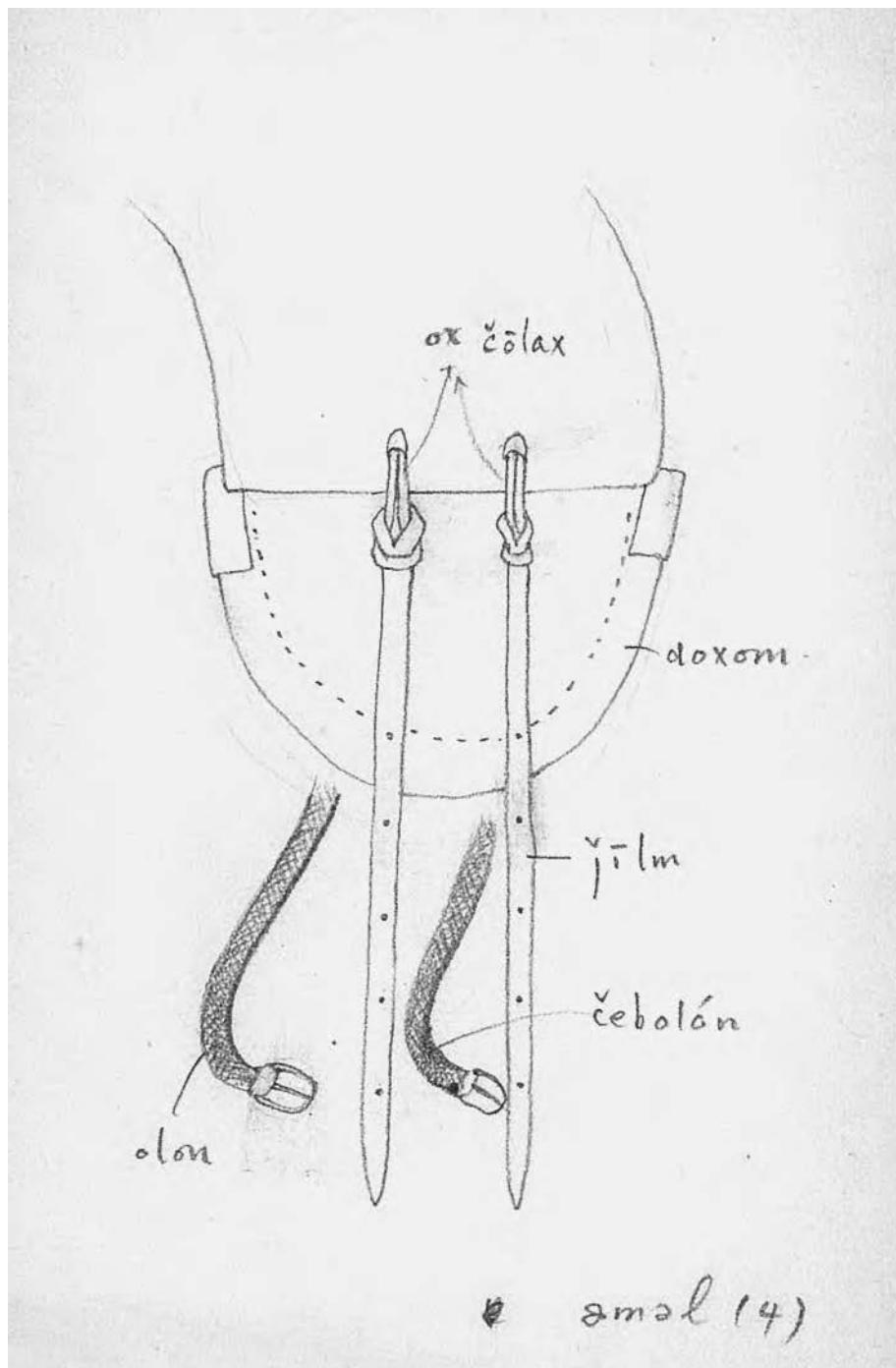


撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：ナランゲル

81-2. 腹帶



81-2. 腹帶

- 注1 左右の腹帶のうち、留め金のついているほうは、ウマの尾をよりあわせたひもをあんでつくるのに対して、留め金のついていないほうが革ひもであることが、原画ではえがきわれている。
- 注2 2本の腹帶のうしろをツアビ（したばらの意）・オロンというかきこみもある。
- 注3 フィールド・ノート0（ゼロ）番の22-28ページにも「図譜」と同様の馬具類のスケッチがある。また、フィールド・ノート1番の30-31ページにはウマの身体部位に関する用語が34個、スケッチとともにしるされている。つづいて35ページまで、ウシ、ヒツジ、ラクダ、ヤギの身体部位名称がラフ・スケッチとともにしるされている。

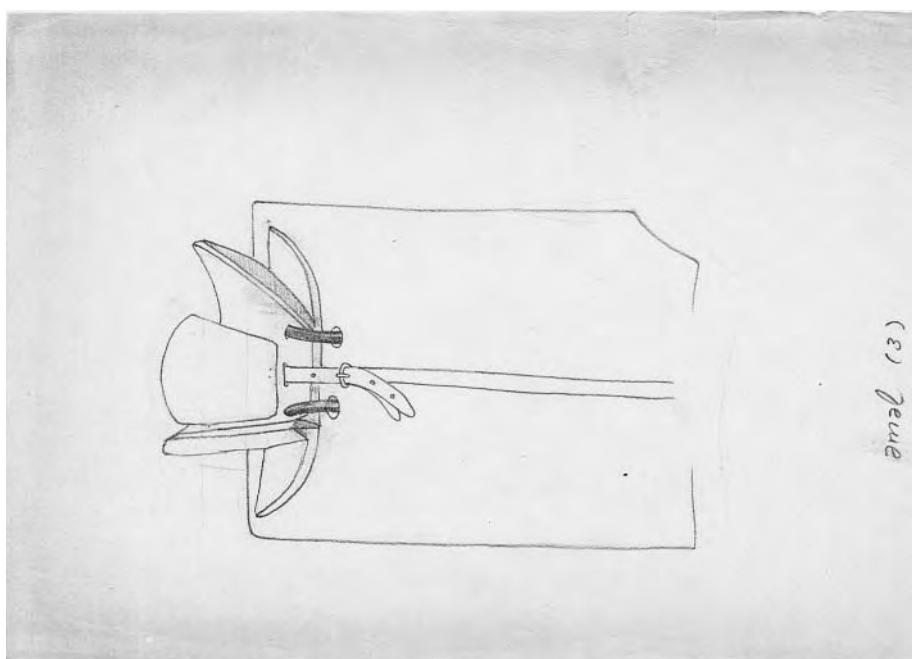
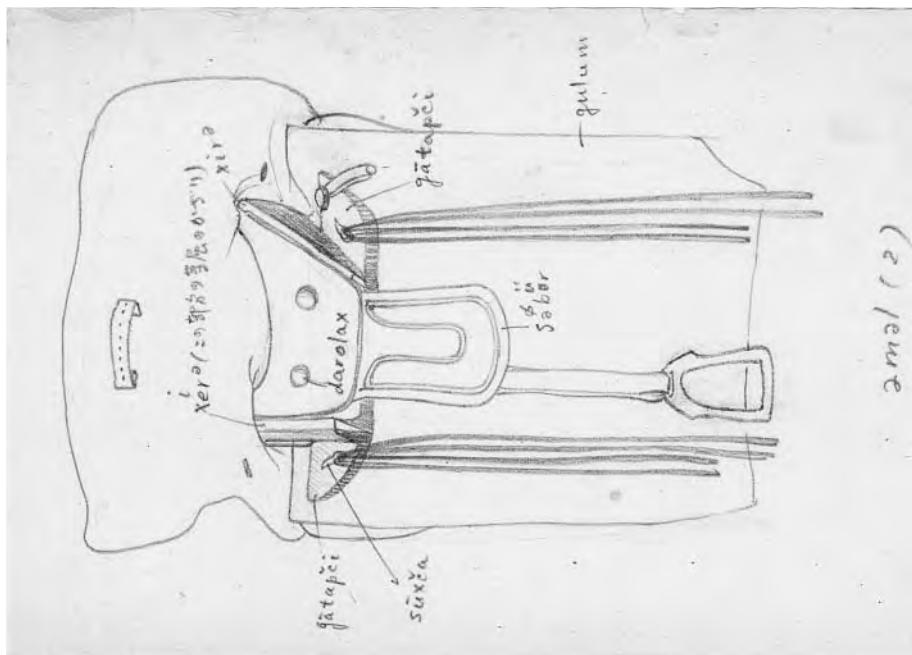


撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：ナランゲル

82. 鑼



82. 鐙

あぶみ

鐙はドゥルーとよばれ、鉄製である（図82）。鐙のながさは左右不相称である。左がみじかく、右がながい。鞍のうえでは左足をまげて、右足をつっぱり、右の尻に体重をかけ、上半身はななめ右をむいている。左手に手綱をもち、右手に鞭をもつ。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』601, 604ページ



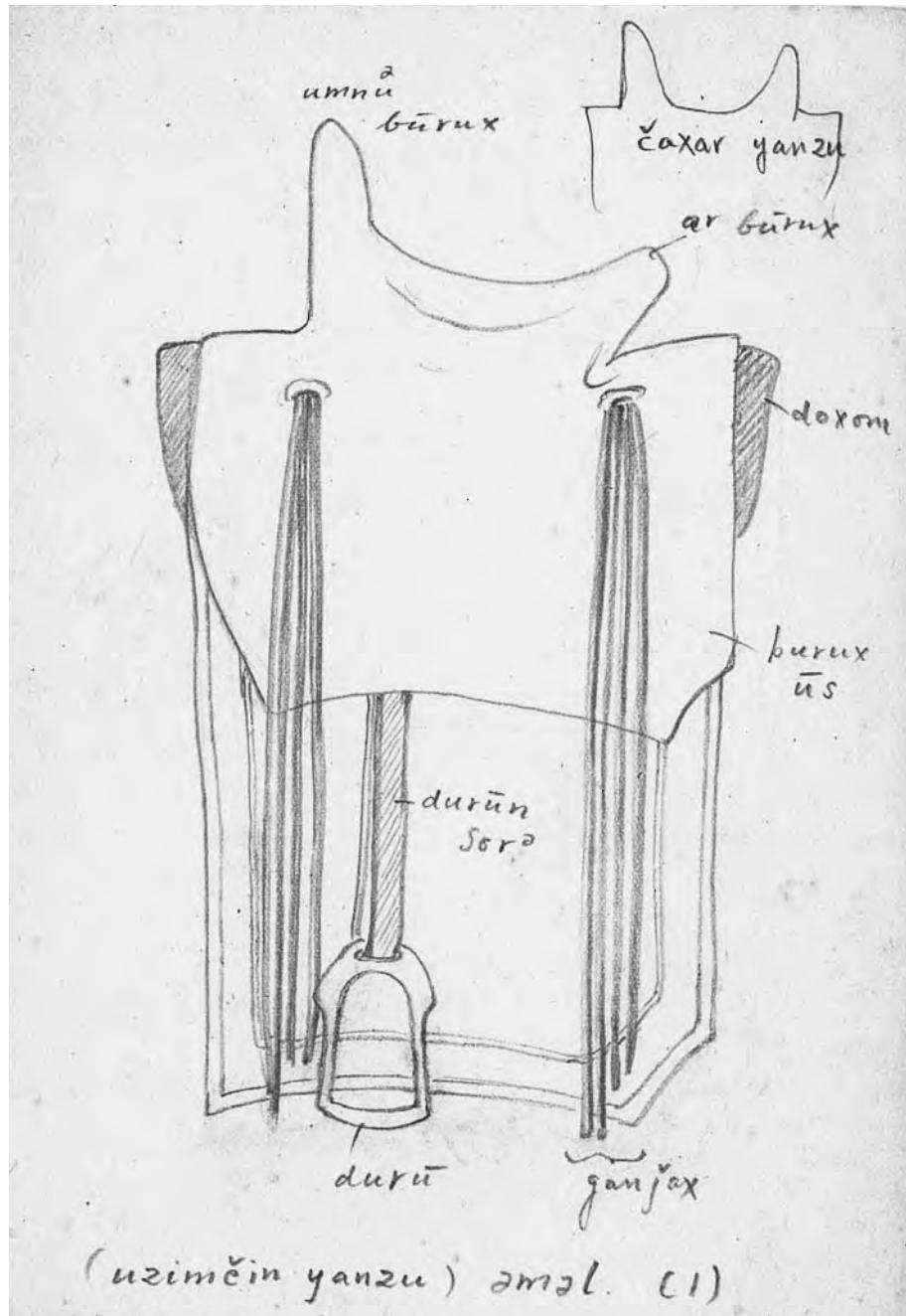
民族雑貨店のショーケース。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地

撮影者：堀田あゆみ

83. 鞍のひも



83. 鞍のひも

鞍には、ガンジャガとよばれる革ひもが前後左右の4ヵ所についている（図83）。これは旅行のときに携帯品をむすびつけるのにもちいる。

オボまつりには競馬がおこなわれる。騎手は少年少女たちであって、この場合はすべて鞍なしのはだかウマである。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』604ページ



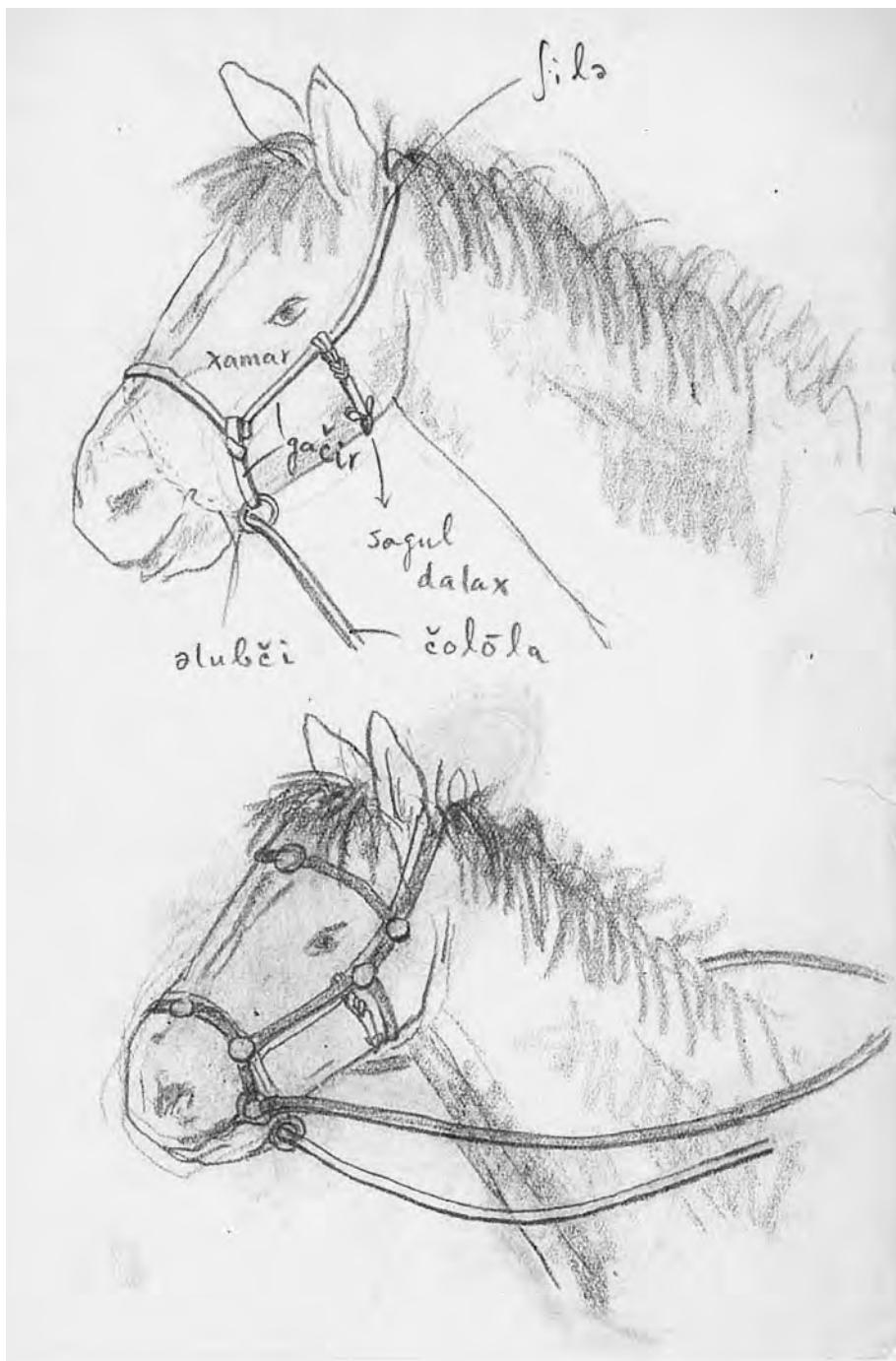
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール・ソム、アルタンエメール・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ



撮影年月：1988年7月
撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム
撮影者：小長谷有紀

オボまつりのナーダムで競馬に出場するウマたち。鞍は飾り布で、鏡はついてない。あぶみ

84. 手綱



84. 手綱

ウマの顔面には革ひも製のおもがいノクトと制御用のはみハジャールを装着する（図84）。ノクトの部分名称として、耳のうしろの部分がシル（うなじの意）、鼻の部分はハマル（鼻の意）などとよばれる。ノクトの革ひもはウマの口の左側から1本あり、ハジャールの革ひもはウマの口からでループになっているから2本あり、合計3本の手綱を左手ににぎることになる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』604, 606ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」では手綱となっていたが、ノクトの訛語としてはおもがいのほうが正確であると判断し、おもがいと改稿した。なお、おもがいにつながる革ひも製の手綱はツォルボールといい、はみにつながる革ひも製の手綱はジョローという。

注2 はみの、ウマの口の中にいれる部分「はみみ」はアムガイといい、手綱とつなぐ輪の部分「はみわ」はズーザイという。



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東ウジムチン旗フレートノール
・ソム、アルタンエメール・ガ
チャ一

撮影者：小長谷有紀



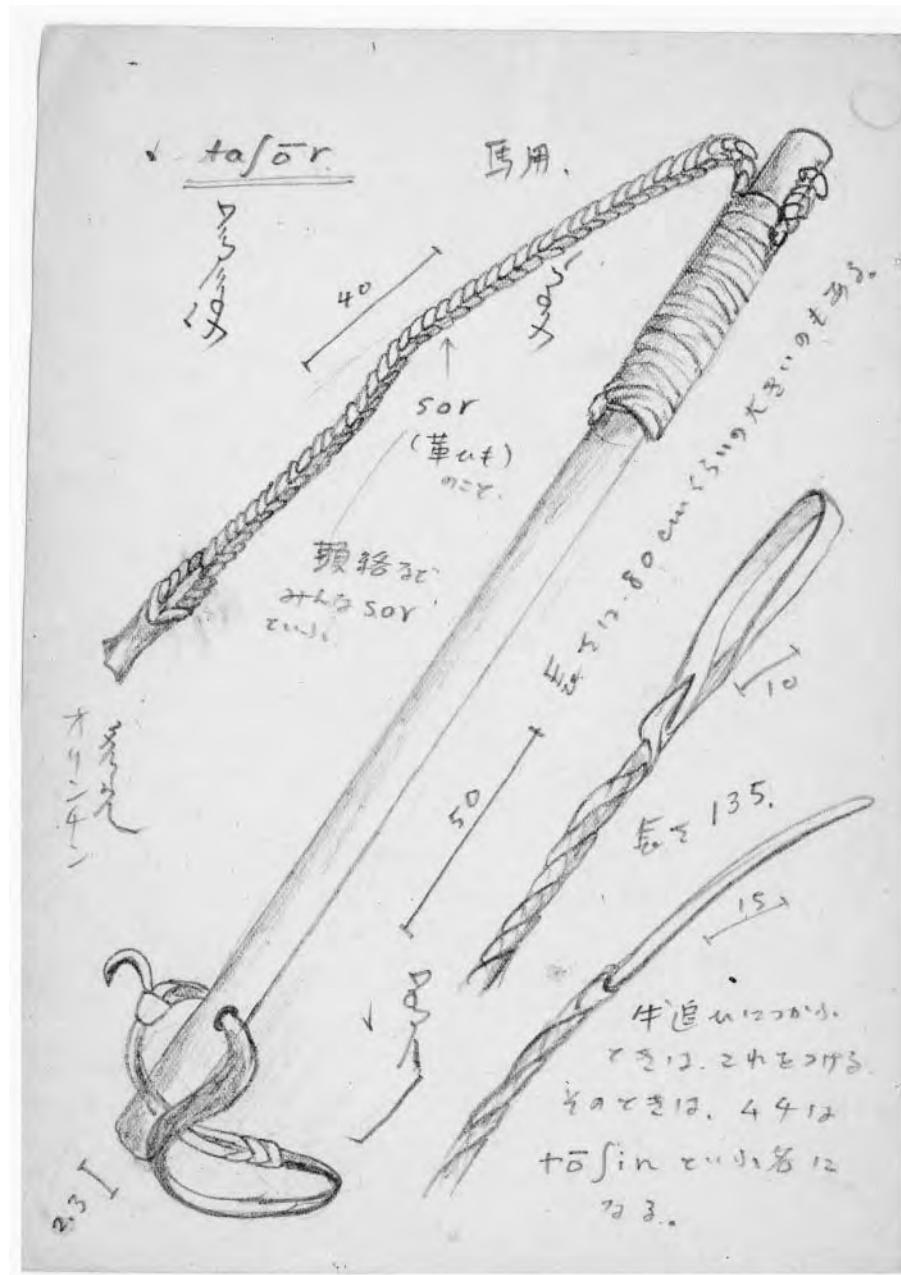
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャ一

撮影者：小長谷有紀

はみのついた制御用だけが装着されており、おもがいが省略されている。遠出しないときや、競馬のときは、このような簡便な方法をとる。乗るときは、ジョローの先をウマの右ほほのズーザイにつなぐ。

85. 鞭



85. 鞭

鞭はタショールという（図85）。木製の柄に革ひもがついている。その革ひもの先はループになっていて、ながい革ひもをついたすことができる。乗馬の場合はふつうみじかいほうをつかう。乗馬のまま畜群をおうときに、革ひもをなぐくする。柄の反対側には、手をとおすように革ひもの輪がついている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』606ページ

注1 つなぎたしたときの名まえは辞書には載っていないが、革ひもの部分が長い鞭のことをトーシンということが確認された。今ではほとんど用いられない単語であるという。

注2 さまざまな用具にもちいる革ひものことをソルということがしるされている。この革ひものつくり方については、フィールド・ノート12番の10-11ページに、ラフ・スケッチとともにしるされている。内モンゴル民族大学の秋喜教授の調査結果によれば、グルムルgürümül・ソルもしくはハプトガイqabtgai・ソルという。平らな編みかたを意味している。

注3 柄のことはプレーbüri-eといい、輪のことはセゲルデレグsegelderegという。



ウシをほふったら、皮の毛をそぎおとし、ながいひも状にさいたあと、このように重石をつかいながら、何度もよりをかけてなめす。

撮影年月：1997年7月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ハシャート・ソム

撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：堀田あゆみ

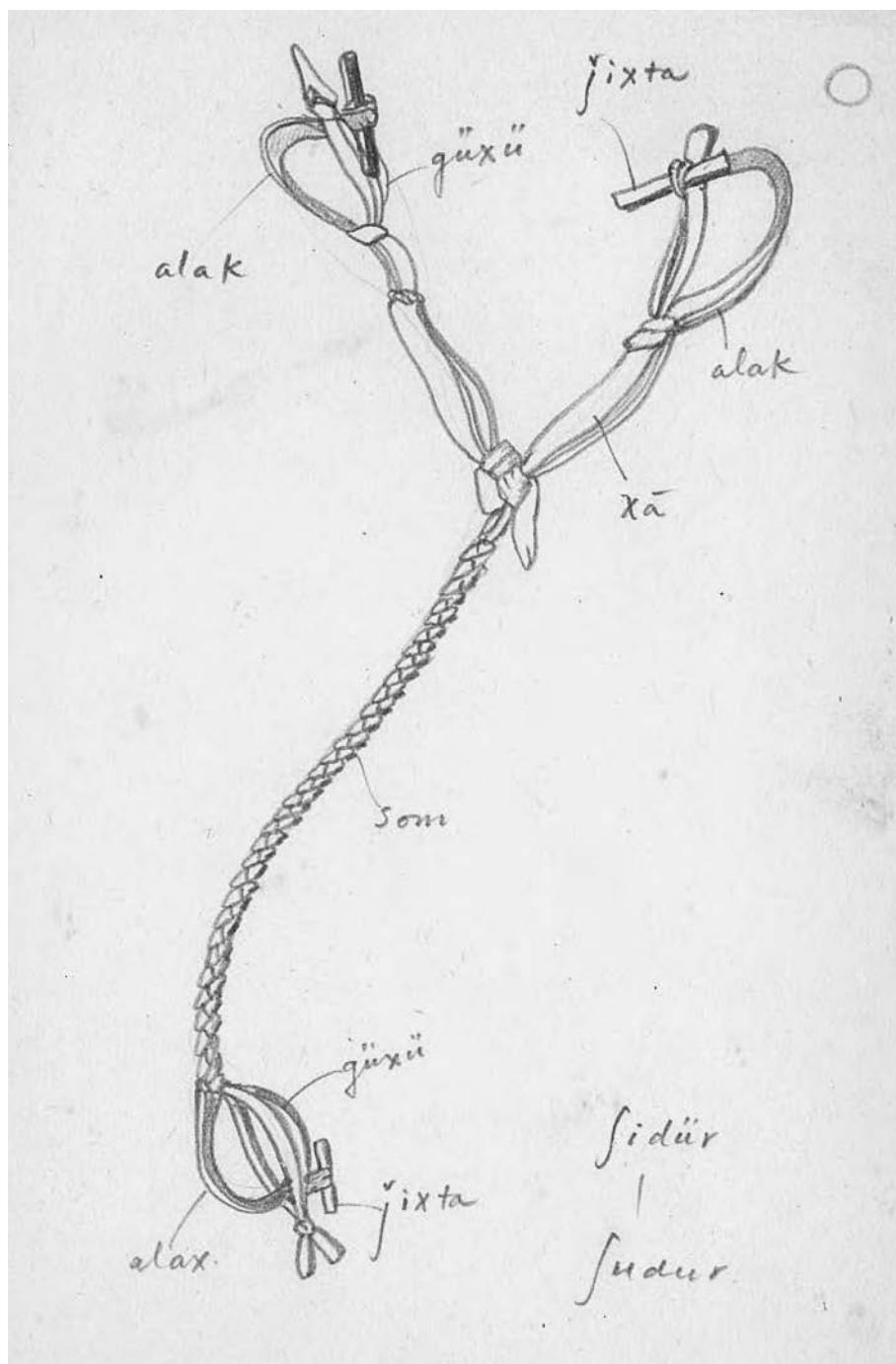


撮影年月：2012年5月

撮影場所：通遼市、ホルチン博物館

撮影者：堀田あゆみ

86. 足かせ



86. 足かせ

戸外で小休止するときに、しばらくウマを放牧するが、とおくへいてしまわないよう、足かせをはめる（図86）。チャハル方言ではシュドルという。シュドルは革ひも製で、前肢2本と後肢1本をしばる。こうしておけば、ウマははしることはできないから、とおくへはいかない。まえ2本の部分はハとよばれ、うしろ1本はソムとよばれる。足をはめる輪の部分はアラクとよび、フック式でとめる。とめるための木片のついたほうをジフタ、穴のあるほうをグフとよぶ。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』606ページ

注1 アラクの部分は、ウマの足をいためないように、やわらかい革を二重にしたものがつかわれる、という。

注2 フィールド・ノート0番の27ページにも同様のスケッチがある。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：堀田あゆみ

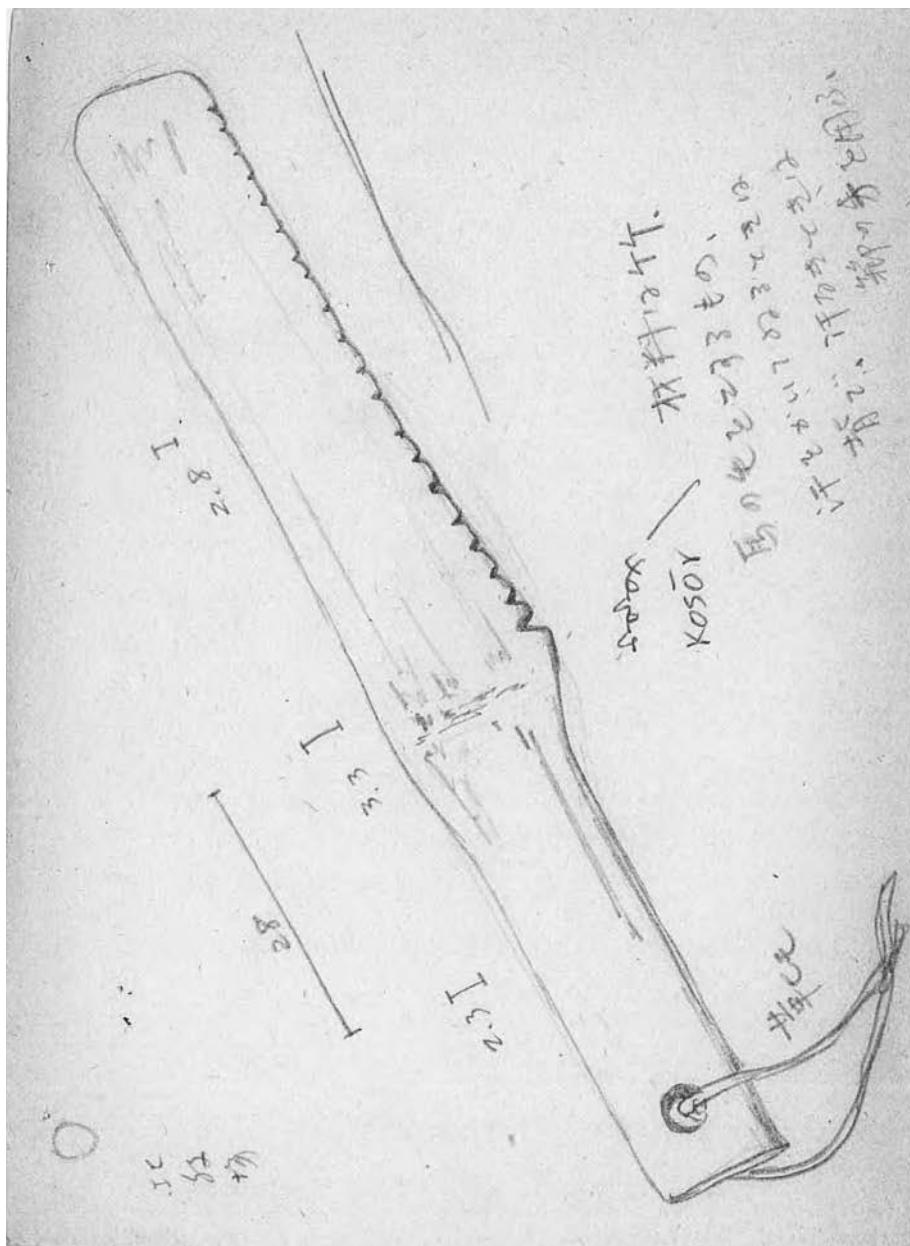
革製のものは倉庫にしまわれている。



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：小長谷有紀

布製のものが使われている。

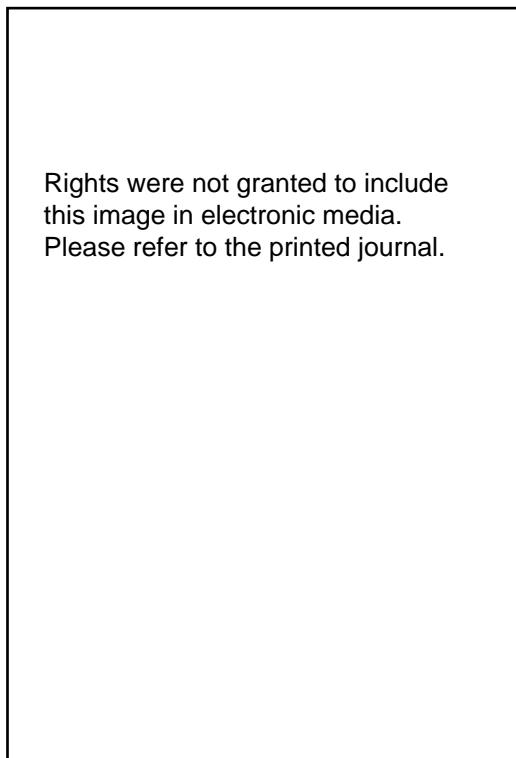
87. 汗とり



87. 汗とり

乗用のウマはじつによく手いれされている。労働のあと、ウマの全身の汗をこそぎおとすための竹べらがある（図87）。ホソールという。柄の部分の幅2.3cm、櫛の幅3.3cm、ヘラの幅2.8cm。たいていの家にあり、ウマにのみもちいる。ギザギザの切れ目がついている櫛の側と、ついていない背の側とがある。汗を大量にかいでいるときは背をもちい、汗をあまりかいでいないときは櫛のほうをもちいる。

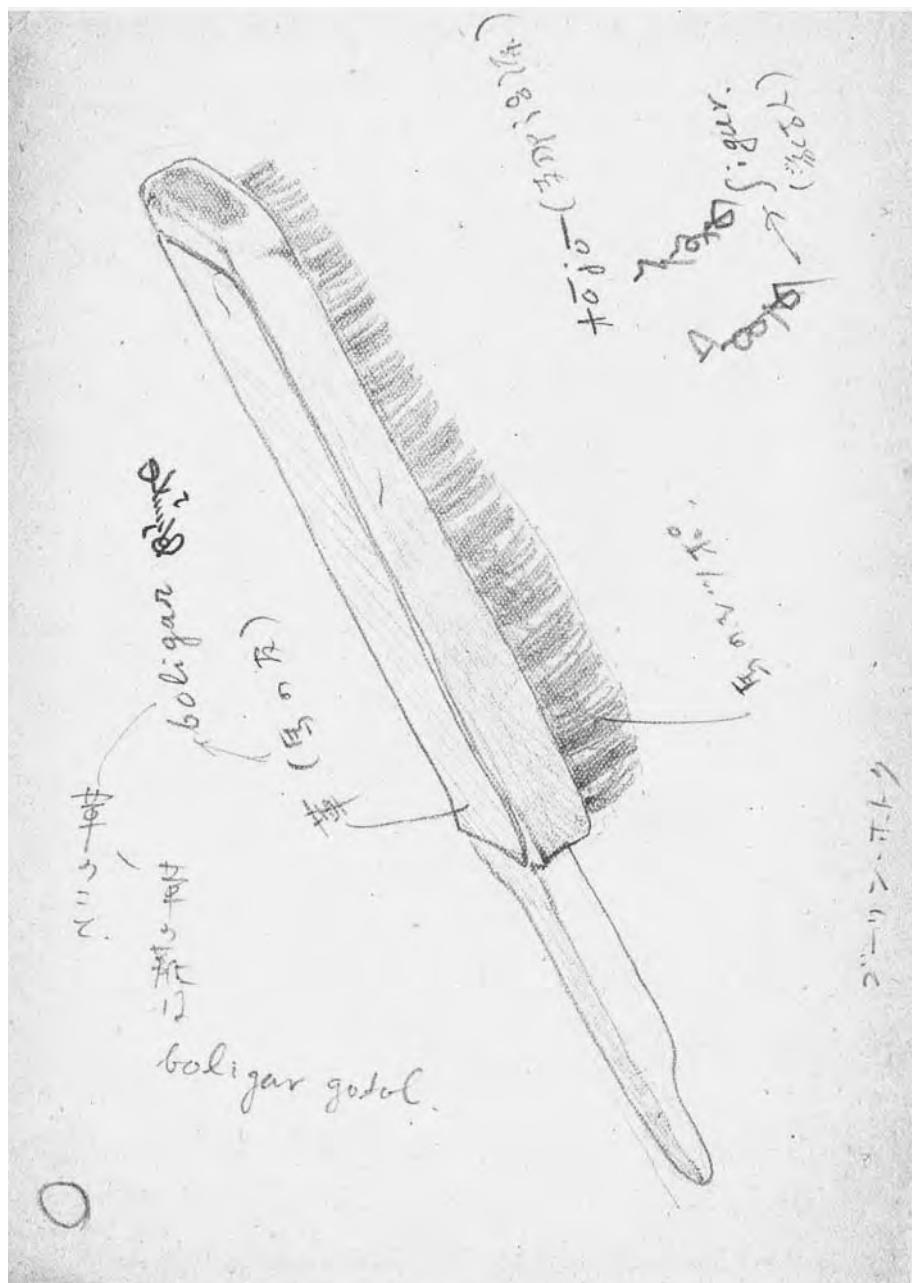
出典 著作集第2巻『モンゴル研究』607ページ



Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：ナランゲレル

88. ウマ用のブラシ



88. ウマ用のブラシ

このほか、ウマの尾の毛でつくったブラシをもっているものもいる（図88）。柄はニレ材。シュワースやトージョーとよぶ。いずれも漢語であろう。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』607ページ

注1 もとの漢語についてはモンゴル語索引を参照のこと。

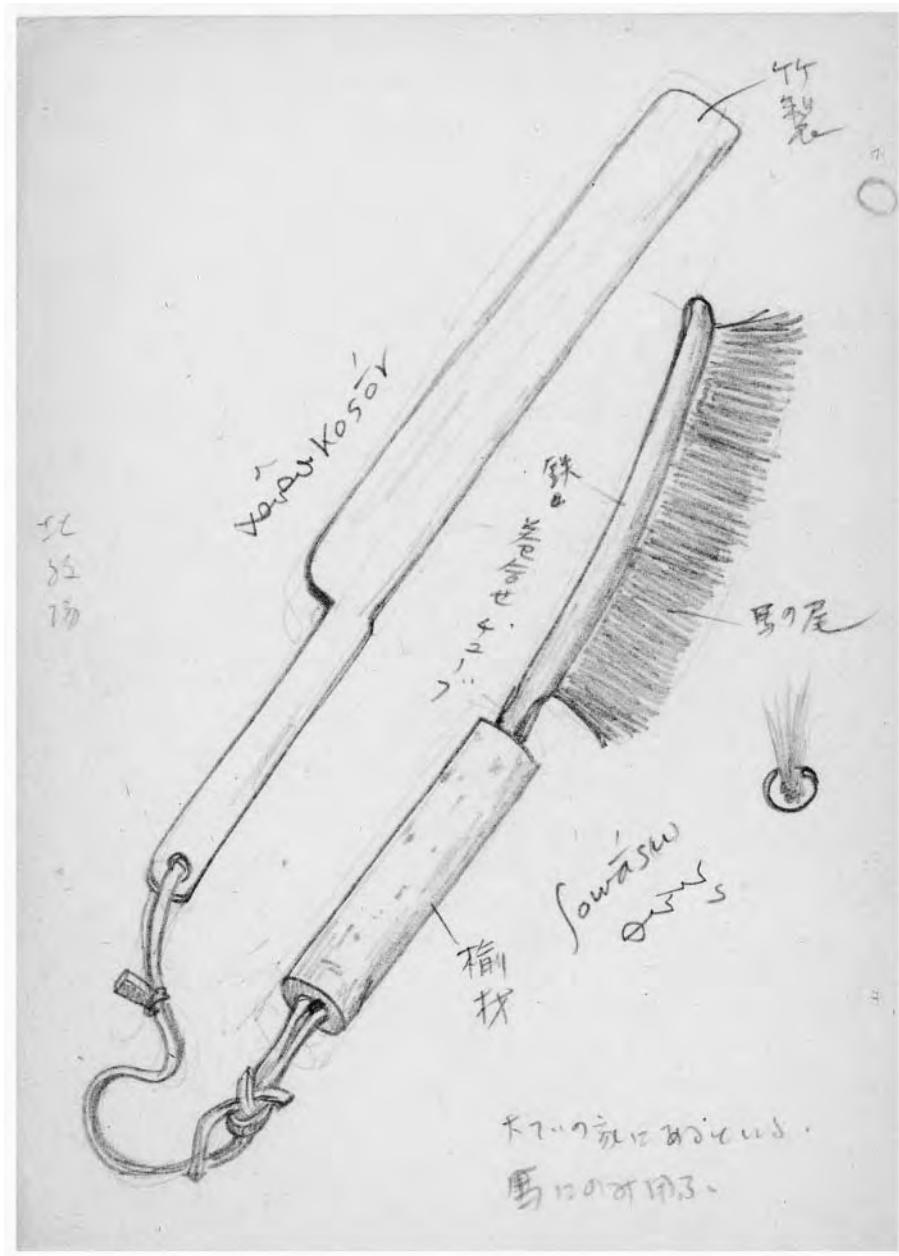


撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

89. ヘラとブラシのセット



89. ヘラとブラシのセット

ヘラとブラシをセットにしていることもある（図89）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』607-608ページ

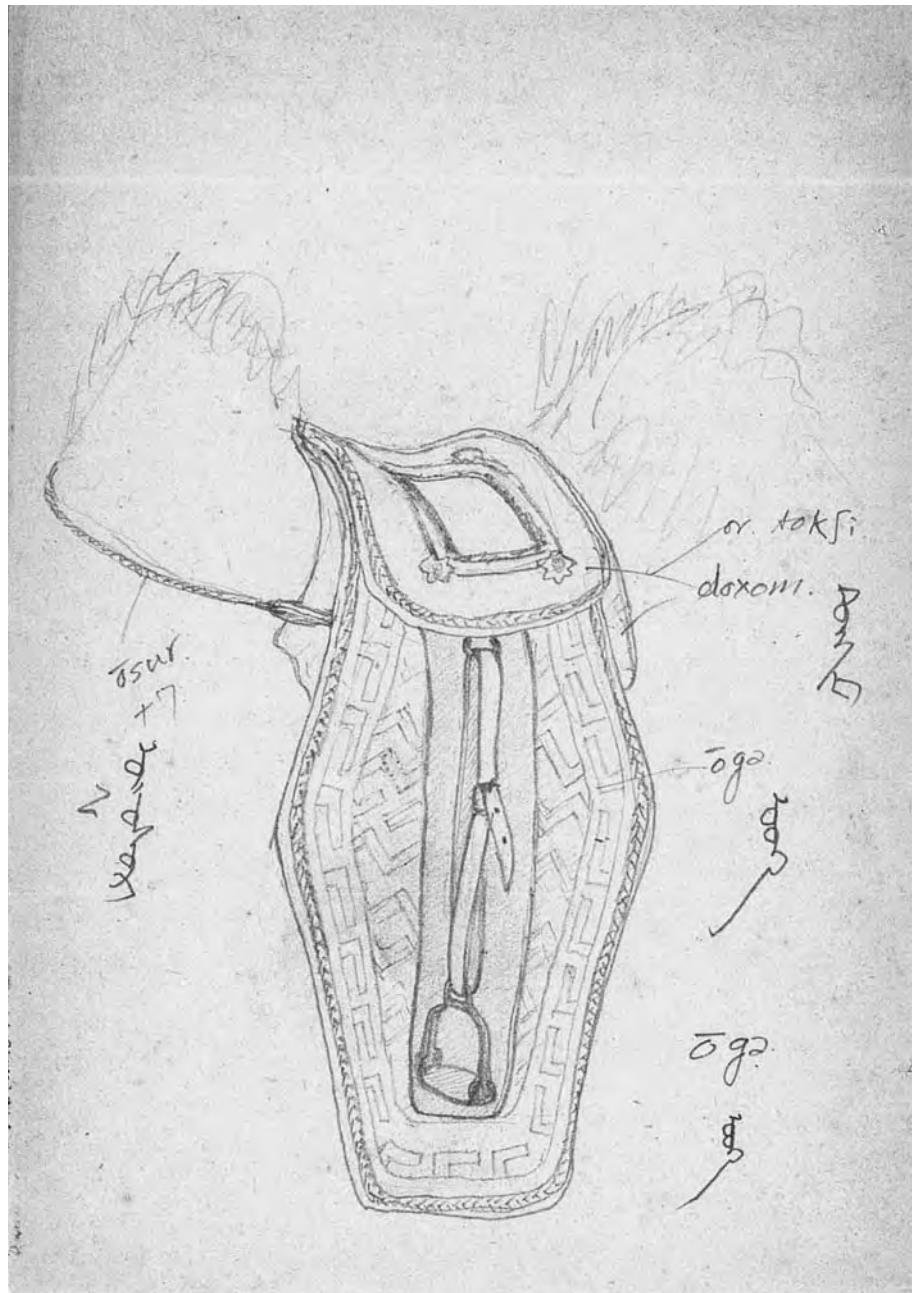


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

90. ラクダにのる



90. ラクダにのる

ラクダにはとくべつの鞍がある（図90）。ほとんどがフェルトでできている。オーゲとかドホムとかよばれるが、ドホムは下部の鞍敷の部分で、オーゲは上部のおおいの部分をさす。これをふたつのコブのあいだにかけて、そのうえに騎乗する。

ラクダには、はみはない。鼻にとおした木片にながい革ひもがついていて、乗り手はその端をにぎっている。ラクダのはな木については別項「ラクダのはな木」にしるした。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』608ページ

注1 ラクダ専用の鞍は、木製の部分がなく、鞍襯（あんじょく）だけからなる。専門用語としてトホシとよばれる。この名前も原画にしるされている。

注2 フィールド・ノート4番の1ページには、ラクダの頭部を横からみた図解説明がある。また、フィールド・ノート13番の65ページおよび14番の3ページや19ページ、12月23日の記録のなかに、「ラクダのはな木」に関する草稿について、ラクダの鞍について、東スニト型とハルハ型の図解説明がある。

注3 「ラクダのはな木」にもちいられた図の原画も次ページ以下にかかげる。これらについては、論文用にみずから清書したとおもわれる製図も4枚のこされている。

注4 「ウシのくちがせ」にもちいられた図の原画もつづけて次ページ以下にかかげる。



撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：ナランゲレル



個人の倉庫の中に放置されている。

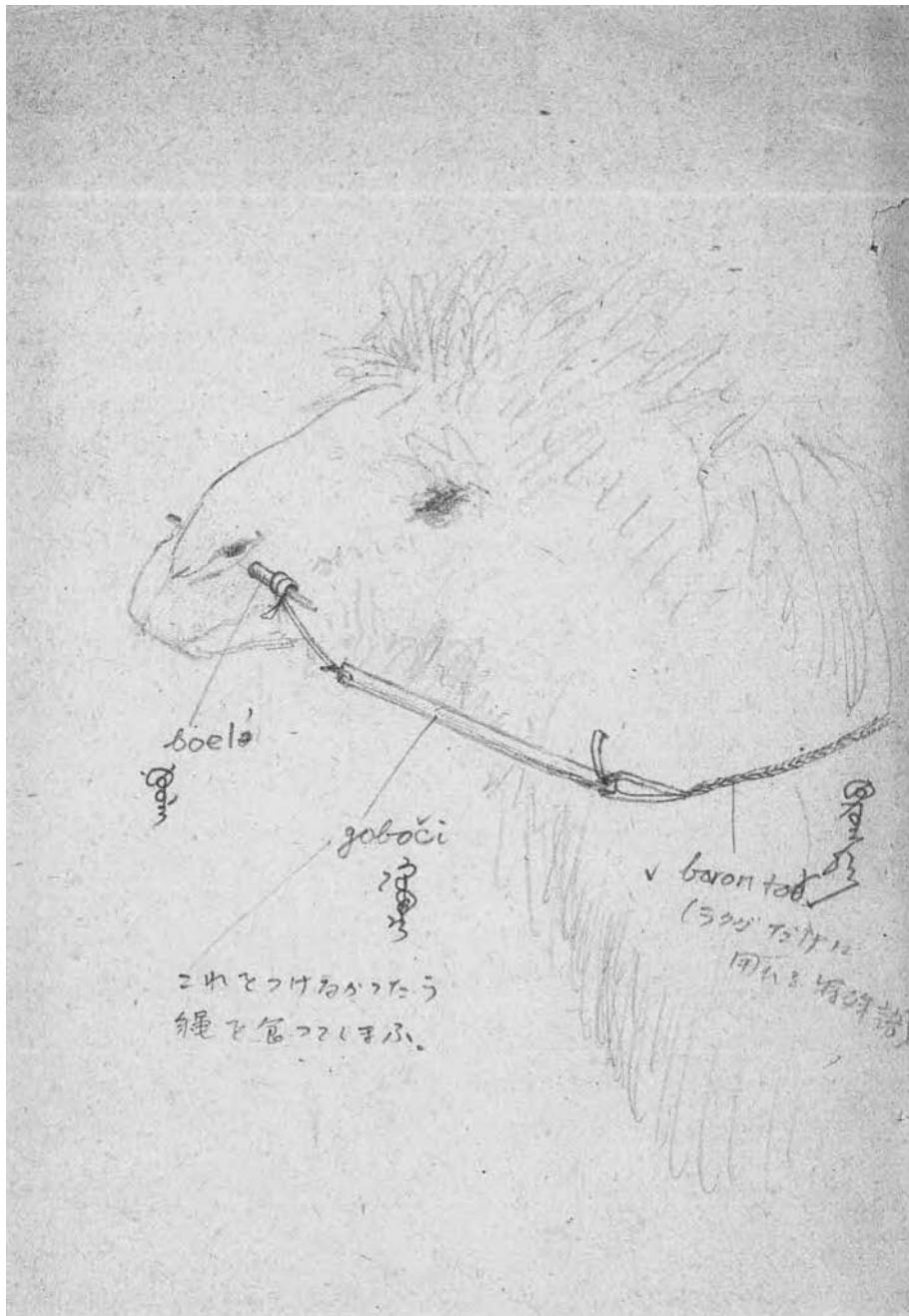
撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、

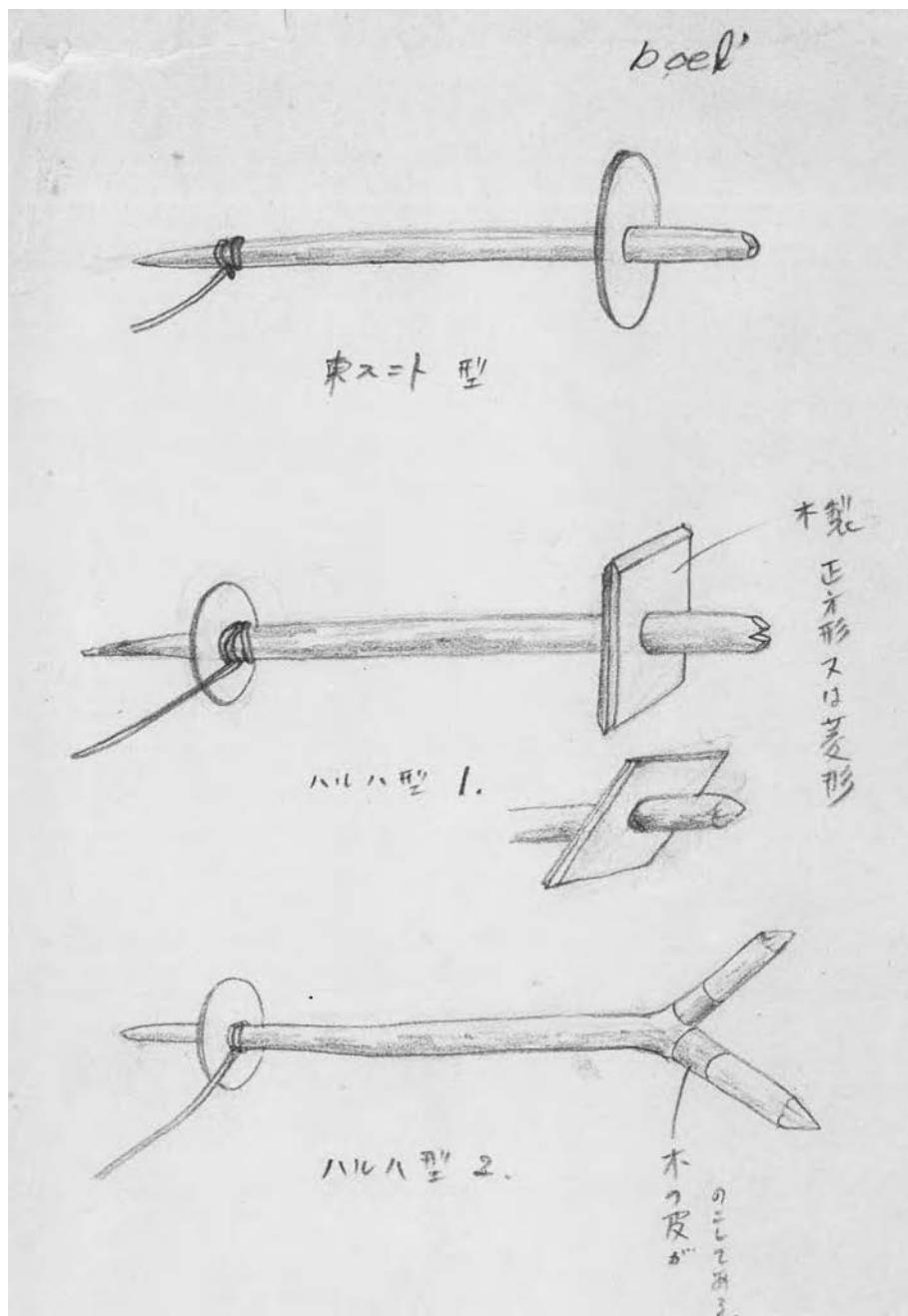
バヤンタル・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

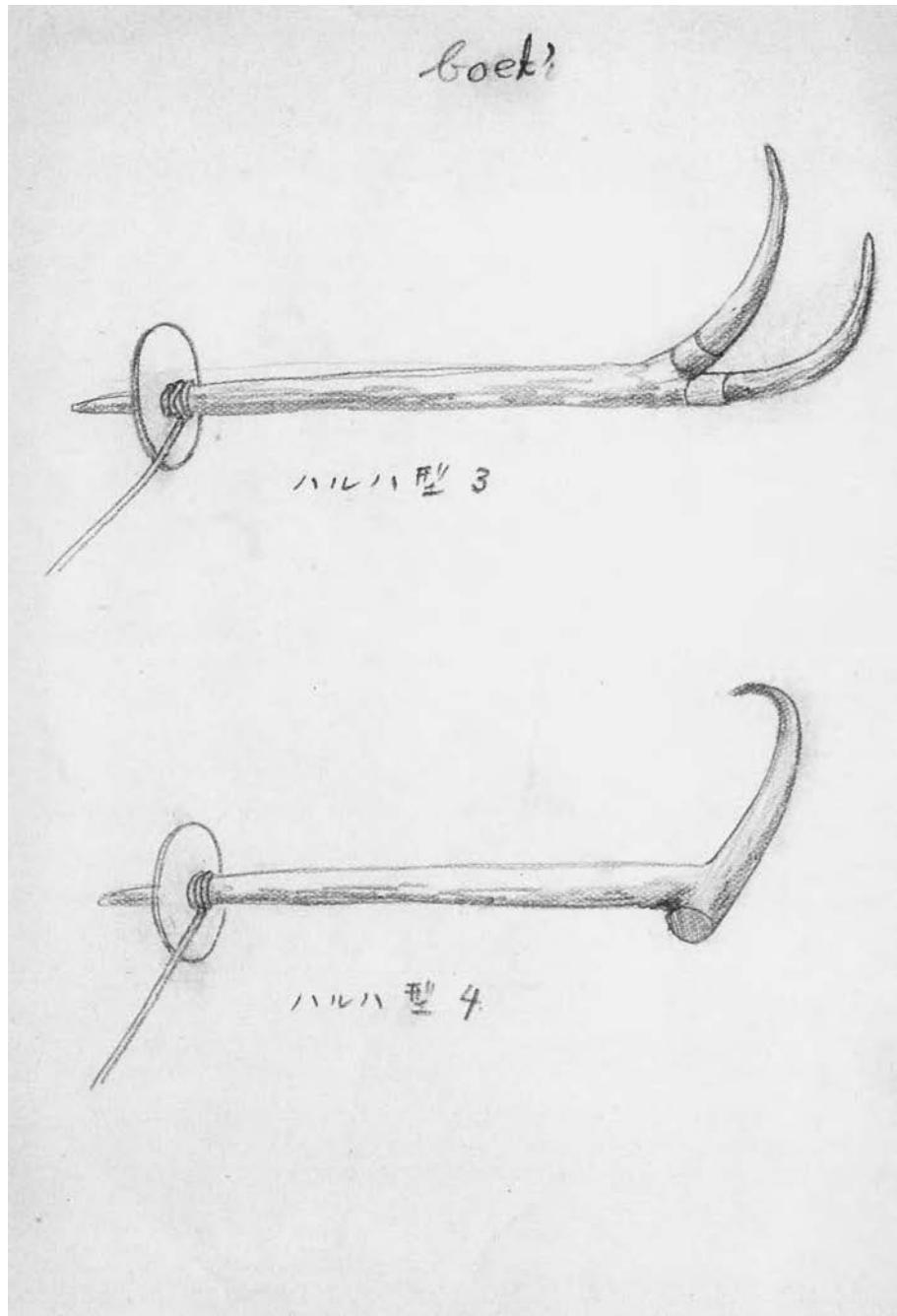
補22. ラクダのはな木



補23. ラクダのはな木



補24. ラクダのはな木



補22. 補23. 補24. ラクダのはな木

ラクダは、べつにあらい動物というわけではないけれど、なかなか気むずかしいところがあるって、ウマなどにくらべると、よほどあつかいにくいものである。それを、なんとかうまく、いうことをきかすことのできるのは、ひとえにこのはな木のつけてあるせいらしい。それほど、こここのところは、ラクダには急所らしいのである。たたせたりすわらせたり、右へむけるのも左へゆかすのも、このはな木のうごかしかたひとつである。はな木には、もちろん、手綱がむすびつけられている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』550ページ

注1 補22～24の説明文の初出は以下のとおり。

梅棹忠夫1946「ラクダのはな木」『学海』第3巻第6号、22-25ページ所収。

注2 フィールド・ノート13番の34-35ページ、64ページ、12月23日の記録のなかに、はな木に関する図解説明と考察があり、すでに論文の草稿ができあがっている。



撮影年月：1997年8月
撮影場所：モンゴル国ドンドゴビ県
撮影者：楊海英



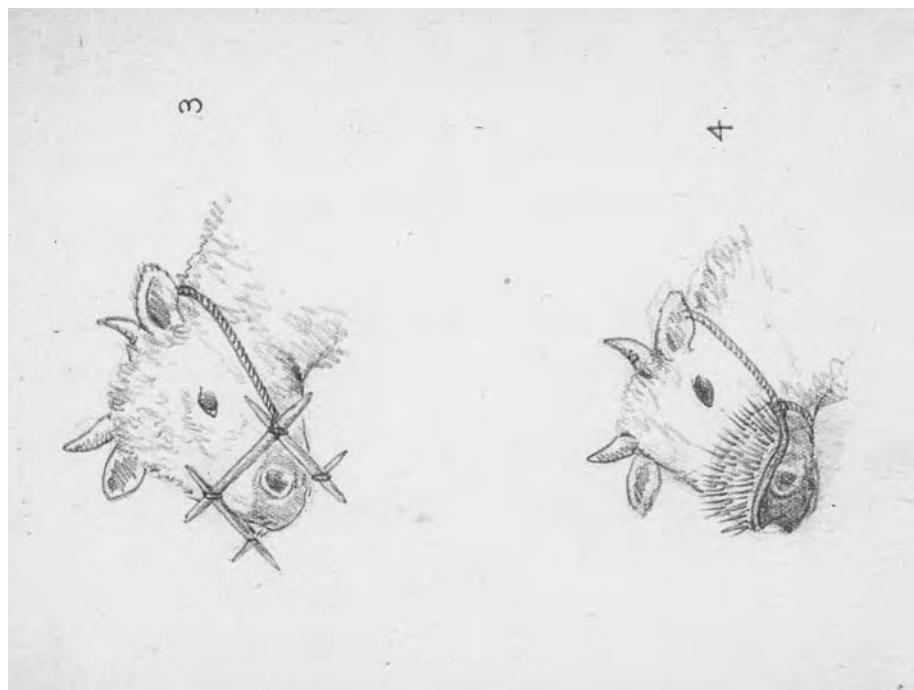
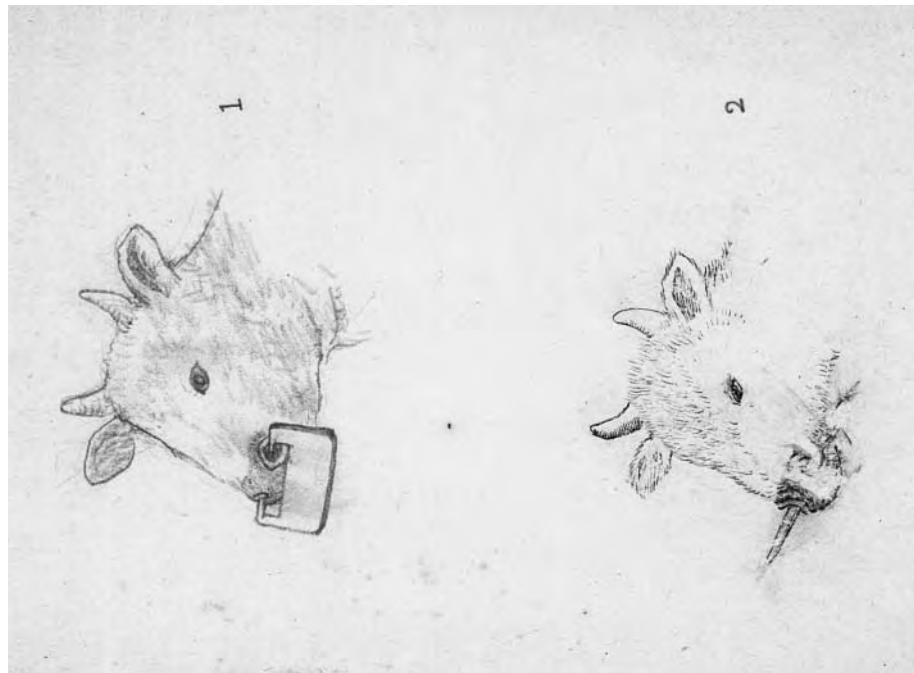
撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー
撮影者：小長谷有紀



一部がプラスチック。ハート型。

撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館
撮影者：堀田あゆみ

補25. 補26. ウシの口がせ



補25. 補26. ウシの口がせ

このユーモラスな発明品を、モンゴル人たちは、シュルクとよんでいた。

シュルクには、いくつかの種類があった。形はずいぶんちがっていたけれど、みんなおなじ名まえでよばれていた。いちばんかんたんだけれど、すこしらんぼうなのは、さきのとがった木の棒を、子ウシの鼻のあなにつきとおしただけのものである。もっとましなのは、やっぱりさきのとがった木の棒を4本、四角い杵の形にくみあわせて、子ウシの鼻づらにかませたものがあった。このようなシュルクをつけられた子ウシが、母ウシの乳房にちかづくと、とがった木のさきが、乳房にちくりとあたるので、母ウシのほうがいやがって、どうしても乳をのませようとしない、という仕くみである。この仕くみがいちばん徹底しているのは、ハリネズミの皮でできていた。フェルトのうえにハリネズミの皮をぬいつけたものを、子ウシは、鼻の頭にしばりつけられるのだった。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』555-556ページ。

注1 補25~26の説明文の初出は以下のとおり。

うめさお・ただお 1946「ウシのくちがせ」『学海』第4巻第3号、28-31ページ所収。

注2 フィールド・ノート12番の43-44ページ、12月17日の記録のなかに、図解説明とともに考察がしるされており、すでに論文の草稿となっている。



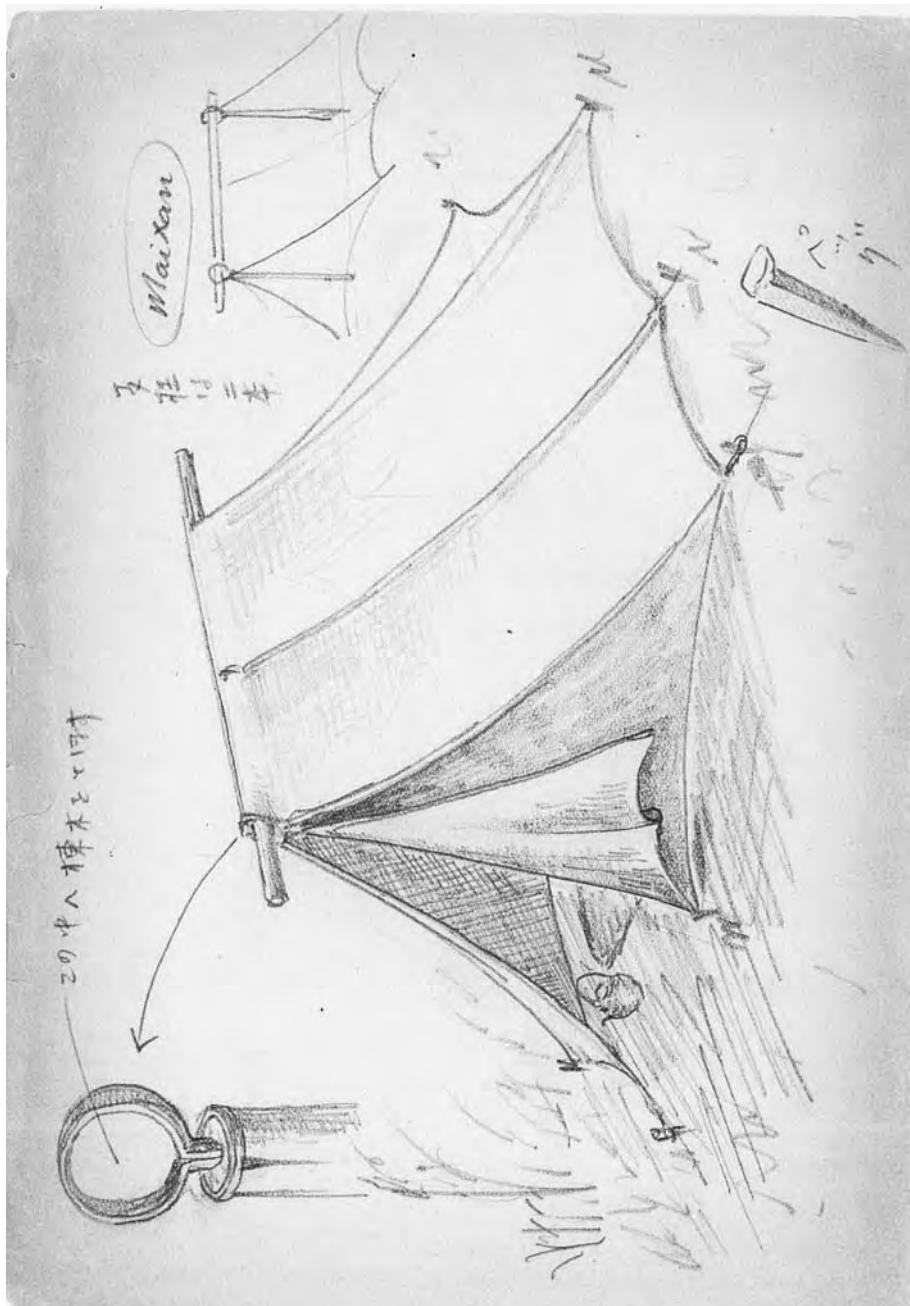
撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、
バヤンタル・ガチャー
撮影者：小長谷有紀

プラスチック製の商品がつかわれている。

91. 旅行



91. 旅行

長途の旅行にでる場合のために、天幕がある（図91）。屋根型のもので、マイハンという。これは、富裕な家にしかない。マイハンは牛車またはラクダにつんでいく。マイハンは青色で、しばしばうつくしい雲型模様がほどこされている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』608ページ



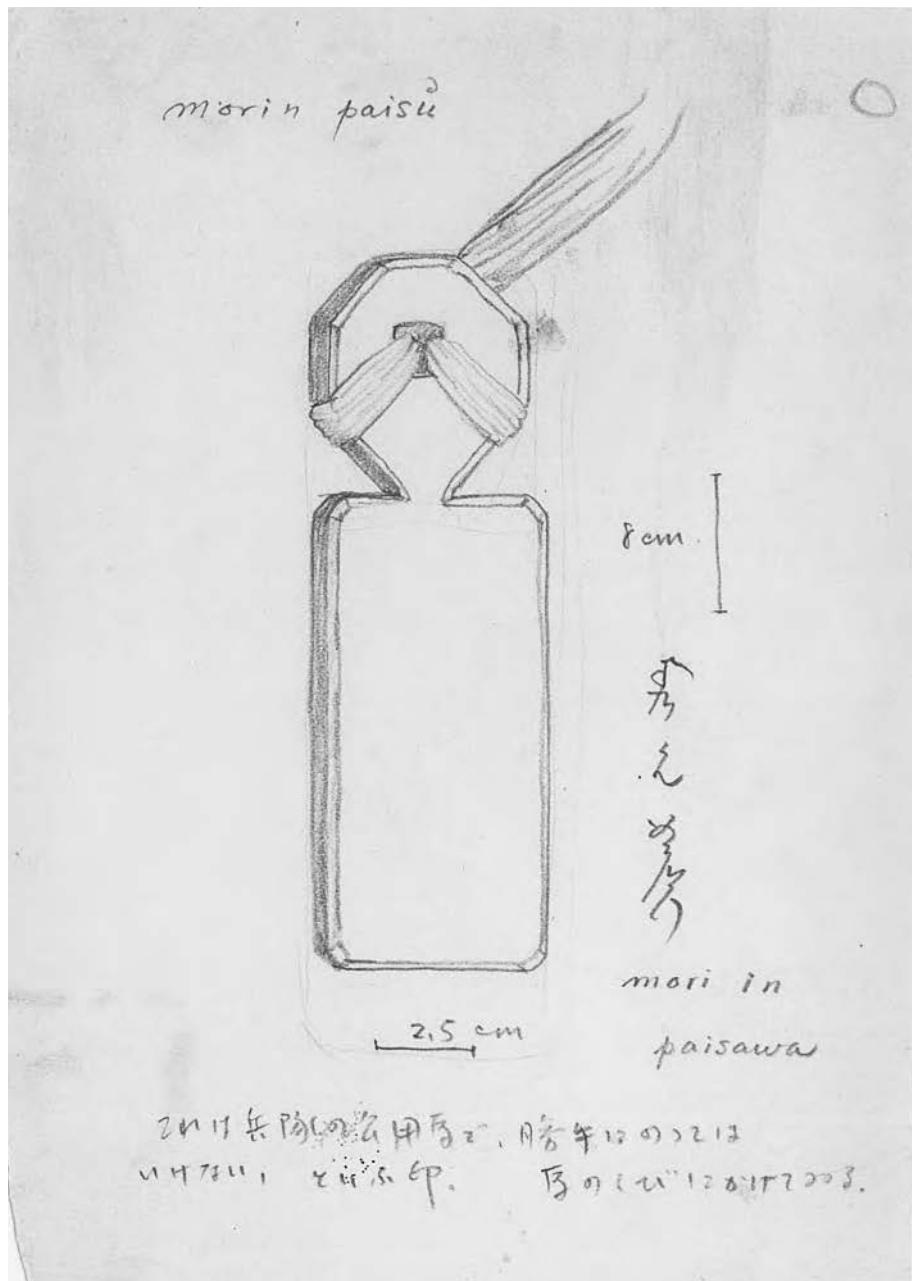
首都までウシの群れを移動させる人たち。テントの入り口付近におかれている袋のなかには馬乳酒がはいっている。

撮影年月：1997年7月

撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ハシャート・ソム

撮影者：小長谷有紀

92. 旅行証明



92. 旅行証明

公用の旅行者は、バイサないしバイスとよばれる木片をウマの首にかけている（図92）。 $2.5 \times 8 \text{ cm}$ 。旗公署や盟公署の命令の伝達者である。バイサは漢語の牌子からきたものであろう。兵隊や公用のウマであることを意味し、かってにのってはいけないという印になる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』608ページ

注1 フィールド・ノート7番の53ページ、11月12日の記録のなかに、おなじ内容がしるされている。



競馬のゴール付近に、着順の数字のかいた札をもって騎馬した人たちがいて、それぞれ担当のウマに併走して、札を手渡し、着順を確認する。この札のことをバイスとよんでいる。

撮影年月：1988年6月

撮影場所：シリンホト市

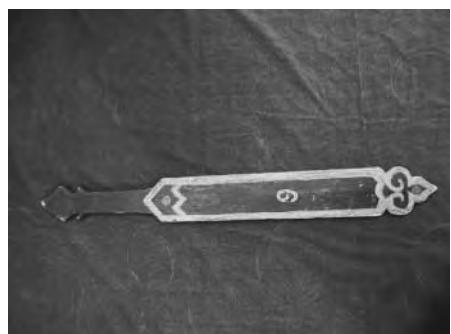
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル



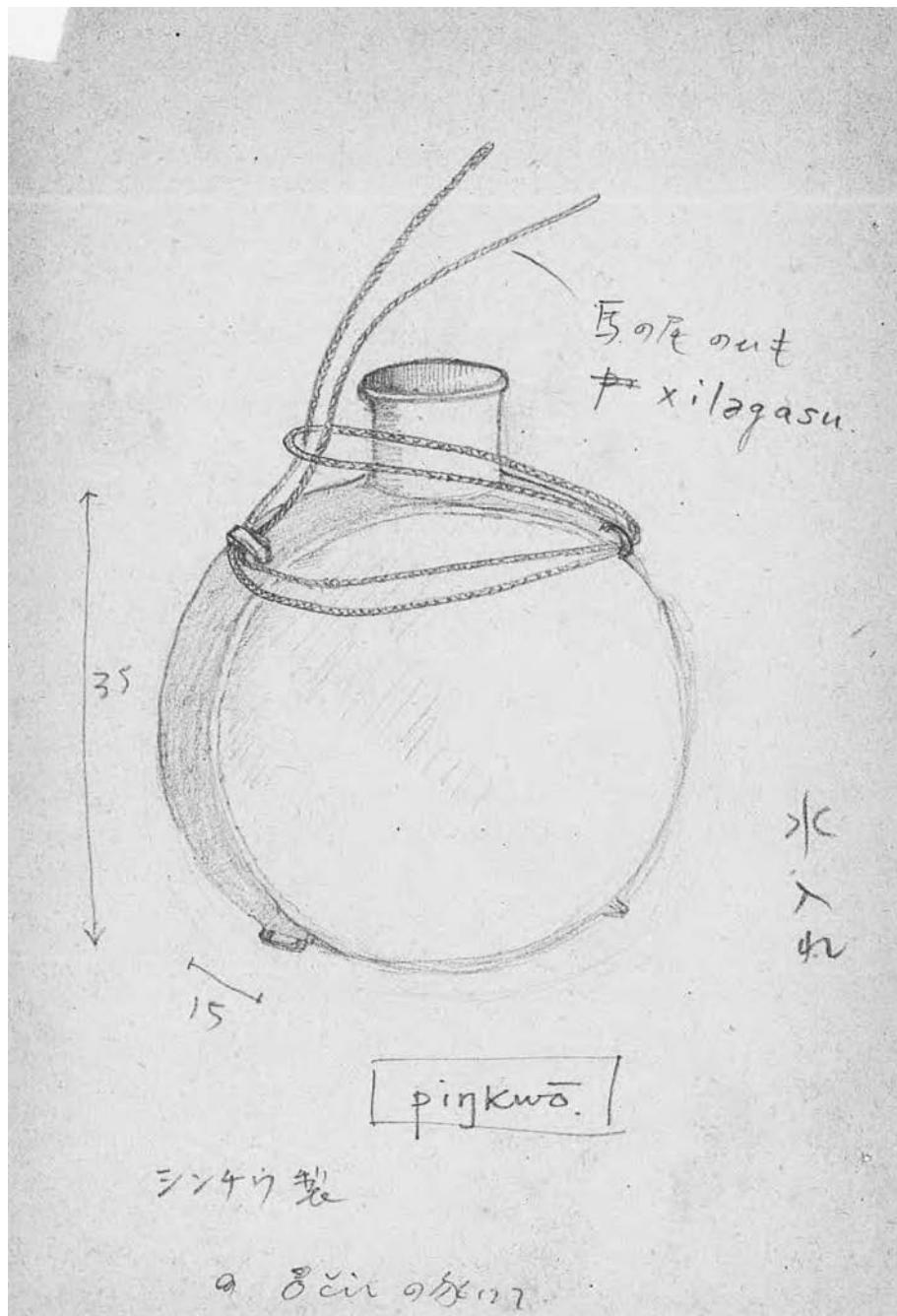
全長約50cm。

撮影年月：2012年4月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：ナランゲレル

93. 水筒



93. 水筒

旅行用に真鍮製の水筒がある（図93）。幅15×たかさ35cm。ピンコウとよばれている。漢語であろう。ウマのしっぽの剛毛でつくったひもがついている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』609ページ

注1 フィールド・ノート3番の98ページにも同様のスケッチがある。そこには、ウマの尾のヒヤルガスというモンゴル語について、ラクダの毛をそうよばないこともしるされている。



ラクダの毛をよってつくったひもがついている。

撮影年月：2000年8月
撮影場所：中国内モンゴル自治区アラシャ盟エジネ旗
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月
撮影場所：フフホト市、内モンゴル大学民族博物館
撮影者：小長谷有紀

94. 携帶用の桶



94. 携帯用の桶

木製の扁平楕円形の桶には、ウルムやジョッヘなどの液状乳製品をいれる（図94）。ほかの扁平桶とおなじく、ガプチク・ソーログとよばれる。16×9×20cm。旅行用で携帯に便利なように小型にできている。革ひもがついており、ウマの鞍の革ひもにもすびつける。

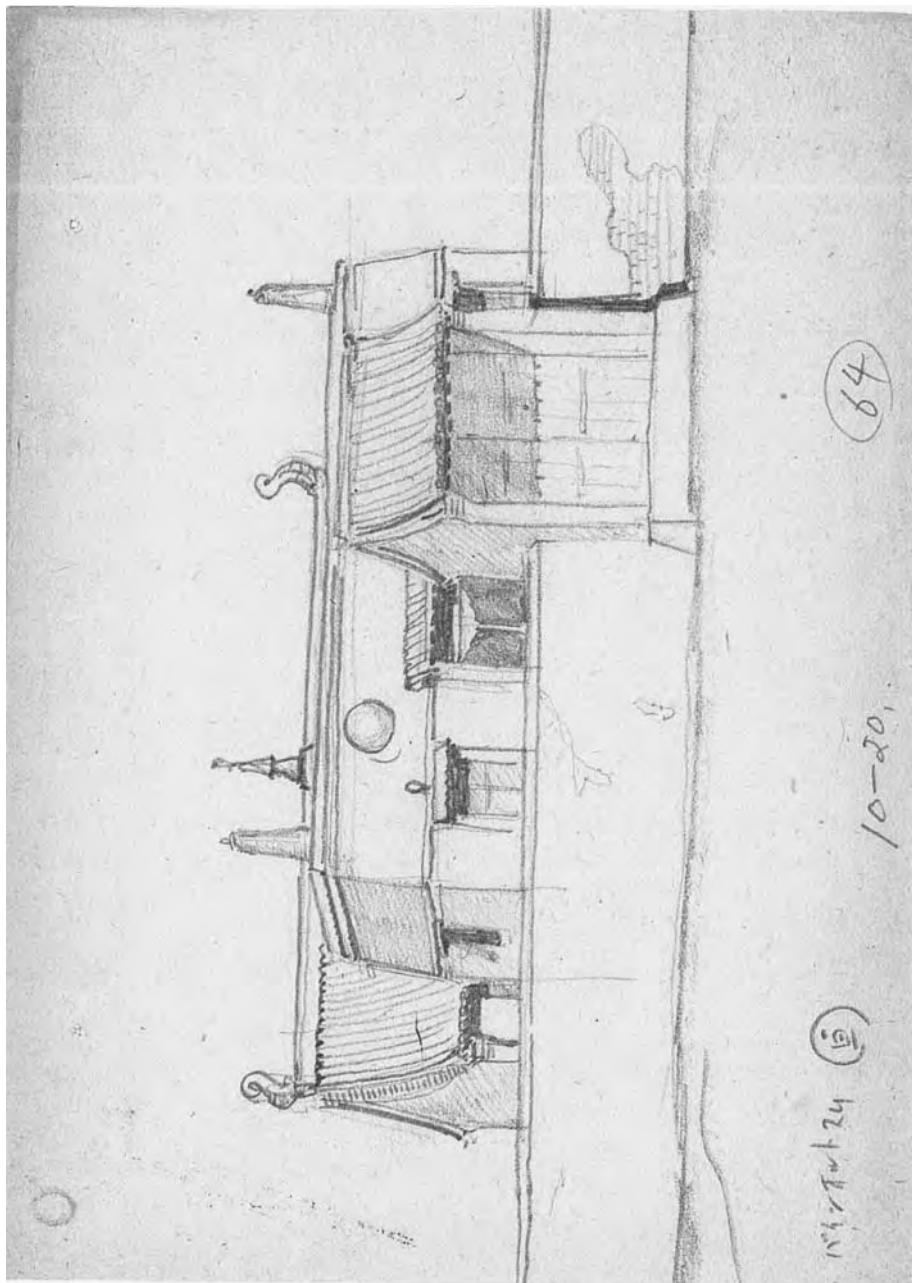
出典 著作集第2巻『モンゴル研究』610ページ



高さ38cm。

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル

95. ラマ廟



95. ラマ廟

モンゴル草原には、点々とラマ廟がある。チベット仏教の寺院である。寺院にはふたつのことなった形式がある。ひとつは、まったく中国ふうの建築で、木造瓦ぶきである。もうひとつは、チベットふうの、陸屋根形式のレンガづくりである。図にしめしたもののは、チベットふうであるが、1部瓦屋根がみえる（図95）。

ラマ廟は、旅行のときによい目標になるとともに、中継基地としてももちいられる。寺院はしばしば遊牧の固定拠点を提供する。モンゴル牧民たちは、寺院の近所に木造の小屋をもち、移動に際してはその小屋を不用の道具の収納庫にもちいでいる。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』610ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図95にもちいられた原画には、和崎のサインとして「亘」としてされている。

注2 調査隊一行は、旗公署を旅行拠点としていた。そのような場所には固定施設がおおい。関連する原画を次ページ以下にかかげる。



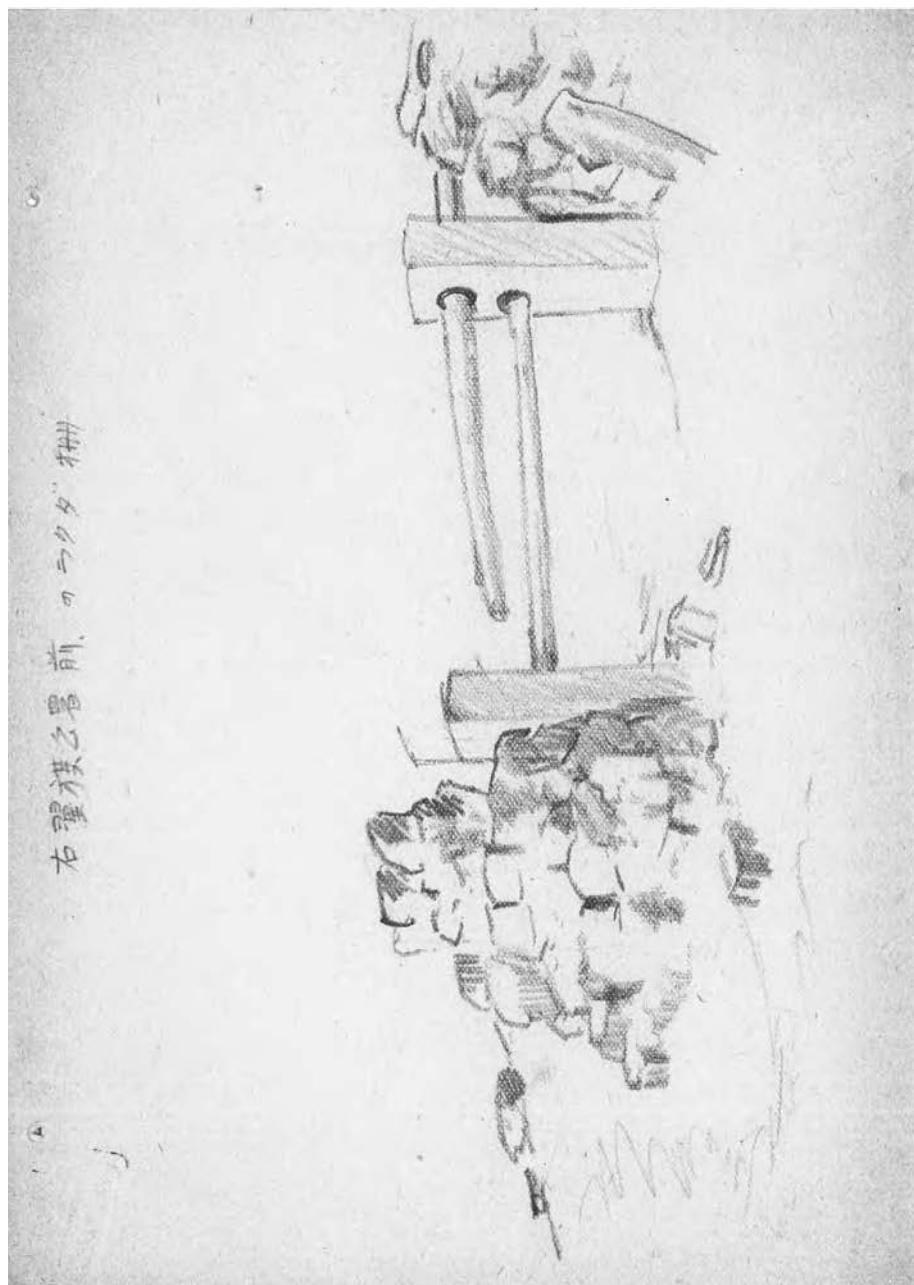
シリンホト市内にある貝子廟の敷地内。

撮影年月：1987年8月

撮影場所：シリンホト市

撮影者：小長谷有紀

補27. ラクダの柵



補27. ラクダの柵

注1 この紙の裏面には「ラクダのねどこ」というタイトルで、2つの簡単な図面がえがかれている。真上から見た図には、直径25メートルの円形とある。断面図によれば、幅2.5メートルの土壘は上部が50センチメートルにせばまっている。土壘の高さは1メートルで、土壘の内側に深さ1.8メートルの溝が掘られている。

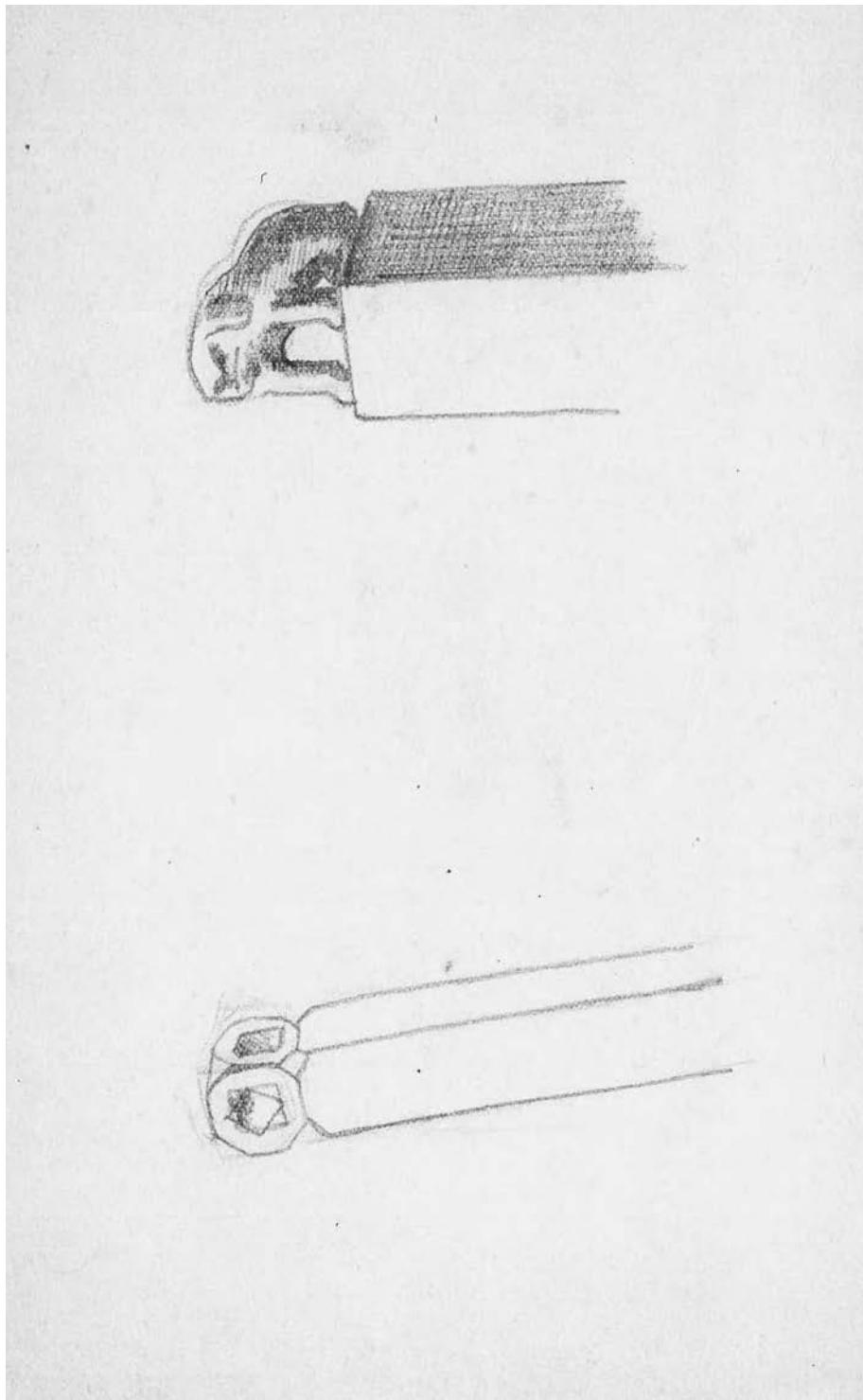


撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

補28. 門柱



補28. 門柱

注1 石製の印鑑のようにも見える。メモはなく、詳細は不明。仮に門柱としておいた。

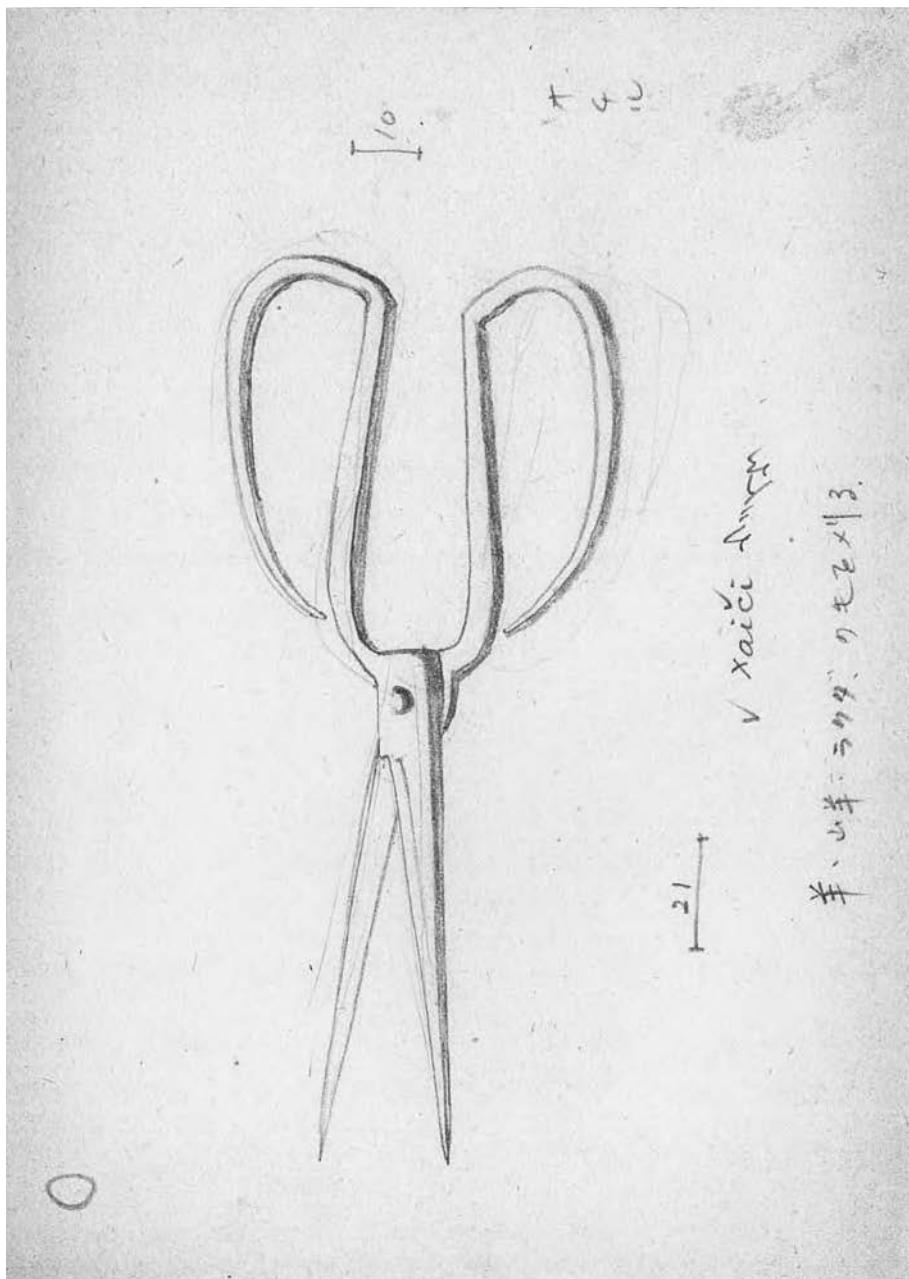


撮影年月：2012年4月

撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ゾム、オンドラフ・ガチャー

撮影者：ナランゲレル

96. フェルトづくり

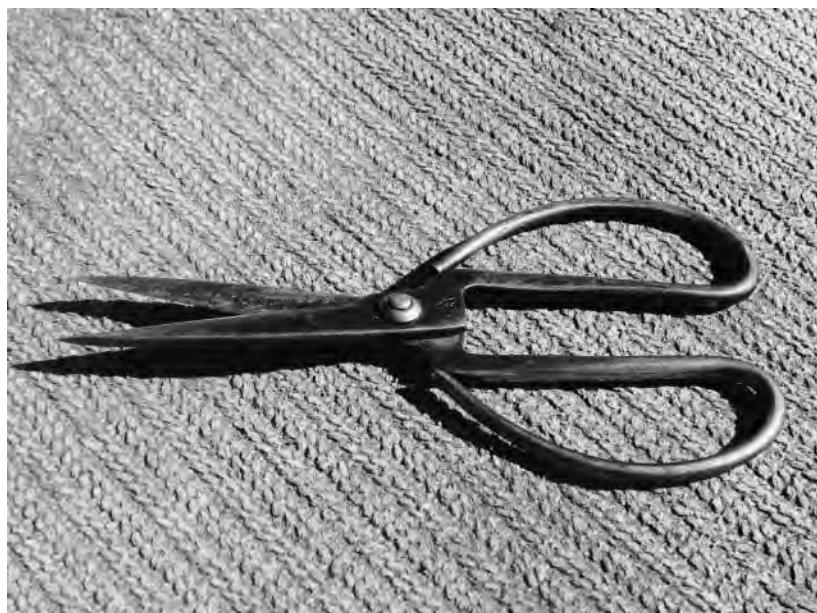


96. フェルトづくり

ヒツジの毛は6月ごろに刈る。秋にも短毛をもういちど刈る。ハサミはハイチ（チャハル方言ではカイチ）である（図96）。ヤギ、ラクダの毛やウマのたてがみもこのハサミで刈る。2.1×10cm。

刈りとった羊毛からはフェルトをつくる。むかしは羊毛をひろげてすのこにまき、ウマでひいて地面をころがしたという。いまでは、フェルトつくりはもっぱら漢人の職人の仕事となっている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』611ページ

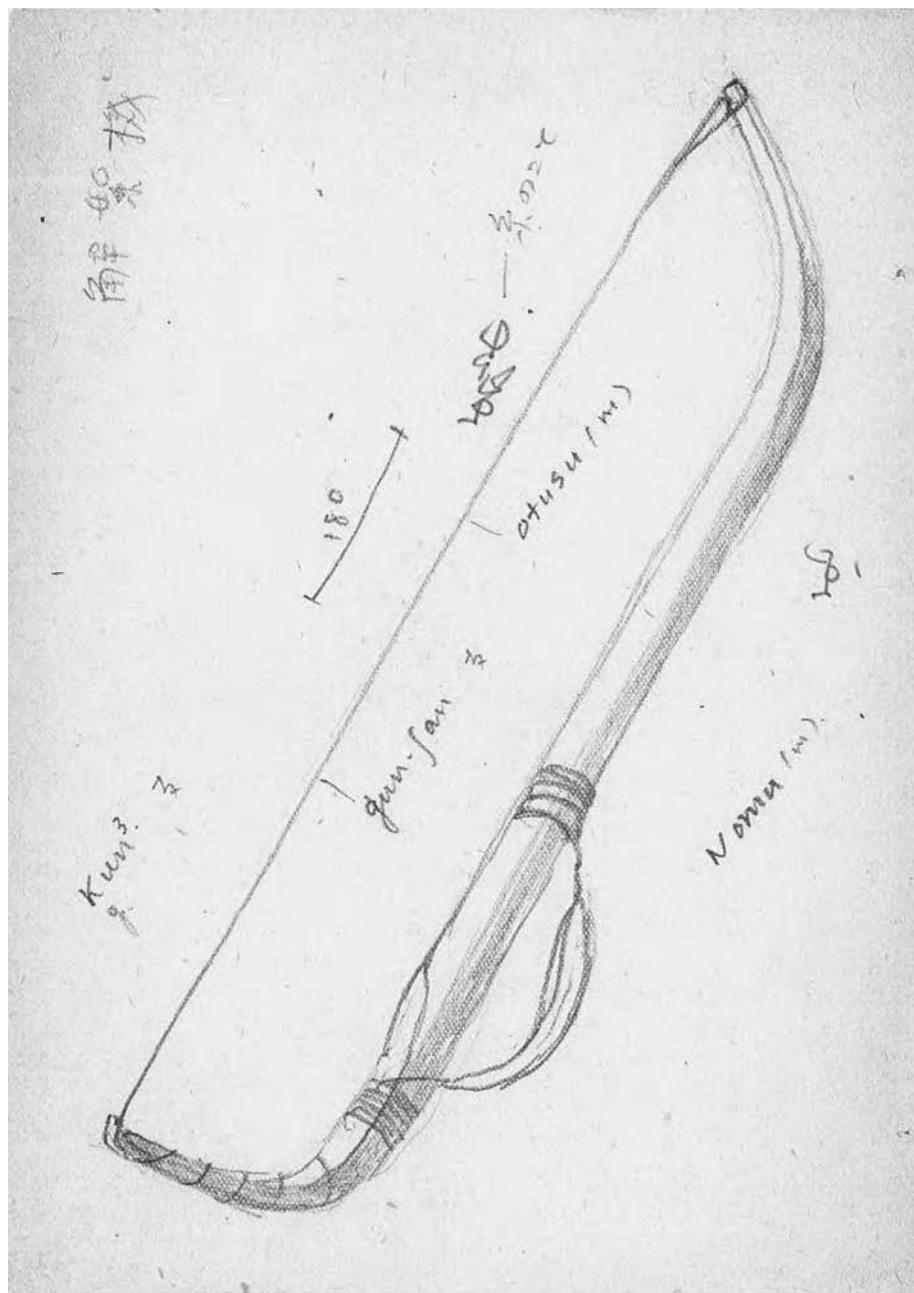


撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗バヤンオール・ソム、バヤンタル・ガチャー

撮影者：小長谷有紀

97. 羊毛ほぐし



97. 羊毛ほぐし

刈りとった羊毛を解絮するには、弓をもちいる（図97）。ノムという。ながさ180cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』611ページ



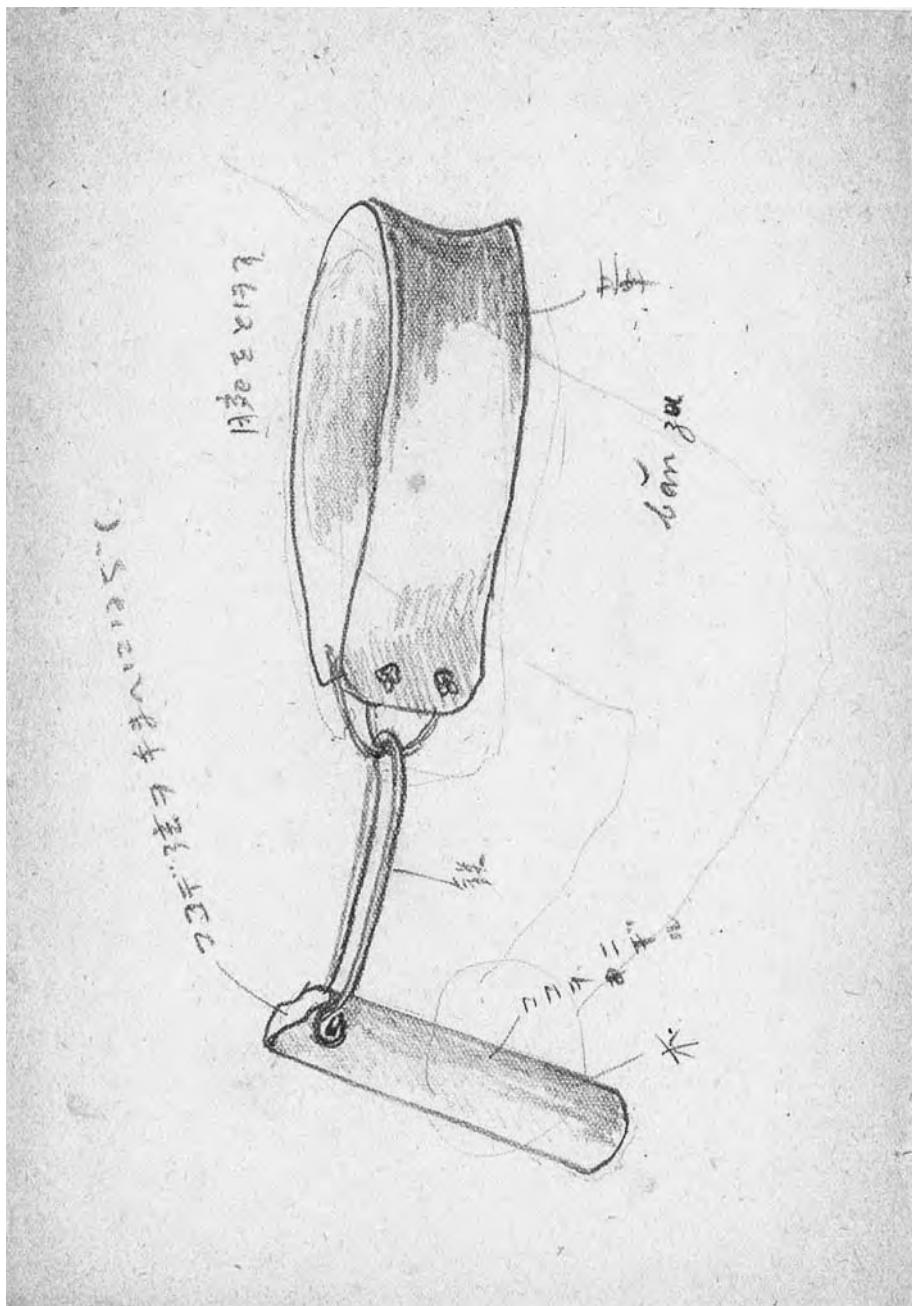
長さ約190cm。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

98. 羊毛ほぐしの補助道具



98. 羊毛ほぐしの補助道具

解糸するためには、もうひとつの道具がある（図98）。皮製の腕輪に腕をとおし、みじかい棒をにぎり、棒のうえはしで弦を手まえにはじく。そうすると、弦のうえの羊毛のもつれがほどける。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』611ページ



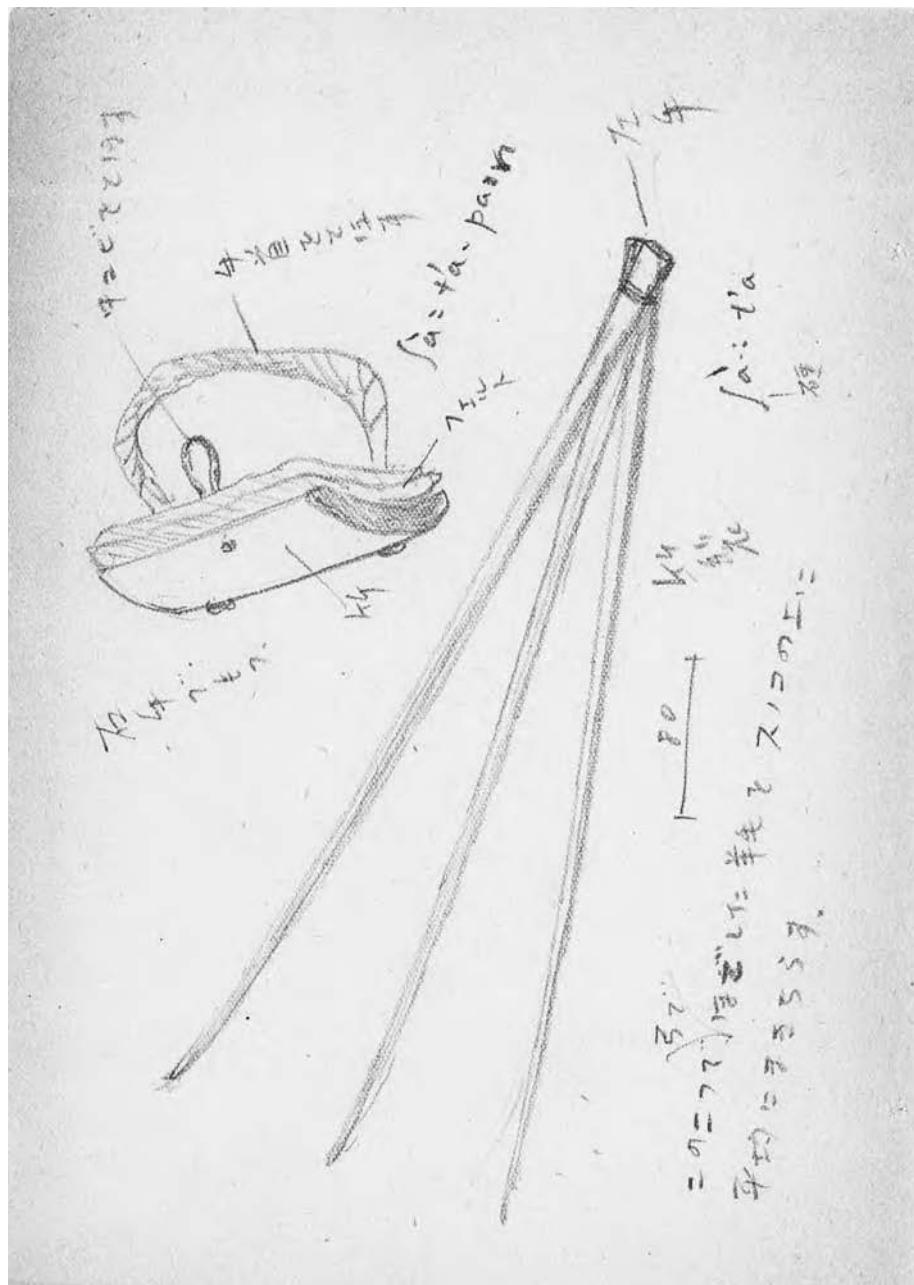
日差しをさけて、ゲルのなかで作業をおこなった。弓ではなくしなる棒を両手にもって、たたく。

撮影年月：1993年8月

撮影場所：中国新疆ウイグル自治区イリ・カザフ族自治州ホボクサイル・モンゴル自治県

撮影者：小長谷有紀

99. 100. 羊毛をまきちらす道具



99. 100. 羊毛をまきちらす道具

弓でほぐした羊毛をすのこのうえに平均にまきちらす道具がある。左手には3本の竹をゆわえたながい箸のようなものをもつ(図99)。80cm。シャータという。右手には、フェルトと竹からできた黒板けしのようなものをもつ(図100)。中指と手首をひもにとおして固定できるようになっている。シャータ・パンという。

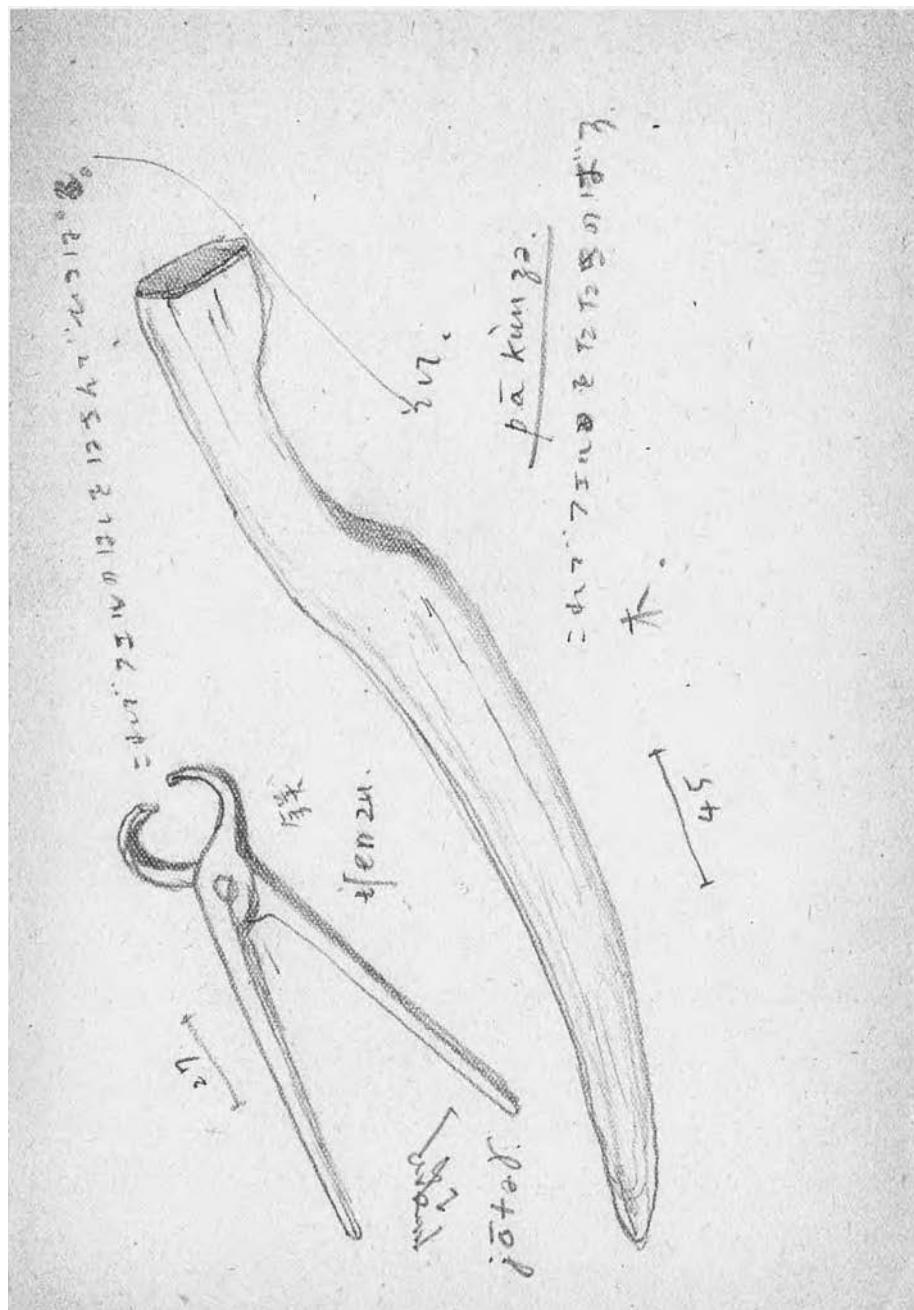
出典 著作集第2巻『モンゴル研究』611-612ページ

注1 「モンゴル遊牧図譜」の図99と図100は一枚の紙にえがかれていた。

注2 シャータとは階段をさすが、よくわからない。パンとは板という中国語からきているだろう。

注3 すのこを回転させる道具についても、原画があるのでつづけて以下に掲載する(補29)。

101. 102. フェルトづくり



101. 102. フェルトづくり

すのこからとりだしたフェルトを成形する。鉄製のヤットコで、フェルトのはしをはさんでひっぱる。ジョータグという（図101）。そのあと、木製の棒でフェルトをたたきのばす。パークンズという（図102）。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』612-613ページ

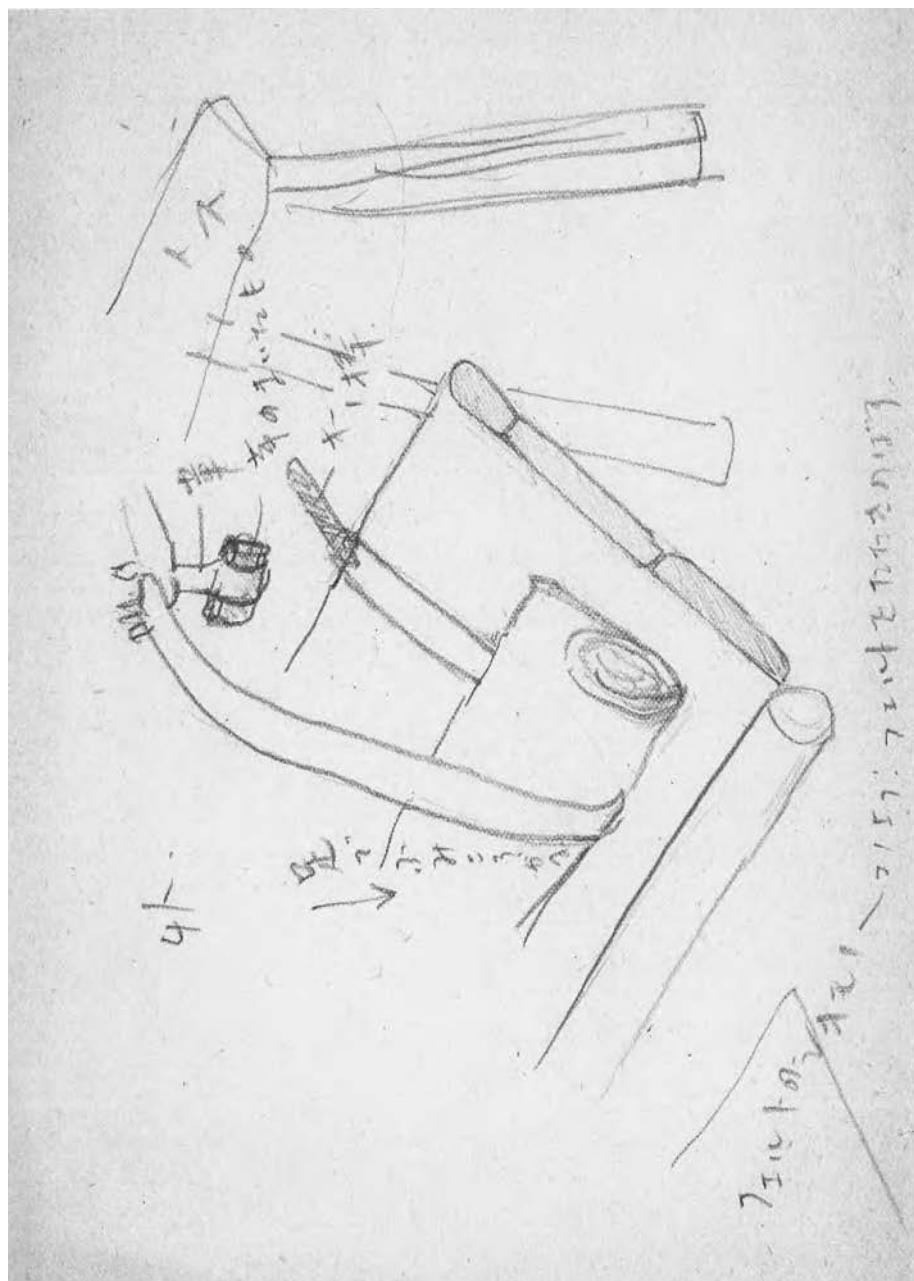
- 注1 パークンズは牛糞をはがしたり、耕作したり、さまざまな目的にもちいることができる。
 注2 モンゴル人のフェルトのつくりかたについては、フィールド・ノート11番の40ページから、12月13日の記録のなかに詳細にしるされている。聞き取りによる記録である。



左列：ほぐした羊毛をしきつめて水をまいてから、棒にまきつけて、ウマでひく。全体をウシの皮などでまく。
 右列：モンゴル人画家シャラブの「モンゴルの1日」にえがかれたシーン。

撮影年月：1997年7月
 撮影場所：モンゴル国アルハンガイ県ハシャート・ソム
 撮影者：小長谷有紀

補29. フェルト製造機



補29. フェルト製造機

すのこをまいて、何本かの皮製ベルトでつりさげ、数人がベルトをいっせいにひっぱってすのこを上下に回転させる。この工程をくりかえして、羊毛を圧縮してフェルトをつくる。途中で水をかけ、また羊毛を補給してしだいにぶあつくしていく。

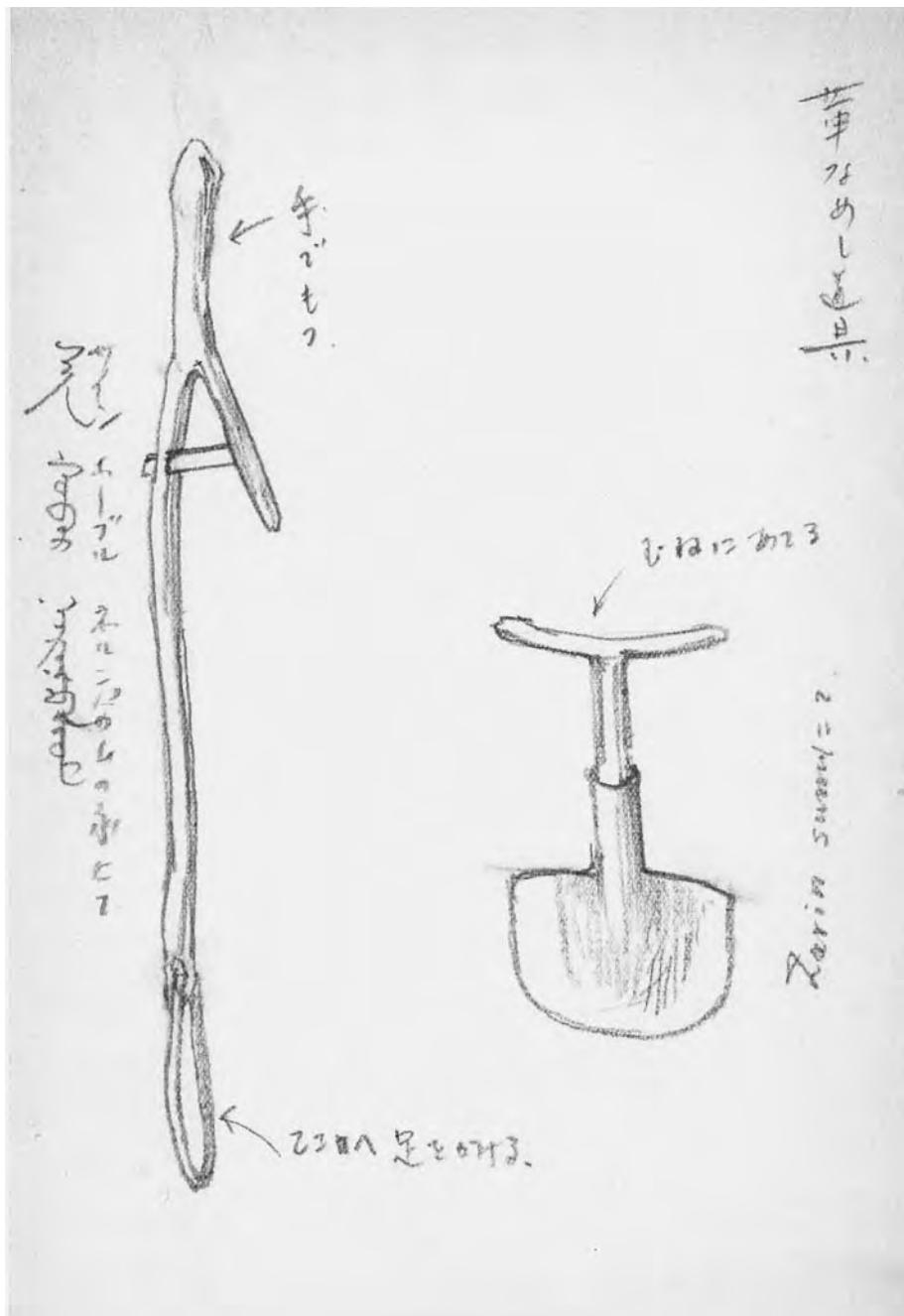
出典 著作集第2巻『モンゴル研究』612ページ

注1 革なめし道具類についても原画があるので、次ページにかけて、あらためて解説をくわえておく（補30）。



出典：国立民族学博物館 梅棹忠夫写真コレクションデータベース（撮影者は和崎洋一）

補30. 革なめし道具



補30.革なめし道具

革なめし道具には、棒状のものとスコップのようなものと2種類ある。棒状のものには、刀がついており、その部分を革にあて、こすってなめす。棒を手でもちながら、足もひもにかけて、手足とともに上下させながら、刀の部分をうごかす。スコップ状のものには、柄の部分に胸をあて、スコップの部分に革をあててうごかし、なめす。(小長谷記)

注1 2012年5月、通遼市ジャロート旗ゲルチョロー・ソム、ボルホショー・ガチャーの牧畜民トゥグスバヤル氏からの聞き取りにもとづく。前者をハジqajiやデゲールdegegürという。後者をホソールqusuGurもしくはサンドーsanduuという。

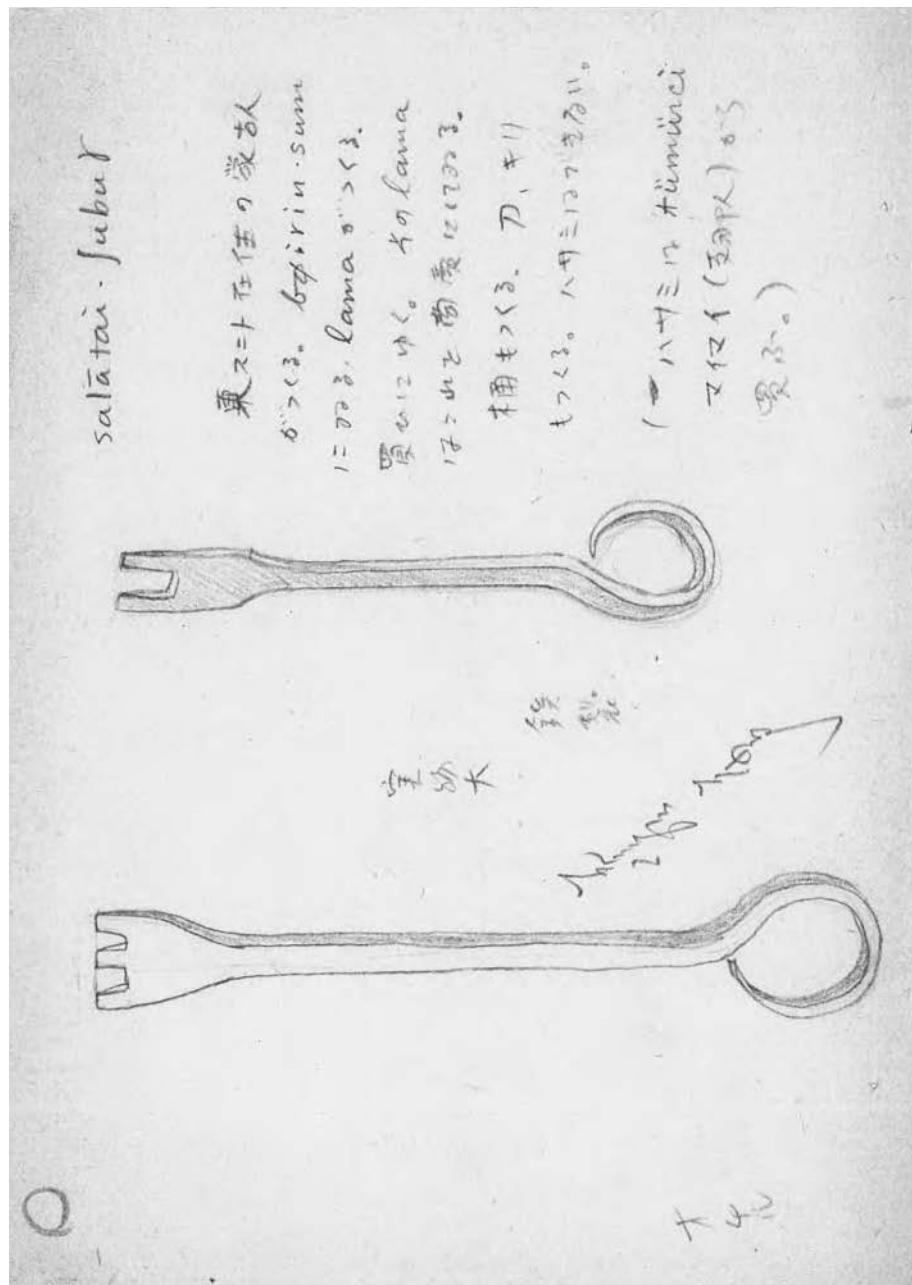


撮影年月：2012年4月
撮影場所：西ウジムチン旗バラゲル・ソム、オンドラフ・
ガチャー
撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト
博物館
撮影者：堀田あゆみ

補31. 革細工用の道具



補31. 革細工用の道具

なめした革をつかって鞍や長靴をつくるのはモンゴル人である。革に穴をあけるための道具をシュブゲという。さきがわかっているものは、サラータイ・シュブゲという。サラートとは枝という意味で、サラータイとは枝分かれしている状態をいう。(小長谷記)

注1 2012年5月、東スニト旗中心地にあるスニト博物館館長ゾリグトバーチル氏からの聞き取りにもとづく。

注2 原画のほかに梅棹による製図もある。



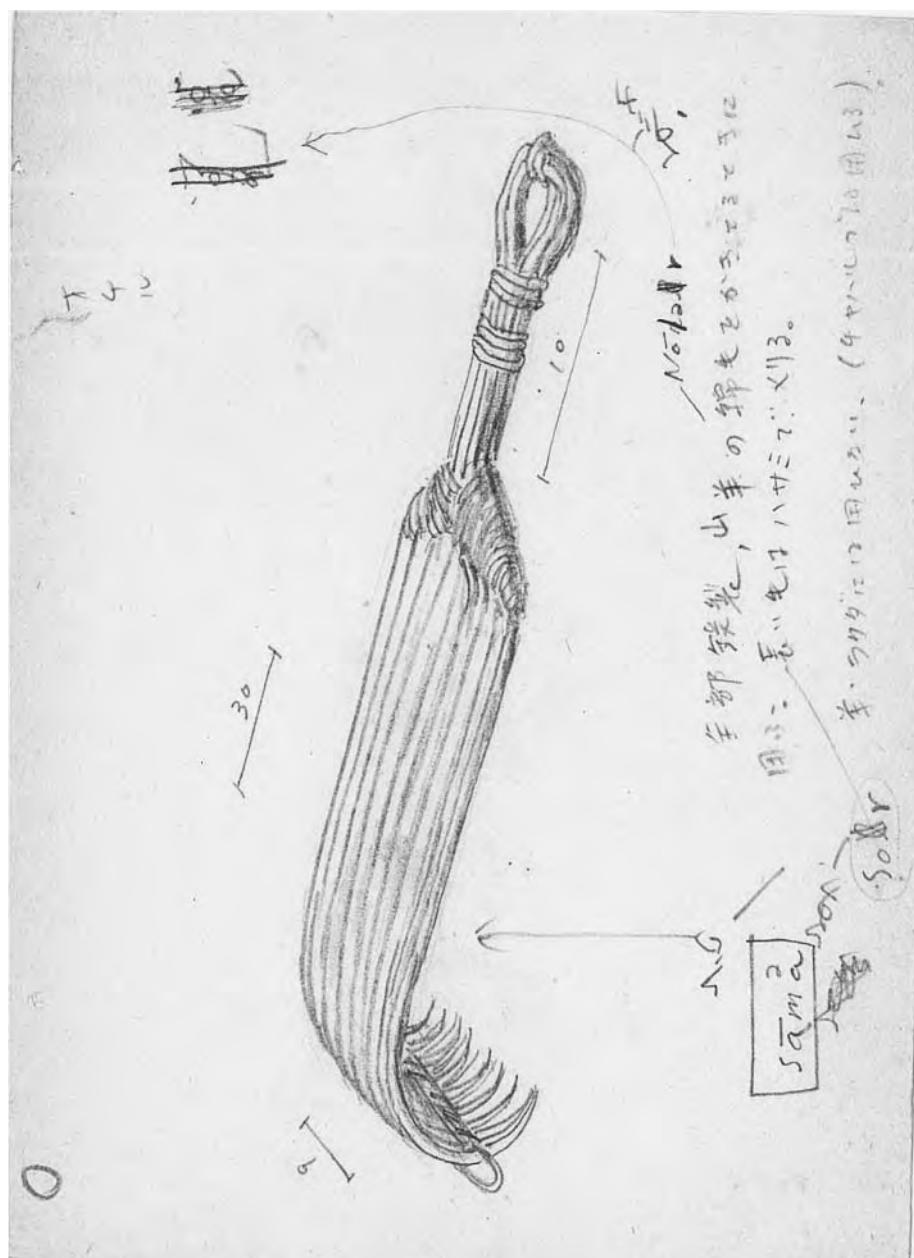
上から錐、握り手、毛ぬき。

撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館

撮影者：堀田あゆみ

103. ヤギの毛



103. ヤギの毛

ヤギの毛は、ながい剛毛をハサミできるが、柔毛は、サム（櫛の意）とよばれる小型の熊手のような鉄製の道具でむしりとる（図103）。9×40cm。柄の部分は10cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』613ページ

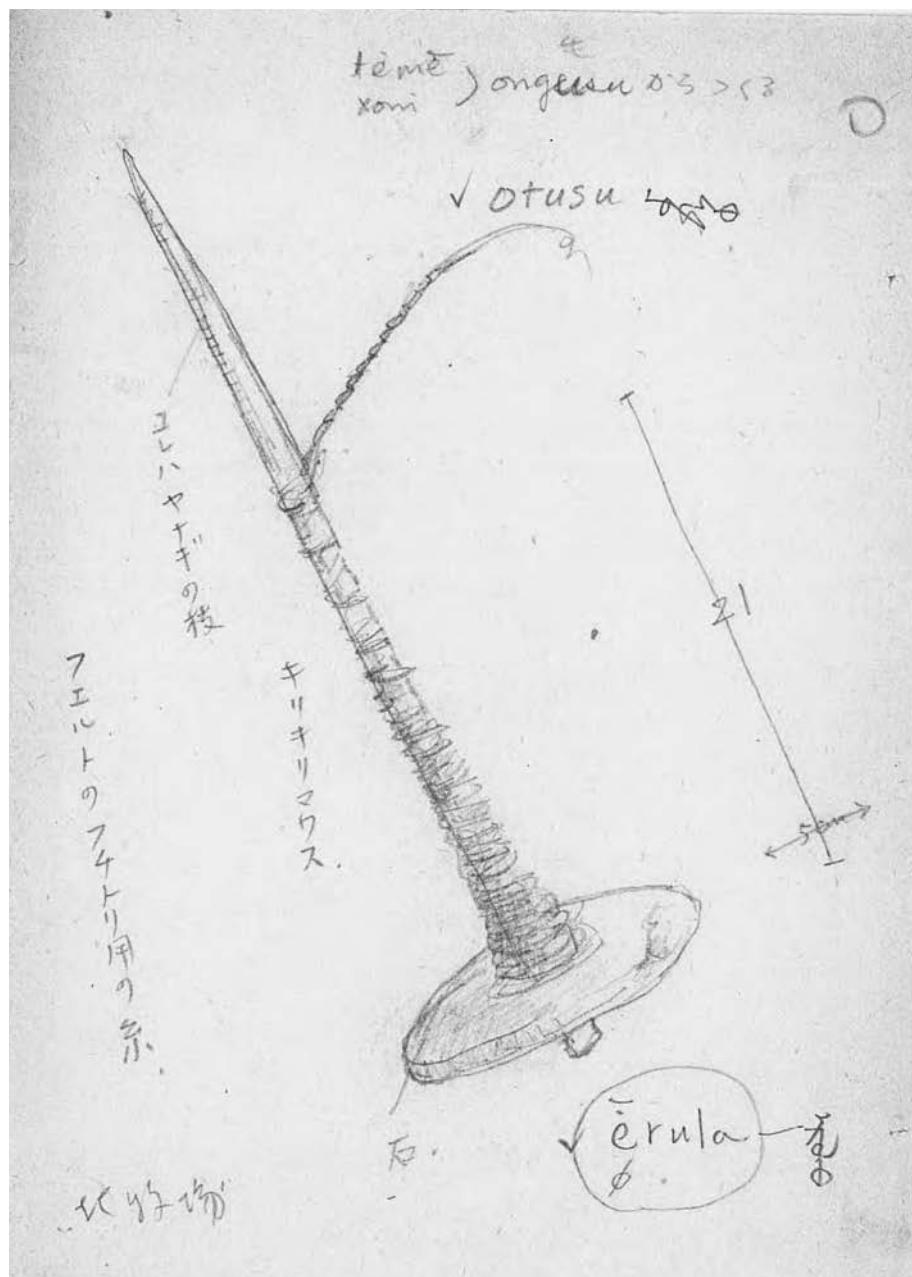


撮影年月：1988年6月
撮影場所：シリンホト市ヤラルト・ソム、バヤンノール・ガチャー
撮影者：小長谷有紀



全長40cm。
撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：ナランゲレル

104. ラクダの毛



104. ラクダの毛

ラクダの毛はオンガスという。オンガスからは、糸、ひも、綱をつくる。ラクダの毛をつむぐには紡錘車がある（図104）。21cm。エールルという。まるい石にヤナギの枝をとおしただけのかんたんなものである。ヒツジの毛もつむいで糸にする。ラクダの毛でつくった糸はフェルトのふちどりやさしこにもちいられる。ヤギの毛もラクダの毛も春に刈る。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』613-614ページ

注1 フィールド・ノート11番の51ページ、12月13日の記録のなかに、毛糸のつむぎかたに関する図解説明がある。チャハルはラクダがすくなく、羊毛をつむぐ（春に刈ったほう）のに対して、スニトではラクダの毛をつむぐ。また、チャハルではエールルをつかうのに対して、スニトではつかわないことなどがしるされている。また、同ノートの49ページには、毛を刈るハサミもえがかれている。図96とはことなって、にぎりバサミであり、漢人のハサミであるとするされている。

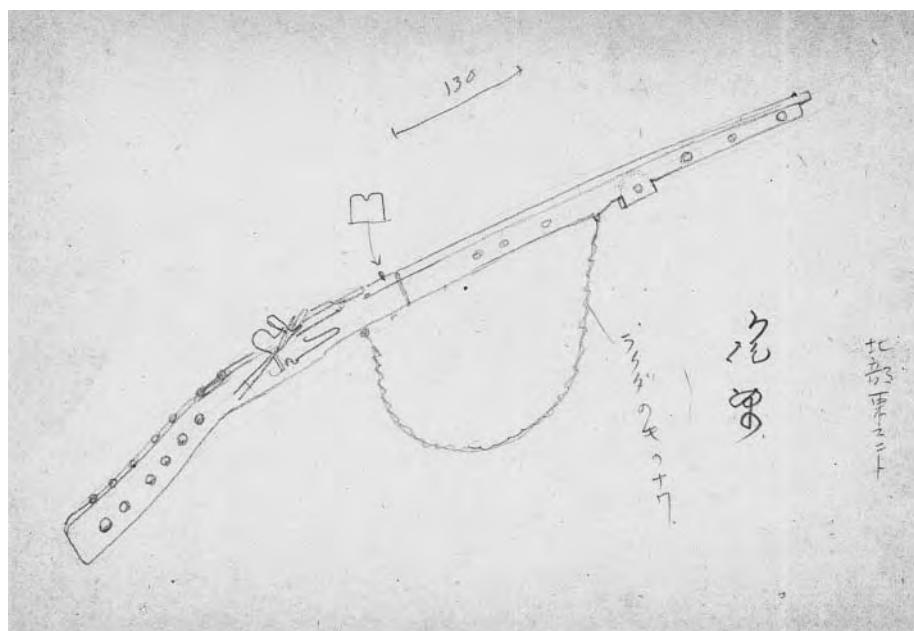
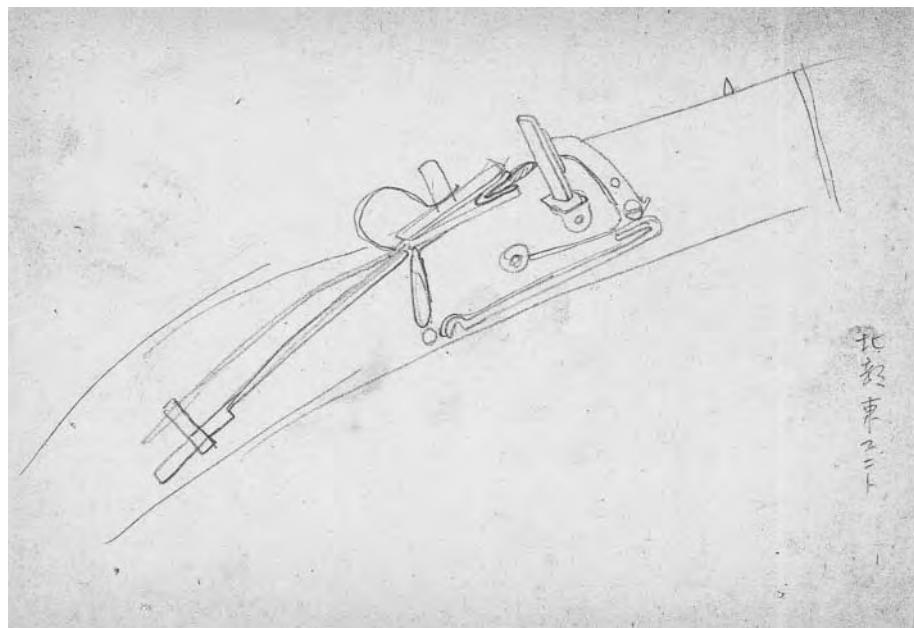


撮影年月：1988年7月
撮影場所：西ウジムチン旗アルタンゴル・ソム
撮影者：小長谷有紀



撮影年月：2012年5月
撮影場所：東スニト旗中心地、スニト博物館
撮影者：堀田あゆみ

105. 狩獵



105. 狩猟

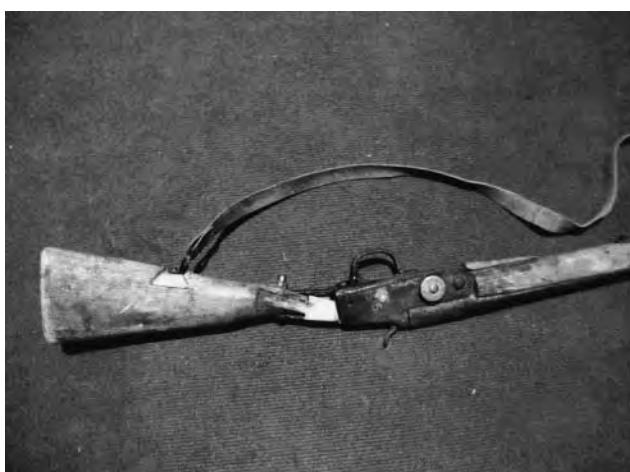
モンゴル草原には、黄羊（ホワンヤン）をはじめ、かずかずの野獣がすんでいる。それらの動物を狩猟することはむかしからさかんにおこなわれていた。旧式の銃をもっていることがある（図105）。ガル・ポー（火の銃という意）とよばれる。130cm。肩かけ用に、ラクダの毛でつくったひもがついている。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』614ページ



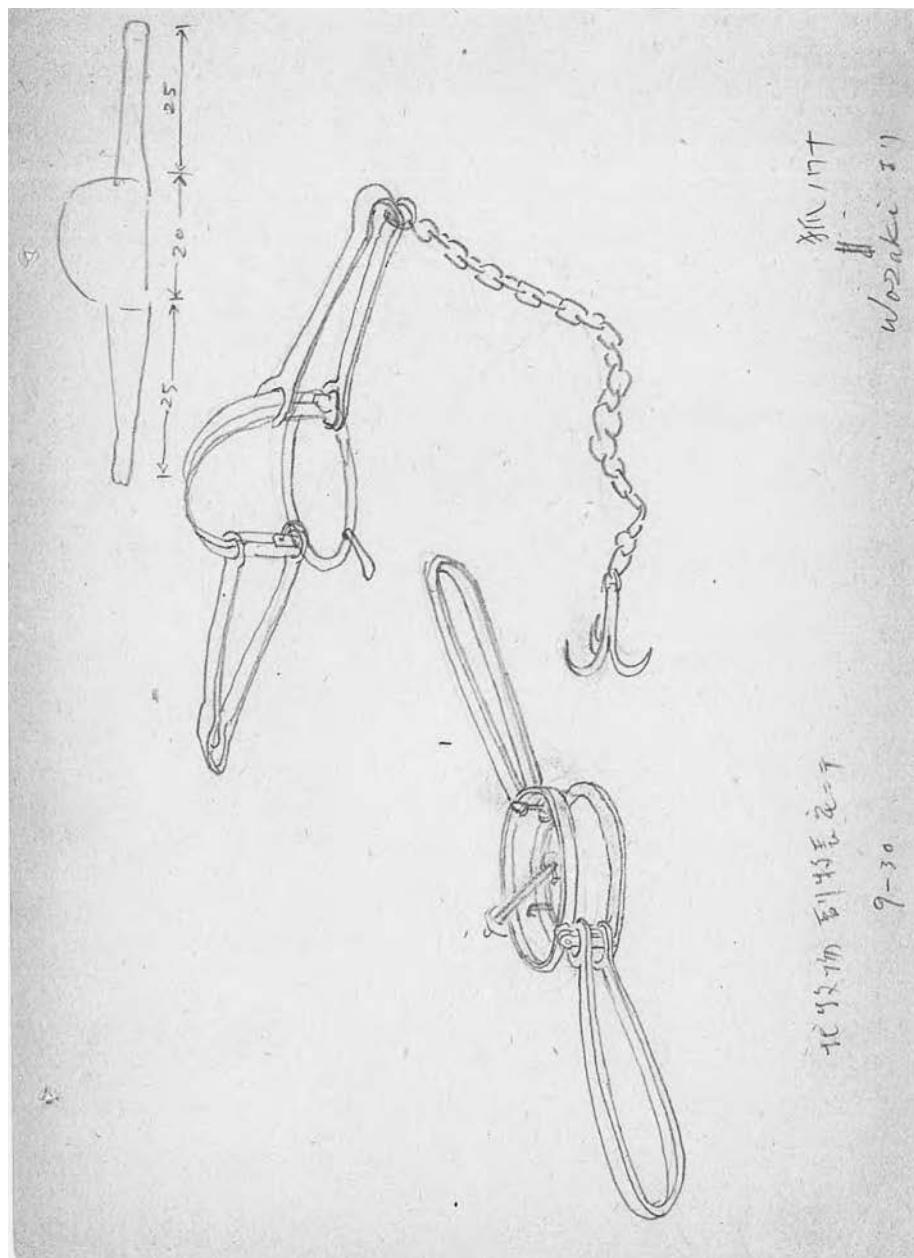
全長およそ170cm。

撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、
スニト博物館
撮影者：ナランゲレル



撮影年月：2012年4月
撮影場所：東スニト旗中心地、
スニト博物館
撮影者：ナランゲレル

106. 狩猟用のわな



106. 狩猟用のわな

キツネなどをとるには、鉄製のわなをもちいる（図106）。全長70cm、とらばさみの部分は直径20cm。

出典 著作集第2巻『モンゴル研究』614ページ

注1 原画には、和崎のスケッチを参照したことがしるされている。



撮影年月：2012年5月

撮影場所：東スニト旗、タマチ博物館

撮影者：堀田あゆみ